

鎌倉市二階堂

国指定史跡

よう ふく じ あと
永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書

— 遺物編・考察編 —

平成14年3月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市二階堂

国指定史跡

よう ふく じ あと
永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書

— 遺物編・考察編 —

平成14年3月

鎌倉市教育委員会

國朝日知錄

卷之五

禮部

禮部

禮部

禮部

序 文

鎌倉市教育委員会
教育長 熊代徳彦

史跡永福寺跡の発掘調査は昭和56年度に試掘調査を開始して以来、平成8年度まで17年間をかけて実施してまいりました。その結果、それまで幻であった永福寺の姿を明らかにすることができました。二階堂・阿彌陀堂・薬師堂が複廊で繋がり、翼廊・中門・釣殿といった寝殿造り風の建物と一体の建物群を構成していること、建物の前面には大きな池があり、橋が架けられていたこと、現在の光学器械で測ったのと同じように正確に測量を行っていること、背景となっている山にも人の手加わり、堀割や経塚がつくられていることなど多くのことが解りました。これらの建築群や庭園は釈迦・阿彌陀・薬師如来の浄土として、奥州攻めで亡くなった源義経、藤原泰衡ほかの諸霊を慰めるのにふさわしい場であると思います。

発掘調査の報告は、これまで年度ごとに概要報告書として刊行してきましたが、今回は昨年度の「遺構編」に引き続き、「遺物編」として永福寺跡から出土した膨大な量の瓦をはじめとする様々な遺物を種類ごとに分類・整理を行って一冊にまとめました。

また史跡永福寺跡整備委員会の委員の先生方をはじめ、各分野の専門の先生方お願いして、考古・建築・庭園・金工・漆工・植生等の各分野から永福寺跡の発掘調査成果を分析していただき、「考察編」としてまとめました。原稿をご執筆いただいた先生方をはじめ、発掘調査の実施にご理解をいただいた周辺住民の方々、関係者の方々に心からお礼を申し上げます。

例 言

1. 本書は国庫及び県費補助を受けて実施した神奈川県鎌倉市二階堂所在「国指定史跡永福寺跡」の環境整備事業に係る発掘調査報告書の遺物・考察編である。
2. 昭和56・57年度の試掘調査は史跡永福寺跡試掘調査団（団長大三輪龍彦）が、鎌倉市教育委員会と史跡永福寺跡整備計画準備委員会（昭和57年6月24日、史跡永福寺整備委員会に改編）・文化庁記念物課・神奈川県文化財保護課の指導・助言を受け、昭和58年度の発掘調査は史跡永福寺跡発掘調査団（団長大三輪龍彦）が、鎌倉市教育委員会と史跡永福寺跡整備委員会・文化庁記念物課・神奈川県文化財保護課の指導・助言を受け、昭和59年度～平成8年度までの発掘調査は鎌倉市教育委員会が、史跡永福寺跡整備委員会・文化庁記念物課・神奈川県教育委員会文化財保護課の指導・助言を受け実施したものである。

3. 本報告「遺物・考察編」作成の体制

調査主任 福田誠 原廣志
調査員 菊川泉 神山晶子 須佐直子 須佐仁和 早坂伸市
調査補助員 久保田裕美 長友純子 榎岡洋音

遺物編の原稿執筆、図及び図版作成の分担は以下の通りである。

原稿執筆 第1章、第2章、第3章 福田誠
第4章第1節～3節・5節 原廣志 第4章第4節 菊川泉
瓦挿図内キャプション 菊川

考察編の原稿執筆の分担は以下の通りである。

原稿執筆

永福寺跡正面の山から発見された経塚に関連して	青山学院大学名誉教授	吉田章一郎
永福寺跡の土木遺構及び仏教関係遺物について	鶴見大学教授	大三輪龍彦
永福寺跡建築遺構の考察	鶴見大学講師	鈴木 亘
永福寺跡の庭園遺構について	日本庭園協会副会長	龍居竹之介
永福寺跡出土の金属製品	文化女子大学大学院教授	中野政樹
永福寺跡出土の漆製品	鶴見大学教授	中里壽克
永福寺跡一帯の古植生について	千葉大学名誉教授	田畑貞寿
	恵泉女子学園短期大学助手	宮内泰之
史跡永福寺跡の古環境変遷	株式会社パレオ・ラボ	鈴木 茂

図版等作成 福田誠 原廣志 菊川泉 神山晶子 須佐直子 須佐仁和 早坂伸市
久保田裕美 長友純子 榎岡洋音

挿図、表及び図版作成は、調査員・調査補助員が分担してこれにあたった。

編 集 福田誠

4. 遺物写真は、木村美代治(故人)が撮影したものと、福田・菊川が新たに撮影したものを使用した。



池岸で出土した瓦類



猪が描かれた瓦片



金鋼製品



経塚 (透扇・帯・珠数)

遺物編 本文目次

第1章 建物の調査	3
第1節 層序と概要	3
第2節 瓦以外の遺物	3
(1) 二階堂・北複廊・南複廊出土遺物	
(2) 阿彌陀堂・南翼廊出土遺物	
(3) 薬師堂出土遺物	
(4) 北翼廊(翼廊・中門・釣殿)出土遺物	
第2章 庭園の調査	4
第1節 層序と概要	4
第2節 瓦以外の遺物	4
(1) 西岸周辺出土遺物	
(2) 北岸周辺出土遺物	
(3) 東岸周辺出土遺物	
(4) 南岸周辺出土遺物	
(5) 橋出土遺物	
(6) 溝・滝口・遺構面出土遺物	
第3章 山の調査	7
第1節 西山の調査	7
第2節 東山の調査	7
(1) 平場出土遺物	
(2) 経塚出土遺物 平成12年度遺構編図51～54	
第4章 出土瓦について	145
第1節 鏡瓦・宇瓦 (図56～図83は軒瓦の形式分類を示した)	145
(1) 鏡瓦(軒丸瓦)	
(2) 宇瓦(軒平瓦)	
第2節 男瓦・女瓦	147
(1) 男瓦(丸瓦)	
(2) 女瓦(平瓦)	
(3) 女瓦凸面の叩き模様について	
(4) 各期の男瓦・女瓦の組み合わせ	
第3節 文字・記号瓦	150
第4節 道具瓦	154
第5節 瓦類から見た永福寺	155
追補 永福寺関連文献資料	289

遺物編 挿図目次

図1 調査地点位置図及びグリッド設定 ・基準点位置図	1	図36 苑地東岸 (I・II期池中) 出土遺物	41
図2 標準土層模式図	2	図37 苑地南岸 (IV期池中) 出土遺物	42
図3 二階堂・北複廊・南複廊出土遺物	8	図38 苑地南岸 (III期池中) 出土遺物	43
図4 阿弥陀堂・南翼廊出土遺物	9	図39 苑地南岸 (I・II期池中) 出土遺物	44
図5 薬師堂出土遺物	10	図40 橋周辺 (池中) 出土遺物	45
図6 薬師堂出土遺物	11	図41 遺水 (5溝) 出土遺物	46
図7 薬師堂出土遺物	12	図42 遺水 (5溝・7溝)・取水遺構出土遺物	47
図8 北翼廊出土遺物	13	図43 滝口出土遺物	48
図9 北翼廊出土遺物	14	図44 枘状遺構・遺水 (1溝) 出土遺物	49
図10 北翼廊出土遺物	15	図45 堂背後出土遺物	50
図11 北翼廊出土遺物	16	図46 2溝・3溝出土遺物	51
図12 苑池西岸 (池中) 出土遺物	17	図47 3溝出土遺物	52
図13 苑池西岸 (下層遺構面・地山面) 出土遺物	18	図48 2溝出土遺物	53
図14 苑池西岸 (下層遺構面) 出土遺物	19	図49 2溝出土遺物	54
図15 苑池西岸 (瓦積み・瓦溜り・池中・地山面) 出土遺物	20	図50 西ヶ谷・西山出土遺物	55
図16 苑池西岸 (雨落ち内瓦溜り・池中) 出土遺物	21	図51 東山平場表採遺物	56
図17 苑池西岸 (池中) 出土遺物	22	図52 東山平場表採遺物	57
図18 苑池西岸 (池中) 出土遺物	23	図53 東山平場出土遺物	58
図19 苑池西岸 (池中) 出土遺物	24	図54 東山平場出土遺物	59
図20 苑地北岸 (IV期上層・下層) 出土遺物	25	図55 鎧瓦・宇瓦各部名称	72
図21 苑地北岸 (IV期下層) 出土遺物	26	図56 蓮華文鎧瓦	76
図22 苑地北岸 (IV期1面) 出土遺物	27	図57 蓮華文鎧瓦	77
図23 苑地北岸 (IV期2面) 出土遺物	28	図58 蓮華文鎧瓦	78
図24 苑地北岸 (IV期2面) 出土遺物	29	図59 巴文鎧瓦	79
図25 苑地北岸 (IV期2面) 出土遺物	30	図60 巴文鎧瓦	80
図26 苑地北岸 (池中) 出土遺物	31	図61 巴文鎧瓦	81
図27 苑地北岸 (IV期3面) 出土遺物	32	図62 巴文鎧瓦	82
図28 苑地北岸・東岸 (池中) 出土遺物	33	図63 巴文鎧瓦	83
図29 苑地東岸 (池中) 出土遺物	34	図64 寺銘鎧瓦	84
図30 苑地東岸 (池中) 出土遺物	35	図65 唐草文字瓦	85
図31 苑地東岸 (池中) 出土遺物	36	図66 唐草文字瓦	86
図32 苑地東岸 (III期池中) 出土遺物	37	図67 唐草文字瓦	87
図33 苑地東岸 (III期池中) 出土遺物	38	図68 唐草文字瓦	88
図34 苑地東岸 (II期池中) 出土遺物	39	図69 唐草文字瓦	89
図35 苑地東岸 (II期池中) 出土遺物	40	図70 唐草文字瓦	90
		図71 唐草文字瓦	91
		図72 唐草文字瓦	92

図73	唐草文字瓦	93	図101	女瓦D類	121
図74	唐草文字瓦	94	図102	女瓦D類	122
図75	唐草文字瓦・連珠文字瓦	95	図103	女瓦D類	123
図76	劍頭文字瓦	96	図104	女瓦D類	124
図77	劍頭文字瓦	97	図105	女瓦D類	125
図78	劍頭文字瓦	98	図106	女瓦D類	126
図79	劍頭文字瓦	99	図107	女瓦D類	127
図80	劍頭文字瓦	100	図108	女瓦E類	128
図81	寺銘字瓦	101	図109	女瓦F類	129
図82	寺銘字瓦	102	図110	女瓦F類	130
図83	寺銘字瓦	103	図111	女瓦F類	131
図84	男瓦A類	104	図112	鳥禽・押印・その他	132
図85	男瓦A類	105	図113	男瓦・女瓦部分名称	133
図86	男瓦A類	106	図114	押印(スタンプ)・人名線刻	134
図87	男瓦A類	107	図115	女瓦C類・E類叩き文様	135
図88	男瓦B類	108	図116	女瓦D類叩き文様	136
図89	男瓦B類	109	図117	鬼瓦	137
図90	男瓦B類	110	図118	鬼瓦	138
図91	男瓦B類・男瓦C類	111	図119	鬼瓦	139
図92	女瓦A類	112	図120	鬼瓦	140
図93	女瓦A類	113	図121	鬼瓦	141
図94	女瓦A類	114	図122	鬼瓦	142
図95	女瓦B類	115	図123	鬼瓦	143
図96	女瓦B類	116	図124	鬼瓦	144
図97	女瓦C類	117			
図98	女瓦C類	118			
図99	女瓦C類	119			
図100	女瓦C類	120			

遺物編 表目次

表1	遺物観察表	60	表4	瓦当形式分類新旧対照表	75
表2	永福寺出土瓦破片総数表	73	表5	鏡瓦・字瓦法量表	163
表3	男瓦・女瓦法量表	74			

遺物編

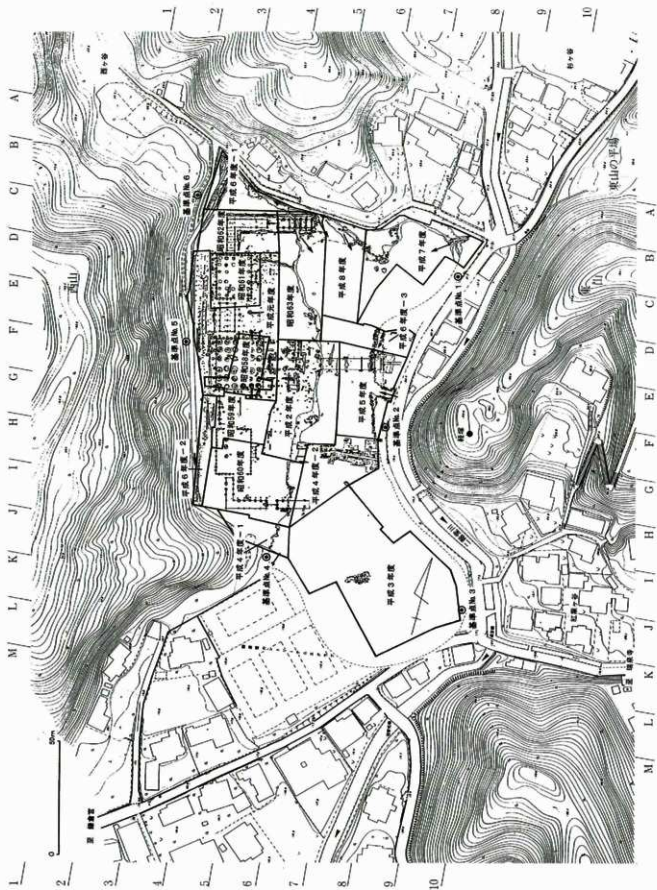


図1 調査地点位置図及びグリッド設定・基準点位置図

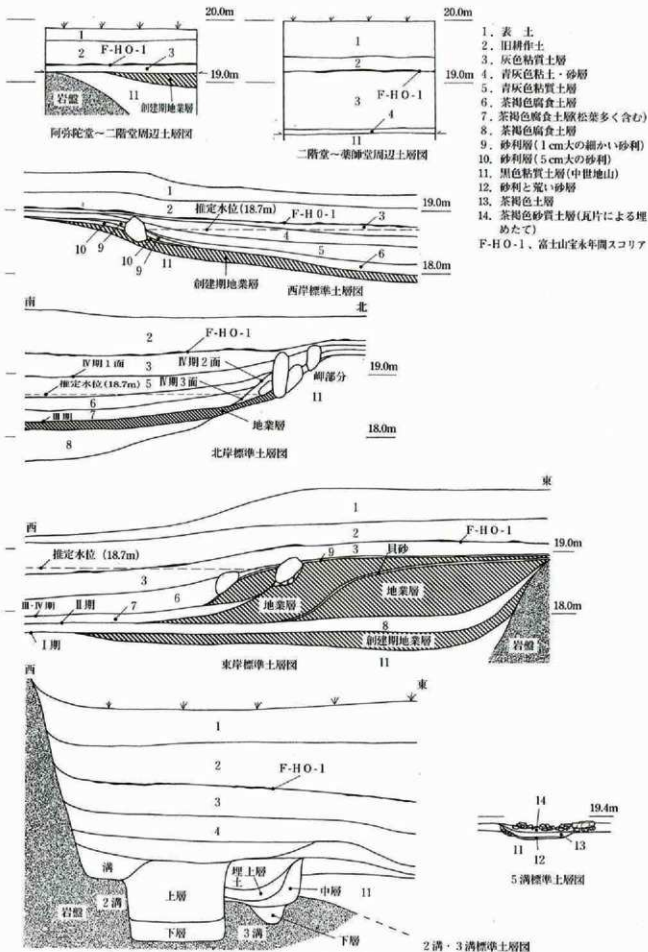


図2 標準土層模式図

第1章 建物の調査

第1節 層序と概要

二階堂を始め阿弥陀堂、薬師堂などの堂舎が建ち並んでいた苑池西側一帯の陸地部分は、南北約150m、東西約60mの平坦地になっている。中央に位置する二階堂を境に、北側は黒色粘質土の地山を削り込んでいる。南側は緩やかに下る地山上に土丹を積み重ね全体に平坦面を造りだしている。

現地表は、薬師堂周辺では海拔21.0m、阿弥陀堂周辺では海拔19.9mと北から南に向かい緩やかに下っている。遺構面の海拔は陸地全体が19.0m前後なので、薬師堂周辺では約2mもの土砂で覆われていることになる。薬師堂周辺で遺構面を覆う青灰色粘土・砂の互層状の堆積状況は、水福寺廃絶後、相当期間放置されていたことをうかがわせる。

第2節 瓦以外の遺物

(1) 二階堂・北複廊・南複廊出土遺物 (図3)

二階堂では礎石が引き抜かれた礎石掘方内から焼けたI期・II期の瓦類が多く出土している。他に遺構面、雨落ち溝内から瓦類に混じり、かわらけ・青磁・白磁・常滑・鉄製品・金銅製品等が出土している。遺構に伴う遺物は多くないが、創建期の木製基壇東柱(二東3)の抜き跡から木製基壇の作り替えの時期に伴い年代を明らかに出来る(寛元・宝治年間)完形の手捏ねかわらけ(7)が出土している。

南複廊では遺構面上で検出した、かわらけ溜り1・2から出土したかわらけ(16~25)が複廊の廃絶時期(延慶3年火災後)を示していると考えられる。

(2) 阿弥陀堂・南翼廊出土遺物 (図4)

阿弥陀堂基壇が創建期に木製であった事を示す、木製基壇東柱柱根(1~3、阿東17・18・24)が出土している。範を採ったとされる平泉毛越寺に類例を見ることが出来る遺物である。遺存状態はあまり良くないが、断面長方形の長辺を堂と平行にして据えられていた。

(3) 薬師堂出土遺物 (図5~7)

寛元・宝治年間修理で木製基壇を廃し、以後壇正積基壇に変更した事を示す基壇石材の東石(図5-16・17・18・19)・葛石・地覆石(図6-1・2)と創建期の木製基壇に使用された東柱柱根が出土している。各石材の規格から壇正積基壇及び木製基壇の高さの推定がなされた。(遺構編参照)

薬師堂基壇が創建期に木製であった事を示す木製基壇東柱柱根(図7、薬東1・3)の樹種はヒノキであることが確認されている。

(4) 北翼廊(翼廊・中門・釣殿)出土遺物 (図8~11)

北翼廊では、遺構面上で検出したかわらけ溜りから出土したかわらけ(図9-1~13)が、翼廊の廃絶時期(延慶3年火災後)を示していると考えられる。北辺雨落ち溝から出土したかわらけ(図9-14~19)は翼廊雨落ち溝を遣水(溝1)として再使用した時期(IV期)以降のもと考えられる。

翼廊東西列のII期に使用された柱が遺存する柱根から、翼廊は径9寸の円柱(図11-3、北翼17底面に黒入れ線が残る。)、樹種はヒノキであったことが確認された。

釣殿先端に遺存する2本の柱根(図11-1・2、北翼33・34)のみ面取り角柱であった。面取りの幅は5.5cmと広い。

第2章 庭園の調査

第1節 層序と概要

苑池は瓢箪形で、推定南北約200m、東西約50～70mの範囲の中央がくびれている。二階堂正面がくびれ部にあたり、西岸から東岸に橋が架けられている。水深はおよそ1m程、水位は景石の据えられたラインを辿るとおよそ海拔18.7m前後になると推定される。苑池の北方では苑池に水を取り込むⅣ期の取水遺構が検出され、南方では大小の岩を組み合わせた島が造られている。現地表面の海拔はおよそ19.5～19.2m。海拔19.0m前後で宝永年間の富士山火山灰層(F-HO-1)が観察される。火山灰層より下に分厚く灰色粘質土層、青灰色粘質土層、茶褐色腐食土層が堆積している。苑池中央に架かる橋より南側では池底に土丹を敷き詰め、北側では地山を削りだし池底としている。池底は海拔約17.6～18.7mで、池底には厚く茶褐色の腐食土層の堆積が見られ、木製品・木っ端・多量の花粉化石が含まれている。

苑池は堆積、水際の埋め立て状況からⅠ期(創建期)、Ⅱ期(鎌倉中期)、Ⅲ期(鎌倉後期)からⅣ期(室町期以降)までの4時期に大きく区分される。

第2節 瓦以外の遺物

(1) 西岸周辺出土遺物(図12～19)

北翼廊から南翼廊を越える南北に細長い苑池の伽藍側の汀である。汀線はⅠ期より、緩やかな斜面に砂利を敷きつめた洲浜の手法で表されている。

南複廊の前面、庭部分は創建期に土丹を用いた地業が行われていた。図13～23のかわらけと24の白磁端反碗は地業面の下、地山面上から出土したもので永福寺創建期(建久三年)の遺物である。

砂利は地山あるいは土丹を敷き詰めた陸から池底にかけて敷き詰められ、砂利は陸地では全面に、池では岸辺から池中にかけ幅約10mの範囲まで敷かれていた様子が観察された。池底や汀線際に出した砂利は、小さな砂利(1～2cm)を大量に用いた上層(鎌倉中期以降)と、池底に大きな砂利(約6cm大)を敷いた下層(創建期～)の2時期に大別される。火事場整理(弘安3年か延慶3年の火災)なのか、上層池底から焼け魚げのある漆塗り仏像残片で一部に金箔の残るもの(図14-1～3、8、9、図17-2、3)・漆塗り台座(図19)・漆塗り机脚(図17-1)・漆塗り部(図17-4)・金銅製飾り金具(図14-15-17、図15-13-15)・螺鈿器物(図16-1～4、6、7)等といった堂内荘嚴具が出土している。金銅製飾り金具の図15-13は机等の隅金具と考えられ、透彫の宝相華文で飾られている。螺鈿器物(図16-1～4)は表裏面ともに螺が舞う宝相華文で加飾されている。螺鈿に使用された夜光貝は失われているが、螺鈿の厚みは厚く約2mmと推定される。大体彫技法で製作されたと思われる宝相華文や蝶々文等の形は優雅で堅くない。中尊寺金色堂等の螺鈿文様に非常に似ているが、これらは蒔絵が施されていないという特徴を持つ。この技法は平等院・中尊寺・巖島神社平家奉納品・春日大社御神宝に見られ、鎌倉期ではなく平安後期のものである。特に螺鈿器物の内、形態の明らかな燈台(図16-6)は平泉中尊寺経藏堂内具燈台に類例を求めることが出来る貴重なものである。建築用材(図18-1)と考えられる部材は巻斗である。大きさから見て、主要建物のものでなく翼廊等の附属建物に使われたものと考えられる。

(2) 北岸周辺出土遺物(図20～28)

南北に広がる永福寺庭園の北端に位置し、取水口周辺から北翼廊脇までの汀である。永福寺建立以前

は、杉ヶ谷から流れ出る二階堂川と北西に位置する西ヶ谷からの流路の合流地点であり、北東側一帯は亀ヶ淵と呼ばれ奥深くに延びる杉ヶ谷の入口である。北西方向は、西ヶ谷の入口となる。苑池遺構内の堆積土の大半は、池中に流れ込んだきめの細かい灰色砂質土と、茶褐色粘質土等の非常に柔らかく粘性が強い土、粗い砂と水摩した土丹が混じる土の三種類に分けられる。柔らかく粘性の強い土は、池中で水が滲んだ状態で堆積したもの、粗い砂と水摩した土丹の混じる土は強い流れ込みがあったことが推察できる。池底の堆積土中には多くの木片・植物遺体が混入し、見た限りでは松葉が多いように思われる。北岸周辺ではⅣ期の時期をさらにⅣ期-3面(14世紀前半)・Ⅳ期-2面(14世紀後半)・Ⅳ期-1面(15世紀以降)の3つに細分することができた。Ⅳ期-2面では漆塗り仏像残片(図21-1、2)の他、「出離生死往生極楽世界為也」の墨書がある五輪塔婆(図25-17)、「南無大日如来」の墨書のある笹塔婆(図22-11~16)が出土している。遺物は他の場所と異なり多くの器種に富み、石塔の他、舶載陶磁器、瀬戸、常滑、かわらけ、漆器、木製品、硯等生活用品も多く出土している。永福寺奥の杉ヶ谷、西ヶ谷の僧坊に関わる遺物が苑池に流れ込んでいる可能性も考えられる。

(3) 東岸周辺出土遺物(図29~36)

苑池の東、中心伽藍の対岸に当たり汀線の形状が著しく変化している場所である。汀はⅠ期~Ⅳ期に分けることが出来る。Ⅲ期の池からは西岸周辺出土遺物でも見られた焼け焦げのある宝相華文様の螺鈿器物残片(図28-17)、蕾部分に金箔が押されていた可能性がある黒漆塗りの蓮華蕾(等部分は金銅製)(図28-19)、頸部に珠文帯を巡らし一部に金箔が残る香炉状の漆器(図28-15)、腰塔か華鬘あるいは幡と考えられる金銅製飾り金具(図32-1、図33-12)といった室内荘厳具や仏像残片(図29-4)台座蓮弁(図33-7)、白木の剣(図29-5)が出土している。また釘、目録(図33-13)、雇い釘(図33-14、図35-14・15)といった木材を繋ぐための鉄製品、擬宝珠残欠(図36-21)や建築部材残片が橋周辺の池底から多く出土している点が注目される。その多くが弘安3(1280)年の火災後に廃棄されたものと考えられる。

(4) 南岸周辺出土遺物(図37~39)

苑池の南、大きく南に張り出した汀である。現在西側にはテニスコートがあり、東から南側は昭和初期に建てられた温泉旅館と道路拡幅のため大きく削平され、汀は遺存していない。しかし池底に敷き詰められた土丹面は、緩やかな傾斜で南に向かい浅くなっていることから、基本的には西岸と同じ洲浜の景観であったと考えられる。東よりのⅢ期池底から金銅製幡吊金具が3点(図37-1~3)、金銅製室内飾り金具(図37-4~6)、螺鈿器物残欠(図37-8)が出土した。金銅製幡吊金具の意匠は3点ともほぼ同じだが、1より2・3の方が重厚である。表裏ともに魚子地を宝相華文で飾り、縁に猪目形の孔が2箇所ある。一部に鍍金が残ることから当初は前面鍍金されていたと思われる。1の中には薄い板を二枚張り合わせた木芯が依存する。2の中には板は遺存していないが、3の中には1と同様に薄い板が二枚、両側から「ハ」の字状にさし込まれていた。この板の表面に黒漆が塗られていたため、布を縫いつけた糸の痕跡と小孔が残る。金銅製室内飾り金具の内4は厚さ3mmの銅板に蓮華と飛雲を彫り込み表している。宝冠の一部とも考えられるが推測の域を出ない。6は宝相華文の透彫が施された須弥壇高欄の飾り金具と考えられ、縁に4箇所猪目型の孔が開く。透彫の宝相華文が施されているものには、西岸周辺で出土している金銅製飾り金具(図15-13)がある。8の螺鈿器物は西岸周辺で出土している螺鈿器物(図16-1~4、6、7)と同様に宝相華文で加飾されている。螺鈿の夜光貝は失われているが、大

体彫技法で製作されていると考えられる。金銅製品、螺鈿器物ともに火災に遭っているため表面が炭化あるいは煤けている。

図39-6、7、9-11のかわらけは、創建期池底から出土したもので12世紀末～13世紀初頭の年代が考えられる遺物である。

(5) 橋出土遺物 (図40)

二階堂正面、橋の基礎材が据えられていた布掘り柱穴の中から釘 (図40-3-5) が出土している。また周辺からも多くの釘等鉄製品、木製部材等が出土している。(東岸周辺出土遺物を参照)

(6) 溝・滝口・遺構面出土遺物 (図41-49)

遺水

5溝 (図41-42)

Ⅲ期遺水の流路である5溝から、明徳三 (1392) 年正月廿六日銘の五輪塔地輪多く石塔石材が出土している。この時期の5溝はほとんど機能していなかったと考えられる。この頃、流路が北翼廊北辺雨落ちを利用する1溝に変更されたと考えられる。1溝出土のかわらけ (図44-4-11) を見るとこの時期の特徴を備えたものが見られる。この他仏像の白毫 (図42-2) や翼廊の下を滑るあたりで、水晶製数珠玉 (図42-11) が出土している。

7溝 (図42)

I期・Ⅱ期遺水の流路である。北翼廊の北側に設けた石を組んだ落ち口から池に流れ込んでいる。遺物は多くないが、手捏ねかわらけがこの時期のものである。

滝口 (図43)

Ⅱ期に造られⅢ期まで使われていた。滝口のトレンチからは手捏ねかわらけが出土。

柵状遺構・1溝 (図44)

Ⅳ期遺水の沈殿槽と流路である。流路は北翼廊雨落ち溝を利用している。

堂背後の溝 (図44)

堂舎背後を北から南に流れる3溝上層・中層・下層、2溝最上層・上層・下層より出土している遺物から、溝の開削、改修の時期が推測されている。

3溝 (図46-47)

堂舎背後、西の山裾に沿って北から南に向う流路で、幅約130～150cm、深さ最大約60cm、断面V字ないしU字形の比較的浅い溝。堆積状況から3時期 (上層・中層・下層) に分けることが出来る。下層から器高が低い皿状の手捏ねかわらけと制止糸切りかわらけ (図46-37・39・40) が出土し、上層 (図46-15-35) から丸底の手捏ねかわらけが出土していることから、3溝は創建期に山際の排水溝として開削され、第Ⅱ期の寛元宝治年間修理の時期に、2溝の開削に併せて埋め戻されたと考えられる。

2溝 (図46-48-49)

三堂の背後、山際に堂と並行する溝で、幅約150cm、深さ140cm。地山や岩盤を断面箱形に掘り窪めた、幅広く深い堀のような溝である。3溝の肩を切り崩しあるいは削平しており、3溝を埋め戻した後に改めて掘り込まれた山際の排水溝である。溝は堆積から3時期 (最上層・上層・下層) に分けられ、2時期目に溝底を埋め、幅を約20cm広げる改修が行われている。溝底から13世紀後半～14世紀前半、最上層

では15世紀代のかわらけやⅢ期の瓦が含まれることから、2溝は13世紀後半に開削され、15世紀代まで使われた後埋め戻されたものと考えられる。

第3章 山の調査

第1節 西山の調査(図50)

西山の調査の内、谷内の西ヶ谷ではトレンチ調査(トレンチ28・29・30)であったが、かわらけ、瀬戸、魚住鉢といった生活用具と考えられる遺物が出土している。山の尾根の調査(トレンチ14~27)では遺物がほとんど出土しなかったが、トレンチ25から岩盤面上に2枚のかわらけ(図50-1・2)が重なり置かれ、トレンチ23からは常滑の捏鉢、瀬戸の鉢(図50-6・7)や14世紀中頃の常滑壺(図50-8~14)を埋納した土塊が検出されている。土塊は直径約55cmで中央にやや斜めに傾いた状態で常滑壺が埋納されていた。蓋の代わりに壺の口部分には鏡がのせられ、更に伏せた状態で山茶碗壺系捏鉢が被せられていた。保存状態は良く、蓋代わりの鏡の紐には白色の掛紐が残されていた。壺の内部に土はほとんど入っておらず、銅銭3枚とやや扁平なそろばん玉形の直径1cmの水晶製の数珠玉1個が出土している。

第2節 東山の調査

(1) 平場出土遺物(図51~54)

東山平場の調査(トレンチ1~11)では、青磁、白磁、かわらけ、瀬戸、火打ち金、硯、温石、火箸、土鍋、手焙りといった生活用具が多数出土し、表採品ではあるが室町期の五輪塔石材が多数確認された。トレンチ調査のため明確な遺構の把握は出来なかったが、この平場は800㎡程の広さがあることから僧坊跡の可能性が考えられる。

(2) 経塚出土遺物(平成12年度刊行、遺構編図51~54)

東山の尾根先端部分(トレンチ13)で検出した経塚遺物である。12世紀末~13世紀初頭の時期が与えられる渥美産産・捏鉢の外容器内に納められた経筒・副納品(金剛子念珠【平装束念珠】、舍利と考えられる粒状の金、青白磁皿片、透扇、腰刀、中国景德鎮産白磁蓋付小壺と壺の中に納められた梳櫛10枚)が出土している。銘文等は確認されなかったが永福寺創建間際の時期に埋納され、出土状況が調査によって明らかな遺物である。(遺構編参照)

なかでも扇類の一つである透扇は皆影背の扇とも呼ばれ、平安時代末~室町時代の絵巻に数多く描かれ、また文箱等の意匠として用いられたりしている。出土遺物として現存する最古の透扇の可能性もあるものである。

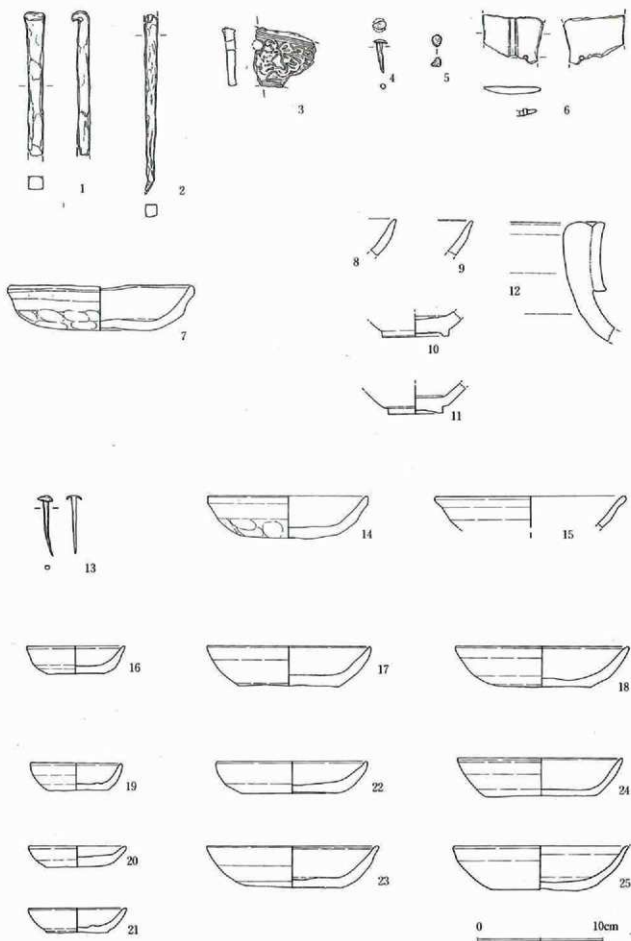


图3 二隔堂·北寝廊·南寝廊出土遗物



1



4



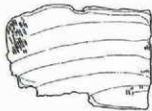
5



6



2



3



图4 阿弥陀堂·南真窟出土遗物

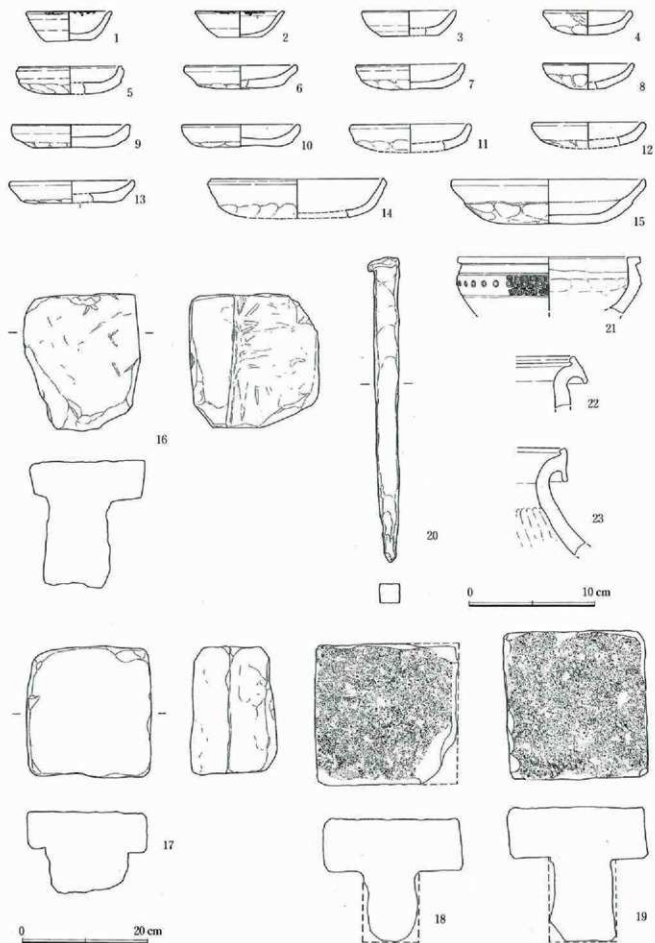


图5 濠脚堂出土遗物

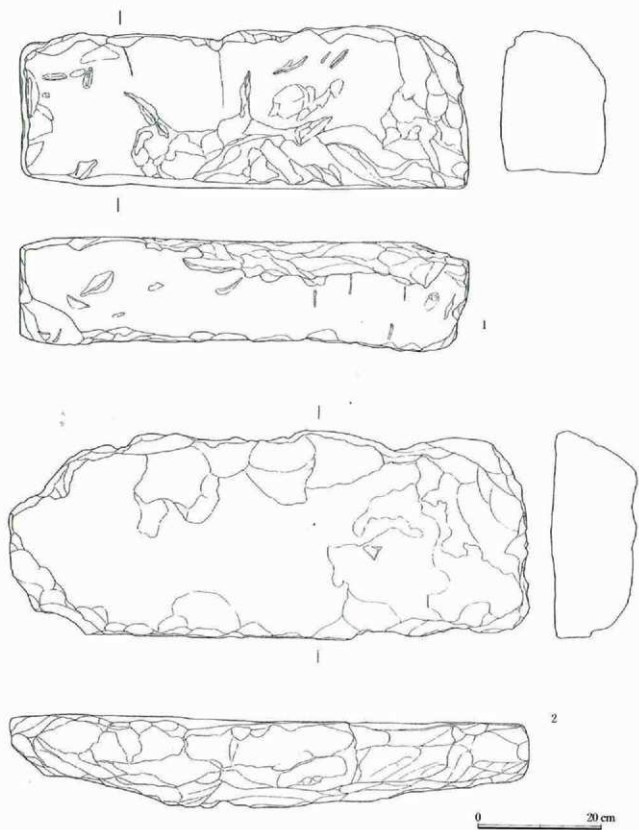
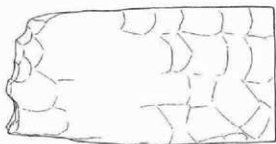
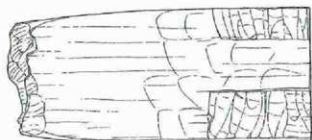
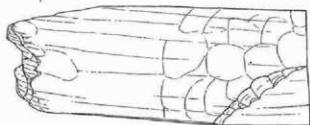
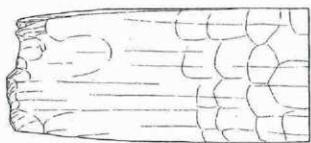
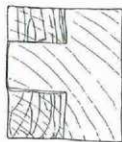


图6 襄陽堂出土遺物



3



2



1



0 20 cm

图7 濮阳出土器物

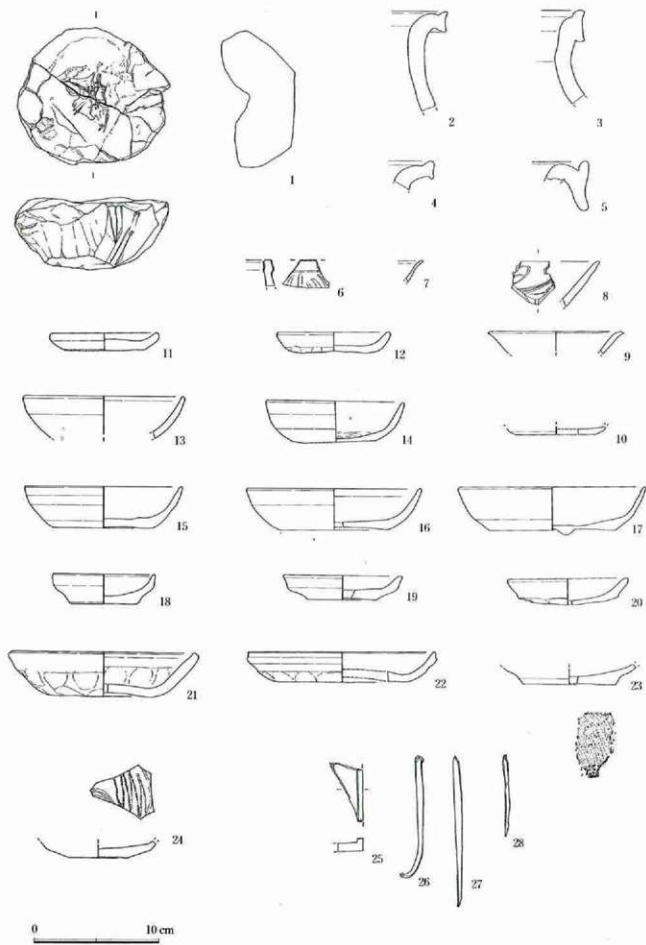
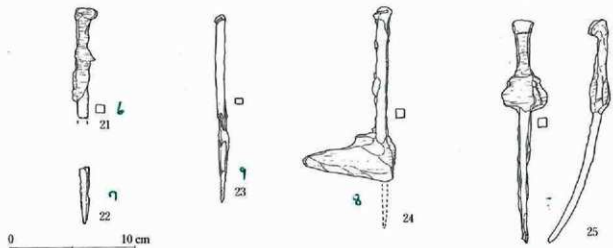
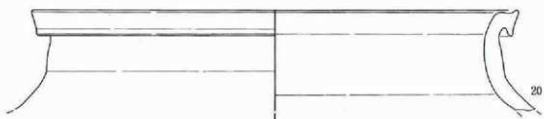
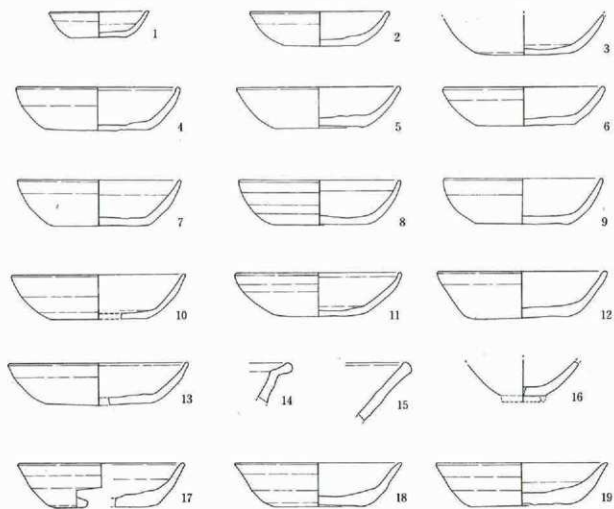


图8 北冥廟出土遺物



0 10 cm

图9 北冥廟出土遺物

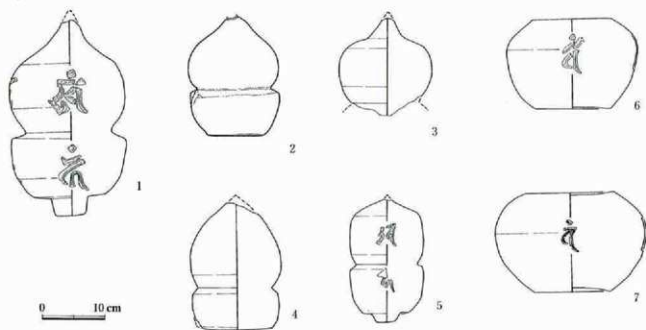
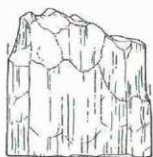
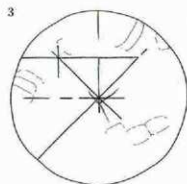


图10 北冥廟出土遺物



1



3

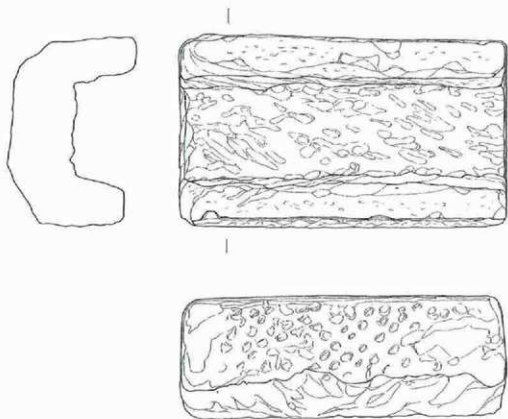


2



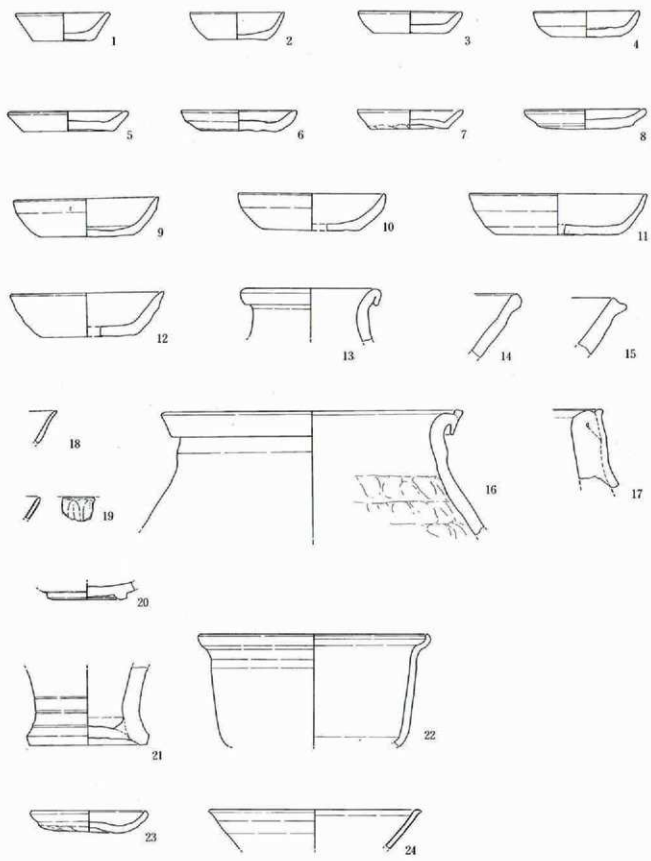
0 20 cm

图11 北冥廟出土遺物



0 20 cm

图12 苑池西岸(池中)出土遗物



NYS9±004

NYS9 67001



图13 苑池西岸(下層遺構面・地山面)出土遺物

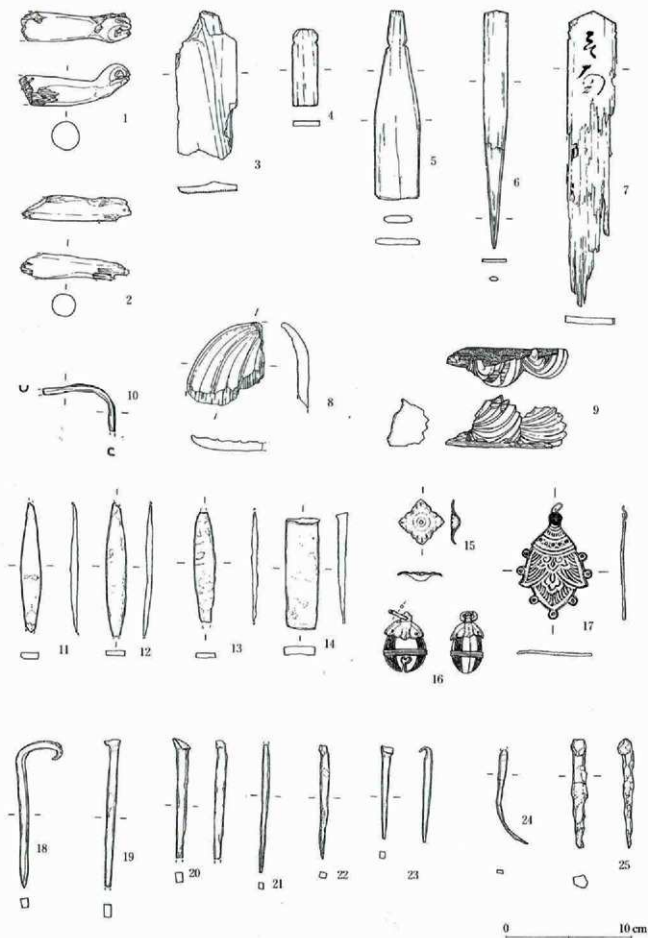


图14 范池西岸(下層遺構面・下層池中)出土遺物

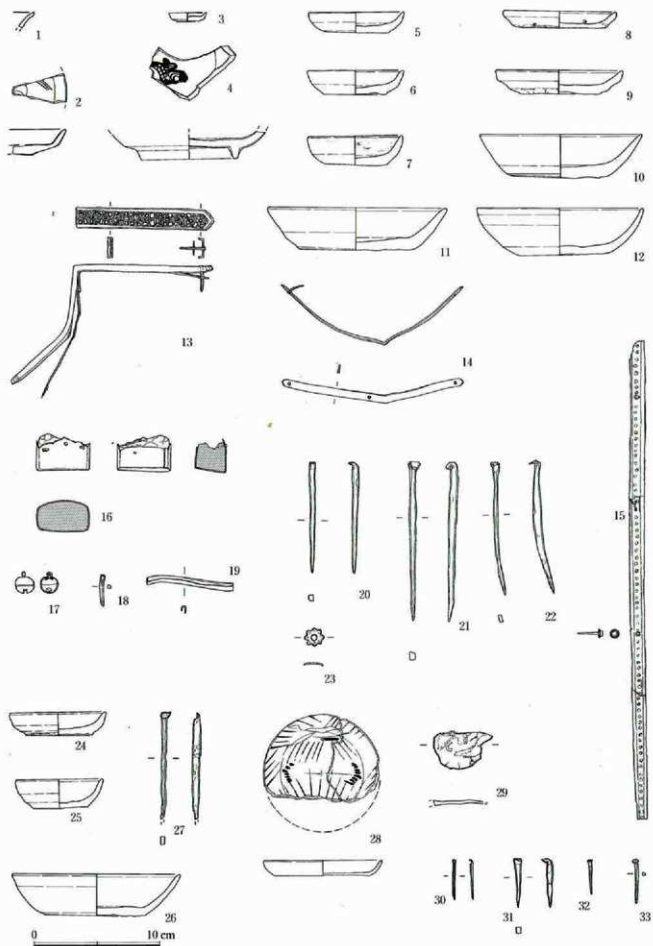


図15 菟池西岸(瓦積み・瓦溜り・池中・地山面)出土遺物

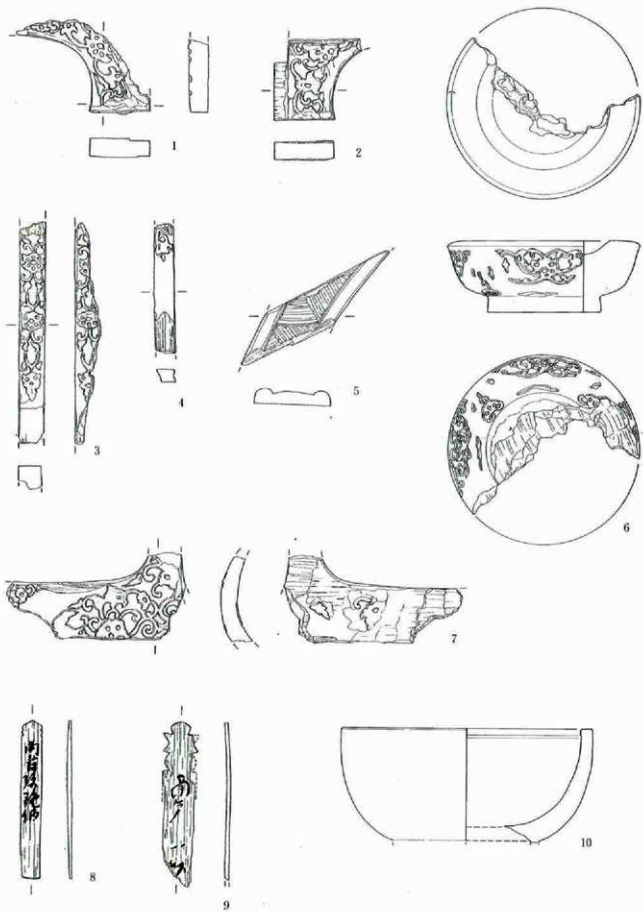
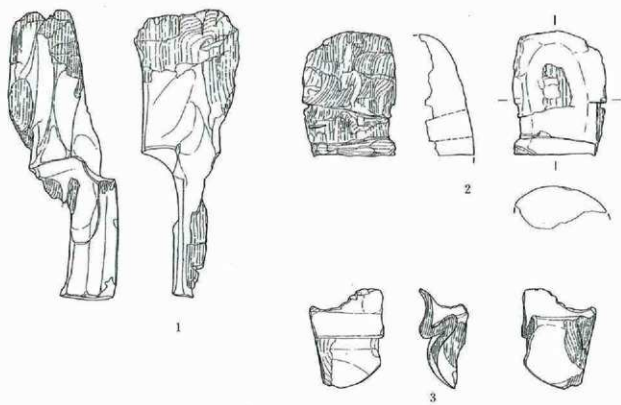
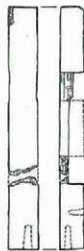
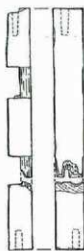
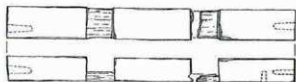
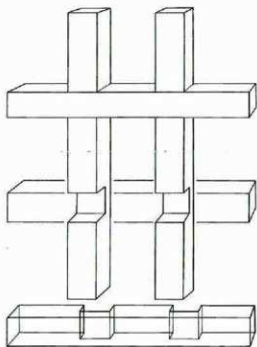


图16 菟池西岸雨落ち内瓦瀝り・池中出土遺物

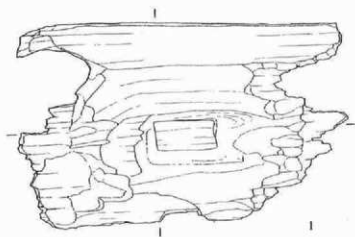
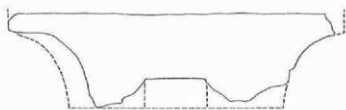


4~6 復元模式図



0 10 cm

图17 菟池西岸(池中)出土遺物



0 10 cm



2



0 20 cm

图16 苑池西岸(池中)出土遗物

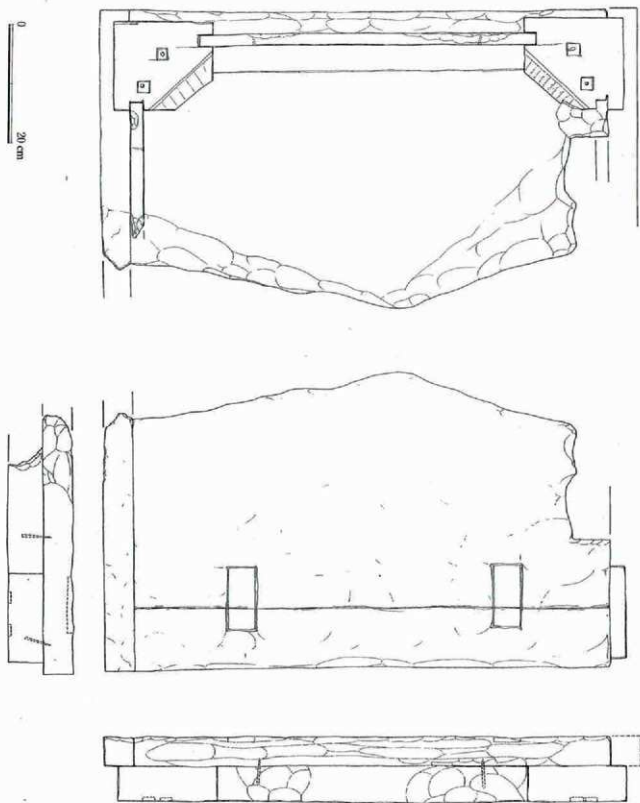


图19 苑池西岸(池中)出土遗物

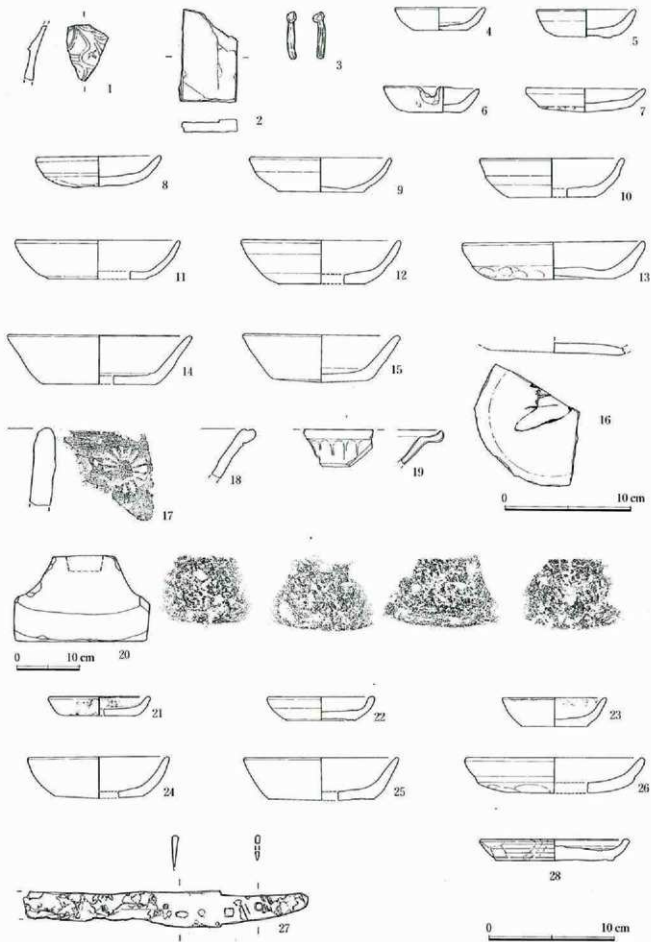


图20 苑池北岸(N期上层·下层)出土遗物

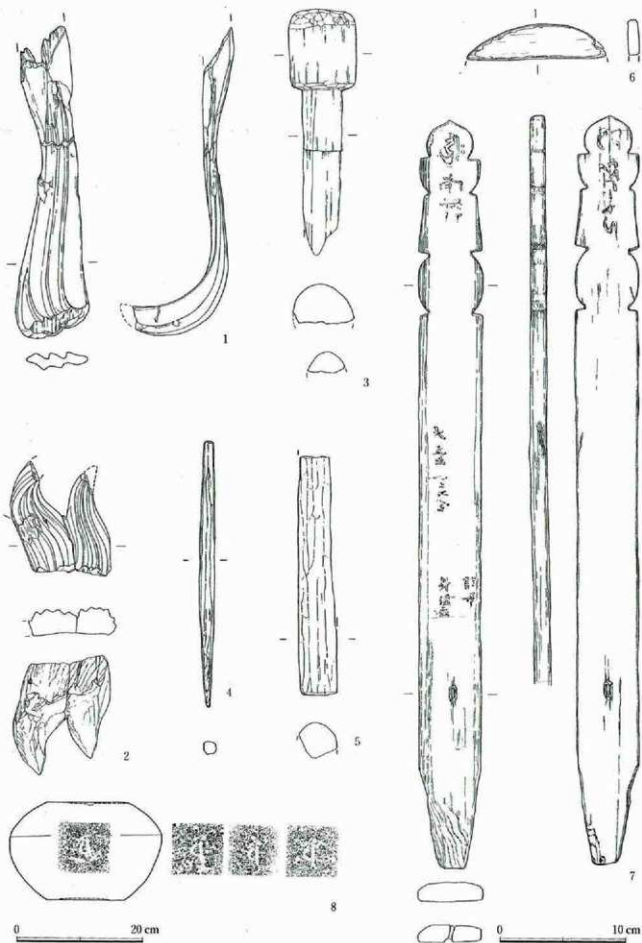


图21 苑池北岸(N期下層)出土遺物

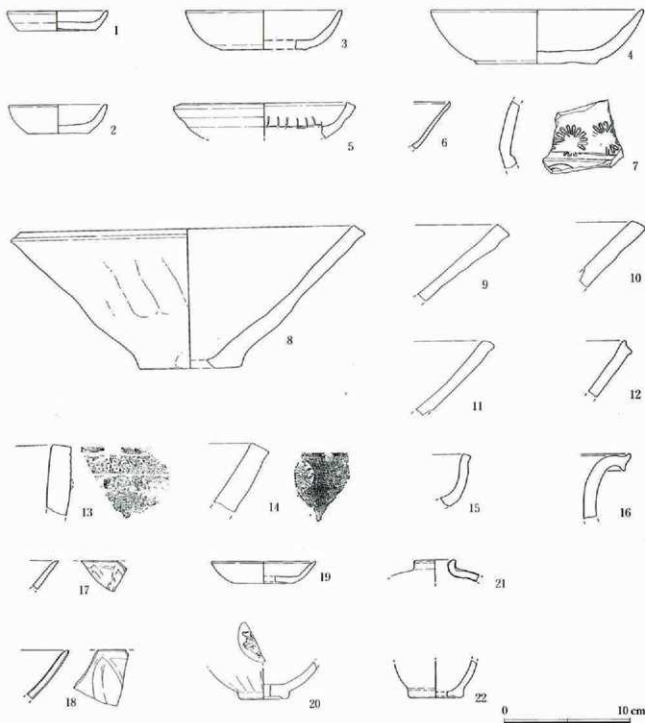


图22 苑池北岸(IV期1面)出土遗物

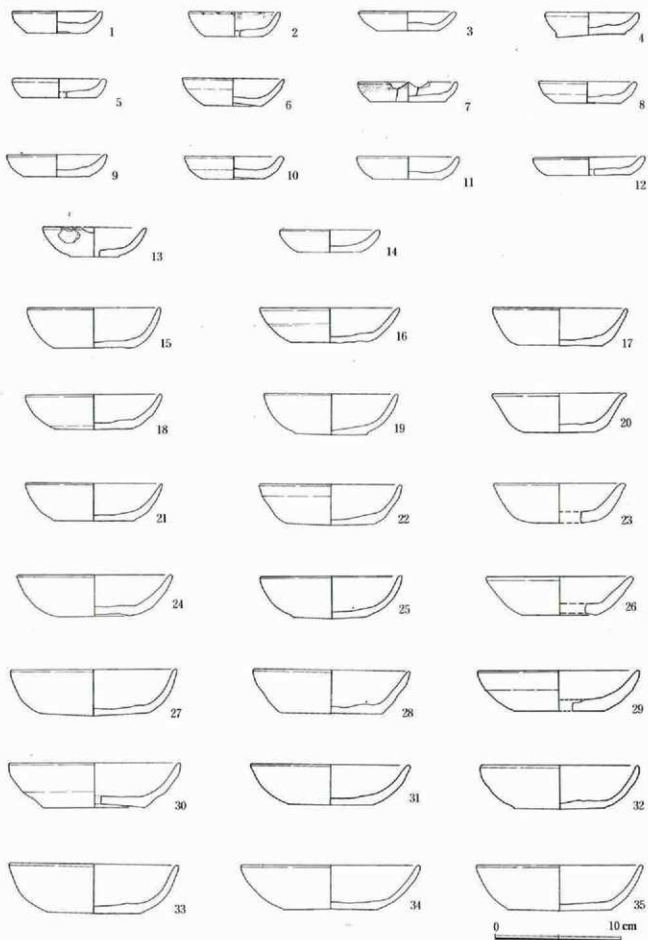


图23 苑池北岸(N期2面)出土遗物

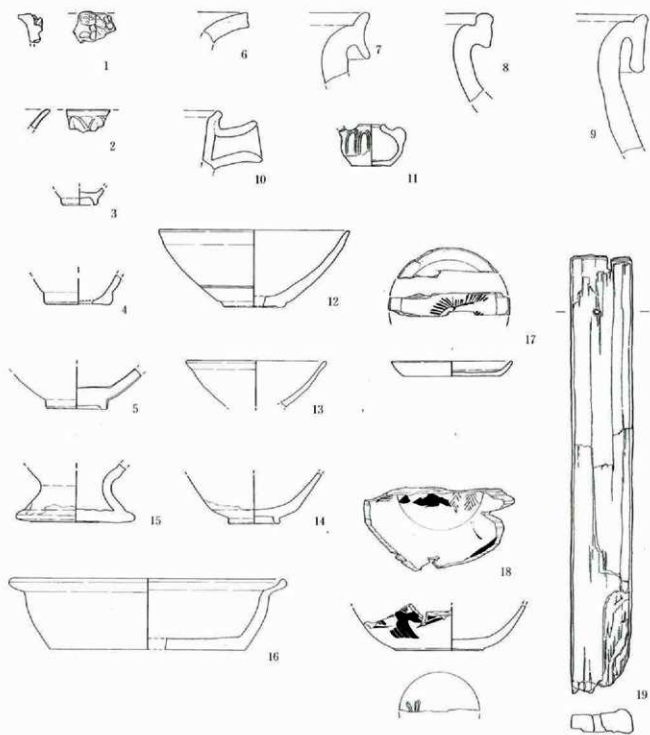


图24 苑池北岸(M期2面)出土遗物

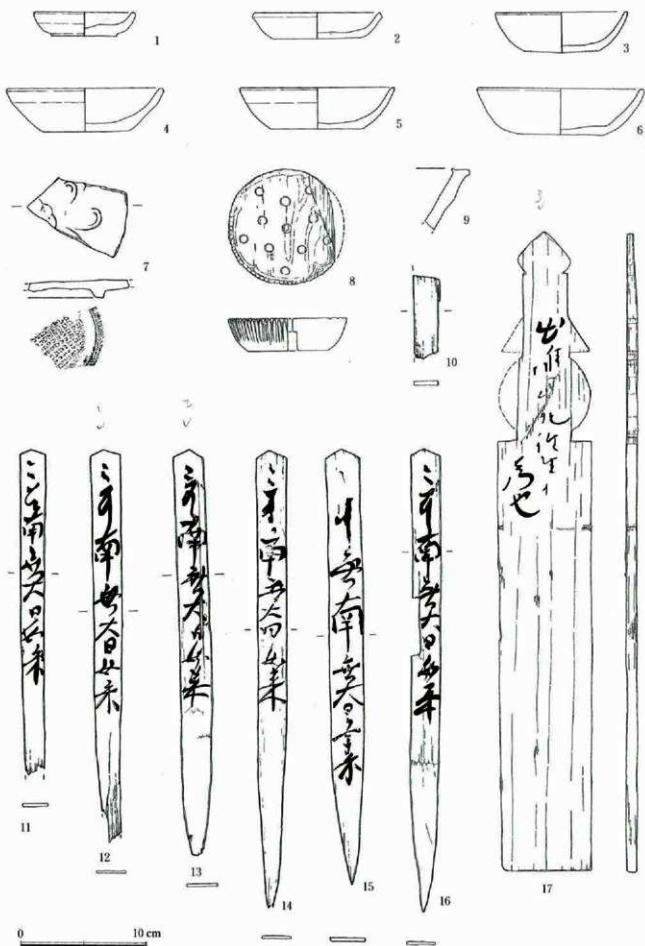


図25 苑池北岸(N期2面)出土遺物

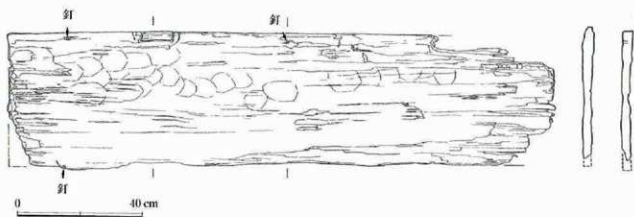


图26 菴池北岸(池中)出土遺物

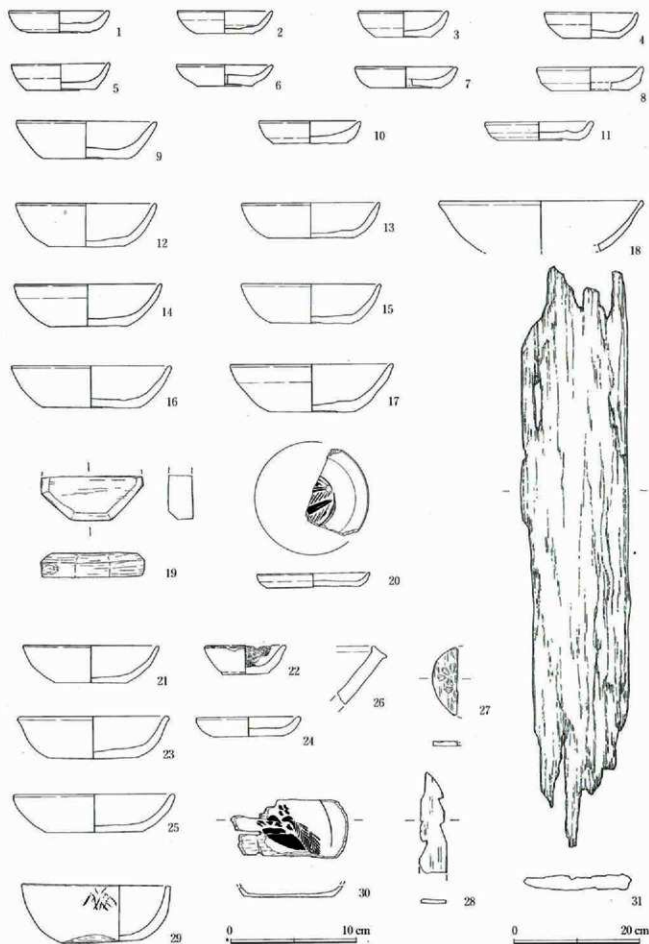
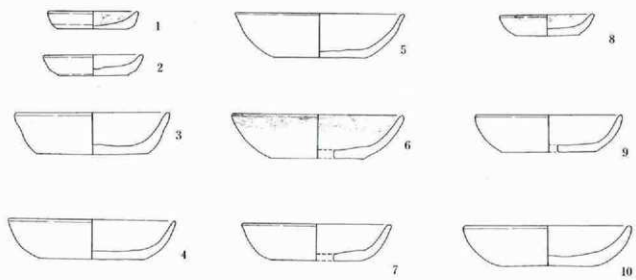
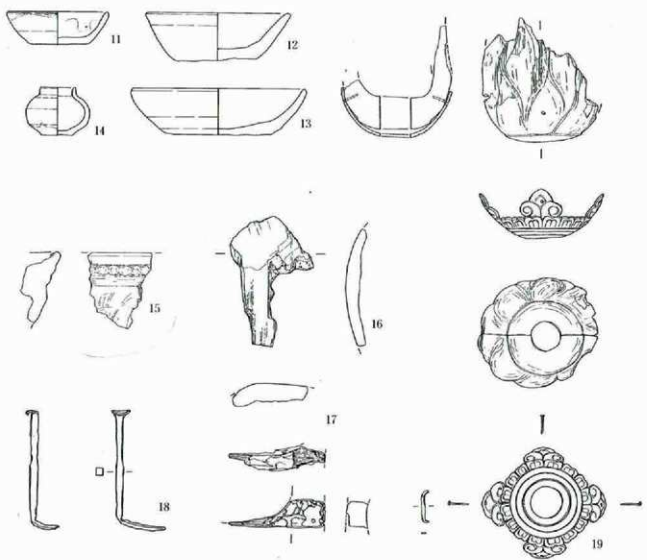


图27 苑池北岸(N期3面)出土遗物



苑池北岸(池中)出土遺物



苑池東岸(池中)出土遺物

圖28 苑池北岸・東岸(池中)出土遺物

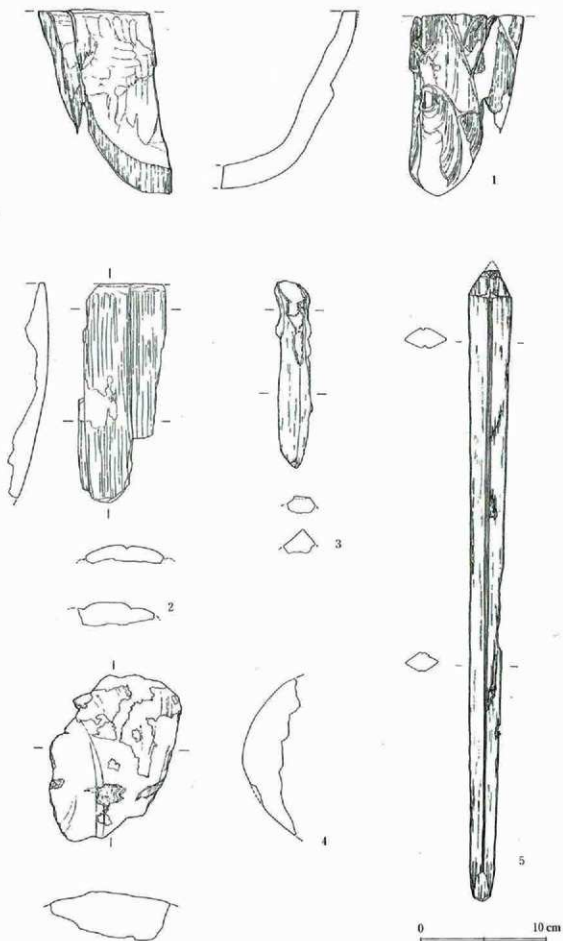


图29 苑池東岸周辺(池中)出土遺物

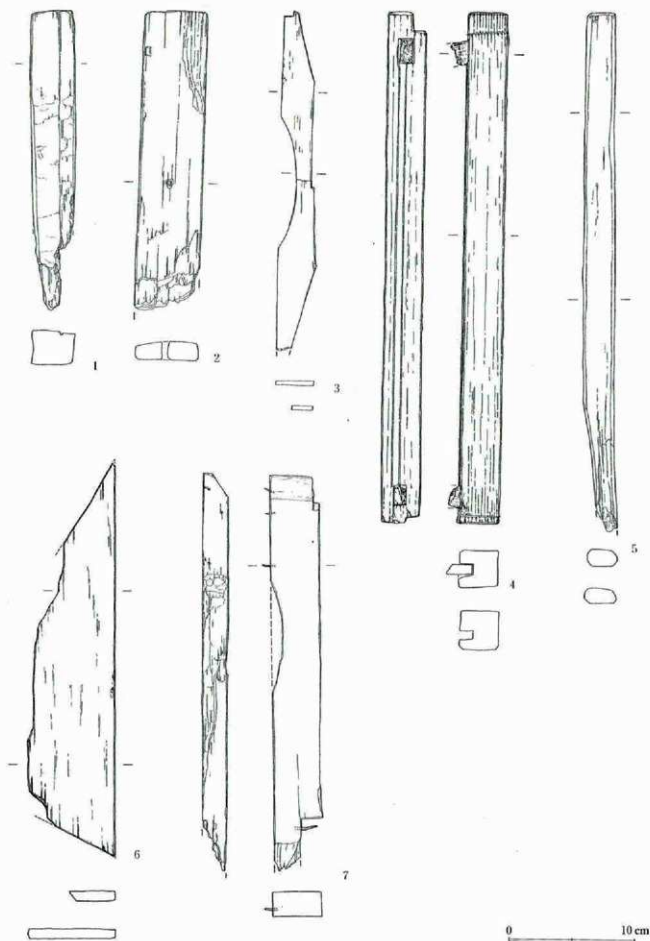


图30 苑池東岸(池中)出土遺物

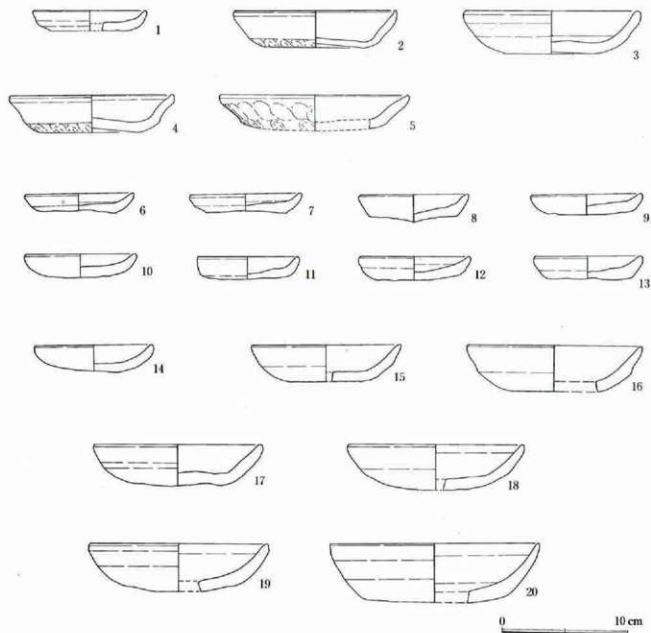


图31 菟池東岸(池中)出土遺物

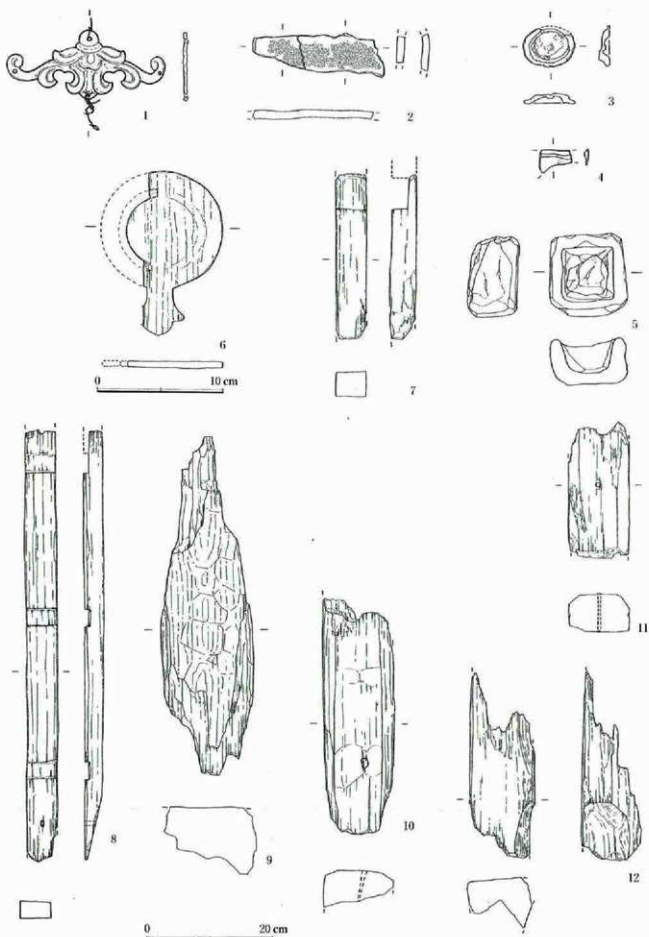


图32 苑池东岸(Ⅱ期池中)出土遗物

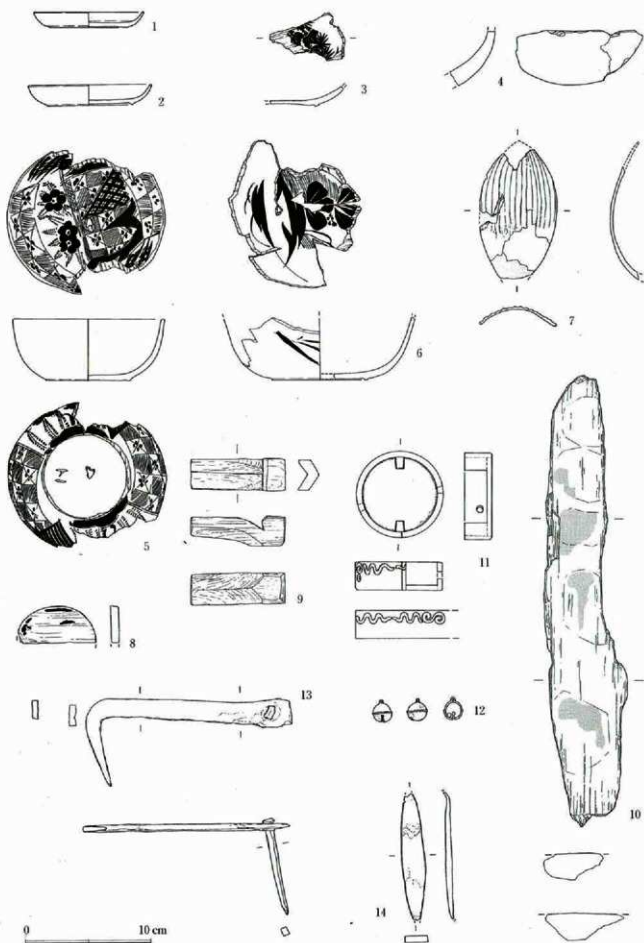


图33 苑池东岸(Ⅲ期池中)出土遗物

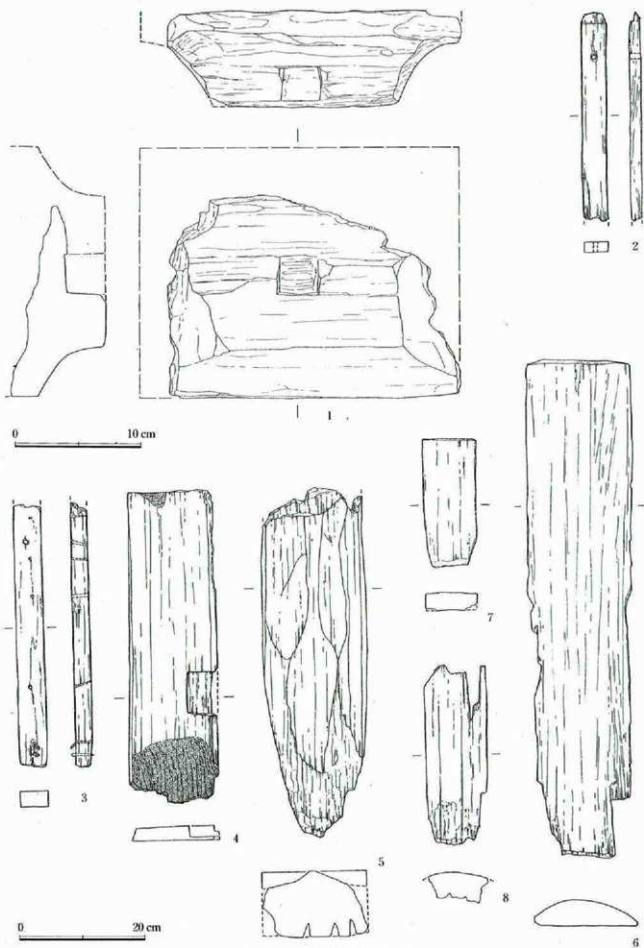


图34 菟池東岸(Ⅲ期池中)出土遺物

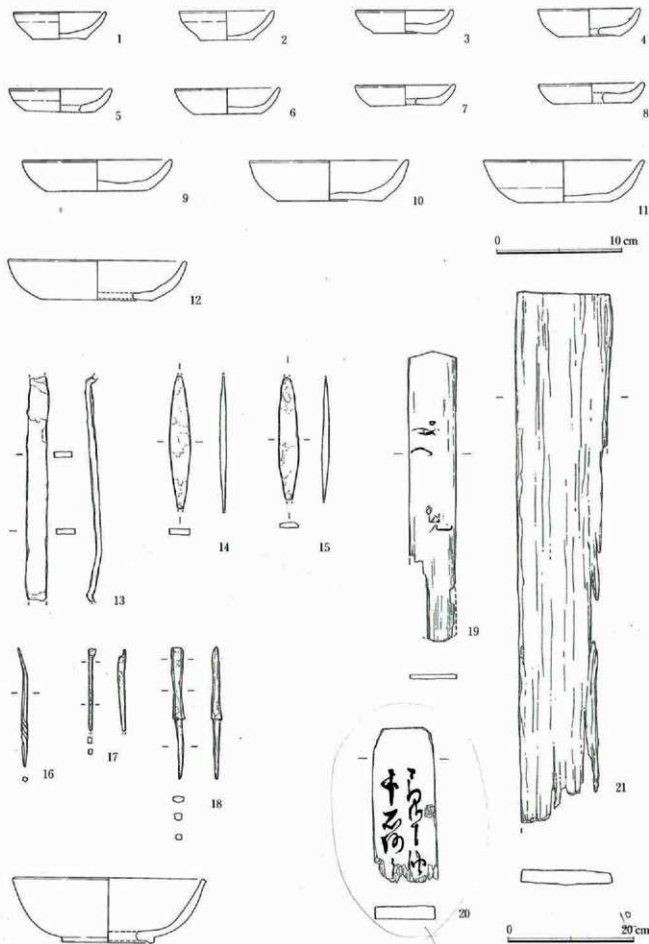


图35 菟池東岸(Ⅱ期池中)出土遺物

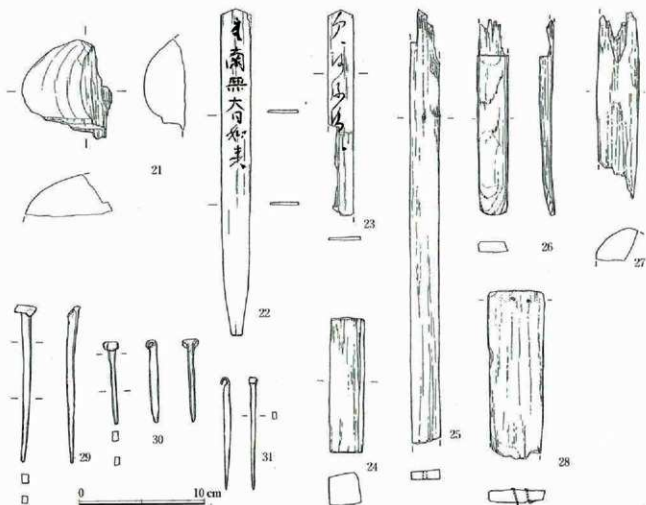
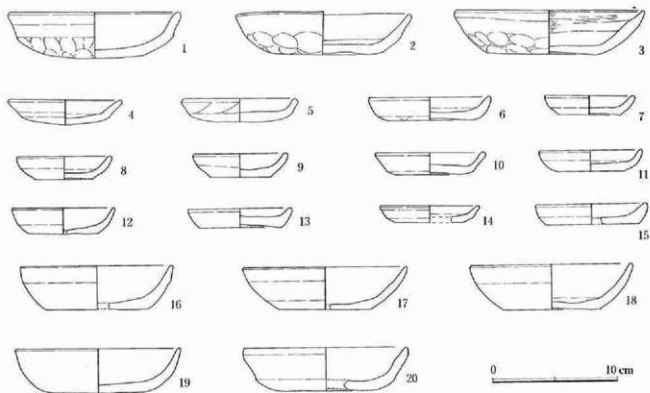


图36 菊池東岸(Ⅰ・Ⅱ期池中)出土遺物

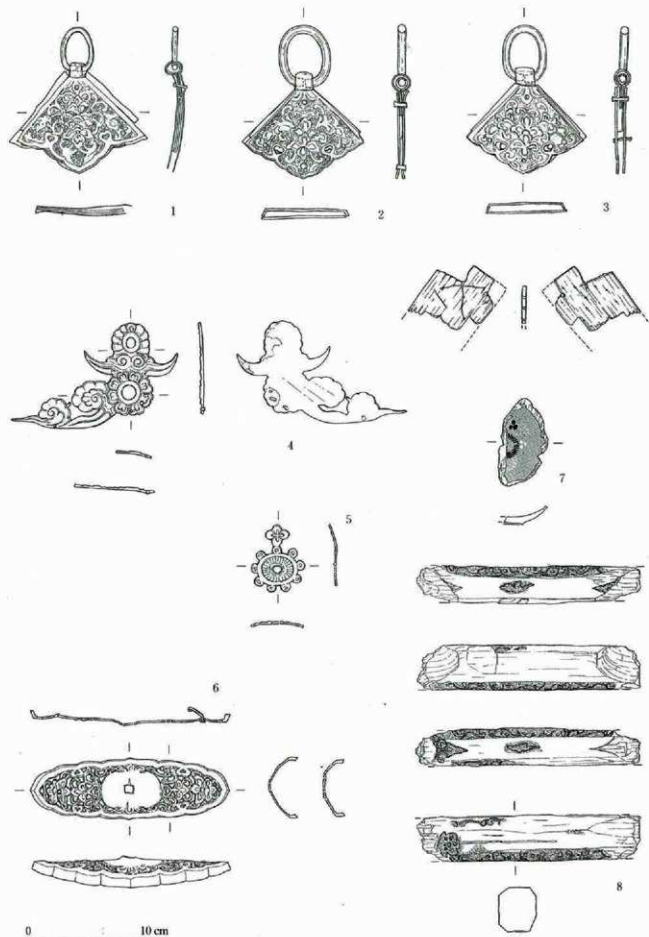
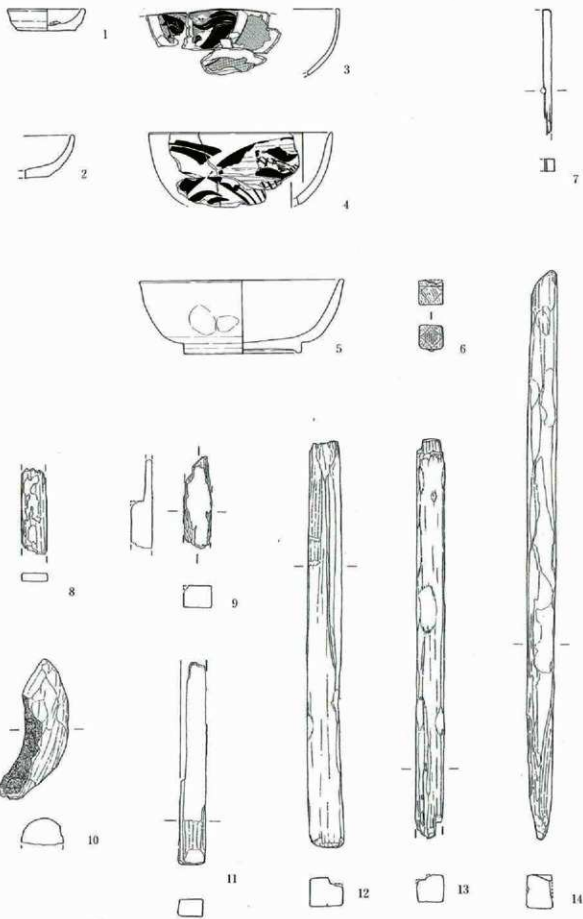


图37 苑池南岸(早期池中)出土遗物



0 10 cm

图38 苑池南岸(三期池中)出土遗物

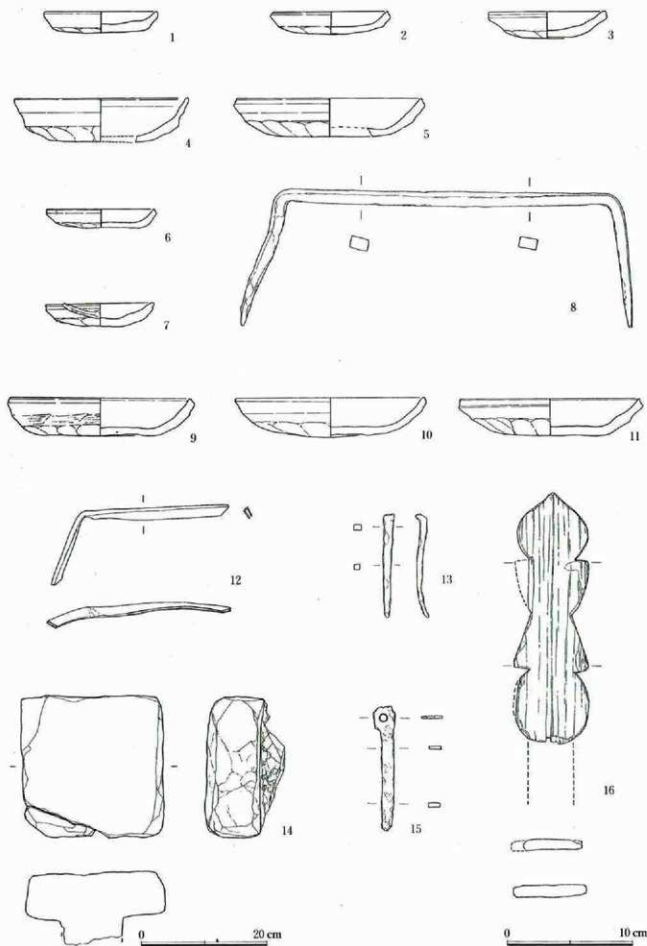
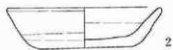
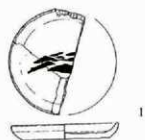


图39 苑池南岸(I·II期中)出土遗物



0 10 cm



0 20 cm

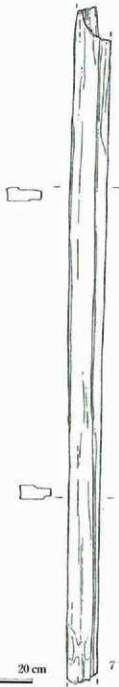


图40 横周边(池中)出土遺物

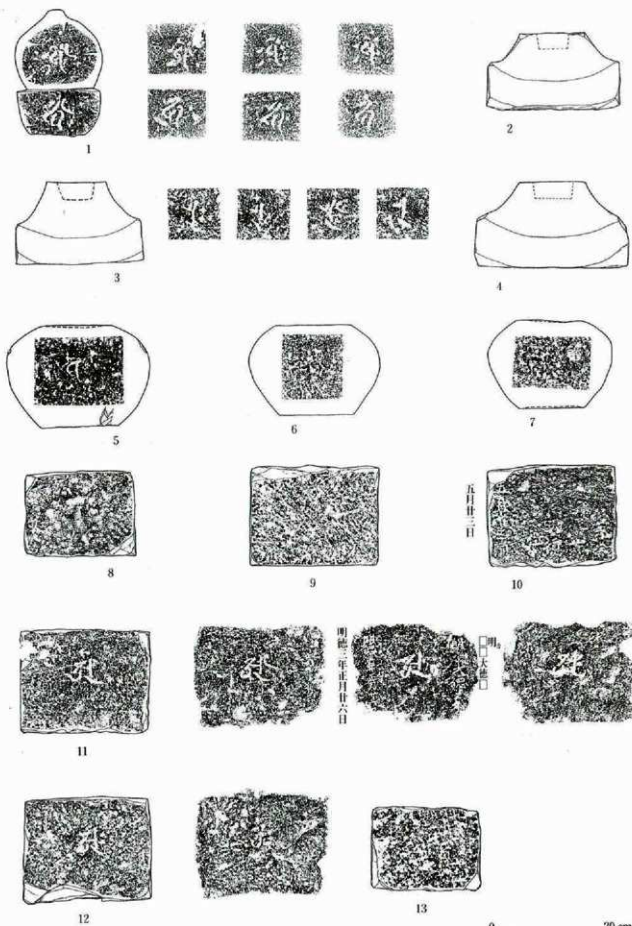


图41 5 冢(遺水)出土遺物

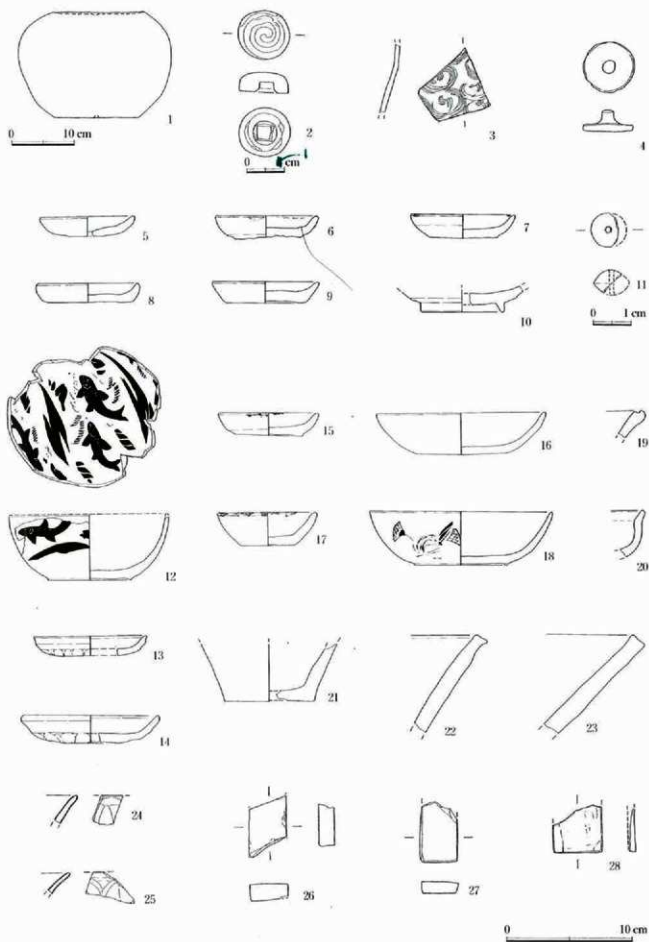


图42 遼水(5溝、7溝)·取水遺溝出土遺物

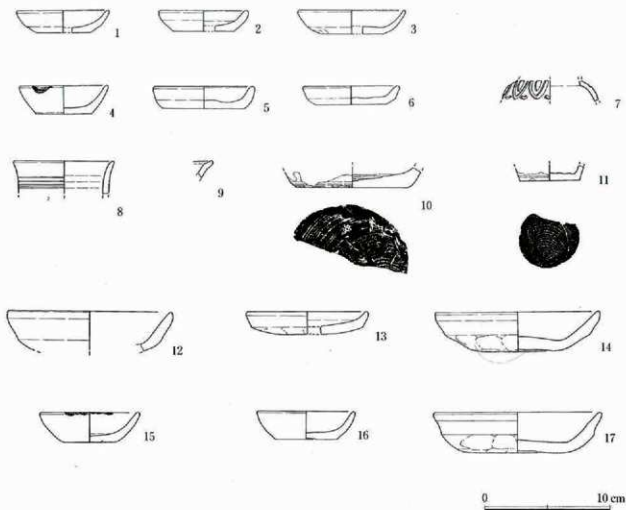


图43 濠口出土遗物

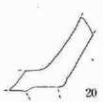
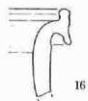
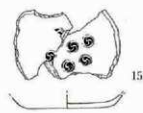
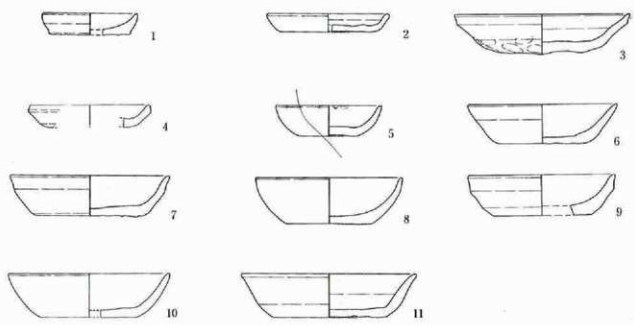


图44 钵状遺構・遺水(1溝)出土遺物

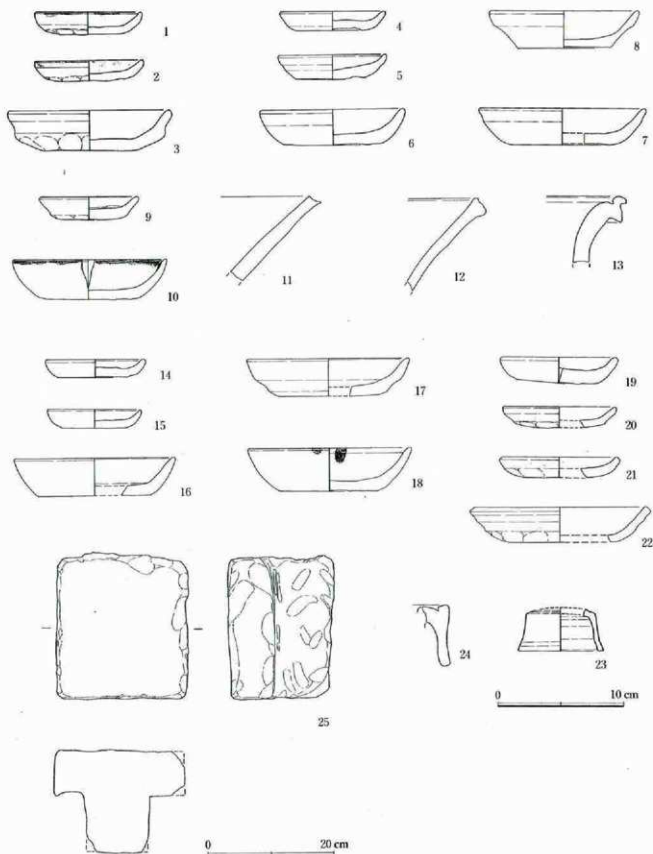


图45 堂背後出土遺物

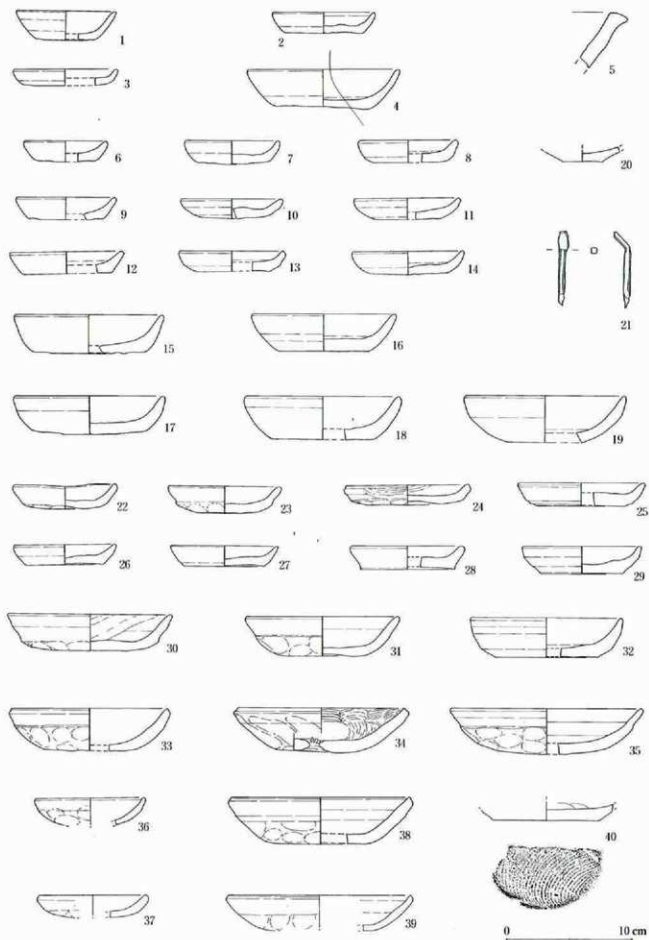


圖46 2溝·3溝出土遺物

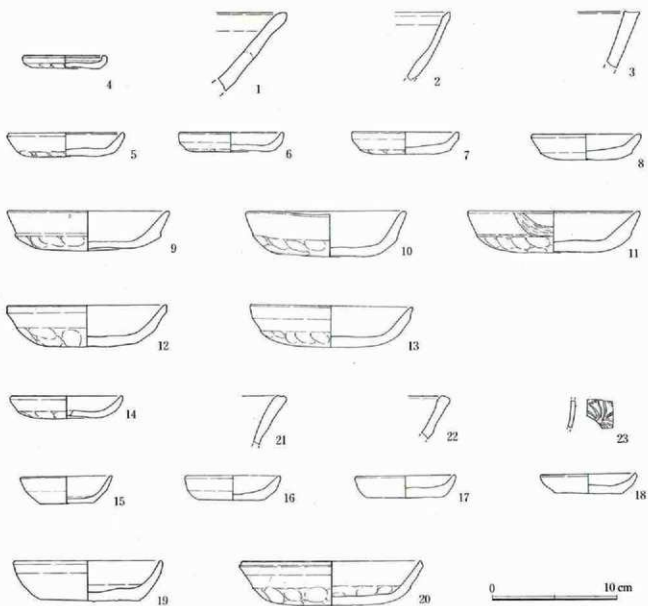


图47-3 清出土遺物

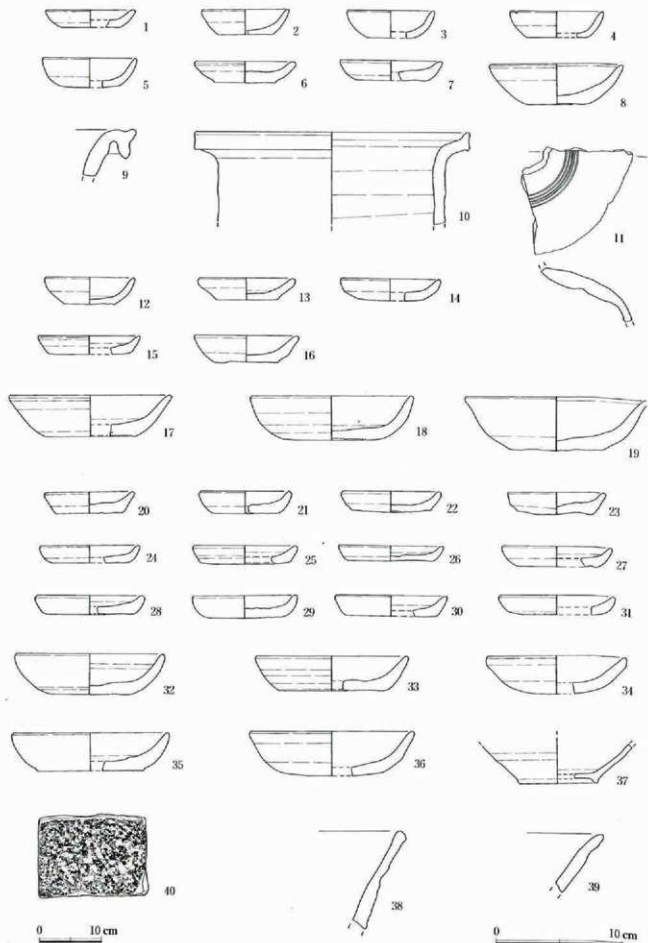


图46 2 满出土遗物

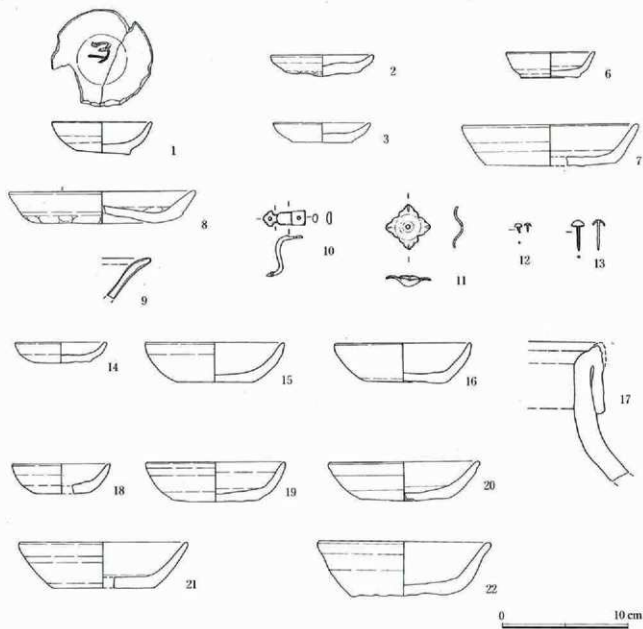
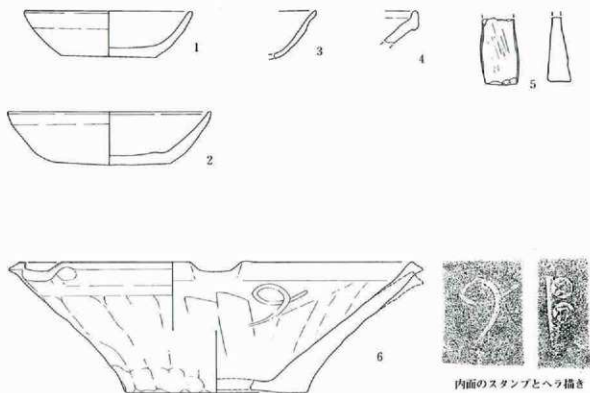


图49 2 清出土遺物



内面のスタンプとヘラ描き

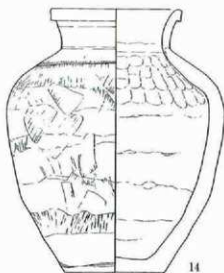
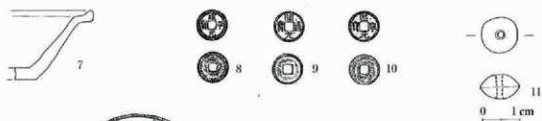


図50 西ヶ谷・西山出土遺物

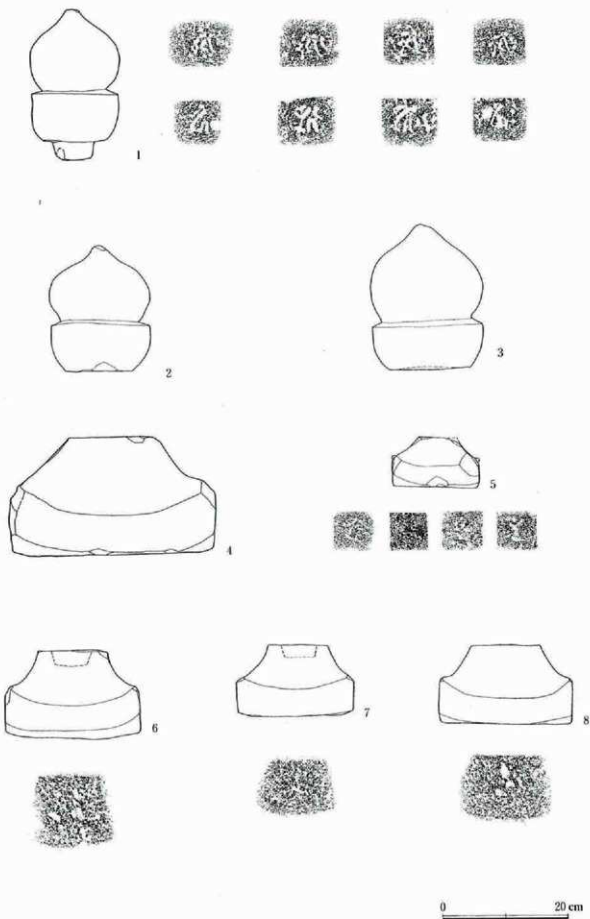
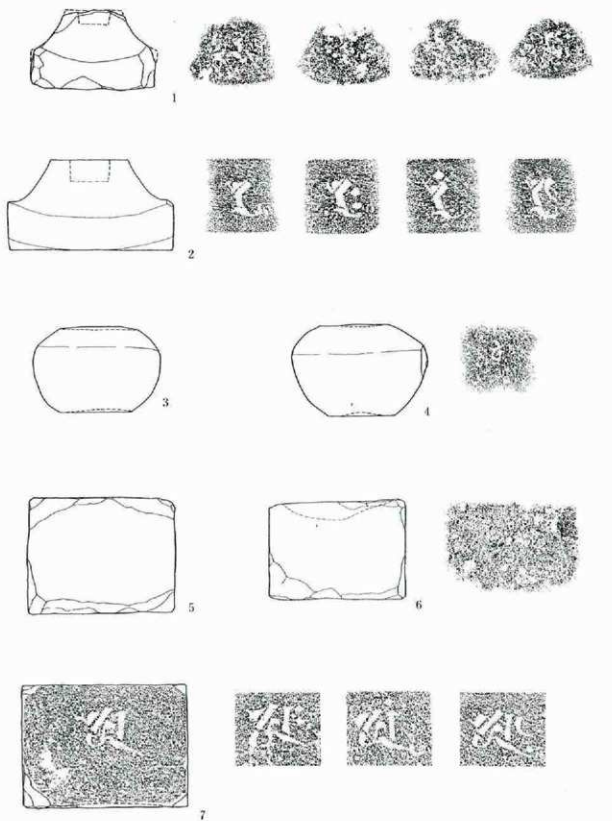


図251 東山平場表押遺物



0 20 cm

圖52 東山平場表探遺物

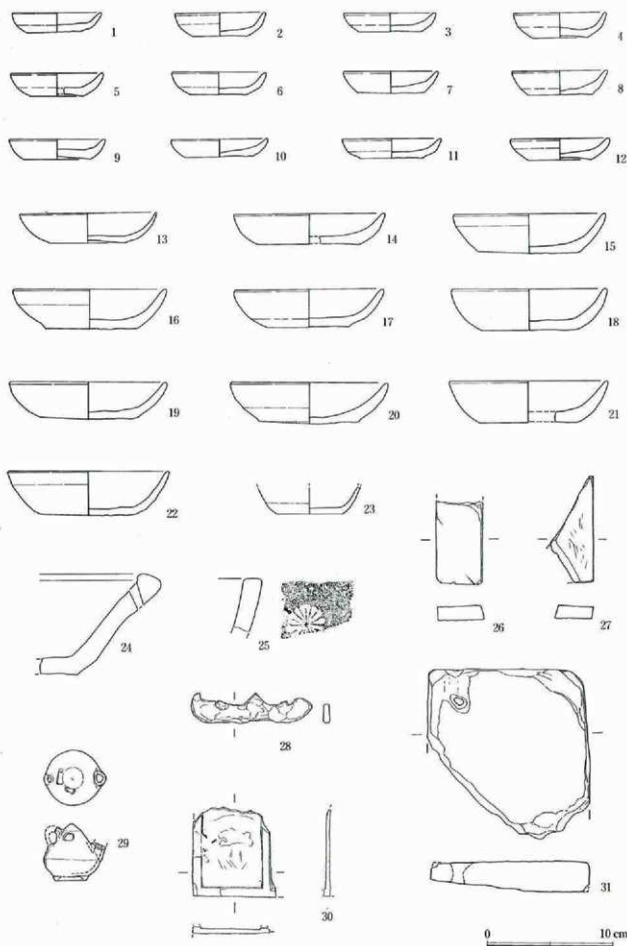


图53 东山平场出土遺物

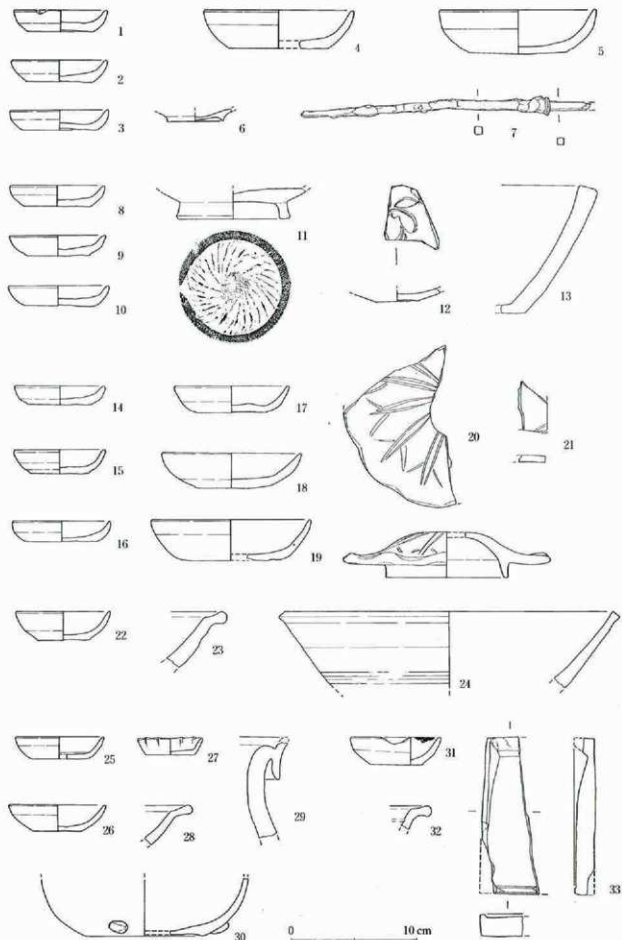


图54 东山平场出土遗物

表1 遺物観察表

図3 一宮堂出土遺物

()内の数値は単位、単位はcm

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	鉄釘	長(11.5)	幅1.3	厚1.0	断面四角形	N83地山上包古層
2	"	長(14.6)	幅1.0	厚1.1	"	"
3	銅製鏝	長(5.1)	幅4.6	厚1.0	表面は無文ではある。堂内具	"
4	銅釘	長2.8	幅0.5	"	銅製は鉄製と異なり裝飾的要素が高い	"
5	金風鈴	縦1.0	横0.8	"	大尺で焼け磨けて面まった金風	N83地山面上
6	銅製品	長(3.7)	幅4.9	厚0.6	銅製が付く	N83地山面上
7	かわらけ	14.6	"	3.5	手捏ね 胎土精良 色は黄灰色 丸底で口縁部外側に凹線が通る	二東3層方内の木製基壇東柱抜き取り穴から出土したこと から修理の行われた瓦元・室 治年頃の遺物と考えられる
8	瀬戸天目茶碗	断片	"	"	素地は灰白色	N1 階堂後雨落附石
9	"	"	"	"	素地は灰白色	"
10	瀬戸碗	"	高台径5.3	"	素地は精良で内面に灰釉	"
11	天目茶碗	"	高台径4.3	"	素地は黄灰色で輪郭線に焼き締まる。吉州窯産か	"
12	茶清壺	断片	"	"	"	"

図3 北極廟出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
13	銅釘	長4.9	幅0.4	"	振り釘	高佃面遺蹟
14	かわらけ	12.6	"	3.4	手捏ね 胎土は精良 色は赤赤灰色	治最層
15	山米碗	14.9	"	"	内面に紅付着 胎土はやや粗 表面に蔦灰釉	柱穴2-4

図3 南極廟出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
16	かわらけ	7.7	4.5	2.2	轆轤成形 胎土は粗 色は赤灰色	かわらけ葺り1
17	"	13.0	8.1	3.2	"	"
18	"	13.7	7.4	3.3	胎土は粗 色は赤赤灰色	"
19	"	7.2	4.7	2.2	胎土は精良 色は黄灰色	かわらけ葺り2
20	"	7.6	4.6	1.7	胎土はやや粗 色は赤灰色	"
21	"	7.8	4.8	2.0	胎土は良 色は橙褐色	"
22	"	11.9	7.6	2.6	胎土は良 色は黄灰色	"
23	"	13.7	7.7	3.3	胎土は粗 色は赤灰色	"
24	"	13.1	8.9	3.0	胎土は良 色は赤赤灰色	"
25	"	13.8	7.6	3.6	胎土は粗 色は赤灰色	"

図4 阿弥陀堂出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	基壇東柱	縦20.0	横20.0	高(35.4)	断面方形	阿弥18 木製基壇木材
2	"	縦16.4	横22.6	高(29.6)	断面長方形	阿弥17
3	"	縦18.8	横15.6	高(21.6)	"	阿弥24
4	鉄釘	長(12.9)	幅0.7	"	断面四角形	阿弥陀堂基壇上
5	板碑	縦(4.6)	横(4.6)	厚0.5	銘板岩製	阿弥陀堂基壇石圍方1

図4 南翼廟出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
6	かわらけ	12.6	8.2	3.6	轆轤成形 胎土は良 色は黄灰色	南翼27(中門柱様方内)

図5 薬師堂出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	6.6	3.6	2.4	轆轤成形 胎土はやや粗 色は赤赤灰色	遺構面まで
2	"	6.9	3.5	2.1	胎土はやや粗 色は赤赤灰色	"
3	"	7.4	4.5	2.0	胎土はやや粗 色は赤赤灰色	"
4	"	6.9	4.0	2.0	手捏ね成形 胎土は精良 色は赤赤灰色	"
5	"	8.0	4.7	2.3	胎土は精良 色は赤赤灰色	"
6	"	8.8	4.7	1.9	"	"
7	"	8.4	2.0	2.0	胎土は精良 色は赤赤灰色	"
8	"	7.0	2.4	2.4	胎土は精良 色は赤赤灰色	"
9	"	9.2	1.8	1.8	胎土は精良 色は赤赤灰色	"
10	"	9.1	1.8	1.8	胎土は精良 色は赤赤灰色	"
11	"	9.4	2.3	2.3	胎土はやや精良 色は赤赤灰色	"
12	"	8.6	2.2	2.2	胎土はやや精良 色は赤赤灰色	"
13	"	9.8	1.8	1.8	胎土はやや精良 色は赤赤灰色	"
14	"	13.8	3.2	3.2	胎土は精良 色は黄灰色	"
15	"	15.2	3.6	3.6	胎土は精良 色は黄灰色	"
16	東石	縦22.0	横18.6	奥行20.4	断面丁字形 壇上積基壇石材	遺構面
17	"	縦21.2	横20.0	奥行(6.6)	"	"
18	"	縦22.4	横22.0	"	"	63年度包舎層出土遺物
19	"	縦23.2	横22.4	奥行21.8	"	"
20	鉄釘	長24.5	幅2.0	"	断面四角形	遺構面
21	大舎	14.4	"	"	瓦質希少断片、素地は灰白精良土、珠文雷文を添らす	遺構面まで
22	茶清壺	断片	"	"	胎土は粗く茶褐色	"
23	"	断片	"	"	胎土は粗く灰色	"

図6 薬師堂出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	地盤石	長73.0	幅27.0	厚17.0	壇上積基壇石材 表面に羽目石の痕跡を残す	遺構面
2	東石	長84.4	幅34.0	厚13.6	壇上積基壇石材 片面が熱を受けている	"

図7 薬師堂出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	東柱	長(53.0)	縦21.9	横21.9	木製基壇木材 断面方形	東柱1(堂北西側)
2	"	長(43.0)	縦21.9	横20.0	"	東柱3
3	"	長(48.0)	縦21.6	横18.4	"	東柱2

図8 北粟産出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	土片製品	径12.4			土片を輪状に蒸割った製品。用途不明	遺積面
2	高滑葉			高5.8	胎土は精良茶灰色 緑赤釉敷く上方に並びない	#
3	#				胎土は精良茶灰色 緑赤釉貼る貼り付	#
4	#				胎土は精良茶灰色 焼成甘くやや軟質	#
5	#				胎土は精良茶灰色	#
6	青白磁				胎土は極精良灰白色 赤褐色の透明な釉面張った口縁で青白か	#
7	# 皿				胎土は精良灰白色 赤褐色の透明な釉	#
8	青磁釉				胎土は極精良茶灰色 内面彫花文	#
9	白磁口瓦皿	10.5			胎土は極精良灰白色 灰白色半透明の釉	#
10	#		6.4		胎土は極精良灰白色 灰白色半透明の釉	#
11	かわらけ	8.4		1.4	手捏ね成形 胎土は精良 色は赤褐色	#
12	かわらけ	8.8		1.6	手捏ね成形 胎土は精良 色は赤褐色	#
13	#	12.6			轆轤成形 胎土は精良 色は赤褐色	#
14	#	10.9	6.7	3.3	胎土は精良 色は赤褐色	#
15	#	12.4	8.0	3.3	胎土は精良 色は赤褐色	#
16	#	13.7	8.5	3.3	胎土は精良 色は赤褐色	#
17	#	14.7	10.1	3.5	胎土は精良 色は赤褐色	#
18	かわらけ	8.1	5.3	2.4	轆轤成形 胎土は精良 色は赤褐色	地山面
19	#	9.2	5.4	2.0	胎土は精良 色は赤褐色	#
20	#	9.4		2.1	手捏ね成形 胎土は精良 色は赤褐色	#
21	#	14.5		3.6	胎土は精良 色は赤褐色	#
22	#	14.7		2.5	胎土は精良 色は赤褐色	#
23	#		7.4		轆轤成形 胎土は精良 色は赤褐色	#
24	青磁皿		4.7		胎土は極精良灰白色 赤褐色の透明な釉 簡直文	#
25	縄			厚1.9	赤褐色の粘板岩製	#
26	鉄釘	長9.8	幅0.5		断面四角形	#
27	#	長12.2	幅0.6		#	#
28	#	長6.6	幅0.3		#	#

図9 北粟産出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.8	4.4	2.1	轆轤成形 胎土は精良 色は赤褐色	NY62北粟からかわらけ産り
2	#	11.0	5.8	2.8	胎土は精良 色は赤褐色	#
3	#			7.8	胎土は精良 色は赤褐色	#
4	#	12.8	8.3	3.5	胎土は精良 色は赤褐色	#
5	#	12.8	7.0	3.3	胎土は精良 色は赤褐色	#
6	#	12.7	7.8	3.1	胎土は精良 色は赤褐色	#
7	#	12.9	7.5	3.7	胎土は精良 色は赤褐色	#
8	#	12.8	7.5	3.6	胎土は精良 色は赤褐色	#
9	#	12.5	7.4	3.7	胎土は精良 色は赤褐色	#
10	#	13.7	7.5	3.6	胎土は精良 色は赤褐色	#
11	#	13.0	7.3	3.5	胎土は精良 色は赤褐色	#
12	#	13.3	7.4	3.7	胎土は精良 色は赤褐色	#
13	#	14.2	8.5	3.4	胎土は精良 色は赤褐色	#
14	瀬戸系緑磁	断片			胎土は精良茶灰色 緑赤丸く 内面灰釉	NY62北辺山落ち層上層
15	山系陶器系程お鉢	断片			胎土は精良茶灰色 口縁赤い灰釉	#
16	瀬戸系		高台(3.4)		胎土は精良茶灰色 赤褐色透明な灰釉	#
17	かわらけ	13.0	7.1	3.6	轆轤成形 胎土は精良 色は赤褐色	#
18	#	13.2	7.0	3.5	胎土は精良 色は赤褐色	#
19	#	13.5	7.9	3.5	胎土は精良 色は赤褐色	#
20	高滑葉	38.8			胎土は精良茶灰色	NY63山辺山落ち層内瓦瀝り
21	鉄釘	長(4.5)	幅0.7		断面四角形	#北粟34下
22	#	長(8.9)	幅0.9		#	#北粟38下
23	#	長15.1	幅0.7		#	#北粟36下
24	#	長(14.0)	幅1.0		地中根木材と腐立柱に打ち付けられていた	#北粟40下
25	#	長18.0	幅1.0		断面四角形	#北粟37下

図10 北粟産出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	空風輪	最大径18.4		高33.2	室町期、五大種子	匂合層
2	#	最大径14.6		高19.2	室町期	#
3	#	最大径15.0		高15.6	室町期	#
4	#	最大径14.6		高20.6	砲弾型、五大種子	#
5	#	最大径11.8		高19.8	砲弾型	#
6	水輪	最大径21.0		高14.4	五大種子	#
7	#	最大径24.4		高16.0	五大種子	#

図11 北粟産出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	柱根	縦23.0	横22.8	高(24.0)	面取り角柱(面取り幅5.5)	NY63北粟39下約断先端
2	#	縦23.2	横23.4	高(28.2)	#(面取り幅5.5)	#北粟40下
3	#	径28.2		高(39.0)	円柱 底面に染入れ有り	NY62北粟17下

図12 釜池西岸池出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	鎌倉石溝	長52.4	幅30.8	厚19.6	溝状に窪む	池中

図13 釜池西岸下層遺構面・地山面出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.3	4.8	2.3	轆轤成形	NY2下層遺構面覆土
2	#	7.4	4.7	2.2	#	#
3	#	8.1	5.8	1.8	#	#
4	#	8.3	5.4	2.1	#	#
5	#	9.2	7.2	1.6	#	#
6	#	9.0	6.0	1.6	手捏ね成形	#
7	#	8.1		1.5	#	#

8	#	9.3		1.6	#	#
9	#	11.4	7.4	3.0	輪縁成形	#
10	#	11.8	7.6	3.0	#	#
11	#	14.0	9.6	3.3	#	#
12	#	12.1	7.5	3.5	#	#
13	常滑小壺	10.3			口縁部玉縁状	#
14	常滑鉢	断片			#	#
15	#	断片			#	#
16	常滑壺	径4			口縁部N字状	#
17	#	断片			幅広の縁部が頸部に接する	#
18	白磁口瓦瓶	断片			胎土は精良灰白色	#
19	青磁蓮弁文碗	断片			胎土は精良灰白色	#
20	白磁		高台径 5.3		胎土は精良灰白色	#
21	瀬戸黒瓶		9.4		素地は乳白色	#
22	瀬戸片耳鍋	18.0			灰白色の灰釉	#
23	かわらけ	9.1		1.7	手摺わ成形。焼成良好で底面中央部が凹み端高が低い	NY69朝建期地業層下地山面上から出土し創建時の徳久三(1192)年頃と考えられる遺物
24	白磁碗反碗	16.9			素地は緻密な灰白色。黄灰色がかかった透明な釉	#

図14 菊池西岸下層遺構面・下層池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	1仏像の手	長(8.9)	径2.4		捺線り 焼け残り	下層遺構面覆土
2	#	長(8.8)	径2.0		捺線り 焼け残り	#
3	1仏像断片?	長(12.0)	幅(4.8)		衣紋か 襷袢の一箇金箔着	#
4	4木製品付孔?	長6.2	幅2.0	厚0.4	端部に切り込み二ヶ所	#
5	#	長16.3	幅3.7	厚0.3	先端が細くなり端部に切り込み二ヶ所	#
6	香炉?	長19.2	幅2.0	厚0.3	素地なし	#
7	取壊灰	長(28.7)	幅3.9	厚0.5	素地(南無阿弥陀仏)	#
8	蓮弁	長(6.6)	径(6.1)		捺線り	#
9	燈籠	長4.3	径(9.7)	厚1.0	黒捺線り 焼け残り	#
10	銅製品	長(6.0)	幅0.7		緑金具か一部に金箔	#
11	1瓶い釘	長(10.5)	幅1.6	厚0.5	木釘を繋ぎ止める釘	#
12	#	長(10.8)	幅1.7	厚0.4	#	#
13	#	長(8.9)	幅1.7	厚0.4	#	#
14	1燈	長9.0	幅12.7	厚0.7	平面は長方形 先端尖る	#
15	銅製品	長3.7	幅0.8	厚0.1	四角花形の打筋か鍍金? 焼け残り	#
16	銅製鈴	長5.1	幅3.5	厚2.7	下部の楕円形 表面の各二箇所に宝相華文を配する	#
17	銅製飾り金具	長9.4	幅6.0	厚0.2	名荷の飾り金具 焼け残り	#
18	鉄釘	長12.0	幅0.6		断面四角形 焼け残り	#
19	#	長(11.9)	幅0.6		#	#
20	#	長(9.6)	幅1.3		#	#
21	#	長(10.4)	幅0.6		#	#
22	#	長(10.7)	幅0.7		#	#
23	#	長7.6	幅1.0		#	#
24	#	長(7.5)	幅0.6		#	下層池中
25	#	長8.8	幅1.3		#	#

図15 菊池西岸瓦積み・瓦張り・池中・地山面上出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	青白磁	断片		2.0	軸は明るい水色	NY1 5区地山面まで
2	青磁蓮文皿			0.7	回文素地	# 3区瓦積み下
3	瀬戸入子	2.9	1.8		精良な胎土。口縁に自然釉	NY1 蓮節室前
4	青磁皿			高台径 7.7	内底に魚(相魚)押印文	#
5	かわらけ	7.4	4.9	1.6	輪縁成形 胎土はやや精良 色は赤灰色	NY63 池中(2・3区)
6	#	7.5	5.0	2.0	胎土はやや精良 色は赤褐色	#
7	#	7.4	5.0	2.3	胎土はやや精良 色は赤褐色	#
8	#	8.9		1.8	手摺わ成形 胎土精良 色は赤灰色	#
9	#	9.9		1.8	胎土精良 色は赤灰色	#
10	#	12.8	7.4	3.4	輪縁成形 胎土はやや粗 色は赤灰色	#
11	#	14.2	8.8	3.4	胎土は粗 色は赤灰色	#
12	#	13.1	7.1	3.8	胎土は精良 色は赤灰色	#
13	金銅製飾り器金具	長16.0	幅1.7		宝相華文の透彫り 内側にも鍍金の板が入る	NY63瓦積み常滑池中
14	銅製取金具	長14.5	幅0.7	厚0.3	両端と中央に釘穴	# 1区池中
15	銅製取金具	長(24.8)	幅1.2		一面の裏面に珠文帯 環状か	# 3区池中
16	銅製金具	長(3.9)	幅1.7	厚2.5	細な環の木口金具か	# 3区池中
17	銅製金具	長1.7	径1.5		環状か	#
18	銅製金具	長2.6			棒状の銅製品	#
19	銅製縁取金具	長7.0	幅0.6		表面一部鍍金が残る	#
20	鉄釘	長8.9	幅0.5		断面四角形	# 3区池下レンヂ
21	#	長12.8	幅1.0		#	#
22	#	長(18.8)	幅0.7		#	# 1区池底
23	釘頭	7.5	5.4	厚0.1	表面に細かな毛彫り	# 3区瓦積み下
24	かわらけ	7.5	5.4	1.9	胎土はやや精良 色は赤褐色	# 瓦張り面上層
25	#	6.8	4.3	2.4	胎土は精良 色は赤褐色	#
26	#	13.2	7.9	3.4	胎土は精良 色は赤灰色	# 3区砂利上層
27	鉄釘	長(8.6)	幅0.8		断面四角形	# 3区B面瓦溜
28	漆器皿	9.3	7.6	1.2	黒漆地に朱漆で文様	# 瓦積み最下層
29	銅製品断片			厚0.2	形状不明	# 1区B面
30	鉄製釘	長3.3	幅0.2		#	# 2区B面
31	鉄製釘	長4.0	幅0.7		断面四角形	#
32	銅製釘	長2.8	幅0.3		#	# 1区瓦裏面
33	銅製釘	長3.6	幅0.5		#	#

図16 苑池西岸雨落ち内瓦葺り・池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	雑器類		幅4.8	厚1.6	黒漆地に螺鈿で宝相華唐草文の装飾 再絵無し	南辺雨落ち境内瓦葺り
2	〃		幅4.8	厚1.5	〃	〃
3	〃	長(17.8)	幅2.1	〃	〃	〃
4	〃	長(10.5)	幅1.7	厚1.1	〃	〃
5	漆製品	幅6.1	厚1.3		彫込みの刺代文様 一部に金箔	3区池中
6	燧燗燈台	上面径15 下面径8.4	高5.5		黒漆地に螺鈿で宝相華唐草文の装飾 再絵無し	南辺雨落ち境内瓦葺り
7	燧燗器物	長(10.5)		厚1.4	〃	〃
8	破砕伝	長12.8	幅1.8	厚0.4	玉頸状の頸部 表裏に「南無阿彌陀仏」	3区池中
9	〃	長(13.3)	幅2.8	厚0.3	五輪塔婆(南)と「無」が読みとれる	〃
10	漆座櫃	20.9	11.8	9.3	総高台黒漆無文飾	〃

図17 苑池西岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	漆製品	長(23.3)			黒漆塗り 高根脚か	3区池中
2	〃	長(10.0)	幅(7.5)		黒漆塗り 仏像の肩口片か	〃
3	〃	長(8.0)	幅(6.0)		〃 仏像の衣紋か	〃
4	漆製品	長23.0	幅2.5	厚1.8	黒漆塗り 扉部材か	〃
5	〃	長19.3	幅2.4	厚1.9	〃	〃
6	〃	長19.5	幅2.4	厚2.0	〃	〃

図18 苑池西岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	斗拱	長(26.3)	幅(16.0)	斗拱(5.8)	善斗 曲線は急である 図24-1の斗拱とほぼ同じ大きさ	3区池中
2	門柱形未製品	長29.4		高(20.6)	柱と異なり横木取りされている 用途不明	〃

図19 苑池西岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	漆台状製品	長(49.6)	幅(39.0)	高(11.2)	黒漆塗り 堂内具調度品か 上板上部に浅いホブ穴	3区池中

図20 苑池北岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	青白磁扁觚	断片			外面牡丹文 灰白色堅緻な胎土 本色の釉	池IV類上層覆土
2	線	長(7.4)	幅(4.7)	厚1.0	陸部のみ残存	〃
3	釘状銅製品	長3.9	幅0.6		釘状	〃
4	かわらけ	7.0	4.2	1.9	轆轤成形	池IV類下層
5	〃	7.8	4.3	2.2	〃	〃
6	〃	7.4	4.2	2.1	〃	〃
7	〃	9.4		1.9	手捏わ成形	〃
8	〃	9.7		2.5	〃	〃
9	〃	11.1	7.0	2.8	轆轤成形	〃
10	〃	11.3	7.0	3.1	〃	〃
11	〃	12.9	7.9	3.1	〃	〃
12	〃	12.4	6.9	3.5	〃	〃
13	〃	14.3		3.0	手捏わ成形	〃
14	〃	14.4	9.0	3.9	轆轤成形	〃
15	〃	12.1	7.5	3.8	〃	〃
16	瀬戸		10.0		瀬戸入子底細片 墨書直有り	〃
17	手捏り	断片			外面口縁下に菊唐文有り	〃
18	常滑鉢	断片			外面口縁下部に花輪が巡る	〃
19	青磁	断片			内面の細かな葉唐文 不透明緑色の釉	〃
20	石塔火輪	最大幅21.8	高14.0		上部に空風輪を受ける幅6cm 深さ2.5cmのホブ穴有り	池IV類焼築土 池地山面覆土
21	かわらけ	7.8	5.8	1.5	手捏わ成形 打明皿	〃
22	〃	8.3	5.4	1.9	轆轤成形 有明皿 13世紀後半～14世紀前半	〃
23	〃	8.1	5.2	2.4	〃 13世紀後半～14世紀前半	〃
24	〃	11.0	7.0	3.4	〃	〃
25	〃	12.0	8.4	3.4	〃	〃
26	〃	14.0		2.9	手捏わ成形 13世紀中	〃
27	刀子	長(23.0)	幅3.0	厚0.5	片切月 目釘穴	〃
28	木屐	11.5	9.5	1.7	未完成品	〃

図21 苑池北岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	仏像断片	長(24.9)	幅6.0	厚2.4	漆製品 天衣か	池IV類下層覆土
2	〃	長(9.0)	幅(7.0)	厚2.0	漆製品 袈裟部	〃
3	木製品	長(19.8)	最大幅5.5		板状の製品	〃
4	〃	長21.2	幅1.3		先端を平にした種状製品	〃
5	〃	長(19.2)	幅3.1		3つ同一個体か	〃
6	円盤断片			厚0.9	漆製品 片面のみ漆	〃
7	五輪塔婆	長60.5	幅5.0	厚1.4	墨は失っているが表面に何文字か浮き上がっている 文脈は不明 下部に釘穴があり長期埋蔵などに打ち付けられていたと思われる	〃
8	五輪塔婆木輪	最大径24.2		高15.8	安山岩製	〃

図22 苑池北岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.9	6.2	1.6	轆轤成形 胎土は淡赤灰色 焼成は良	IV類1面覆土
2	〃	7.7	4.8	2.3	〃 胎土は良 色は赤灰色	〃
3	〃	12.3	6.7	3.2	〃 胎土は良 色は赤灰色	〃
4	〃	16.8	9.6	4.3	〃 胎土は精良 色は赤灰色 特大の製品	〃
5	瀬戸銅皿	13.3			灰輪が全体に強く施される	〃
6	瀬戸土器碗	断片			精良なみの細かみ胎土で堅緻	〃
7	瀬戸扁觚	断片			外面に段文から 翠雲を菊花文で装飾	〃
8	常滑浅鉢	28.6	7.7	11.2	胎土は精良 色は黄灰色	〃
9	〃				胎土は精良 色は赤褐色	〃
10	〃				胎土は精良 色は赤褐色	〃
11	〃				胎土は精良 色は赤褐色	〃

12	#	#				胎土は精良	色は灰褐色	#	#
13	#	手振り	#			胎土は良	色は灰白色	#	#
14	#	#	#			胎土は良	色は灰色～赤灰色	#	#
15	#	常滑鉢	#			胎土は良	色は灰色 胎土による緑灰色の釉	#	#
16	#	白滑鉢	#			胎土は精良	色は灰褐色	#	#
17	#	青磁蓮弁文碗	#			外面に蓮葉文 胎土は白色硬質 青緑色の釉	#	#	
18	#	青磁蓮弁文碗	#			外面に蓮葉文 胎土は白色硬質 青緑色の釉	#	#	
19	#	白磁口平皿	8.2	4.7	1.8	胎土は灰白色硬質 外面まで施釉	#	#	
20	#	青磁蓮弁文碗	#	高台径 3.5		胎土は精良	色は灰色 内面に印花文有り	#	#
21	#	青磁碗	3.0			胎土は精良	色は赤灰色 一次焼成のため釉は暗緑色	#	#
22	#	青白磁水注	#	高台径 3.9		胎土は精良	色は明灰色 二次焼成のため釉は不透明	#	#

図23 苑池北岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	輪縁成形	胎土は粗	成形・特徴	備考
1	#	かわらけ	7.1	4.7	1.8	#	赤褐色	IV期2面覆土
2	#	#	7.1	4.7	2.0	#	胎土はやや粗い 色は赤灰色 灯明皿	#
3	#	#	7.5	4.8	2.6	#	胎土は精良	色は赤灰色
4	#	#	7.1	5.4	1.8	#	胎土は良	色は黄灰色
5	#	#	7.1	6.0	1.5	#	胎土は良	赤灰色
6	#	#	8.0	4.6	2.2	#	胎土は精良	色は赤褐色
7	#	#	7.7	6.0	1.6	#	胎土は精良	色は黄灰色 灯明皿
8	#	#	7.6	5.2	1.8	#	胎土はやや粗い 色は赤灰色	#
9	#	#	7.8	5.3	1.8	#	胎土は良	色は黄灰色
10	#	#	7.7	5.0	1.8	#	胎土はやや粗い 色は赤灰色	#
11	#	#	7.9	5.5	1.8	#	胎土は精良	色は黄灰色
12	#	#	8.7	6.6	1.5	#	胎土は良	赤灰色
13	#	#	8.1	3.9	2.4	#	胎土はやや粗い 色は赤褐色 灯明皿	#
14	#	#	7.7	5.0	1.8	#	胎土はやや粗い 色は赤褐色	#
15	#	#	10.4	6.3	3.2	#	胎土は精良	色は黄灰色
16	#	#	11.0	6.2	2.8	#	胎土は精良	色は赤灰色
17	#	#	10.5	6.7	3.0	#	胎土は精良	色は赤灰色
18	#	#	10.7	6.0	2.8	#	胎土は精良	色は赤灰色
19	#	#	10.4	5.8	3.3	#	胎土は精良	色は赤灰色
20	#	#	10.5	5.6	3.1	#	胎土はやや粗い 色は赤褐色	#
21	#	#	10.7	6.4	3.0	#	胎土は良	色は赤褐色
22	#	#	11.2	7.0	3.3	#	胎土は精良	色は赤褐色
23	#	#	10.3	6.0	3.2	#	胎土はやや粗い 色は赤褐色	#
24	#	#	12.2	5.7	3.3	#	胎土は精良	色は赤褐色
25	#	#	11.2	5.8	3.4	#	胎土は精良	色は黄灰色
26	#	#	11.6	5.9	3.1	#	胎土は粗	色は黄褐色
27	#	#	13.1	8.6	3.7	#	胎土は精良	色は赤褐色
28	#	#	12.3	8.9	3.5	#	胎土は精良	色は赤褐色
29	#	#	14.8	7.4	3.2	#	胎土は精良	色は赤褐色
30	#	#	13.5	8.1	3.6	#	胎土は精良	色は赤褐色 灯明皿
31	#	#	12.6	6.7	3.2	#	胎土は粗	色は赤褐色
32	#	#	12.4	7.2	3.5	#	胎土は精良	色は赤褐色
33	#	#	13.3	7.5	4.0	#	胎土は精良	色は赤褐色
34	#	#	14.1	7.5	3.5	#	胎土は精良	色は赤褐色
35	#	#	13.0	8.2	3.7	#	胎土は精良	色は赤褐色

図24 苑池北岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	輪縁成形	胎土は粗	成形・特徴	備考
1	#	青白磁香炉か	#			口縁部片	胎土は精良灰白色 水青色の釉	IV期2・3面覆土
2	#	青磁蓮弁文碗	#			胎土は精良灰白色	透明な赤褐色の釉	#
3	#	青白磁水注か	#	高台径 2.6		胎土は良明白色	文様は一次焼成のため不明	#
4	#	青白磁香炉か	#	5.0		胎土は良明灰色	一次焼成を受ける	#
5	#	青磁碗	#	高台径 4.8		胎土は精良灰白色	外面に蓮弁文 透明な暗緑色の釉	#
6	#	常滑鉢	断片			胎土は精良	色は灰白色 口縁部が四角	IV期2面覆土
7	#	#	#			胎土は精良	色は赤褐色	#
8	#	#	#			胎土は精良	色は赤褐色	#
9	#	#	#			胎土は良	色は赤褐色	#
10	#	瀬戸戸平鍋	#			胎土は精良黄灰色	赤褐色の釉	#
11	#	瀬戸水注	2.0	3.1	3.4		全体に赤褐色の揚釉 外面に蓮弁文の押印	#
12	#	瀬戸天目碗	14.9	高台径 4.7	6.2		胎土は精良黄灰色 緑灰色の釉	#
13	#	北朝系瀬戸戸	11				胎土は精良赤褐色 白色の陽文	#
14	#	瀬戸天目碗	#	高台径 3.9			胎土は精良黄灰色 赤褐色の釉 貼付け高台	#
15	#	瀬戸朝顔	#	7.2			胎土は精良赤褐色 緑灰色の釉	#
16	#	瀬戸戸縁鉢	21.8	15.4	5.7		胎土は精良赤褐色 赤褐色の釉	#
17	#	瑠璃	9.5	7.6	1.2		全体に瑠璃 内面に朱で塗か	#
18	#	木製茶室	#	高台径 7.1			内外面漆面に朱で塗か	#
19	#	建築部材か	長(35.3)	幅 5.0	厚 1.9		用途不明品	#

図25 苑池北岸池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	輪縁成形	胎土は粗	成形・特徴	備考
1	#	かわらけ	7.8	5.2	1.9	#	赤褐色	IV期2面覆土
2	#	#	10.0	7.0	2.1	#	胎土は良	色は黄灰色
3	#	#	10.4	6.9	2.3	#	胎土は良	色は赤褐色
4	#	#	12.2	6.8	3.5	#	胎土は良	色は黄褐色
5	#	#	7.2	7.3	3.3	#	胎土は精良	色は赤褐色
6	#	#	13.0	6.5	3.7	#	胎土は精良	色は赤褐色
7	#	瀬戸鉢	断片				胎土は精良黄灰色 底部内面に花文裏面に朝し目	#
8	#	木製蓮葉中房	最大径 9.3		高 2.7		5弁の花弁と種子を模した丸い形取りを口縁持つ	IV期2面覆土
9	#	常滑製鉢	#				胎土は良質 色は赤褐色	IV期2面覆土
10	#	木製品	断片				上端に丸みを持つ 用途不明	IV期2面覆土
11	#	形振笥	長(26.0)	幅 2.1	厚 0.3			#
12	#	#	長(31.3)	幅 2.5	厚 0.2			#
13	#	#	長(32.5)	幅 2.5	厚 0.3			#

14	#	長36.7	幅2.9	厚0.2	#	#
15	#	長34.9	幅2.9	厚0.3	#	#
16	#	長37.2	幅2.4	厚0.3	#	#
17	五輪班家	長51.4	幅7.3	厚0.9	「川原生死生半庵」(口口為也)の遺書	#

図26 先池北岸池中出土遺物

№	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	板状木製品	長(175.2)	幅42.4	厚4.0	扉の可能性のある材で表面に手谷痕が顕著 鉄釘が2ヶ所	IV期2面

図27 先池北岸池中出土遺物

№	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.9	5.1	1.7	轆轤成形 胎土は良 色は黄灰色	IV期3面覆土
2	#	7.5	4.7	1.8	# 胎土は精良 色は赤灰色	#
3	#	7.0	4.4	2.1	# 胎土は良 色は黄灰色	#
4	#	7.2	4.5	2.1	# 胎土は精良 色は赤灰色	#
5	#	7.8	5.5	3.1	# 胎土は精良 色は黄灰色	#
6	#	7.6	4.5	1.7	# 胎土はやや粗 色は黄灰色	#
7	#	8.0	5.8	1.7	# 胎土はやや粗 色は黄褐色	#
8	#	8.3	6.1	1.9	# 胎土は良 色は赤灰色	#
9	#	11.1	6.8	3.0	# 胎土はやや粗 色は赤灰色	#
10	#	8.0	5.9	1.8	# 胎土は精良 色は赤灰色	#
11	#	8.5	6.5	1.5	# 胎土は良 色は黄灰色	#
12	#	11.1	6.0	3.5	# 胎土は精良 色は暗黄灰色	#
13	#	10.9	6.9	2.8	# 胎土は精良 色は赤灰色	#
14	#	11.6	6.1	3.4	# 胎土は精良 色は赤灰色	#
15	#	11.0	6.5	3.2	# 胎土は精良 色は黄灰色	#
16	#	12.7	7.7	3.4	# 胎土はやや粗 色は赤灰色	#
17	#	12.9	6.8	3.8	# 胎土はやや粗 色は赤灰色	#
18	瓦器	16.0			胎土は良 口縁部の欠損・変状に暗灰色 暗文無し	#
19	木製品	長8.2		厚2.0	用途不明木製品 復元すると八角形の台状	#
20	漆器	8.9	7.3	1.1	内外面ともに黒漆地 内面に朱漆で文様	#
21	かわらけ	10.6	6.7	3.0	轆轤成形 胎土は精良 色は赤灰色	IV期池中覆土
22	#	6.2	3.7	2.4	# 胎土はやや粗 色は赤灰色 灯明皿	#
23	#	11.7	7.1	3.4	# 胎土は良 色は赤灰色	#
24	#	8.1	5.4	1.6	# 胎土は精良 色は黄灰色	#
25	#	12.7	7.8	3.1	# 胎土は良 色は赤灰色	#
26	菅沼鉢	断片			胎土は精良 色は暗褐色	#
27	木製品			厚0.4	用途不明木製品	#
28	人形	長(8.1)	幅2.2	厚0.3	形代 銅面を向き、色帽子から頭、胸まで	#
29	漆器皿	11.9	6.4	4.5	#	#
30	漆器皿			7.1	#	#
31	材木	長(93.4)	幅17.0	厚2.4	#	要確認

図28 先池北岸・東岸池中出土遺物

№	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.0	5.5	1.4	轆轤成形 胎土はやや粗 色は赤灰色 灯明皿	トレンチ1
2	#	7.7	5.6	1.7	# 胎土は精良 色は黄灰色	#
3	#	12.0	8.9	3.4	# 胎土はやや粗 色は赤灰色	#
4	#	13.1	8.2	3.2	# 胎土は良 色は赤灰色	#
5	#	13.3	7.3	3.6	# 胎土は精良 色は赤灰色	#
6	#	13.4	7.4	3.5	# 胎土は精良 色は黄灰色	#
7	#	11.6	7.1	3.0	# 胎土は精良 色は黄灰色	トレンチ2
8	#	7.3	5.2	1.7	# 胎土は精良 色は赤灰色	トレンチ7
9	#	11.5	7.5	3.0	# 胎土は精良 色は黄灰色	#
10	#	13.1	7.3	3.2	# 胎土はやや良 色は赤灰色	#
11	かわらけ	7.9	4.8	2.7	# 胎土は精良 色は赤灰色	3区A面まで
12	#	11.2	6.4	3.9	# 胎土は粗 色は赤灰色	#
13	#	13.7	8.3	3.7	# 胎土は精良 色は黄灰色	#
14	銅線壺	2.7	2.5	3.9	銅線壺 胎土は精良灰白色 明茶褐色の不透明な釉	#
15	漆器木製品	断片			用途不明 裏面黒漆 内外面黒漆塗り 部分的に金箔	#
16	#	断片			#	#
17	銅製品			厚1.6	黒漆地に銅線 銅線の目ば丈短	#
18	鉄釘	長13.0	幅0.7		断面四角	#
19	漆草書	草部長(10.2)	幅9.2		書は木質黒漆塗	#
		等部長4.0	幅10.0		書は金銅塗	#

図29 先池東岸池中出土遺物

№	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	漆器木製品	長(14.6)	幅5.2	厚2.2	内外面漆下地塗存 外面は漆塗に影込まれている	3区A面まで
2	#	長(17.0)	幅(6.3)		# 底は凹 裏面は黄褐色	#
3	#	長15.1	幅(2.9)		# 上縁は目めに傷られる 裏面は境痕	#
4	#	縦(13.4)	横(10.4)		# 1区南下地塗りに上に漆が塗される 仏像文が 盛損	#
5	木製銅	長51.5	幅3.5	厚1.7	白木造りで両方 中央に葉が入る	#

図30 先池東岸池中出土遺物

№	器種・種別	長	幅	厚	成形・特徴	備考
1	木製漆材	24.0	3.6	2.7	用途不明品 半ば破損	3区
2	#	(24.0)	5.2	1.5	用途不明品 中央部に穿孔有り	#
3	#	(27.3)	3.2	0.3	用途不明品 半ば破損	#
4	#	41.1	3.3	3.1	用途不明品 両葉に字に加工され側面に漆が影込まれる	#
5	#	41.8	2.5	1.4	用途不明品 角は面取りされ片側細く削り込まれている	#
6	#	32.0	(7.0)	0.9	用途不明品 板状の部材で両端は鋭角に加工されている	#
7	#	(31.8)	4.0	2.1	用途不明品 5本の釘が固定している 一部破損	#

図31 先池東岸池中出土遺物

№	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	8.9	6.2	1.6	轆轤成形 胎土は精良 色は赤灰色	N782 トレンチ内B面相当

2	#	12.8		3.0	手摺ね成形	胎土は精良	色は赤灰色	#
3	#	13.7	7.0	3.5	轆轤成形	胎土は精良	色は赤灰色	#
4	#	12.9		3.0	手摺ね成形	胎土は精良	色は赤灰色	#
5	#	15.0		2.9	#	胎土はやや劣精良	色は赤灰色	#
6	#	8.6	6.0	1.4	轆轤成形	胎土は粗	色は赤灰色	NY6 3区トレンチ上層
7	#	8.8	6.4	1.4	#	胎土は粗	色は赤灰色	#
8	#	8.5		2.2	#	胎土はやや粗	色は赤灰色	#
9	#	8.7	7.0	1.7	手摺ね成形	胎土は精良	色は赤灰色	#
10	#	8.7		1.9	#	胎土は精良	色は明黄灰色	#
11	#	7.9		1.8	#	胎土は精良	色は赤灰色	#
12	#	8.7		1.9	#	胎土は精良	色は赤灰色	#
13	#	8.3		1.8	#	胎土は精良	色は赤灰色	#
14	#	9.3		2.1	#	胎土は精良	色は明黄灰色	#
15	#	11.7		3.0	#	胎土は精良	色は明黄灰色	#
16	#	13.8		3.7	#	胎土は精良	色は赤灰色	#
17	#	13.2		3.4	#	胎土は精良	色は明黄灰色	NY6 3区トレンチ下層
18	#	13.8		3.7	#	胎土は精良	色は明黄灰色	#
19	#	14.1		3.9	#	胎土は良	色は明黄灰色	#
20	#	16.6	10.8		轆轤成形	胎土は精良	色は茶褐色	#

図32 築池東岸埋池出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考	
1	金網製品	長 5.6	幅12.7	厚 0.3	塵垢取り金具か、針金遺存	埋池遺構面下土	
2	#	#	#	厚 0.6	砂目部分に鍍金付着	仏像片か	#
3	#	縦 3.2	横 4.2	高 0.8	市目部分に鍍金付着	釘頭か	#
4	#	#	#	厚 0.3	用途不明品	#	#
5	土片製品	縦 6.6	横 6.2	高 3.7	面角に土片をくり抜いてある用途不明品	#	#
6	木製品	縦13.2	横(9.8)	厚 0.5	手摺状を呈する。用途不明品	#	#
7	木材	長(13.5)	幅 2.5	厚 2.0	格子もしくは仏像部片か	#	#
8	#	長(70.0)	幅 2.5	厚 1.5	#	#	#
9	#	断片	#	#	柱材か	#	#
10	#	断片	#	#	釘穴が貫通する	#	#
11	#	長(22.0)	幅 9.6	厚 6.1	中央に穿孔	#	#
12	#	断片	長(29.0)	幅(10.0)	内柱の残欠か	#	#

図33 築池東岸埋池出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考	
1	深鉢皿	8.6	6.2	1.2	内外面黒漆地で無文	埋池遺構面	
2	#	9.7	6.7	1.7	内外面黒漆地で無文	輪高台	#
3	深鉢輪	(6.0)	(3.9)	(1.6)	内外面黒漆地 内面に無文と梵文をスタンプ	#	#
4	#	断片	#	#	内外面共に朱漆地で無文	#	#
5	#	11.9	6.7	高台径 5.0	内外面黒漆地に朱漆手摺きで短楕・楕を施す	三角高台	#
6	#	#	#	高台径 7.6	内外面黒漆地に朱漆手摺きで短楕・楕を施す	三角高台	#
7	深鉢浅弁	長(10.4)	幅 6.1	厚 0.2	表裏面共に黒漆地 当初金箔か、仏像台座	#	#
8	木製品	#	#	厚 0.7	#	#	#
9	#	長 7.6	幅 2.6	厚 0.9	#	#	#
10	木材	断片	#	#	ドット部分に朱が付着	#	#
11	銅製品	径 7.0	厚 0.4	高 3.3	鍍付け 表面にクリ彫り 実行は込みが認められる	#	#
12	銀箔	縦 1.8	径 1.6	#	鍍金遺存 11の中に入っている	#	#
13	目録	鉤部長16.5	幅 1.7	厚 0.4	釘付きで出土 木材を繋ぎ留める釘	#	#
14	釘	釘長 7.8	幅 1.7	厚 0.7	#	#	#
14	釘	長(10.1)	幅 1.9	厚 0.5	木材間を繋ぎ留める釘	#	#

図34 築池東岸埋池出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考	
1	手摺	縦(25.6)	横(20.0)	斗縁(5.5)	巻斗 図18-1の巻斗とはほぼ同じ大きさ	埋池池底	
2	木材	長(16.8)	幅(2.0)	厚 0.9	半斗有り 格子もしくは仏像部片か	#	
3	#	長(42.5)	幅 2.3	厚 1.3	6ヶ所に釘穴有り 内2ヶ所に釘遺存	#	#
4	#	長(26.0)	幅 2.0	厚 1.2	建築材部か、下部佛土 上部に魚け	#	#
5	#	#	幅 8.4	厚 5.3	建築材部か	#	#
6	#	長(40.0)	幅 3.3	厚 3.2	建築材部か	角材を削り込んでいる	#
7	#	#	幅 4.1	厚 1.4	建築材部か	#	#
8	#	断片	#	#	建築材部か	#	#

図35 築池東岸埋池出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考		
1	かわらけ	7.2	4.3	2.2	轆轤成形	胎土はやや粗く砂多い	色は赤灰色	NYS 埋池池中
2	#	7.4	4.3	2.3	#	胎土は粗	色は明赤灰色	#
3	#	7.6	5.1	1.9	#	胎土はきめ細かい	色は明赤灰色	#
4	#	7.9	4.9	2.2	#	胎土は精良砂多い	色は明赤灰色	#
5	#	8.0	5.5	1.9	#	胎土は精良	色は赤灰色	#
6	#	8.2	5.4	2.1	#	胎土は精良	色は明赤灰色	#
7	#	7.8	5.6	1.6	#	胎土は精良	色は明赤灰色	#
8	#	8.2	6.2	1.6	#	胎土は粗砂多い	色は赤灰色	#
9	#	11.8	8.0	2.5	#	胎土は粗	色は赤赤灰色	#
10	#	12.5	8.3	3.3	#	胎土はやや粗	色は明赤灰色	#
11	#	12.6	7.4	3.4	#	胎土はやや粗	色は明赤灰色	#
12	#	13.9	8.5	3.2	#	胎土は精良	明赤灰色	#
13	銅製品	幅 1.8	厚 0.5	#	鏡か、両端欠片	#	#	
14	銅い釘	長(10.7)	幅 1.7	厚 0.5	木材間を繋ぎ留める釘	#	#	
15	#	長(19.0)	幅 1.2	厚 0.5	#	#	#	
16	鏡	長 9.6	幅 0.5	#	木部欠損 断面四角根本で残っている	#	#	
17	鉄釘	幅 0.6	#	#	先端部欠損 断面四角	#	#	
18	鉄釘	長10.6	幅 1.0	厚 0.8	先端が鑿状の粗欠	#	#	
19	木簡	長23.5	幅 3.5	厚 0.4	呪符か	#	#	
20	#	幅 5.0	幅 3.0	厚 1.0	呪符か	#	#	
21	木材	長さ(85.0)	幅15.0	厚 2.0	建築部材	NY82 BトレンチA面上	NY5 埋池池中	

図36 釜池東岸Ⅰ・Ⅱ期池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	13.6		3.7	手捏ね成形 胎土は細かく篩目良し。色は黄灰色	I 期遺物表面層土
2	"	13.9		3.5	胎土はきめ細かい。色は赤灰色	"
3	"	14.9		3.5	胎土はきめ細かい。色は赤灰色	"
4	"	8.8		2.0	胎土は精良。色は黄灰色	"
5	"	8.8		1.9	胎土は精良。色は黄灰色	"
6	"	9.5		1.9	胎土はやや粗砂い。色は明茶灰色	"
7	"	7.0	4.9	1.6	轆轤成形 胎土はやや粗。色は明茶灰色	"
8	"	7.4	4.6	1.8	胎土はやや粗砂い。色は明茶灰色	"
9	"	7.5	7.5	1.9	胎土はやや粗。色は明茶灰色	"
10	"	8.6	5.4	1.2	胎土は精良。色は明茶灰色	"
11	"	8.0	5.3	1.7	胎土は精良。色は明茶灰色	"
12	"	8.1	5.6	2.1	胎土はきめ細かい。色は赤灰色	"
13	"	8.1	6.5	1.5	胎土はきめ細かい。色は明茶灰色	"
14	"	7.8	5.4	1.4	胎土は細かく。色は赤灰色	"
15	"	8.6	7.4	1.7	胎土はやや粗。色は明茶灰色	"
16	"	12.0	8.2	3.5	胎土はやや粗。色は赤灰色	"
17	"	13.0	7.3	3.4	胎土はきめ細かい。色は明茶灰色	"
18	"	12.7	7.8	3.6	胎土はきめ細かい。色は赤灰色	"
19	"	13.0	7.8	3.6	胎土は細かい。色は明茶灰色	"
20	"	12.7		3.5	手捏ね成形 胎土は精良。色は明茶灰色	"
21	木製扉宝珠	径(7.9)	幅(7.0)	高(3.7)	丸欠。扉蓋裏に朱文最大径は1.0。傾度か	II 期遺物表面層土
22	木輪	径26.2	幅2.4	厚0.2	扉蓋裏。頭は非連続して先端は鋭角状に削られる	"
23	"	径(16.7)	幅2.1	厚0.3	突起部は非連続	"
24	木製品	径10.9	幅2.8	厚2.6	扉蓋部材。不整形な角柱状	"
25	"	径(34.9)	幅2.4	厚0.8	扉蓋部材。釘穴が貫通	"
26	"	径(18.8)	幅2.5	厚0.9	扉蓋部材。一端が細く削られる	"
27	"	断片			扉蓋部材	"
28	"	径(13.6)	幅4.5	厚1.1	扉蓋部材	"
29	鉄釘	径12.6	幅0.7		断面四角形	"
30	"	径6.7	幅0.6		断面四角形	"
31	"	径9.1	幅0.6		断面四角形	"

図37 釜池南岸IV期池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	金銅製輪吊金具	本体長9.0	幅長3.6	網厚0.1	表裏面に金箔地に朱相華唐草文。木芯遺存	A 面層土
2	"	"	"	5.0	"	"
3	"	"	"	4.6	"	"
4	金銅製品	径8.5	幅13.4	厚0.3	表裏面に金箔地に朱相華唐草文。譲り厚0.3cmの木芯が遺存し糸を留めていた糸の端を取り取有	"
5	"	径5.4	幅4.5	厚0.3	朱色の浮彫。中央に穴。仏像の冠?	"
6	"	径16.0	幅5.0	網厚0.2	朱相華唐草文透彫。中央と左右に釘穴有り。須弥壇高欄の飾り金具か	"
7	漆器輪	断片			内外面黒漆地。内面茶色漆地に朱と黒漆で朱文	"
8	木製品	径(17.7)	幅3.1	厚3.6	朱相華唐草文。轆轤は非連続	"

図38 釜池南岸Ⅱ期池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	5.8		4.6	轆轤成形 胎土は精良。色は赤灰色	2 区 B 面層土
2	"	断片			胎土は精良。色は赤灰色	"
3	漆器輪	断片			外面黒漆地。内面茶色漆地に朱で朱文と葛文	"
4	"	14.5			外面黒漆地に朱で朱文を描く。内面黒漆地	"
5	漆器輪	16.0	高台径 9.0	5.9	内外面黒漆地。外面にアラガタ取り時に付いた手拵痕が明瞭に残る	"
6	遺物のつまみ	2.0四方			面穴物の裏のつまみか。六面体の内をすべて面取り	"
7	漆器製品	断片			面穴欠か	"
8	"	幅2.0	厚0.7		面穴欠か	"
9	"	幅2.2	厚1.7		面穴欠か	"
10	"	断片			全体が湾曲する。内側に黒漆地帯が付着。仏像残欠か	"
11	"	幅2.1	厚1.4		面穴欠か	"
12	木製品	径32.7	幅2.7	厚2.3	漆器製品残欠	"
13	"	幅2.3	厚2.2		漆器製品残欠	"
14	"	径45.8	幅2.9	厚2.8	漆器製品残欠。表面側に朱着せの痕跡	"

図39 釜池南岸Ⅰ・Ⅱ期池中出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	8.9		1.7	手捏ね成形 胎土は精良。色は赤灰色	C 面まで
2	"	9.1		1.8	胎土は精良。色は黄灰色	"
3	"	9.2		2.2	胎土は精良。色は赤灰色	"
4	"	14.8		3.5	胎土は精良。色は黄灰色	"
5	"	14.7		3.1	胎土は精良。色は黄灰色	"
6	"	8.5		1.5	胎土は精良。色は赤灰色	"
7	"	8.4		1.8	胎土は精良。色は赤灰色	C 面直上
8	輪	径27.0	幅1.5	厚1.0	鉄製。遺存状態良好。大型の輪	"
9	かわらけ	14.4		3.0	手捏ね成形 胎土は精良。色は黄灰色	C 面
10	"	14.8		3.2	胎土は精良。色は黄灰色	"
11	"	14.2		3.0	胎土は精良。色は赤灰色	"
12	鍍金釘	径(14.7)	幅0.9	網厚0.1	銅製。表面が銀色に輝くことから鍍金か	出土層位不明
13	鉄釘	径8.4	幅0.7		断面四角形	2 区池中
14	木製品	径22.5	幅22.5	厚(10.4)	塊状。表面に朱を塗る	"
15	木製品	径10.9	幅1.8	厚0.2	断面に溝をくぐり先端に直径5mmの穿孔。前面の部品か	"
16	瓦輪形装	径(20.3)	幅6.1	厚1.0	瓦輪形の地盤いかが欠損。裏面確認できず	"

図40 第四池池中出土遺物

No.	品種・種別	口径	底径	高さ	成形・特徴	備考
1	漆器類	8.4	6.3	1.2	内外面黒漆地で黒文	布蓋4
2	かわらけ	12.2	7.3	3.3	轆轤成形 胎土はやや粗 色は明赤灰色	布蓋3
3	鉄釘	径15.1	幅0.8		断面四角形	布蓋4
4		径15.7	幅0.8		断面四角形	
5		径15.2	幅0.7		断面四角形	柱穴3
6	木材	径(72.0)	幅12.6	厚3.6	建築部材 手斧彫明眼	布蓋3
7		径108.6	幅6.0	厚2.4	建築部材	

図41 5溝(遺水)出土遺物

No.	品種・種別	口径	底径	高さ	成形・特徴	備考
1	五輪形空風輪	口径14.0	直径13.4	高さ20.2	4面に種子 安山岩製	1区5溝
2	" 火輪		幅21.8	高さ12.2	文字無し 安山岩製	"
3	"		幅29.4	高さ13.4	4面に種子 安山岩製	"
4	"		幅24.8	高さ14.0	文字無し 安山岩製	"
5	" 木輪	径23.0		高さ16.4	安山岩製	"
6	"	径21.0		高さ14.4	安山岩製	"
7	"	径20.0		高さ14.0	安山岩製	"
8	" 漆輪		幅18.0	高さ13.8	安山岩製	"
9	"		幅29.4	高さ16.2	安山岩製	"
10	"		幅21.0	高さ16.4	五月廿二日 安山岩製	"
11	"		幅21.0	高さ16.6	明治三(1892)年正月廿六日 安山岩製	"
12	"		幅29.4	高さ16.8	安山岩製	"
13	"		幅17.4	高さ13.6	安山岩製	"

図42 遺水(5溝、7溝)・取水遺構出土遺物

No.	品種・種別	口径	底径	高さ	成形・特徴	備考
1	五輪形木輪	径24.6		高さ3.5	文字無し 安山岩製	NY6 1Kpit1
2	白漆	径1.4		高さ0.5	樹皮製塗物の残片	" 1区A層まで
3	青白磁海鏡				漆木文 胎土は精良灰白色 漆青緑灰色の釉	" 1区B層まで
4	瀬戸蓋	径4.1		高さ1.7	胎土は精良 漆黄灰色 暗緑色の灰釉	"
5	かわらけ	7.4	5.0	1.6	轆轤成形 胎土は良 色は明赤灰色	"
6	"	8.0	5.3	1.7	" 胎土は良 色は赤茶灰色	"
7	"	8.2	5.5	1.9	" 胎土は精良 色は明黄灰色	"
8	"	7.9	6.6	1.6	" 胎土は精良 色は明黄灰色	"
9	"	8.4	6.1	1.7	" 胎土は精良 色は明黄灰色	"
10	瀬戸蓋鉢		高台径6.5		胎土は精良 漆赤灰色 暗緑色の灰釉	"
11	木皿取珠玉	径0.9		厚0.7	次層しているが厚度の高いものである	NY63 5溝注ぎ口付近
12	漆器類	12.6		高さ5.3	内外面黒漆地に赤漆で亀文を描く	" 7溝注ぎ口附近
13	かわらけ	8.9		高さ1.6	手捏ね成形 胎土はやや精良 色は濃赤灰色	" 7溝注ぎ口
14	"	10.7		高さ2.3	" 胎土はやや精良 色は赤灰色	"
15	"	7.8	5.4	1.8	轆轤成形 胎土は良 色は黄灰色 地明肌	NY7取水遺構
16	"	13.3	7.3	3.3	" 胎土は精良 色は赤灰色	"
17	"	7.7	4.2	2.7	" 胎土は粗 色は赤灰色	"
18	漆器類	14.5		高台径7.9	内外面黒漆地に赤漆で扇文・波面まで施す	"
19	瀬戸蓋鉢	断片			胎土は良 漆赤灰色 内面に黒漆	"
20	山形銅葉形銅環	断片			胎土は粗 漆赤灰色	"
21	瀬戸蓋鉢	断片	7.2		胎土は精良 漆赤灰色の釉	"
22	常滑鉢	断片			胎土は良 内面良く焼けている	"
23	"	断片			胎土は良 漆赤灰色の釉	"
24	青磁蓮弁文碗	断片			胎土は精良 黄緑灰色の釉	"
25	"	断片			胎土は精良 緑灰色の釉	"
26	磁石	幅3.0	厚1.3		縦方向に研ぎ傷有り	"
27	磁石	幅3.1	厚1.0		縦方向に研ぎ傷	"
28	磁石	幅4.0	厚0.6		縦方向に研ぎ傷	"

図43 瀬口出土遺物

No.	品種・種別	口径	底径	高さ	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.2	4.3	1.8	轆轤成形 胎土は精良 漆赤灰色	NY57B以才木窟(瀬口)遺構
2	"	6.9	4.8	1.7	" 胎土は精良 漆赤灰色	"
3	"	8.4	4.8	1.9	" 胎土は精良 黄灰色	"
4	"	6.9	4.5	2.3	" 胎土は精良 黄灰色	"
5	"	7.8	6.5	1.8	" 胎土は精良 漆赤灰色	"
6	"	7.5	5.5	1.5	" 胎土は精良 赤灰色	"
7	銅器類	断片			東洋産	"
8	瀬戸	断片			灰釉	"
9	瀬戸	断片			灰釉	"
10	瀬戸		8.9		灰釉	"
11	瀬戸		4.8		灰釉	"
12	かわらけ	13.0			手捏ね成形 胎土精良 明赤灰色	NY5瀬口ノ2ノ1期遺構面相当
13	"	9.5		1.8	" 胎土精良 明赤灰色	" 瀬口南上層期遺構面相当
14	"	12.9		3.2	" 胎土精良 明赤灰色	" 瀬口南上層期遺構面相当
15	"	7.8	4.1	2.4	轆轤成形 胎土粗い 赤灰色	" 瀬口ノ2ノ1期遺構面相当
16	"	7.5	4.9	2.3	" 胎土粗い 赤灰色	" 瀬口南上層期遺構面相当
17	"	13.1		3.3	手捏ね成形 胎土粗く 明赤灰色	" 瀬口南下層期遺構面相当

図44 料状遺構・遺水(1溝)出土遺物

No.	品種・種別	口径	底径	高さ	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.5	6.1	1.8	轆轤成形 胎土は精良 色は濃赤灰色	料状遺構
2	"	9.5	7.3	1.5	" 胎土は精良 色は濃赤灰色	"
3	"	13.9		3.2	手捏ね成形 胎土は精良 色は濃赤褐色	"
4	"	9.4			胎土は精良 色は赤灰色	"
5	"	8.3	4.5	2.5	轆轤成形 胎土は粗い 色は濃褐色	1溝
6	"	11.8	6.6	3.1	" 胎土は精良 色は赤褐色	"
7	"	12.6	8.1	3.2	" 胎土は粗い 色は濃赤灰色	"
8	"	11.6	6.9	3.7	" 胎土は粗い 色は赤褐色	"
9	"	11.5	7.8	3.3	" 胎土は粗い 色は濃褐色	"

10	#	12.7	7.8	3.5	#	胎土は粗い	色は赤灰色	#
11	#	13.8	9.1	3.5	#	胎土は粉質	色は赤灰色	#
12	青磁	断片			鉢	胎土は極精良	色は暗緑色半透明	#
13	青白磁	断片			梅鉢	胎土は極精良	白色	釉は水色透明
14	粉引行平	断片			行平	胎土は精良	赤灰色	釉は淡緑透明
15	淨土堂	断片	6.4		胎土は粗い	色は赤灰色	内面に6条の水線	#
16	常滑茶	断片			大鉢	胎土は精良	赤灰色	内面に6条の水線
17	常滑酒	断片			大鉢	胎土は精良	赤灰色	内面に6条の水線
18	常滑酒	断片			大鉢	胎土は精良	赤灰色	内面に6条の水線
19	常滑酒	断片			大鉢	胎土は精良	赤灰色	内面に6条の水線
20	常滑酒	断片			大鉢	胎土は精良	赤灰色	内面に6条の水線

図5 常滑焼出土物

No.	図種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考		
1	かわらけ	8.5	4.7	1.8	手捏ね成形	胎土は精良 色は赤灰色	NY59 3溝上面	
2	#	8.5	4.7	1.7	#	胎土は精良 色は赤灰色	#	
3	#	12.8	8.1	3.2	#	胎土はやや粗い 色は赤灰色	#	
4	#	8.1	5.5	1.5	轆轤成形	胎土はやや粗い 明赤灰色	#	
5	#	8.4	5.5	2.0	#	胎土は粉質 赤灰色	#	
6	#	11.3	7.7	2.9	#	胎土は良 赤灰色	#	
7	#	13.0	7.7	3.0	#	胎土は良 赤灰色	#	
8	#	11.7	7.3	3.0	#	胎土はやや粗い 赤灰色	NY1 砂利面覆土	
9	#	11.6	7.9	3.2	手捏ね成形	胎土はやや粗い 赤灰色	NY1 2溝成袋以後の層位	
10	#	12.1	7.9	3.2	轆轤成形	胎土はやや粗い 赤灰色	#	
11	常滑鉢	断片			厚鉢	胎土は極まり精良	#	
12	常滑鉢	断片			厚鉢	胎土は極まり精良	#	
13	常滑茶	断片			茶	胎土は極まり精良	#	
14	かわらけ	7.8	5.5	1.5	轆轤成形	胎土は精良 色は濃赤灰色	NY1 2溝構築時の地業層上層	
15	#	7.8	5.1	1.5	#	胎土は精良 色は赤灰色	#	
16	#	12.6	9.0	3.0	#	胎土は精良 色は赤灰色	#	
17	#	12.7	8.0	3.0	#	胎土は精良 色は赤灰色	#	
18	#	12.8	7.8	3.4	#	胎土は粗い 色は黄灰色	#	
19	#	9.0	6.4	2.1	#	胎土はやや粗い 色は赤灰色	NY1 2溝構築時の地業層下層	
20	#	8.8	4.7	1.7	手捏ね成形	胎土は極精良 赤灰色	#	
21	#	9.1	4.6	1.6	#	胎土は精良 黄灰色	#	
22	#	13.6	8.2	3.8	#	胎土は極精良 黄灰色	#	
23	青白磁	断片			梅鉢蓋	胎土は精良	白色	釉は赤褐色
24	常滑茶	断片			茶	胎土は極まり精良	やや粘り有り	NY1 柱穴10
25	東石	縦23.6	横21.0	高16.6	増正積基壇東石			NY59 井戸

図6 2溝・3溝出土物

No.	図種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考	
1	かわらけ	7.8	4.7	2.9	轆轤成形	胎土は良 色は明赤灰色	1区2・3溝(上段共通部)
2	#	8.1	5.1	1.8	#	胎土は精良 色は赤褐色	#
3	#	8.1	6.7	1.3	#	胎土は精良 色は明黄灰色	#
4	#	12.0	7.4	3.0	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
5	常滑鉢	断片			厚鉢	胎土は良 色は暗赤灰色	#
6	かわらけ	6.4	4.7	1.7	轆轤成形	胎土はやや粗い 色は明赤灰色	1区3溝
7	#	7.4	5.7	1.9	#	胎土は精良 色は明赤灰色	#
8	#	7.6	5.3	1.8	#	胎土は良 色は赤灰色	#
9	#	7.7	5.9	1.8	#	胎土は精良 色は黄灰色	#
10	#	7.9	4.7	1.6	手捏ね成形	胎土は精良 色は赤灰色	#
11	#	8.2	4.7	1.7	#	胎土は精良 色は黄灰色	#
12	#	8.8	7.0	1.8	轆轤成形	胎土はやや粗い 色は濃黄灰色	#
13	#	8.2	5.7	1.7	#	胎土は精良 色は明黄灰色	#
14	#	8.7	6.1	1.9	#	胎土は精良 色は濃黄灰色	#
15	#	11.7	9.0	3.0	#	胎土は良 色は赤灰色	#
16	#	11.3	7.2	3.1	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
17	#	11.8	9.2	3.1	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
18	#	12.1	8.2	3.5	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
19	#	12.7		3.7	手捏ね成形	胎土は精良 色は赤褐色	#
20	青白磁		3.1		皿	胎土は精良	釉は淡青白色
21	鉄釘	長6.1	幅0.9		断面四角形		#
22	かわらけ	8.0		1.8	手捏ね成形	胎土は精良 色は赤灰色	3溝上層
23	#	8.8		2.2	#	胎土は精良 色は赤褐色	#
24	#	9.8		1.8	#	胎土は精良 色は黄灰色	#
25	#	9.9	7.0	1.9	轆轤成形	胎土は精良 色は黄灰色	#
26	#	8.0	6.2	1.6	#	胎土は良 色は赤灰色	#
27	#	8.4	6.4	1.6	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
28	#	8.8	7.5	1.9	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
29	#	9.3	6.5	2.2	#	胎土は精良 色は赤褐色	#
30	#	13.0		2.9	手捏ね成形	胎土は精良 色は赤灰色	#
31	#	12.1		3.2	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
32	#	12.0	8.2	3.2	轆轤成形	胎土は精良 色は黄灰色	#
33	#	12.5		3.4	手捏ね成形	胎土は精良 色は赤褐色	#
34	#	13.3		3.5	#	胎土は精良 色は濃黄灰色	#
35	#	15.2		3.7	#	胎土は精良 色は赤褐色	#
36	#	8.6			#	胎土は精良 色は赤灰色	3溝中層
37	#	8.5			#	胎土は精良 色は黄灰色	#
38	#	14.3		3.8	#	胎土は粗い 色は赤褐色	#
39	#	14.6			#	胎土は粗い 色は赤褐色	#
40	#		8.6		轆轤成形	胎土は粗い 色は赤褐色	3溝下層

図7 3溝出土物

No.	図種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考	
1	山茶碗蓋茶器鉢	断片			胎土はやや粗いが極まりよい	色は灰色	3溝a(上層)
2	常滑片口	断片			胎土は極まり精良	口縁部は舌状に丸く収まる	#

3	常滑鉢	断片			胎土は精良	灰石が目立つ		
4	かわらけ	6.4	1.0		手捏ね成形	胎土は精良	色は赤灰色	小型
5	〃	9.1	1.9	〃	〃	胎土は精良	砂がやや多い	黄灰色
6	〃	8.2	1.6	〃	〃	胎土は精良	色は黄灰色	〃
7	〃	8.4	1.8	〃	〃	胎土は相いい	色は赤灰色	〃
8	〃	8.5	2.1	〃	〃	胎土は相いい	色は黄灰色	〃
9	〃	12.8	3.2	〃	〃	胎土は相いい	色は黄灰色	〃
10	〃	12.6	3.7	〃	〃	胎土は精良	色は赤灰色	〃
11	〃	13.6	3.3	〃	〃	胎土は精良	色は赤灰色	〃
12	〃	12.6	3.4	〃	〃	胎土はやや粗い	色は赤灰色	〃
13	〃	12.8	3.4	〃	〃	胎土は精良	色は黄灰色	〃
14	〃	8.8	1.8	〃	〃	胎土は精良	色は赤灰色	〃
15	〃	7.2	2.2	〃	〃	胎土はやや粗い	色は赤灰色	〃
16	〃	7.0	2.0	〃	轆轤成形	胎土は相いい	色は赤灰色	〃
17	〃	7.9	1.8	〃	〃	胎土は精良	色は赤灰色	〃
18	〃	7.5	1.6	〃	〃	胎土は精良	色は黄灰色	〃
19	〃	11.7	3.2	〃	〃	胎土はやや粗い	色は赤灰色	〃
20	〃	14.2	3.6	〃	手捏ね成形	胎土は精良	色は赤灰色	〃
21	山茶壺系茶碗	断片			胎土はやや粗い	細かな気泡有り	内面に煤	〃
22	〃	断片			胎土は精良	自然釉が少かる	〃	〃
23	青白磁	断片			梅魚	胎土は精良	灰白色	釉は白色透明

図8 2 譲出土遺物		口径	底径	器高	成形・特徴	備考		
No.	器種・種別							
1	かわらけ	6.9	4.5	1.4	轆轤成形	胎土は良	色は暗黄褐色	1区2層最上層
2	〃	6.7	4.4	2.0	〃	胎土はやや良	色は明赤灰色	〃
3	〃	6.8	3.6	2.2	〃	胎土はやや粗い	色は明赤褐色	〃
4	〃	7.3	4.6	2.1	〃	胎土は良	色は赤灰色	〃
5	〃	4.3	4.7	2.4	〃	胎土は良	色は暗赤褐色	〃
6	〃	7.7	4.9	1.7	〃	胎土はやや良	色は赤褐色	〃
7	〃	7.9	5.4	1.6	〃	胎土はやや粗い	明赤灰色	〃
8	〃	10.5	5.0	3.3	〃	胎土はやや良	色は赤灰色	〃
9	常滑壺	断片			胎土は精良	暗灰色	自然釉	〃
10	〃	21.6			胎土は精良	緑灰色	自然釉	〃
11	瀬戸壺	断片			胎土は	胎土は	胎土は	胎土は
12	かわらけ	7.0	4.0	1.5	轆轤成形	胎土は	胎土は	胎土は
13	〃	7.4	4.9	1.8	〃	胎土は精良	色は明赤灰色	1区2層上層
14	〃	7.7	5.1	1.8	〃	胎土は精良	色は明赤灰色	〃
15	〃	8.0	6.4	1.5	〃	胎土は精良	色は明赤灰色	〃
16	〃	8.1	5.2	2.1	〃	胎土は精良	色は赤赤灰色	〃
17	〃	12.7	7.0	3.4	〃	胎土は良	色は明赤灰色	〃
18	〃	12.7	7.4	3.6	〃	胎土は良	色は赤赤灰色	〃
19	〃	14.3	7.3	4.3	〃	胎土はやや粗い	色は赤赤灰色	〃
20	〃	8.9	5.2	1.7	〃	胎土は良	色は明赤灰色	1区2層下層
21	〃	7.0	5.2	1.8	〃	胎土は精良	色は明赤灰色	〃
22	〃	7.7	6.4	1.7	〃	胎土はやや粗い	色は明赤灰色	〃
23	〃	7.6	6.1	1.8	〃	胎土は良	色は明赤灰色	〃
24	〃	7.8	6.0	1.4	〃	胎土はやや良	色は明赤灰色	〃
25	〃	8.1	7.2	1.5	〃	胎土はやや良	色は明赤灰色	〃
26	〃	8.2	6.7	1.2	〃	胎土は良	色は明赤灰色	〃
27	〃	8.5	6.2	1.7	〃	胎土は良	色は明赤灰色	〃
28	〃	8.3	7.0	1.5	〃	胎土は良	色は明赤灰色	〃
29	〃	8.1	5.9	1.8	〃	胎土はやや良	色は明赤灰色	〃
30	〃	8.7	7.1	1.7	〃	胎土はやや粗い	色は黄赤灰色	〃
31	〃	9.0		1.6	手捏ね成形	胎土は精良	色は明赤灰色	〃
32	〃	11.7	6.1	3.3	轆轤成形	胎土はやや粗い	色は赤赤灰色	〃
33	〃	11.9	8.4	2.8	〃	胎土はやや良	色は黄赤灰色	〃
34	〃	11.0		3.1	手捏ね成形	胎土は良	色は暗赤灰色	〃
35	〃	12.3	8.5	3.1	轆轤成形	胎土は	胎土は	胎土は
36	〃	12.9		3.6	手捏ね成形	胎土はやや粗い	色は赤赤灰色	〃
37	茶壺系山茶碗	断片	高さ 6.1		胎土は精良	緻密	粗粒高台	〃
38	山茶壺系茶碗	断片			胎土はやや粗い	明灰色	〃	〃
39	〃	断片			胎土は精良	明灰色	〃	〃
40	五輪香地輪	横17.0	高13.4		文字があるが読みとれない			〃

図9 2 譲出土遺物

No.		器種・種別		口径	底径	器高	成形・特徴	備考
No.	器種・種別							
1	かわらけ	7.8	4.3	2.9	轆轤成形	胎土は粗く	赤赤灰色	「子」型書 NY62 2層
2	〃	8.0		1.7	手捏ね成形	胎土は精良	色は赤灰色	〃
3	〃	7.5	4.7	1.6	轆轤成形	胎土は精良	色は赤赤褐色	〃
4	鉄釘	長(7.3)	幅 0.8		断面四角形			NY63 2層出土
5	〃	長 8.1	幅 0.6		断面四角形			NY63 2区B面遺 2注目
6	かわらけ	13.9	10.4	2.1	轆轤成形	胎土は精良	色は黄赤灰色	NY1 2層出土層
7	〃	13.9	10.4	3.3	〃	胎土は精良	色は赤灰色	〃
8	〃	14.6		2.6	手捏ね成形	胎土は精良	色は赤赤灰色	〃
9	青磁	断片			胎土は精良	赤灰色	釉は青緑色	やや不透明
10	陶製品	幅 1.3		厚 0.3	文字状を呈する	母台上部金具	表面鍍金	〃
11	〃	長 3.7		厚 0.3	釘跡の彫金	四角花形	表面鍍金	〃
12	鉄釘	長 0.8			断面下二ム状の角釘			〃
13	〃	長 2.5			断面下二ム状の角釘			〃
14	かわらけ	12.1	4.5	1.7	轆轤成形	胎土は精良	色は黄赤灰色	NY4 2層
15	〃	10.8	6.0	3.2	〃	胎土は精良	色は赤灰色	〃
16	〃	10.7	6.3	3.1	〃	胎土は精良	色は黄灰色	〃
17	常滑壺	断片			胎土は精良	赤灰色	〃	〃
18	かわらけ	7.6	4.3	2.4	轆轤成形	胎土は精良	色は明赤灰色	NY6 2区2層
19	〃	10.9	6.9	3.2	〃	胎土は精良	色は黄灰色	〃
20	〃	11.8	7.0	3.2	〃	胎土は精良	色は明赤灰色	〃

21	#	13.2	7.9	3.7	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
22	#	13.5	7.4	4.4	#	胎土は精良 色は赤灰色	#

図50 西ヶ谷・西山出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	輪軸成形	成形・特徴	備考
1	かわらけ	13.3	7.6	3.7	輪軸成形	胎土は精良 色は赤灰色	西ヶ谷トレンヂ25
2	#	16.0	9.3	4.3	#	胎土は精良 色は赤灰色	#
3	瀬戸	断片			胎土は良淡灰色	釉は淡緑色透明	西ヶ谷トレンヂ28
4	高住鉢	断片			胎土は良灰白色		#
5	磁石		幅 3.1	厚 1.9	中底	色は茶褐色	西山トレンヂ23
6	常滑鉢	33.1	14.4	10.6	胎土は緻密赤灰色	内面に滑石 3つ目	西山トレンヂ23土境2
7	瀬戸新緑鉢			5.6	胎土は良明灰白色	緑灰色の灰輪	#
8	鉢				成字元玉	図50-14室内出土	西山トレンヂ23土境1(塚)
9	#				成字元玉	図50-14室内出土	#
10	#				成字元玉	図50-14室内出土	#
11	飯椀	径1.0		厚0.7	木晶製	管笠玉形 図50-14室内出土	#
12	鏡	径10.4		厚 0.7	内区線と花文	外区波文 地浮菊花文	#
13	山茶壺蓋型鉢	21.8	12.4	8.9	胎土は砂多く粗い	図50-14表の裏に利用	#
14	常滑蓋	10.2	7.9	21.2	肩部に牙輪	鏡、型鉢に裏をさされる	#

図51 東山平場表採遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	五輪塔空風輪	空径14.4	最大幅14.0	高24.2	安山岩製	東山平場
2	#	空径16.2	最大幅16.0	高20.2	鎌倉石製	#
3	#	空径18.0	最大幅17.8	高23.4	鎌倉石製	#
4	五輪塔火輪		最大幅33.2	高19.0	鎌倉石製	#
5	#		最大幅14.0	高 8.0	鎌倉石製	#
6	#		最大幅21.6	高14.2	安山岩製	#
7	#		最大幅18.8	高11.6	安山岩製	#
8	#		最大幅21.4	高12.8	安山岩製	#

図52 東山平場表採遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	備考
1	五輪塔火輪		最大幅20.0	高12.6	安山岩製	東山平場
2	#		最大幅26.6	高14.6	安山岩製	#
3	五輪塔水輪	最大径20.6		高13.8	安山岩製	#
4	#	最大径22.0		高14.8	安山岩製	#
5	五輪塔地輪		幅23.8	高18.8	鎌倉石製	#
6	#		幅21.8	高15.6	鎌倉石製	#
7	#		幅26.4	高20.0	安山岩製	#

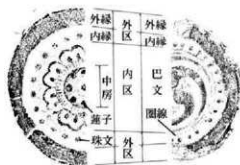
図53 東山平場出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	輪軸成形	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.0	4.2	1.6	#	#	東山平場トレンヂ4
2	#	7.0	4.2	1.8	#	#	#
3	#	7.1	5.0	1.5	#	#	#
4	#	7.3	4.4	2.0	#	#	#
5	#	7.3	4.2	1.8	#	#	#
6	#	7.3	4.4	1.8	#	#	#
7	#	7.4	5.2	1.8	#	#	#
8	#	7.5	5.1	1.2	#	#	#
9	#	7.5	5.3	1.6	#	#	#
10	#	7.5	5.5	1.4	#	#	#
11	#	7.7	5.0	1.6	#	#	#
12	#	7.8	5.0	1.7	#	#	#
13	#	10.8	6.1	2.4	#	#	#
14	#	11.9	8.0	2.4	#	#	#
15	#	12.0	8.0	3.2	#	#	#
16	#	12.1	7.4	3.2	#	#	#
17	#	11.8	6.5	3.1	#	#	#
18	#	12.2	7.6	3.3	#	#	#
19	#	12.3	7.2	3.0	#	#	#
20	#	12.3	7.9	3.4	#	#	#
21	#	12.5	7.7	3.4	#	#	#
22	#	12.6	7.4	3.6	#	#	#
23	瀬戸高		5.3		胎土は精良	色は黄灰色	#
24	手摺り			8.0	胎土は軟質		#
25	#				胎土は砂が多く粗い		#
26	磁石		幅 3.7	厚 1.2	中底	色は黄灰色	#
27	#			厚 1.0	中底	色は赤赤灰色	#
28	大打ち金			厚 0.5	上半部欠損		#
29	青磁水漏			高 4.6	胎土は精良堅緻灰白色	釉は緑灰色半透明	#
30	硯	長(7.2)	幅(6.6)		色は暗灰色	上部部欠損	#
31	風石		幅12.7	厚 3.6	滑石製	角に穿孔有り	#

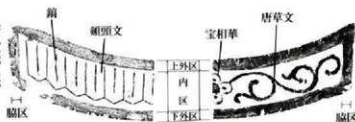
図54 東山平場出土遺物

No.	器種・種別	口径	底径	器高	輪軸成形	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.3	5.2	1.7	#	#	東山平場トレンヂ1
2	#	7.5	5.3	1.7	#	#	#
3	#	7.7	5.9	1.6	#	#	#
4	#	11.7	7.8	3.1	#	#	#
5	#	12.4	7.9	3.6	#	#	#
6	伊勢系土器?	断片			黒小輪	胎土は黄灰色 貼り付けの三角高台	#
7	水漏	長(23.1)			鉄製		#
8	かわらけ	7.4	5.3	1.7	輪軸成形	#	東山平場トレンヂ2
9	#	7.5	5.0	1.7	#	#	#
10	#	7.9	5.4	1.6	#	#	#

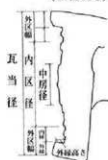
11	瀬戸鉢				底部に黒き目文様	#
12	白磁刺花文皿			3.4	胎土は灰白色堅緻 釉は乳白色	#
13	手摺り			10.3	胎土は良	#
14	かわらけ	7.0	5.2	1.6	轆轤成形	東山平場トレンチ5
15	#	7.1	4.6	1.9	#	#
16	#	7.4	4.2	2.3	#	#
17	#	8.9	5.5	2.2	#	#
18	#	11.0	5.8	2.8	#	#
19	#	12.6	7.6	3.3	#	#
20	酒念蓋	最大(16.5)		3.6	瀬戸もしくは瀬轆轤製 胎土は黄灰色	#
21	磁石			厚 0.5	中胚 色は黄灰色	#
22	かわらけ	7.4	4.1	2.3	轆轤成形	東山平場トレンチ9
23	瀬戸新緑鉢	断片			胎土は黄灰色 透明茶緑色の灰釉	東山平場トレンチ7
24	瀬戸鉢	26.2			胎土は黄灰色 透明茶緑色の灰釉	#
25	かわらけ	6.9	4.3	1.8	轆轤成形	東山平場トレンチ10
26	#	7.5	3.8	2.2	#	#
27	瀬戸入子	5.2	3.9	1.4	輪花型 胎土は黄灰色 表面に黄灰釉	#
28	瀬戸新緑鉢	断片			胎土は黄灰色 茶緑色透明の灰釉	#
29	常滑壺	断片			胎土は灰色長石を多く含む	#
30	瀬戸鉢		9.4		胎土は精良灰白色 乳灰色の釉	#
31	かわらけ	7.1	4.2	2.3	轆轤成形	東山平場トレンチ11
32	瀬戸新緑鉢	断片			胎土は良黄灰色 茶緑色透明の釉	#
33	甌	長12.7		厚 1.5	色は暗灰色 縦平分欠損	#



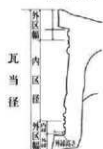
▶ 甌瓦各部名称



蓮華文甌瓦 (YA101e)



巴文甌瓦 (YA113)



▶ 甌瓦計測部分

額頭文字瓦 (YN103)



唐草文字瓦 (YN101b)

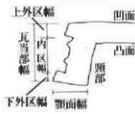


図55 甌瓦・宇瓦各部名称

永福寺出土瓦

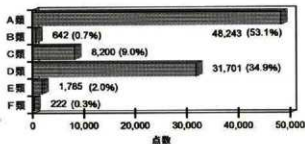
瓦破片總数 126,881点

女(平)瓦・男(丸)瓦破片總数 123,825点

鍔(軒丸)瓦・宇(軒平)瓦破片總数 2,922点

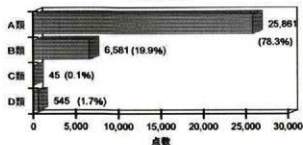
鬼瓦破片總数 134点

女(平)瓦
出土点数と割合



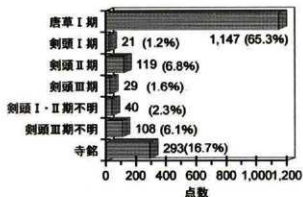
女(平)瓦破片数 90,793点

男(丸)瓦
出土点数と割合



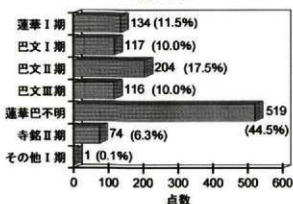
男(丸)瓦破片数 33,032点

宇(軒平)瓦
出土点数と割合



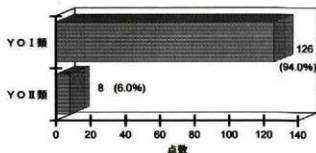
宇(軒平)瓦破片数 1,757点

鍔(軒丸)瓦
出土点数と割合



鍔(軒丸)瓦破片数 1,165点

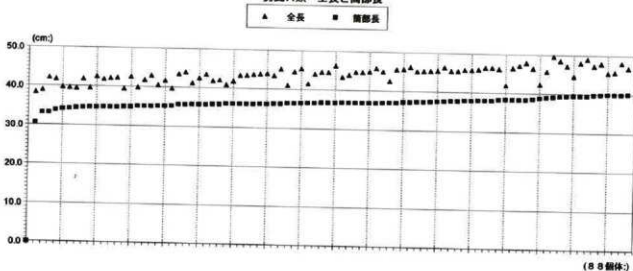
鬼瓦
出土点数と割合



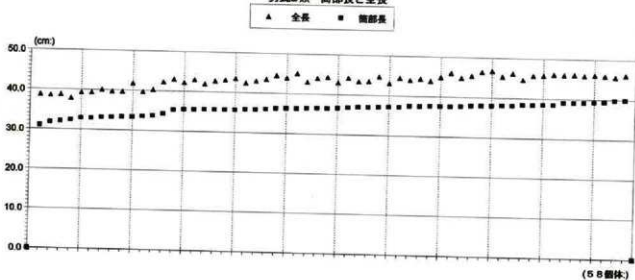
鬼瓦破片数 134点

表2 永福寺出土瓦破片總数表

男瓦A類 全長と筒部長



男瓦B類 筒部長と全長



女瓦 A・B・C・D・F類
全長

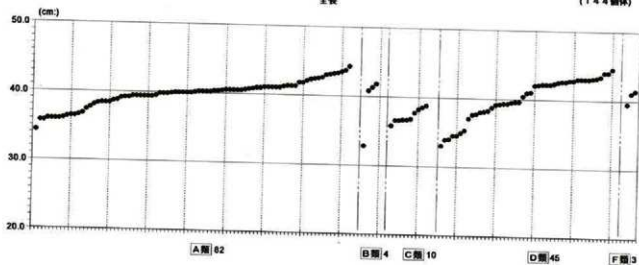


表3 男瓦・女瓦法量表

蓮華文鏡瓦

旧 (概要報告使用)	新 (本報告使用)
YA101a	YA101a
YA101b	YA101b
YA101c	YA101c
YA101d	YA101d
YA101e	YA101e
YA101f	YA101f
YA101g	YA101g
YA101i	YA101i
YA101h	YA102
YA102	
YA103	YA103

巴文鏡瓦

旧 (概要報告使用)	新 (本報告使用)
YA1101	YA1101
YA1102a	YA1102a
YA1102b	YA1102b
YA1102c	YA1103
YA1103	
YA1104	YA1104a
YA1104a	
YA1104b	YA1104b
YA1105	YA1105
YA1106	YA1106
YA1107	YA1107
YA1108	YA1108
YA1109	YA1109
YA1110	YA1110
YA1111a	YA1111a YA1111c
YA1111b	YA1111b
YA1112a	YA1112a
YA1112b	YA1112b
YA1113	YA1113
YA1104aの一部	
	YA1114a
	YA1114b
	YA1115

寺銘鏡瓦・その他

旧 (概要報告使用)	新 (本報告使用)
YA1101a	YA1101a
YA1101b	YA1101b
YA1101c	YA1101c
YANV01	欠番

唐草文字瓦

旧 (概要報告使用)	新 (本報告使用)
YN101a	YN101a1
YN101g	YN101a2
YN101b	YN101b
YN101j	
YN101d	YN101d
YN101e	YN101e1
YN101c	YN101e2
YN101f	YN101f
YN101h	YN101h1
YN101i	YN101h2
YN101k	YN101k
YN102	YN102
YN103	YN103
YN104	YN104
YN105	YN105
YN106	YN106

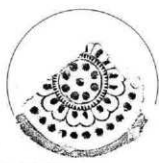
刺頭文字瓦

旧 (概要報告使用)	新 (本報告使用)
YN1101	YN1101
YN1102	欠番
YN1103	YN1103
YN1104	
YN1105	YN1105a YN1105b
YN1106	YN1106
YN1107	YN1107
YN1108	YN1108
YN1109	YN1109
YN1110	YN1110
YN1111	YN1111
YN1112	YN1112
YN1114	
	YN1115
YN1113	YN1113

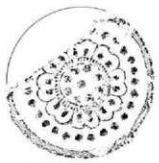
寺銘字瓦・蓮珠文字瓦

旧 (概要報告使用)	新 (本報告使用)
YN1101a	YN1101a YN1101c
YN1101b	YN1101b
YN1102	欠番
YN1103a	YN1103a
YN1104	
YN1103b	YN1103b
YN1101	YN1101

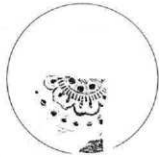
表4 軒先瓦型式分類の新旧対照表



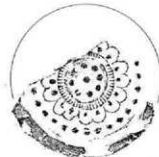
1 YA101a



2 YA101a



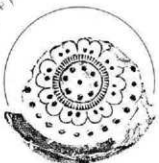
3 YA101b



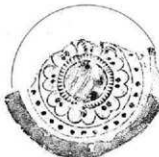
4 YA101c



NY 62-044



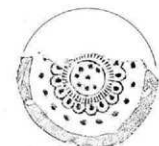
5 YA101f



6 YA102



7 YA101i



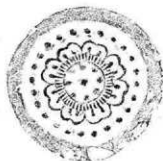
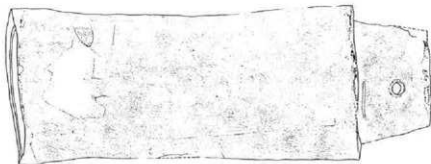
8 YA101g



0 10 cm

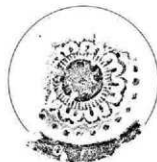
YA1は蓮花文。いずれも1期のもと考えられ、基本的に精良堅緻な胎土で成る。YA101は桐弁八葉蓮花文で中房に1+8の蓮子を置き、花弁との間に放射状の筋を添らせる。1期の主流が巴文とこの形式となると見られ、范の種類、出土点数ともに多い。YA102・YA103はそれぞれ1形式ずつ確認されている。

図56 蓮花文鏡瓦



1 YA101e

YA101a 丸みをもった猪目形の花弁は、先端が深く盛り上がるように立体的に表される。蓮子は比較的大さい。珠文も比較的大きく。数は27個。外縁の内側に削っている。瓦當径約16cm。



2 YA101e

YA101b 花弁の外縁を凸線でごわす。YA101eと非常によく似ているが、若干小振り。これが焼成による縮みか否かは判断できない。出土点数は図に示した1点のみである。

YA101c 花弁を立体的に表す。YA101aによく似るが、蓮枝が若干小さい。外縁の内側に削りを施す。瓦當径約16cm。

YA101e 花弁の外縁を凸線でごわす。瓦當背面に「国元」の面押印を持つものも見られる。珠文の数は24個。推定瓦當径約16cm。



3 YA101e

YA101f 花弁を立体的に表す。YA101eと似るが蓮子の大きさ、花弁の膨らみ等がわずかに異なり、子葉が接近する。外縁の内側に削りを施す。瓦當径約16cm。

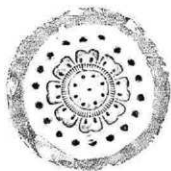
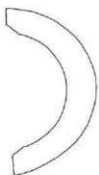
YA101g 隣り合う花弁が接近するため、掏弁が小さい車弁のように見える。珠文の数は16個。外縁の内側に削りを施す。YA101形式の中では、瓦當径が14.6cmと小振り。

YA101i YA101eと似るが、推定瓦當径は13cm。外縁内側に削りを施す。珠文の数は推定32個。

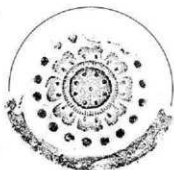
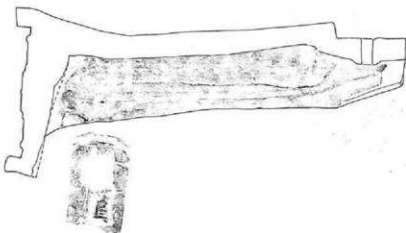
YA102 文様構成はYA101と同じであるが、珠文を挟んで2本の凸線が巡る。推定瓦當径16.6cm。

0 10cm

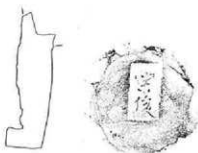
図67 蓮花文鏡瓦



1 YAI01d



2 YAI01d



0 10 cm



3 YAI03

YAI01d 花卉を扁平な盛り上がりで表わす。瓦當背面に「宗俊」・「文長」の人名押印を持つものも見られる。珠文の数は18個。瓦當径16cm。

YAI03 出土した破片は、二本の図線で珠文を挟む部分。胎土・軸から判断して東海地方窯産と考えられる。八事裏山1号窯出土の資料と同范と考えられる。この類例の文様構成はYAI01fとほぼ同様である。



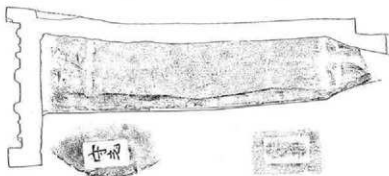
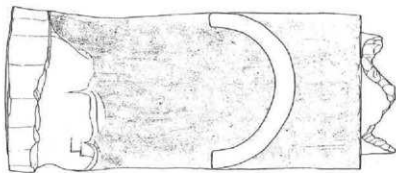
1 YAH01



2 YAH01



3 YAH02a



0 10 cm

YAHは巴文、1期から中期以降のものまで見られる。複製中では、18の形式を報告したが、出土した破片すべてに対して、その後さらに詳しい観察・撮影を行い、新しく分類を行った。

YAH01 珠文の無い右廻り巴文。文縁部分は扁平で、巴の尾は比較的短い。瓦當径約13cm。外縁の内側に削りが見られる。粘土が、一部に軟質で、男尻部分を残す破片はごく稀であった。瓦當背面は物面仕様が明確で、古式な縁部を持つと言える。1期。

YAH02a 左廻り巴文。珠文の数は18個。文縁部分は丸く盛り上がる。瓦當径約17cm。瓦當背面に寸光の人名押印を持つものもある。特に男尻部内側にもこの押印があるもの(図59-30)があった。瓦當径17.5cm程度。1期。

YAH02b 左廻り巴文。巴の尾が短い。外縁の内側に削りを見出す。拓印では観察できないが、中心に彫刻作時の分向しの痕と見られる小さな凸がある。珠文の数は22個。瓦當径16cm程度。1期。

YAH03 左廻り巴文。巴の尾が図縁に接する。鑑定瓦當径18cm。YAH02a・YAH02b

より一回り大き形である。凸部分の盛り上がりが高い。複製中YAH02cとしたものもこの形式。1期。

YAH11a 左廻り巴。図縁がない。珠文の数は24個と推定される。瓦當径16cm程度。1期。

YAH11b 左廻り巴。巴が図縁で表現される。23個の珠文はYAH11aよりやや大き形。外縁内側に削りを見出す。瓦當径16cm程度。1期。

YAH11c 左廻り巴文。図縁がない。YAH11aに似るが、巴の尾がやや短い。珠文の数は22個。外縁内側に削りを見出すもの(図60-7)と、長さないもの(図50-6)の両方がある。瓦當径は13cm程度。1期。

YAH12a 図縁を伴う左廻り巴文。凸部の盛り上がりが高く扁平で、円形も扁平。外縁内側に削りが見られる。瓦當径は13cm程度。1期。

YAH12b 図縁を伴う左廻り巴文。YAH12aに似るが、凸部断面は若干丸みを持つ。外縁内側に削りが見られる。珠文の数は24個と推定される。瓦當径は14cm程度。1期。

図59 巴文鏡瓦

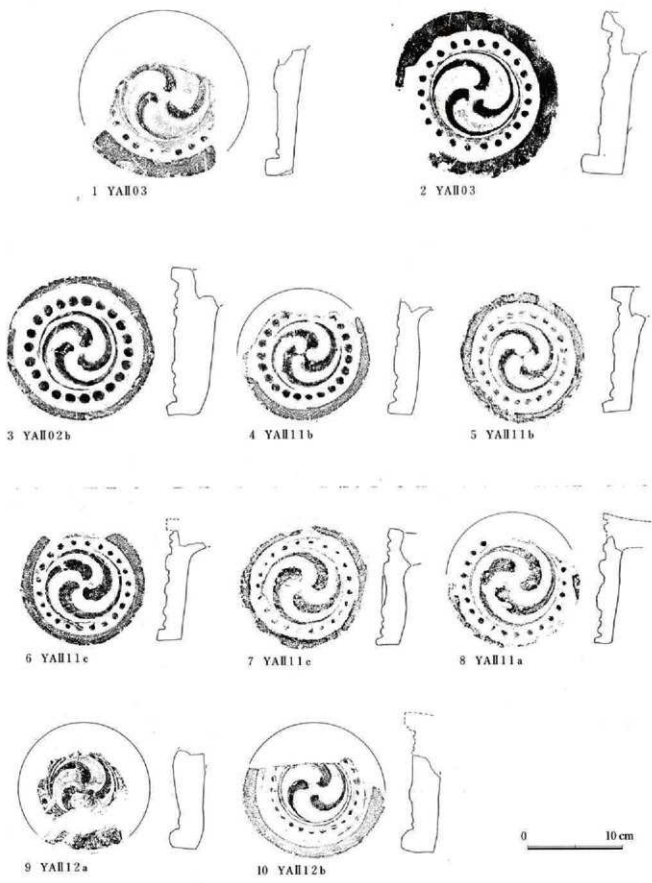
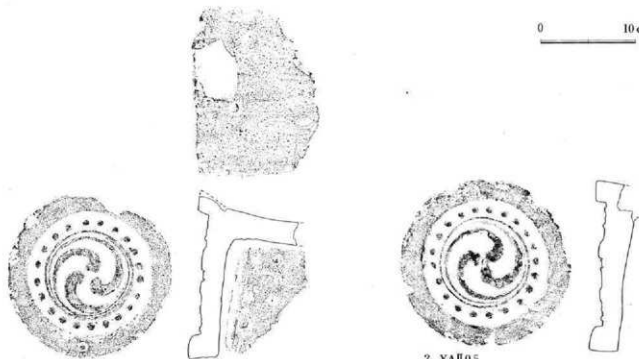
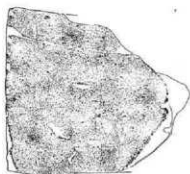


图60 巴文瓦

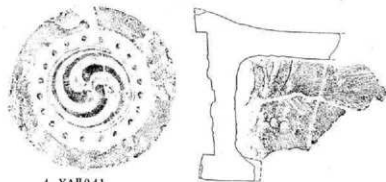


1 YAH05

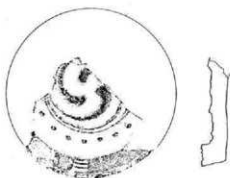
2 YAH05



3 YAH04a



4 YAH04b



5 YAH04b

YAH04a 図線を伴う右遷り巴文。珠文帯の内側に図線を設ける。巴の尾は図線に接しない。珠文の数はYAH04bより多い。瓦當径は17cm程度と推定される。瓦當面に黒色の塵れ砂が付着する。Ⅱ期。

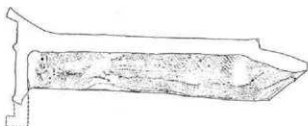
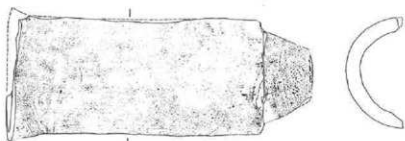
YAH04b 図線を伴う右遷り巴文。中心に「△」の捺印を持つもの。外側に「日」状の捺印を持つものが見られる。珠文の数は20個。また、△捺印のものでは頸部に筒状の凸が設けられる鳥突と見られるものが含まれる。Ⅱ期。

YAH05 図線を伴う左遷り巴文。中心に径1cm程度の竹筒状の捺印がある。外縁にもこの捺印が見られるものもある。(図6-1-1) 珠文の数は21個。瓦當径は17cm程度。Ⅱ期。

図61 巴文瓦



1 YAH09



0 10 cm



2 YAH09



3 YAH07



4 YAH08



5 YAH08



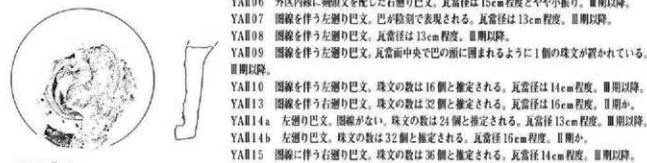
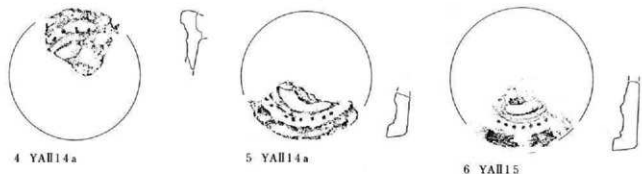
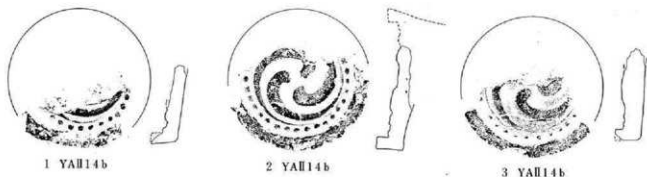
6 YAH13



7 YAH06



图62 巴文铺瓦



YAH06 外区内縁に網面文を配した右廻り巴文。瓦當径は15cm程度とやや小振り。Ⅲ期以降。
 YAH07 図線を伴う左廻り巴文。巴が陰刻で表現される。瓦當径は13cm程度。Ⅲ期以降。
 YAH08 図線を伴う左廻り巴文。瓦當径は13cm程度。Ⅲ期以降。
 YAH09 図線を伴う左廻り巴文。瓦當面中央で巴の頭に囲まれるように1個の珠文が置かれている。
 Ⅲ期以降。
 YAH10 図線を伴う左廻り巴文。珠文の数は16個と推定される。瓦當径は14cm程度。Ⅲ期以降。
 YAH13 図線を伴う右廻り巴文。珠文の数は32個と推定される。瓦當径は16cm程度。Ⅱ期か。
 YAH14a 左廻り巴文。図線がない。珠文の数は24個と推定される。瓦當径13cm程度。Ⅲ期以降。
 YAH14b 左廻り巴文。珠文の数は32個と推定される。瓦當径16cm程度。Ⅱ期か。
 YAH15 図線を伴う右廻り巴文。珠文の数は36個と推定される。瓦當径14cm程度。Ⅲ期以降。

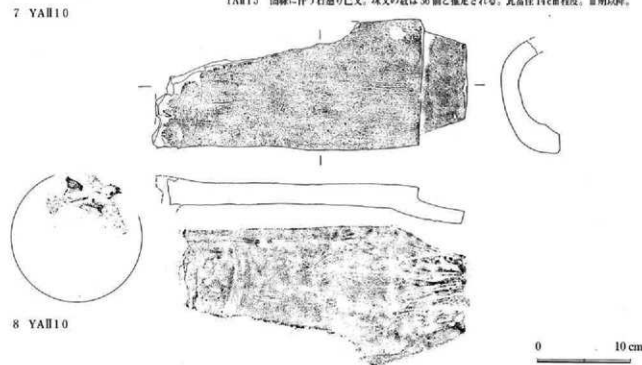
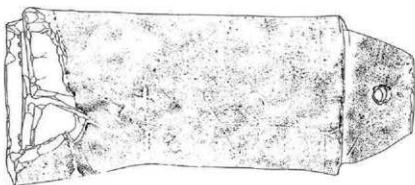


図63 巴文鋪瓦



1 YAM01a



YAM01は珠文帯の中に、「永福寺」の3字を配する。
 YAM01a 珠文は比較的密で、断面半円径の明瞭な盛り上がり。II期。
 YAM01b 「寺」の字画が省略されている。また、珠文と「福」が重なるなど、粗雑な作りといえる。II期。
 YAM01c 字体・珠文が比較的繊細に浅く作られる。字体や表現はYAM03aに似る。II期。



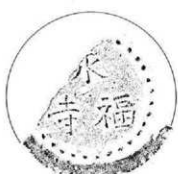
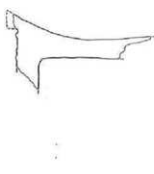
2 YAM01a



3 YAM01b



4 YAM01c



5 YAM01c



0 10cm

図64 寺鈍筒瓦

0 10 cm

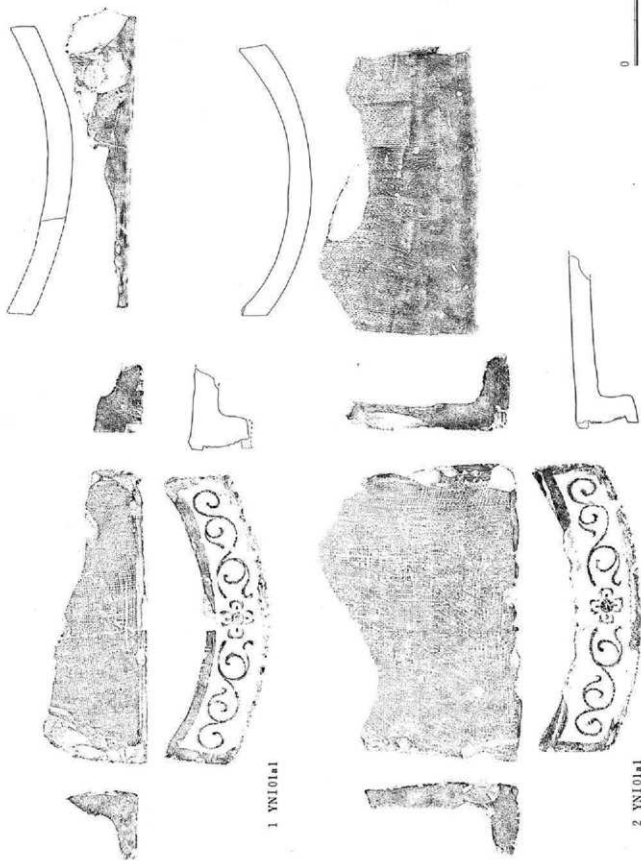
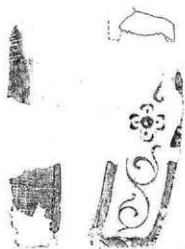
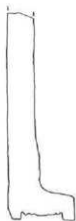


图65 唐草文字瓦



1 YN101a2



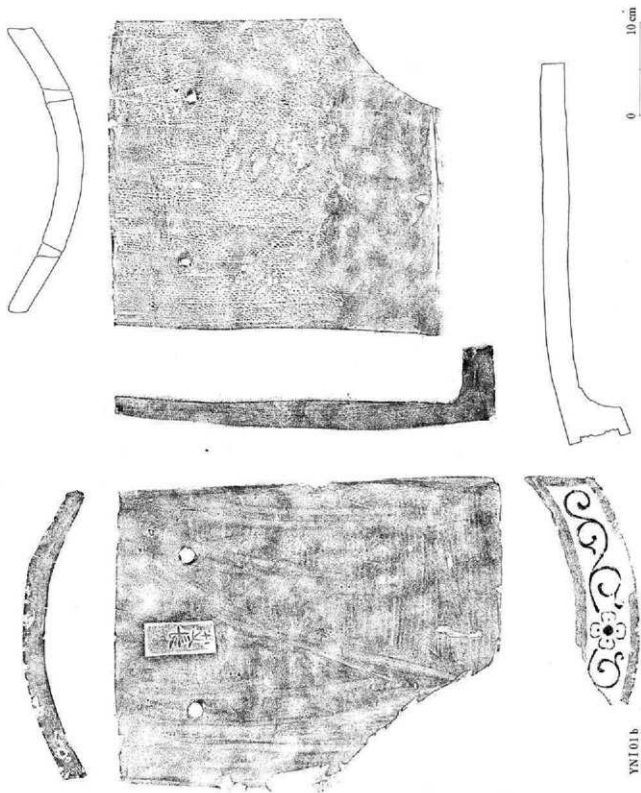
2 YN101a1

YN101は均正唐草文、中心飾は十字に四花卉を配した端花文で、唐草は三回転する。精良胎土であり、女瓦A類もしくはB類を伴うもので、I期の製品と考えられる。

YN101a1 中心飾の花卉の中央が猪目形に窪み。唐草は花卉から離れる。女瓦A類を伴うもの(図65-1・2)、B類を伴うもの(図66-2)、両方がある。

YN101a2 YN101a1と同じ范を唐草部二回転の箇所でも切り詰めている。概観中YN101gとしてきたもの。

図66 唐草文字瓦



YNI01b 端花文は比較的細い凸線で彫らみをもつ。唐草端部の分岐が浅い。概観中では女瓦部分に人名押印のあるものをYNI01jとして独立した形式に扱ってきたが、瓦當の点という観点でこのYNI01bに統一した。

図67 唐草文字瓦

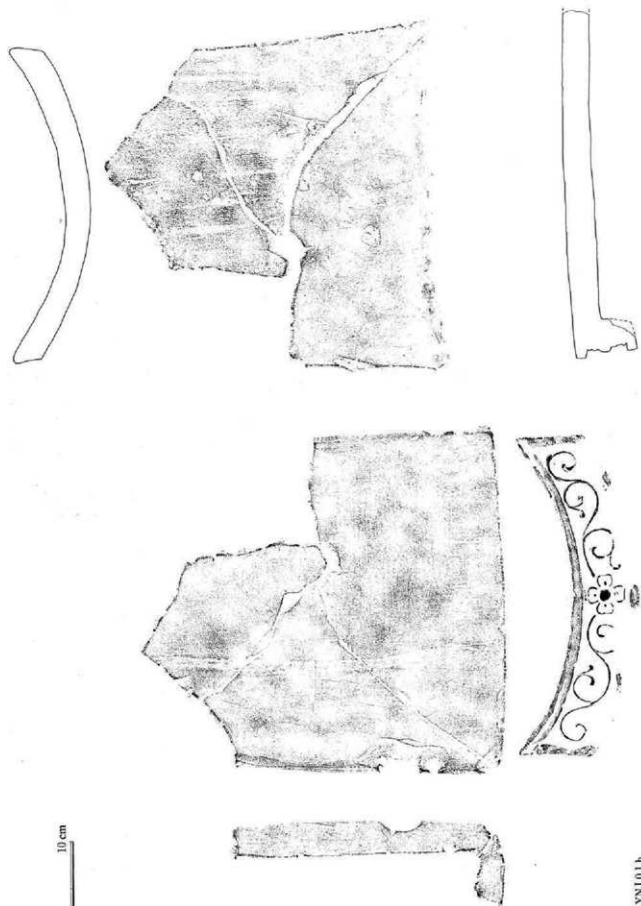


图68 蕙草文字瓦

YN101b

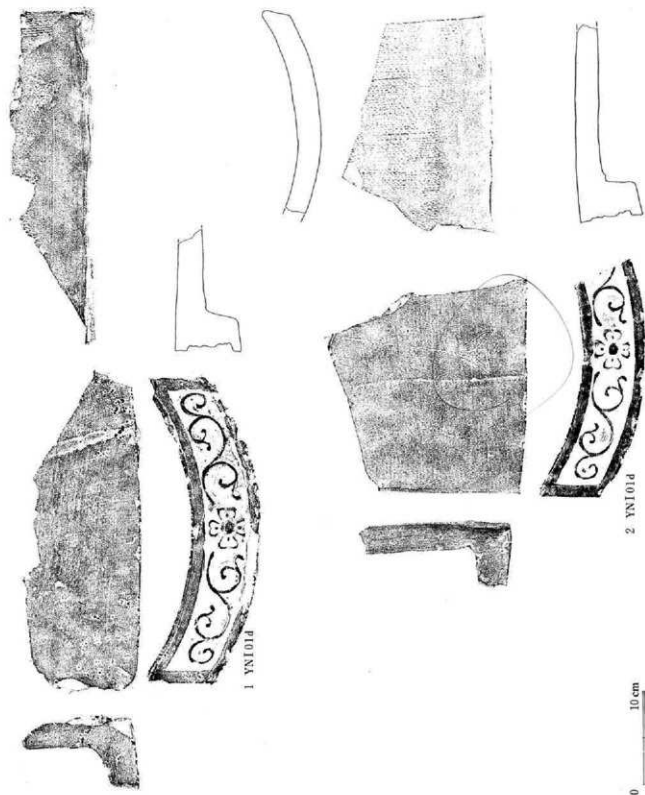


图69 唐草文字瓦



YNI01d 端花文の花弁がYNI01a1・bより角張った形状を成す。女瓦部凹面に花押状の線刻を有するもの(図69-2・図70)もある。

YNI01e1 端花文を凸線ではなく立体的に表わす。花弁先端が宝珠状に突出する。唐草は花弁に接し、端部は太く強い回転。

YNI01e2 YNI01e1の范を唐草二回転の箇所まで切り詰めている。假想中YNI01cとしてきたもの。

YNI01f 文様は全体的に均一的な太さの凸線で表わされる。二回転目の唐草の端部が左右若干向きを異にする。右唐草の端部は瓦の生産途中で范が欠けたものと見られ、潰れているものが多く出土している。

図70 唐草文字瓦

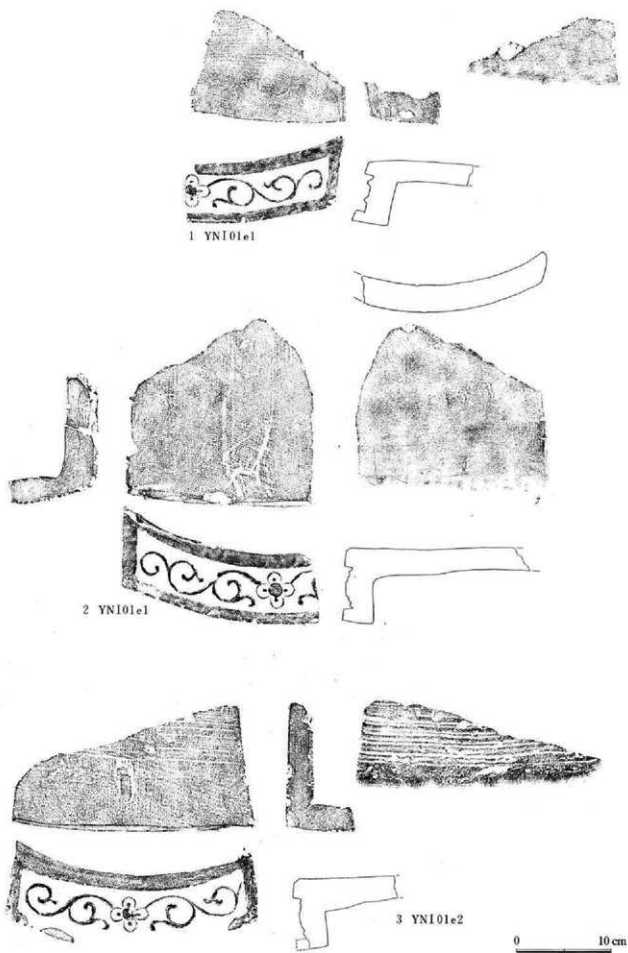


图71 唐草文字瓦

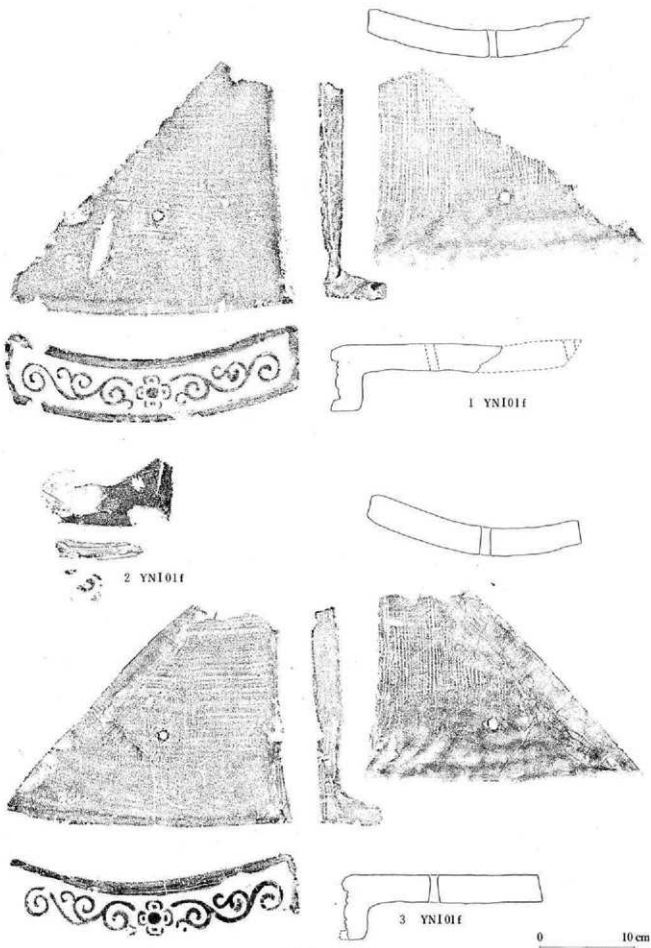
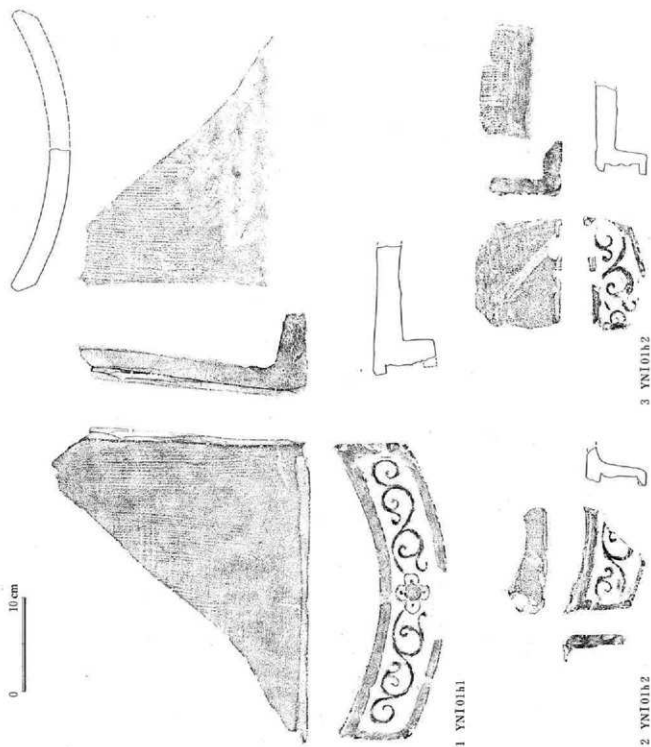


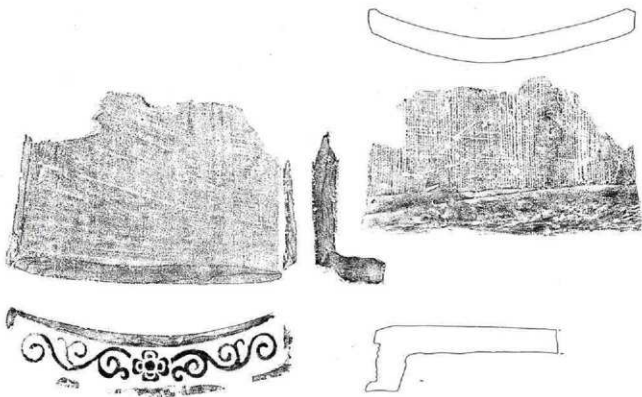
图72 唐草文字瓦



YNI01h1 瑞花文の花弁は丸みをもつ。唐草先端は花卉に接する。唐草は太さの均一的でない凸線で表される。唐草端部が強い回転、折り曲げの痕跡を残す破片が見られる。

YNI01h2 YNI01h1と同じ范を唐草二回転の箇所で切り詰めたもの。内区上部も詰めている。概観中YNI01iとしてきたもの。

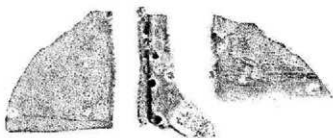
図73 唐草文字瓦



1 YNI01k



2 YNI06

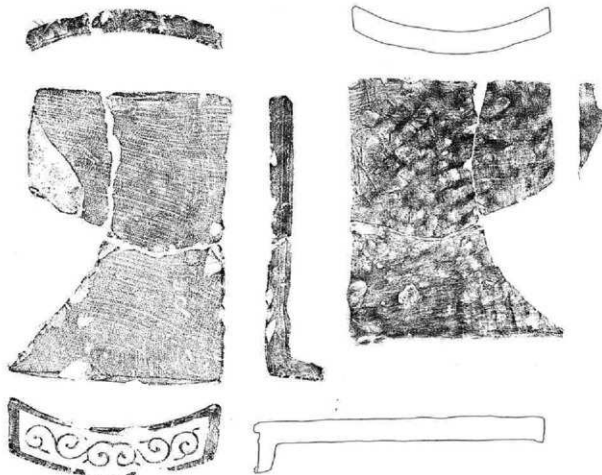


3 YNI06

0 10 cm

YNI06 文様はYNI01とほぼ同じ均正唐草文。中心飾の部分は出土していない。陶質で、瓦當面に灰釉が施されている。名古屋市の八事裏山室もしくはその周辺の産か。I期。

図74 唐草文字瓦



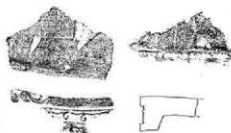
1 YNI03



2 YNI02



3 YNI02



4 YNI05



5 YNW01

YNI03 中心部に端花文を用いない。子葉を持つ唐草は左右対称に3回転する。唐草の部分にも布目痕が認められるなど、折り曲げの痕跡が観察できる破片もある。女瓦部はA型。凸面を指頭圧で縄目痕をなで消しているものもある。I期。

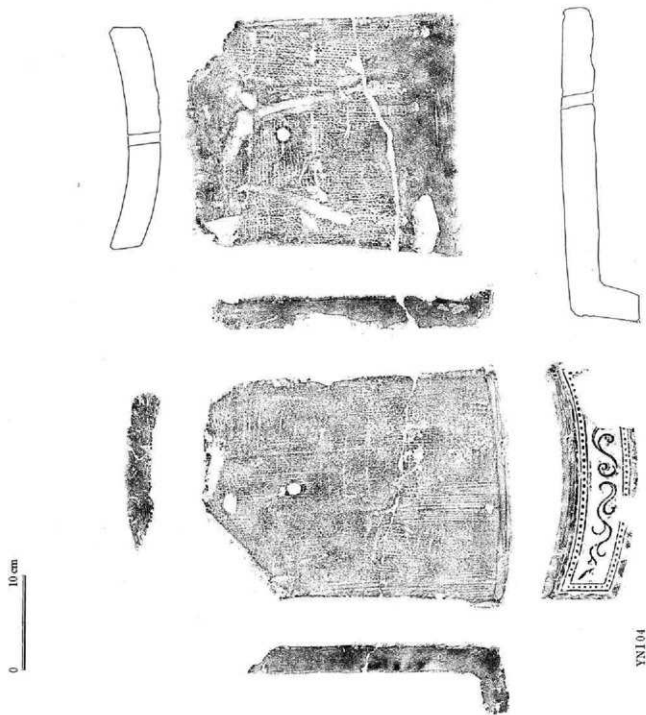
YNI02 界線を設けて内縁に珠文を配置し、釣り針状の唐草を上向き下向き交互に配置した唐草文。出土破片数は2点のみである。胎土は粗くⅢ期以降のものと考えられる。

YNI05 界線の中に下向き釣り針状の唐草を配置する。焼成は良好で堅緻だが、粗胎、Ⅲ期以降か。

YNW01 連珠文。界線を設けて連珠文を配する。内区幅約2.0cm。蓮珠文の字瓦片はこの1点のみ出土。I期か。

0 10cm

図75 唐草文字瓦・連珠文字瓦



YNI04 中心飾に端花文を用いない。二重に界線を巡らし珠文帯を設ける。文様はごく浅い凸で表される。1点のみ出土している。同范のものは当遺跡に近い横小路周辺遺跡【註】で出土している。胎土は精良で、女瓦部はA型。1期。

【註】二階堂宇横小路93番1地点【鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15】（鎌倉市教育委員会平成11年3月）

図76 唐草文字瓦

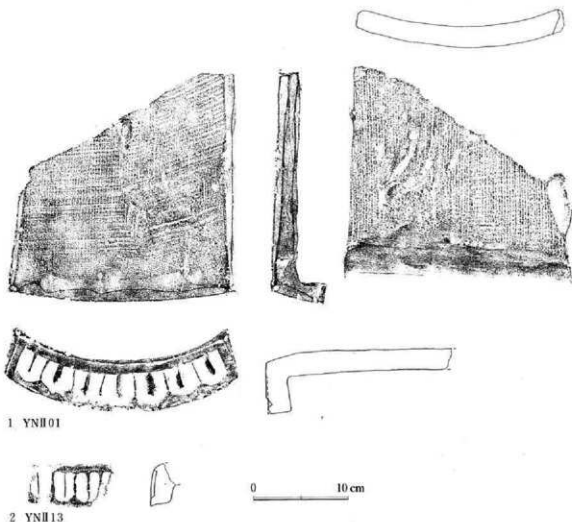


図77 剣頭分子瓦

YN II は剣頭文字瓦。各時期のものがあるが、I 期のものは下向き陰刻、II 期のものは下向き陽刻、III 期以降のものは上向き陽刻と大別できる。特に III 期のものは小型化する傾向がある。

YN II 01 陰刻下向き剣頭文。鋸は断面三角形を呈する。瓦當面に布目痕が認められるなど、折り曲げの痕跡が認められるものがある。女瓦 A を作る。I 期。

なお概観中挙げた YN II 02 は横須賀考古学会保管品で、実際に発掘調査では出土しなかったため、欠番とした。

YN II 05 a 陽刻上向き剣頭文。周縁に捺すように界線を設け、剣頭文の中に「永福寺」の文字を右から一字ずつ配している。「福」の左に円を分割した花形の押印が見られる。ただし、出土した破片数が少なく、この押印が見られるのは 1 点のみである。(図 79-3) 女瓦 E を作る。III 期以降。

YN II 05 b 陽刻上向き剣頭文。界線が無く、YN II 05 a より剣頭の幅が広い。文様の配置は YN II 05 a と同じと考えられるが、図に示した 1 点が出土したのみである。胎土は粗くやや軟質。女瓦 E を作ると考えられ、III 期以降。

YN II 06 陽刻上向き剣頭文。界線を設け、中心に左廻り巴文、両脇 4 個半の剣頭を配する。III 期以降。女瓦 E を作る。III 期以降。

YN II 07 陽刻上向き剣頭文。YN II 06 とほぼ同文で、中心の巴文が右廻り。女瓦 E を作る。III 期以降。

YN II 08 陽刻上向き剣頭文。上下に界線を設ける。剣頭の 1 単位の幅は 1.7~1.8cm とかなり狭いが、15 より若干広い。女瓦 E を作る。III 期以降。

YN II 09 陽刻上向き剣頭文。界線は下のみに設けられる。女瓦 E を作る。III 期以降。

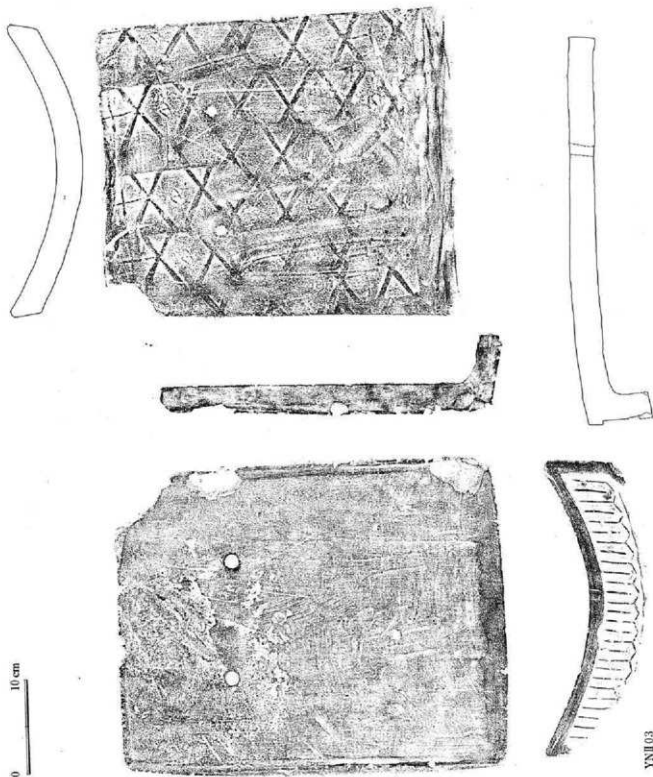
YN II 10 陽刻上向き剣頭文。界線は上のみに設けられる。女瓦 E を作る。III 期以降。

YN II 11 陽刻上向き剣頭文。界線がない。女瓦 E を作る。III 期以降。

YN II 12 陽刻上向き剣頭文。上下に界線を設ける。概観中 YN II 14 とした中心に三鱗を配するものは、これと同型式と見られる。女瓦 E を作る。III 期以降。

YN II 13 陰刻下向き剣頭文。鋸は断面三角形を呈する。剣頭の幅が YN II 01 より狭く筋も浅い。瓦當面には布目痕が認められ、折り曲げ。

YN II 15 陽刻上向き剣頭文。上下に界線が設けられる。YN II 08 とよく似るが、剣頭文の幅が更に小さく、鋸が水玉状に退化しているのが特徴である。



YNI 03 陽刻下向き額頭文。女瓦C類を伴う。埼玉県児玉郡の水廻瓦窯産とみられる。瓦當面に布目痕が認められるものもあるが、成形技法は折り曲げとは考えにくい。調査中YNI 04としたものも、このYNI 03と同一であることが確認された。II期。

図78 額頭文字瓦

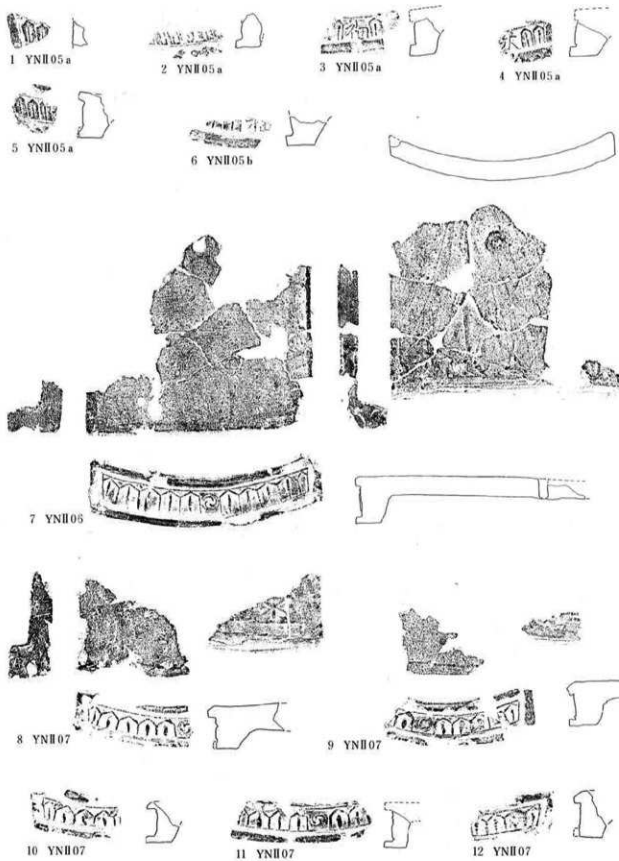


图79 刻划文字瓦

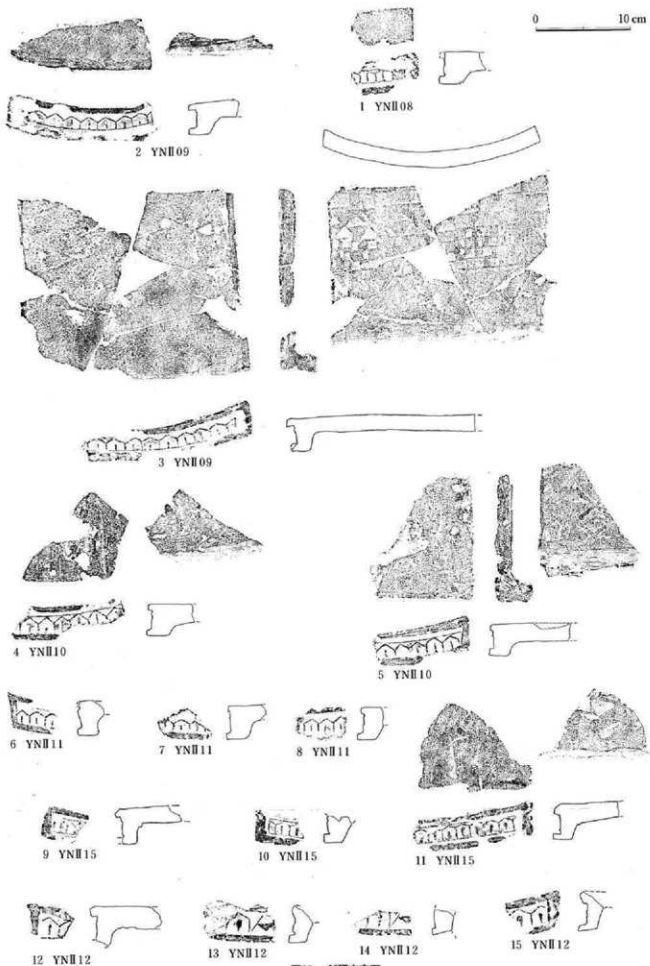
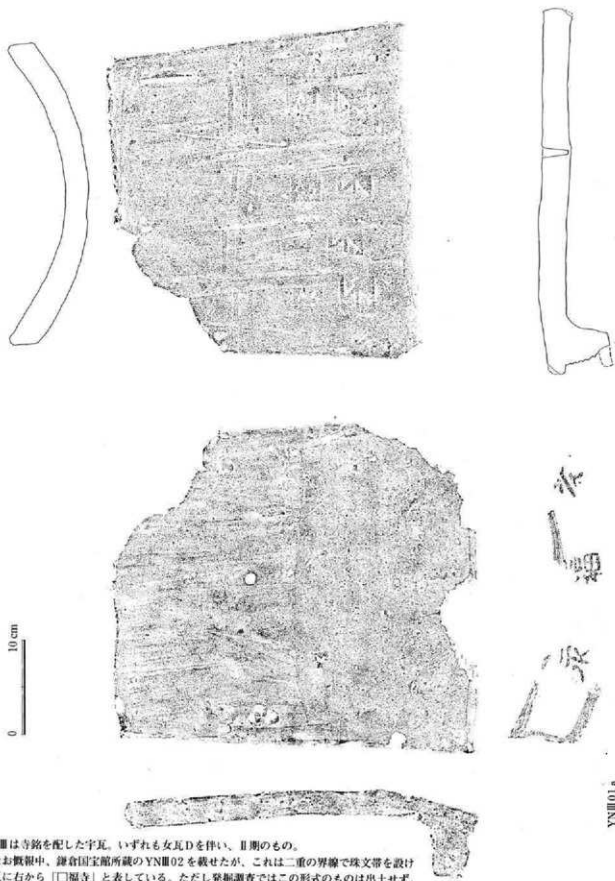


图80 刻字文字瓦

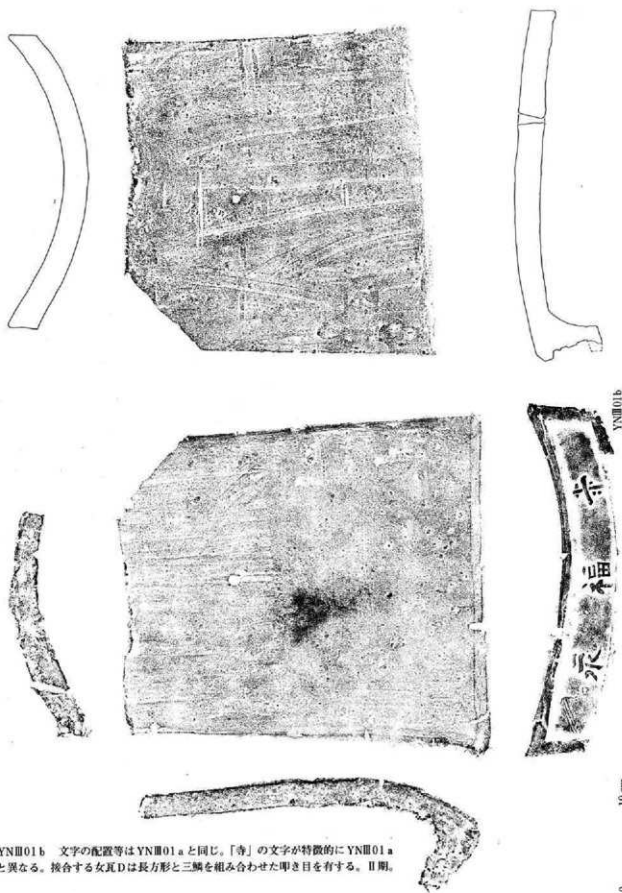


YNIIは寺路を配した字瓦。いずれも女瓦Dを伴い、II期のもの。

なお概観中、鎌倉国宝館所蔵のYNII02を観せたが、これは二重の界線で珠文帯を設け内区に右から「□福寺」と表している。ただし発掘調査ではこの形式のものは出土せず。鎌倉国宝館に所蔵されるに至った経緯も明らかでない点が多い。よって欠番とした。

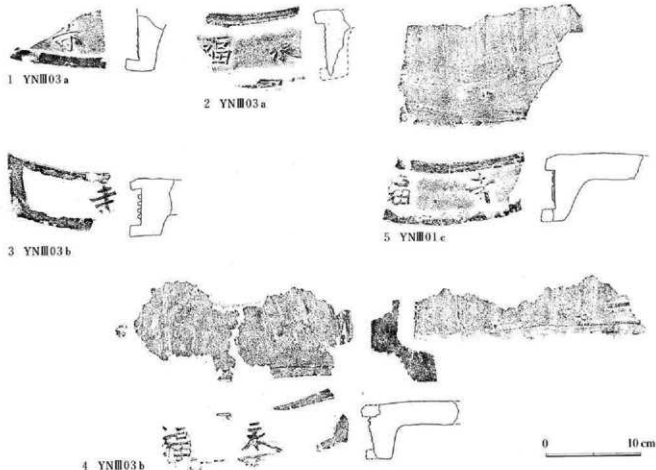
YNII01a。「永福寺」の三文字を左から凸で表わしている。接合する女瓦Dは長方形と三線・花菱を組み合わせた甲と目を有する。II期。

図81 寺銘字瓦



YNIII01b 文字の配置等はYNIII01aと同じ。「寺」の文字が特徴的にYNIII01aと異なる。接合する女瓦Dは長方形と三隅を組み合わせた甲き目を有する。II期。

図82 寺銘宇瓦

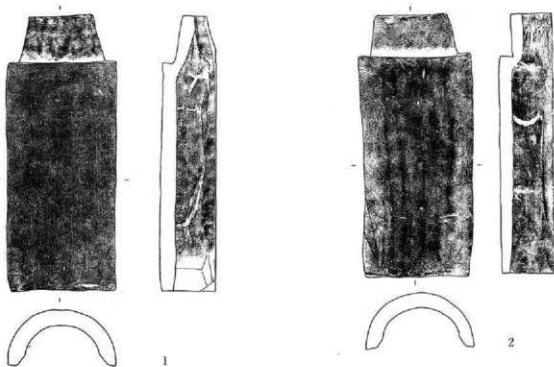


YN01c YN01aと非常によく似たもので、「寺」の文字中「寸」の上部が突き抜ける。同范で范を彫りなおしている可能性もある。Ⅱ期。

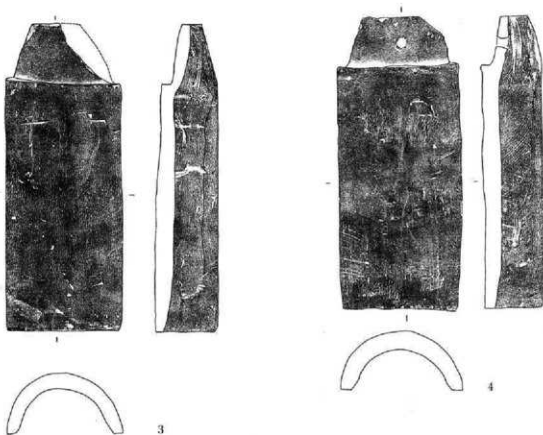
YN03a 「永福寺」の三文字を右から浅い凸で表わしている。概報中「寺」の部分の破片をYN04としたが、字体等から判断してこのYN03aであろう。Ⅱ期。

YN03b 字体はYN01aに似るが、寺銘を右から表わしている。Ⅱ期。

図83 寺銘字瓦

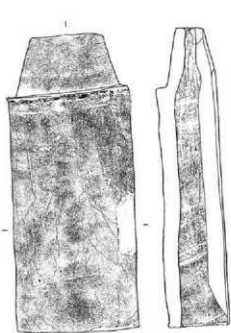


男瓦A類（1期） 胎土は精良で軟質と硬質の製品がある。
 暗灰色～灰褐色を呈し凸面には細かな襷目印きを有するものが多く、凹面には布目痕が残る。



0 20 cm

図84 男瓦A類



1



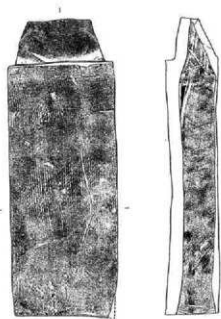
1



1



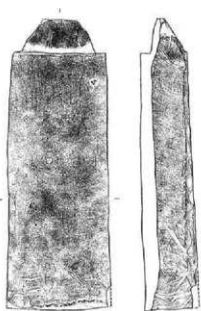
2



1



3



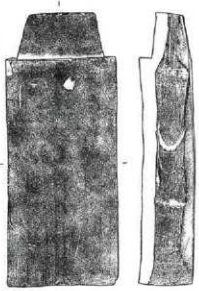
1



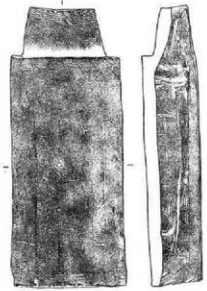
4

0 ————— 20 cm

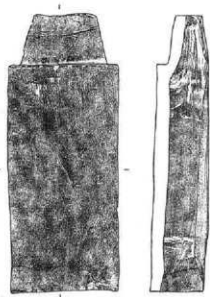
图85 男瓦A類



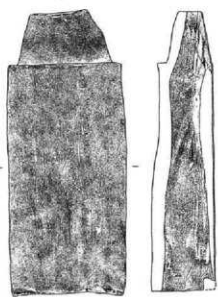
1



2



3



4

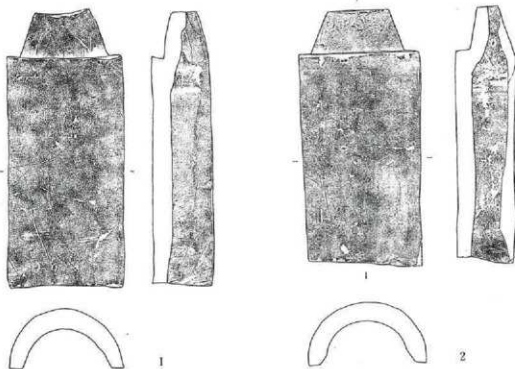
0 20 cm

图86 男瓦A類

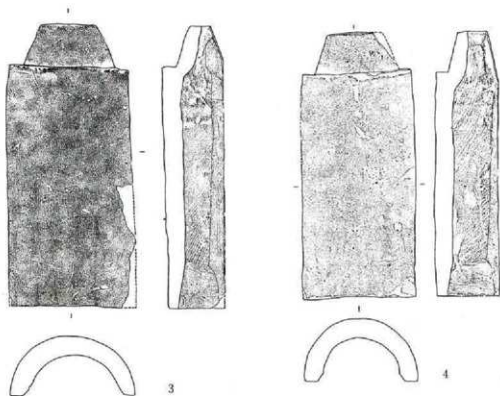


0 20 cm

图87 男瓦八類

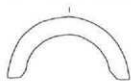
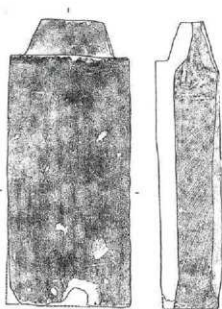


男瓦B類（B期） 胎土に砂、石粒を多く含み、気泡も多い。表面は灰白色～灰黒色を呈し凸面の叩き目は丁寧にナデ消される。凹面は細かな布目痕を残す。

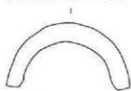
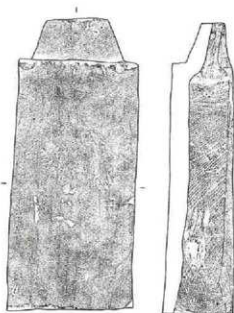


0 20 cm

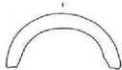
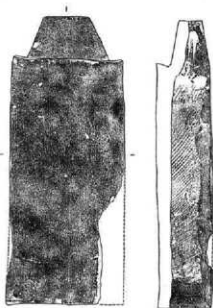
図88 男瓦B類



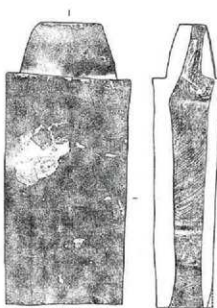
1



2



3



4

0 20 cm

图89 男瓦B類

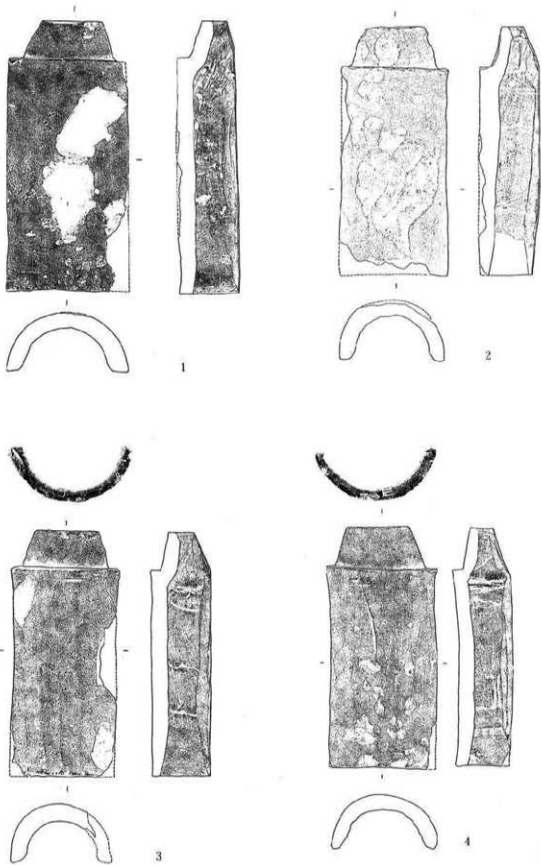
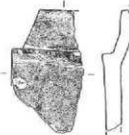


图90 男瓦B類



1 男瓦D類

男瓦D類 (Ⅲ期)
極めて粗い胎土で割れ口はザックリしている。表面は黒灰色のくすべ焼き風。



2 男瓦B類



3 男瓦B類

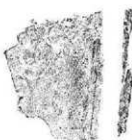


4 男瓦C類

男瓦C種 (Ⅰ期) 陶器質の胎土で長石が目立つ。YA103、女瓦F類と同質の胎土であることから東海地方産と考えられる。



5 男瓦C類



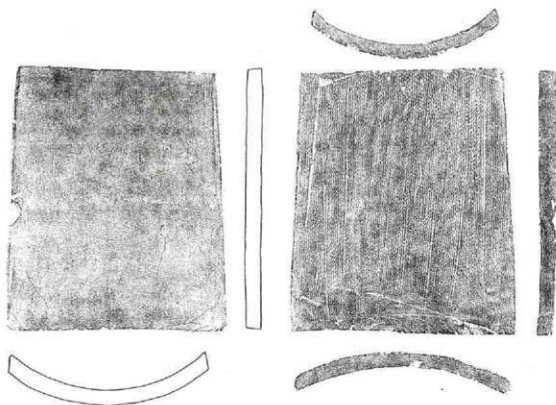
6 男瓦C類



7 男瓦C類

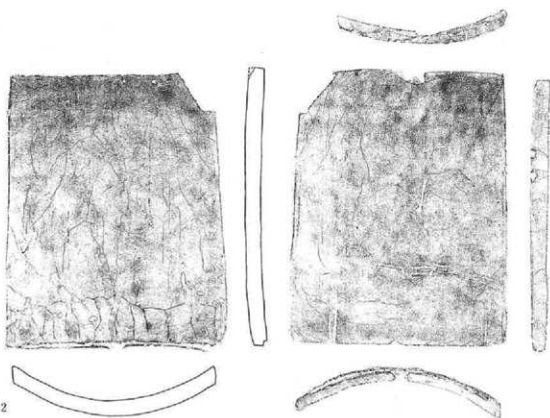
0 20 cm

図91 男瓦B類・男瓦C類



1

2 当初は宇瓦で、唐草文の瓦当を焼成前に切り落した痕跡を有する。凸面の欄目は丁字家にナデ酒している。



2

0 20 cm

092 女瓦A類

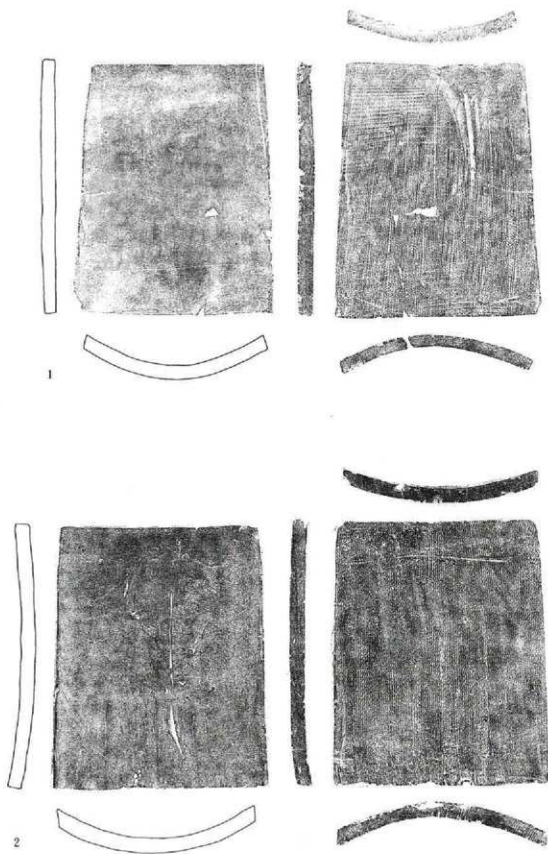
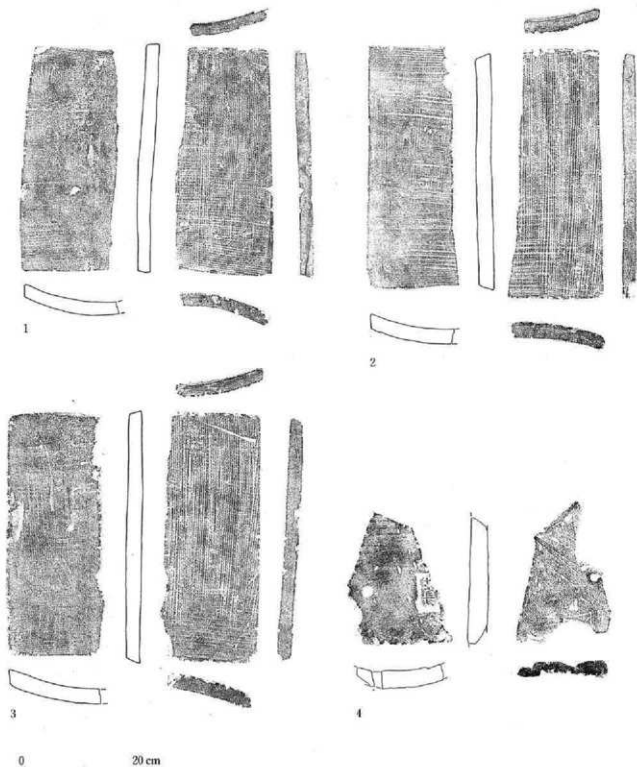


图93 女瓦人頭



1～3 焼成後に縦平分に割られており甃斗瓦として用いられた可能性が高い。同様のものは他にも多く出土している。

4 縄目が斜めに走る特殊な製品。

図94 女瓦A類

20 cm
0

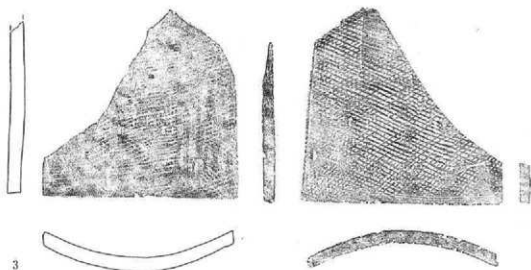
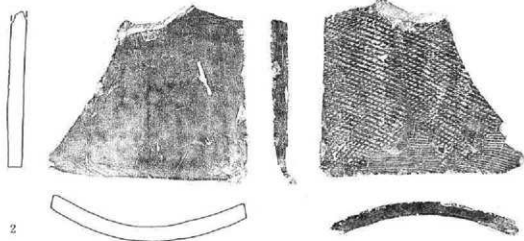
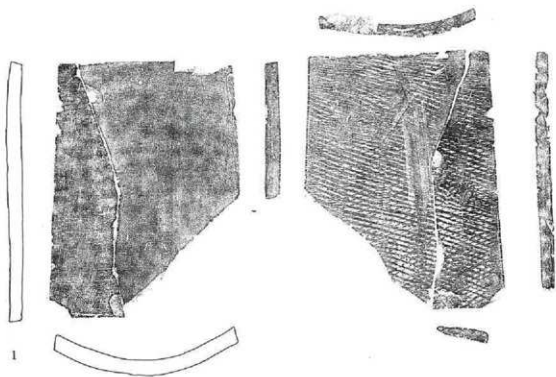
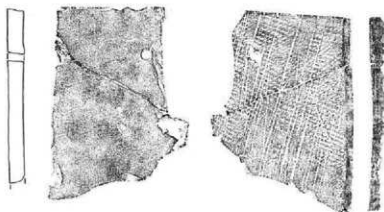


图95 女瓦B類



1

2 凸面にB型の細かい斜格子とA型の横目の二種類の印きを有するもの。

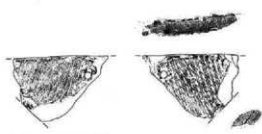


2

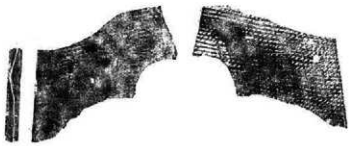
3 隅切瓦片

4 凸面を焼成後に研摩しているもの。

0 20 cm



3



4

図96 女瓦B類

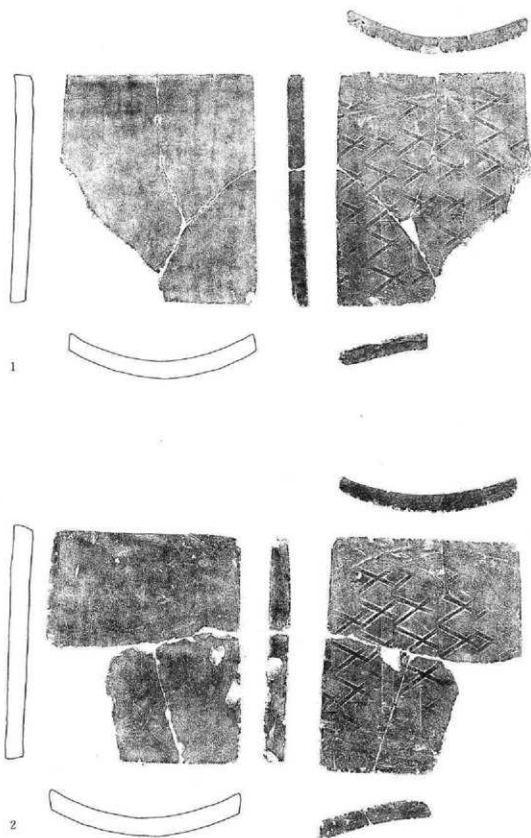
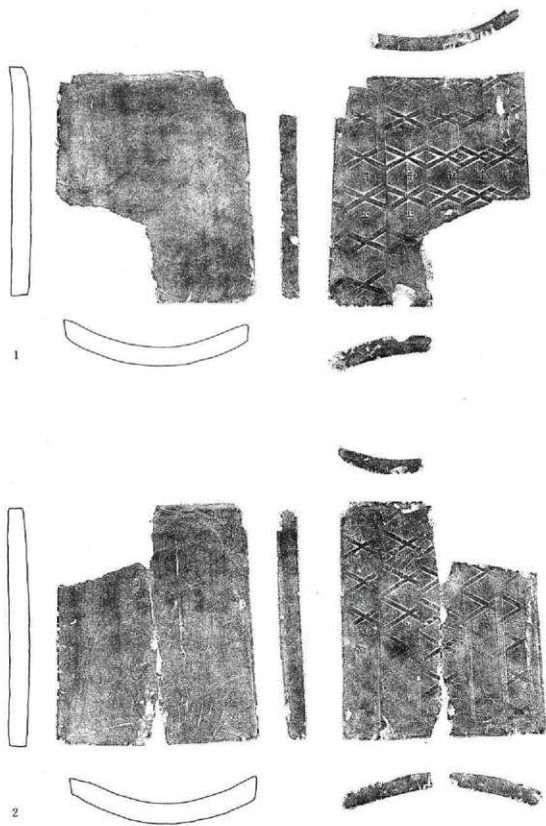


图97 女瓦C類



0 20 cm

图96 女瓦C類

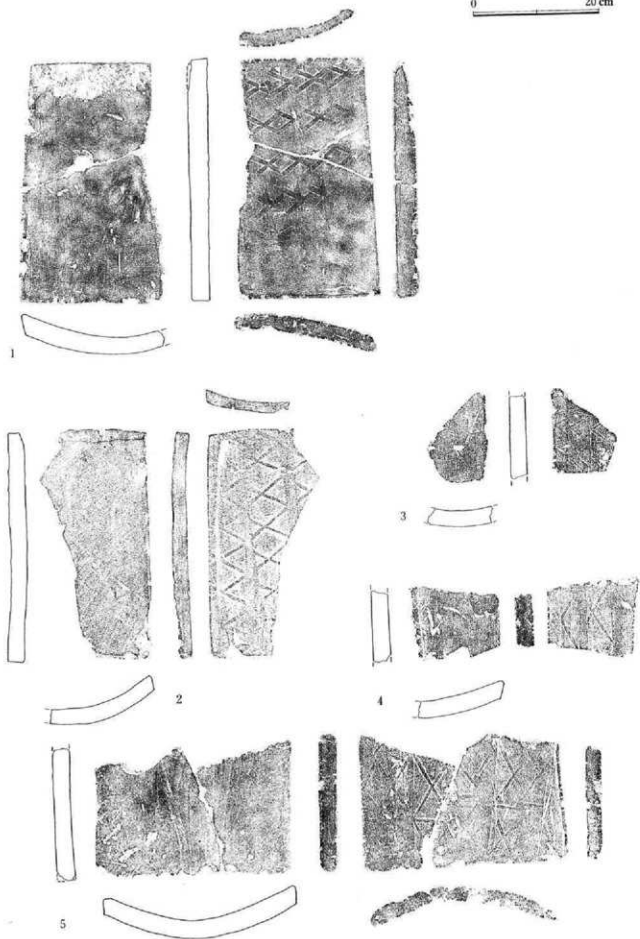


图99 女瓦C類

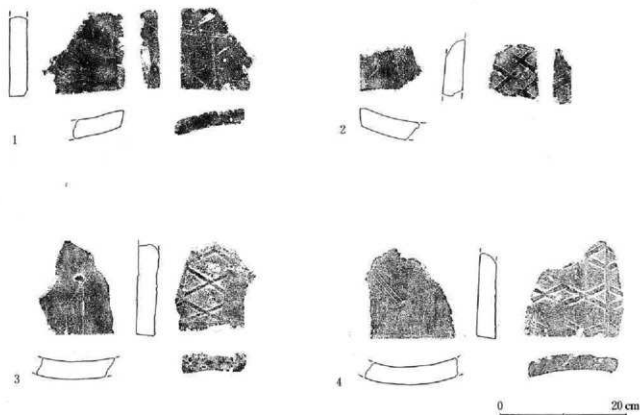


図100 女瓦C類

- 女瓦A類 (I期)** この一群の中に人名押印(YM1)を有する。凸面に細かい網目印き痕が残る。印き板の原体は、印き目の幅が狭く、網目が広端から狭端まで通ることから細長いものを使用していたと思われる。凹面の布目痕は、丁寧にナデ消されている。表面に離れ砂が付着、軟質と硬質の2種類があり、灰～灰褐色を呈する。
- 女瓦B類 (I期)** 凸面に斜格子の印き目が施された一群である。凹面の布目痕はA類と同様に丁寧にナデ消されることが多い。胎土はA類の硬質に就いている。
- 女瓦C類 (II期)** 大きな斜格子文印きの中に、文字「大」「上」・記号「十」・花押を組み込んだ一群である。YN1103と同じ木彫瓦窯の製品である。
- 女瓦D類 (II期)** 寺銘押印(YM2)を有する一群である。胎土に小石、気泡を含む粗いものである。焼成は良好で灰～灰褐色を呈するものが多い。凸面に大きな斜格子文と斜格子文+花菱文といった文様の入るもの、細長く「末福寺」と寺銘の入るもの等がある。
- 女瓦E類 (III期)** 男瓦D種と同じ胎土の一群である。表面や胎土中に黒色粒子や白色粒子が認められる。凸面に斜格子、三鱗文、花菱文等を組み合わせた特徴ある印き目が付く。表面はくすくす焼き風で、灰～黒灰色を呈する。
- 女瓦F類 (I期)** 男瓦C種、YA103、YN106と同じ胎土で東海地方窯産と考えられている一群である。胎土は陶器質で硬質である。凸面に横、斜め方向の網目印き、正格子、斜格子の印き目が付く。凸凹面に多量の離れ砂が付着する。

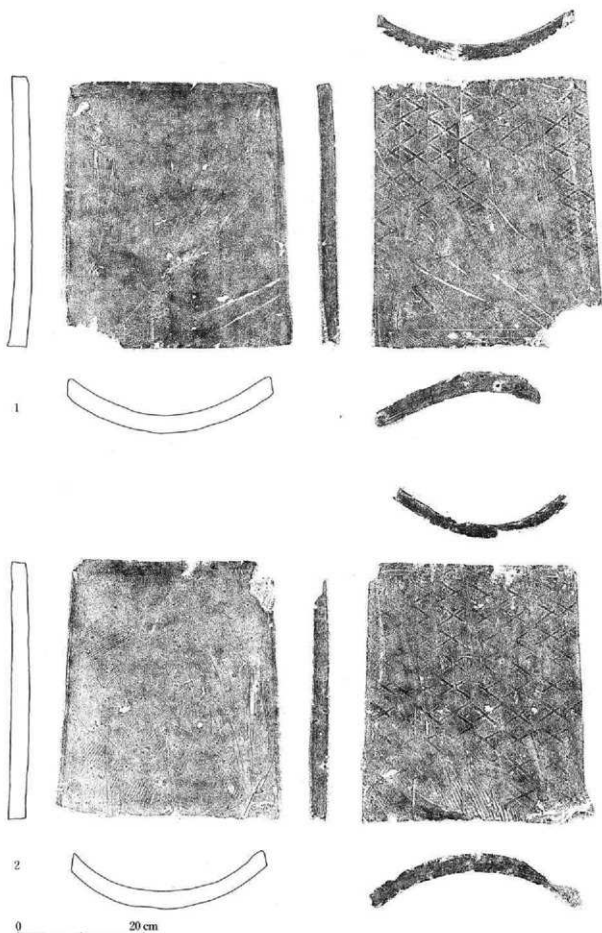
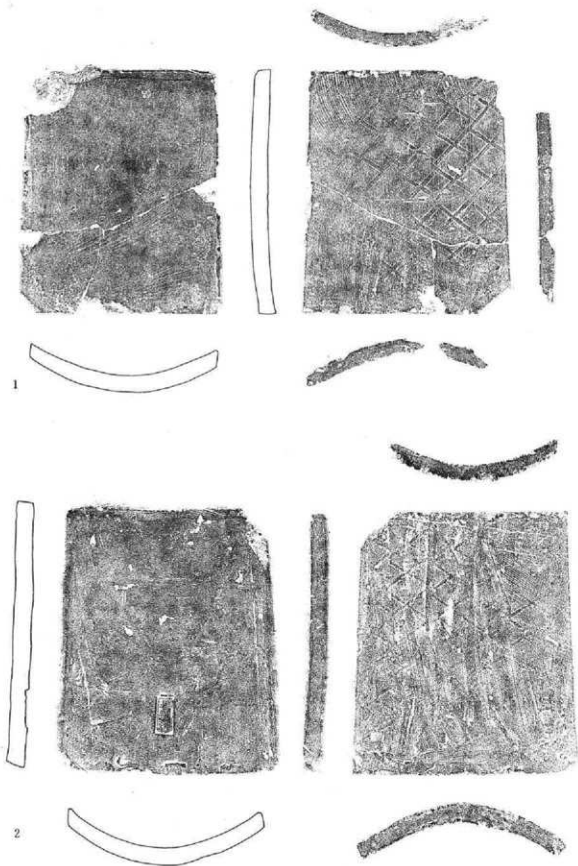


图101 女瓦D型



0 20 cm

圖102 女瓦口類

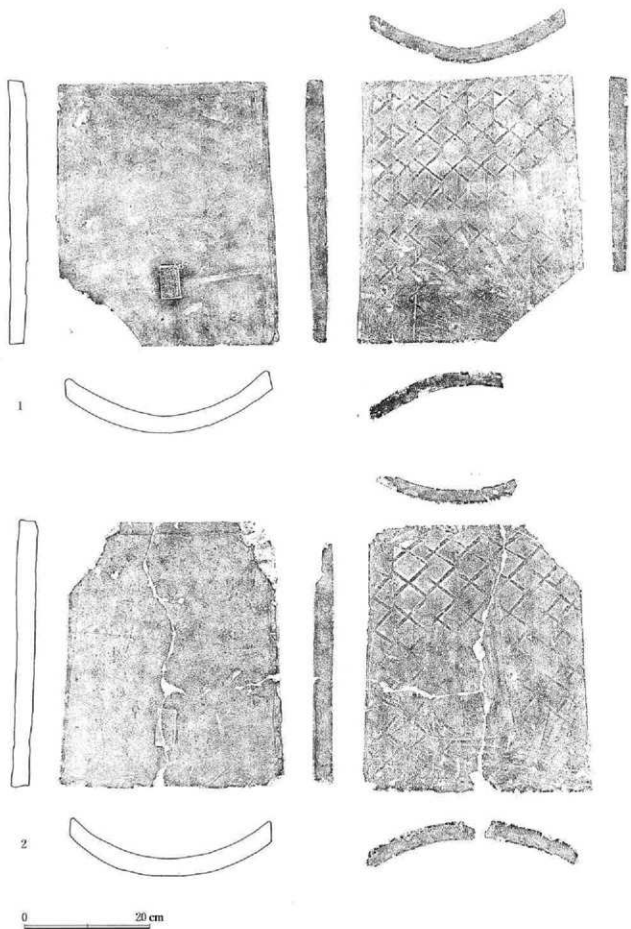


图103 女瓦D類

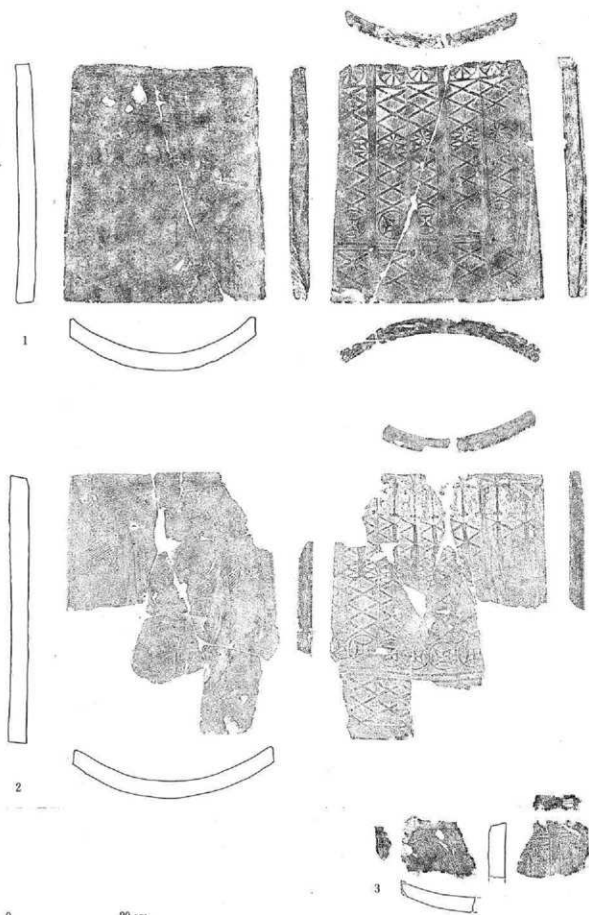


图104 女瓦口類

0 20 cm

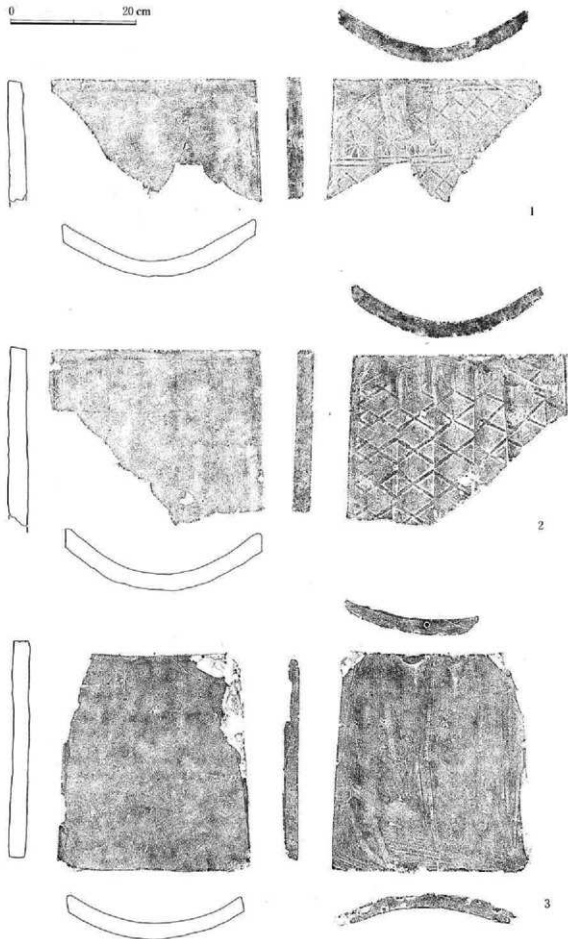


图105 女瓦D類

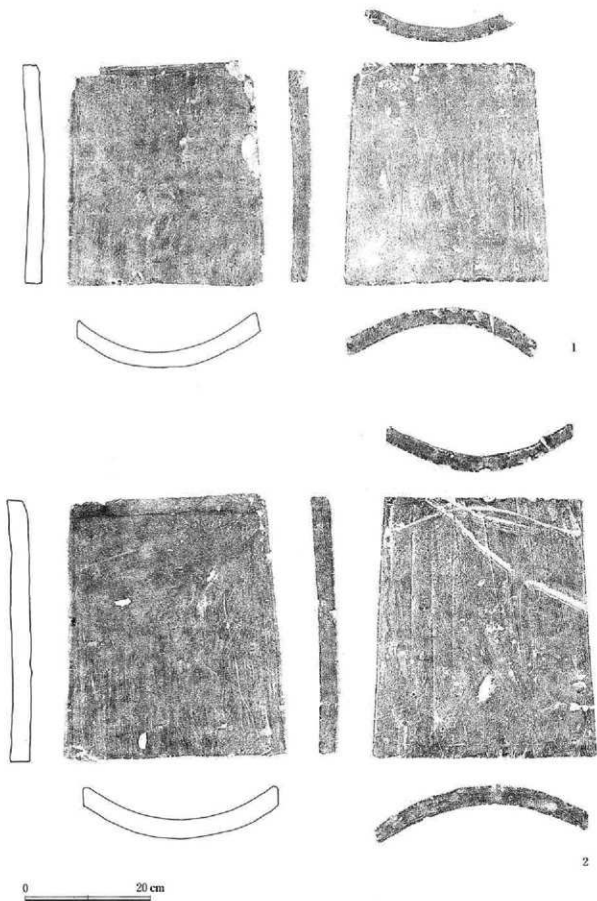


圖106 女耳D類

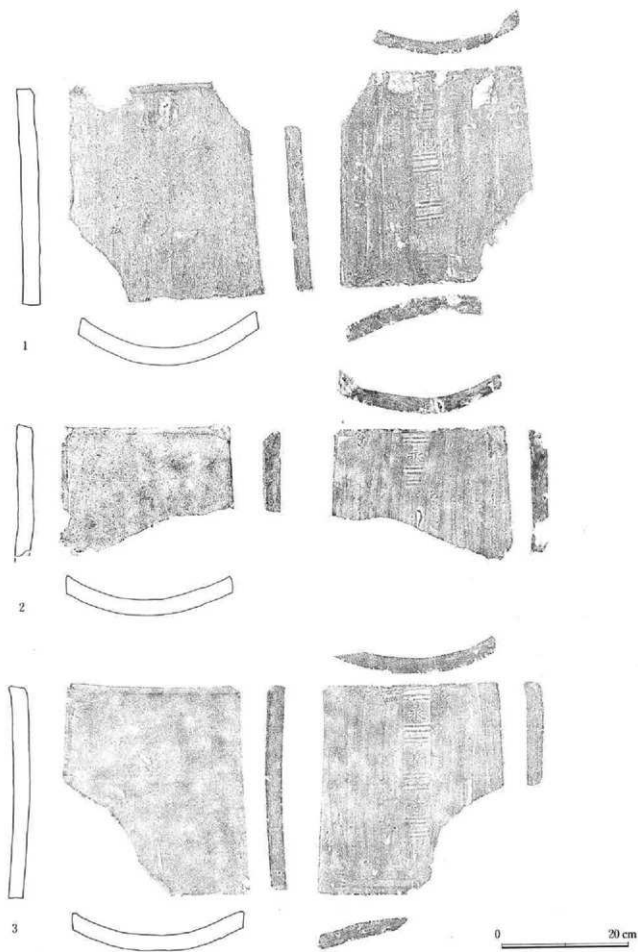


图107 女瓦D類

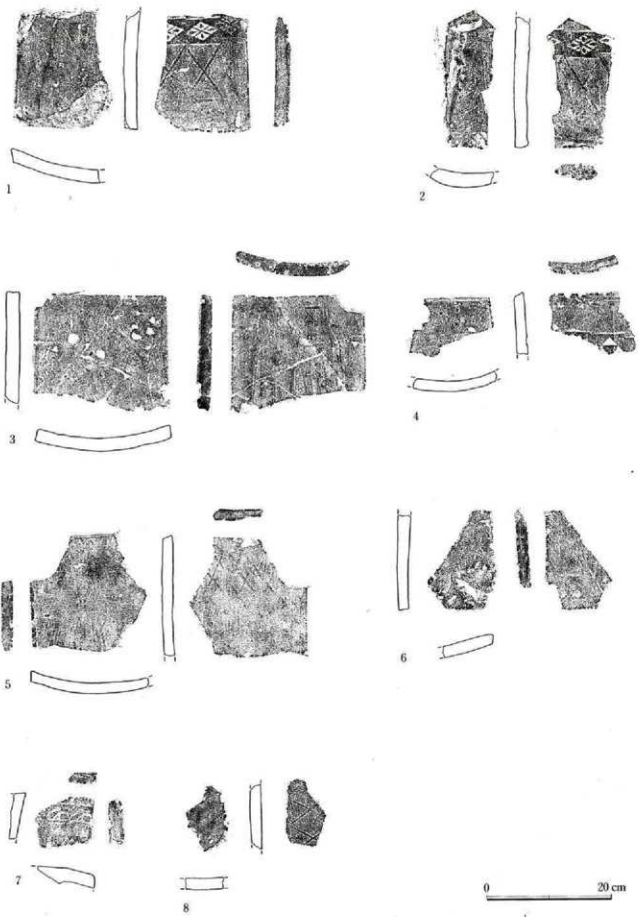


圖108 女瓦E類

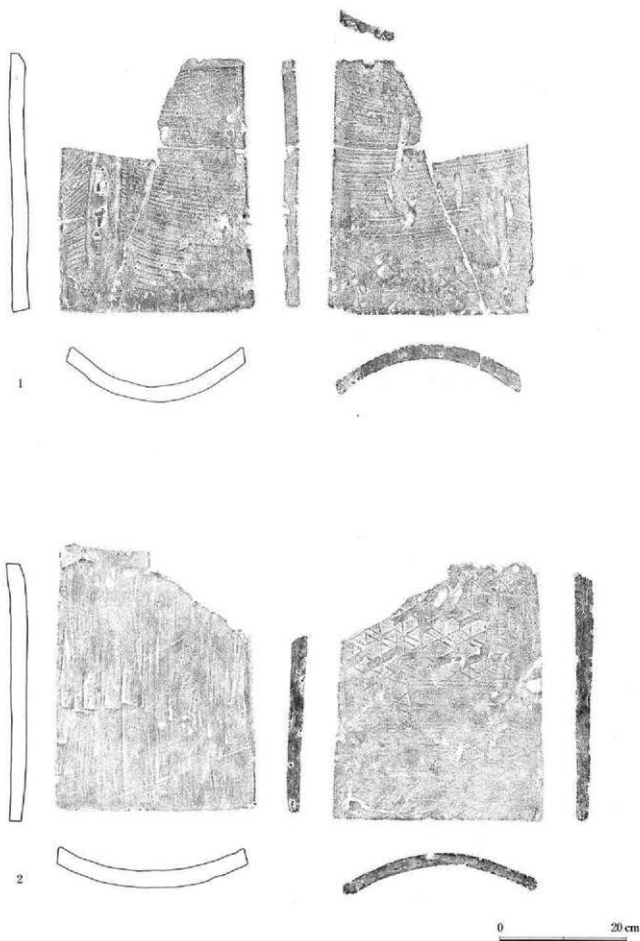


图109 女瓦F類

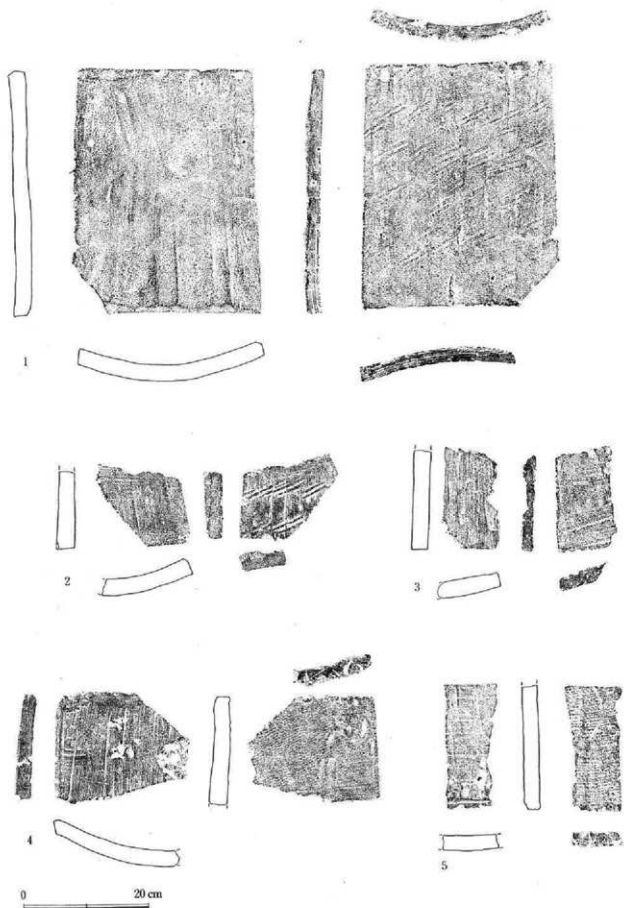


圖110 女瓦F類

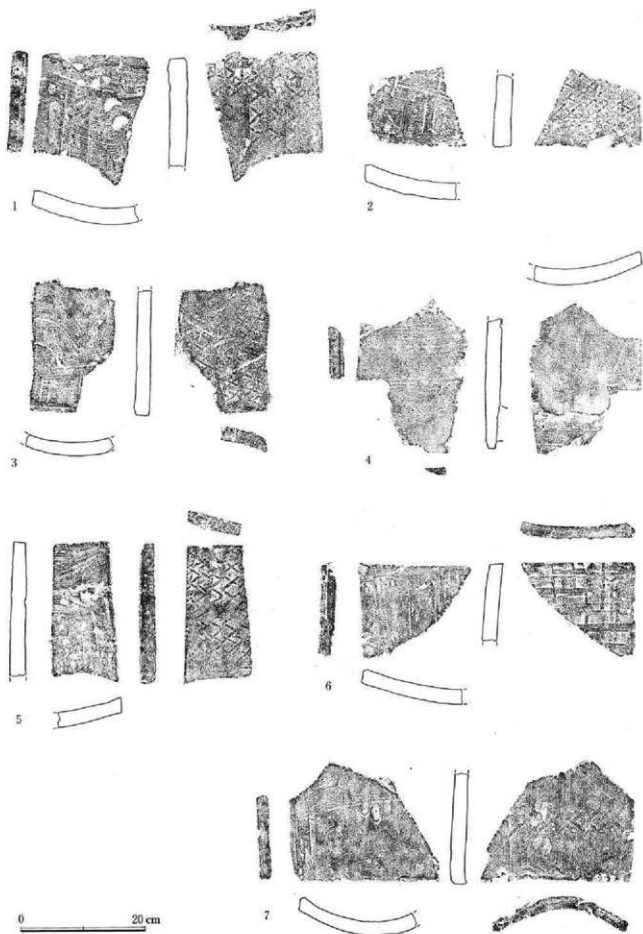
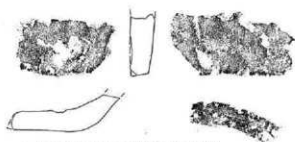


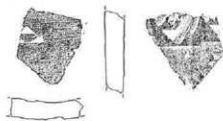
图111 女瓦F類



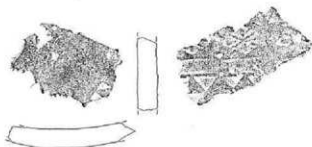
1 役瓦 (雁振瓦もしくは鳥会瓦) II期?



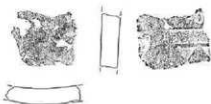
2 役瓦 (雁振瓦もしくは鳥会瓦) II期?



3 三鱗文押印(女瓦E類)



4 三鱗文押印(女瓦E類)



5 三鱗文押印(女瓦E類)



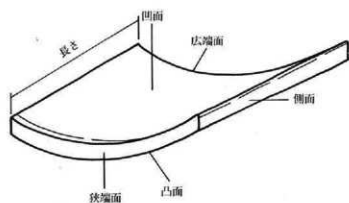
6 戯画(女瓦A類)



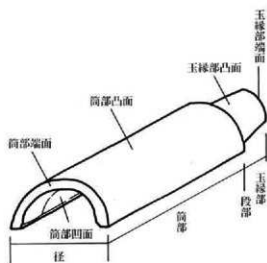
7 竹管押印
(男瓦A種)

0 10 cm

図112 鳥会・押印・その他



女瓦部分名称



男瓦部分名称

图113 男瓦·女瓦部分名称



YMI01a



YMI01b



YMI01c



YMI02



YMI05



YMI04e



YMI04b



YMI04a



YMI06



YMI06



YMI03



YMH01a



YMH01b



YMH02a

N763-13b



YMH04



YMH03a



YMH03b

N763-137



YMH03c



YMH07a



YMH07b



YMH05a



YMH05b



YMH06c



YMH05a



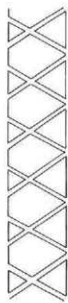
YMH05b

縮尺 1/2

図114 押印(スタンプ)・人名ヘラ書き



女瓦C類
(圖99-1)



女瓦C類
(圖99-2)



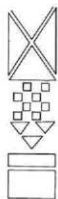
女瓦C類
(圖97-1)



女瓦C類
(圖98-2)



女瓦C類
(圖98-1)



女瓦E類
(圖90-3)



女瓦E類
(圖108-1·2)

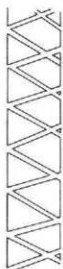


女瓦C類
(圖78)



女瓦C類
(圖99-5)

圖115 女瓦C類・E類 印き文様



女瓦D類



女瓦D類
(圖102-2 ·
圖105-2)



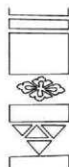
女瓦D類
(圖103-1 · 2)



女瓦D類
(圖102-1)



女瓦D類
(圖101-1 · 2)



女瓦D類
(圖81)



女瓦D類
(圖107-1)



女瓦D類
(圖107-2 · 3)



女瓦D類
(圖105-1)



女瓦D類
(圖104-2)



女瓦D類
(圖104-1)

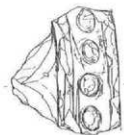
圖116 女瓦D類 叩き文様



1 YOI01a



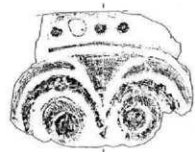
2 YOI01a



3 YOI01a



0 20 cm



4 YOI01b



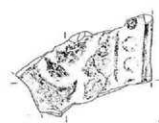
5 YOI01b



6 YOI01b



7 YOI01b



8 YOI01b



图117 鬼瓦

YOI 型 I期・II期水殿瓦窯系の良質胎土

YOI01 范の型作り

YOI01a (特大) YOI01d (小)

YOI01b (大) YOI01e (大)

YOI01c (中) YOI01f (小)



1 YO101e



3 YO101e



4 YO101e



2 YO101e



5 YO101e



0 20 cm

图118 鬼瓦

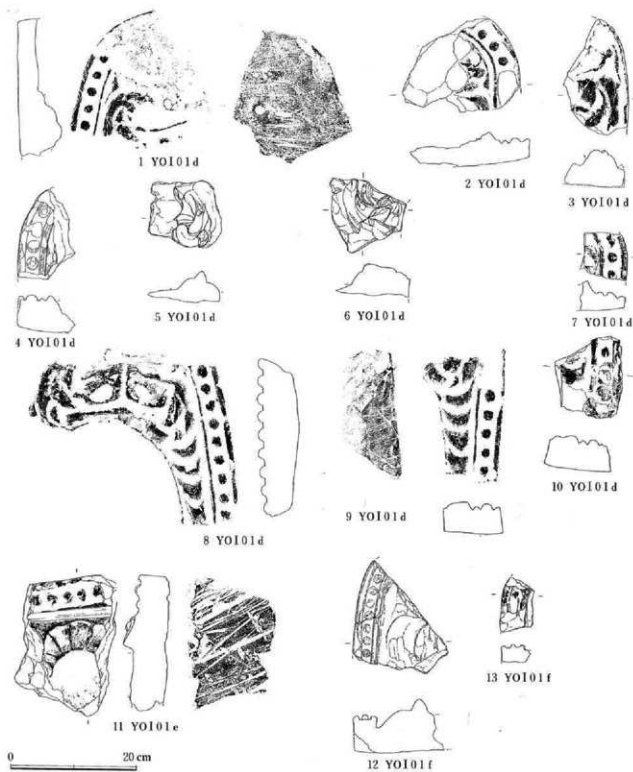


图119 瓷瓦

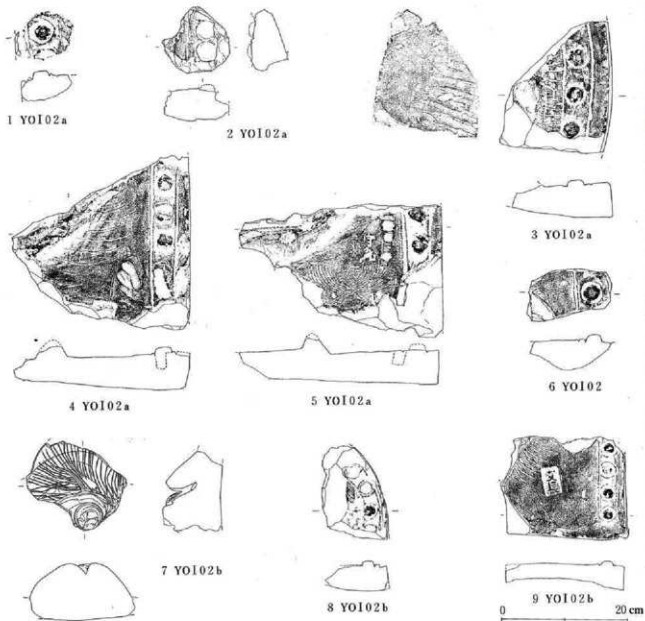


図120 鬼瓦

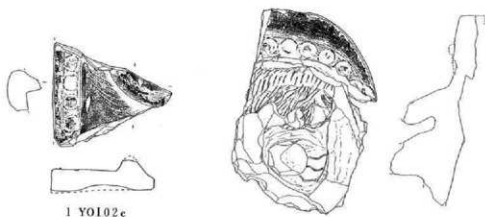
YO102 范の手作り

YO102a (特大) YO102d (小)

YO102b (大) YO102e (中)

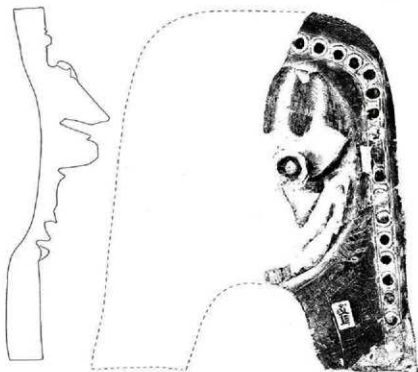
YO102c-1 (中) YO102f (中)

YO102c-2 (中)



1 YOI02e

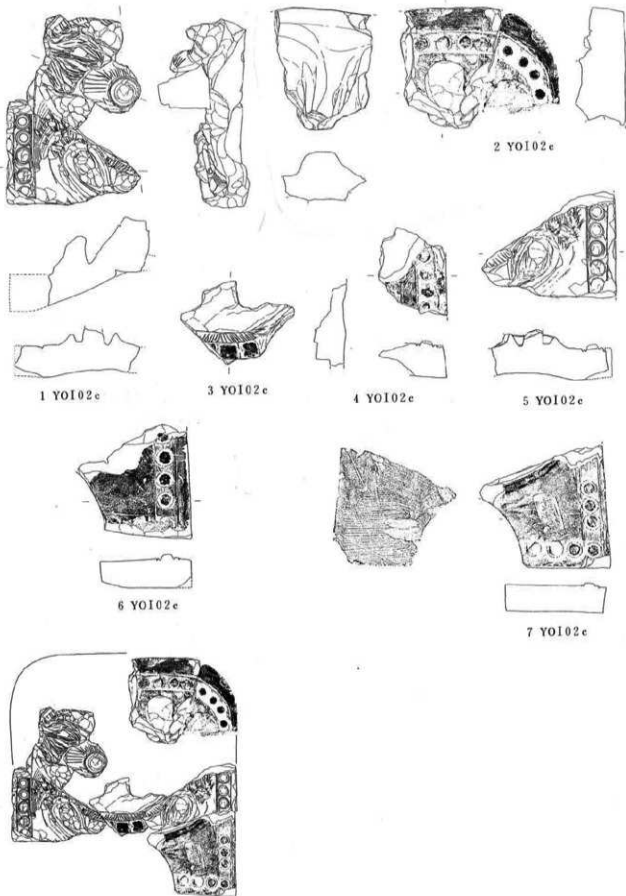
2 YOI02e



3 YOI02e

0 20 cm

图121 鬼瓦



2 YO102e

1 YO102e

3 YO102e

4 YO102e

5 YO102e

6 YO102e

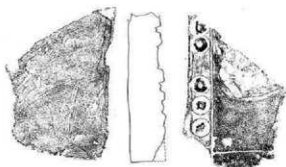
7 YO102e

0 20 cm

图122 鬼瓦



1 YO102d



2 YO102f



3 YO102e



4 YO102不明

0 20 cm

图123 鬼瓦

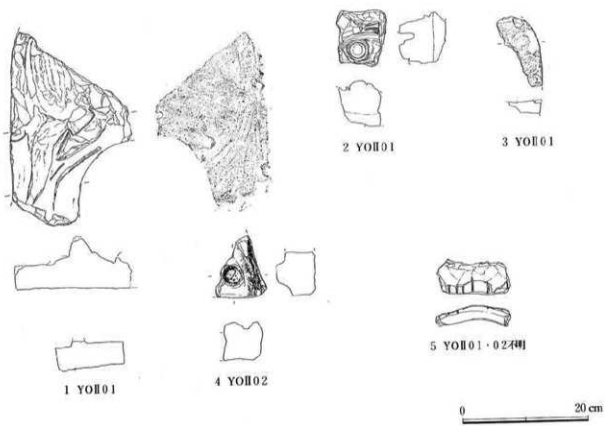


図124 鬼瓦

YOI類 Ⅱ期・Ⅲ期で木殿瓦窯系以外の粗い胎土

YOI01 范の手作り

YOI02 范の手作り

第4章 出土瓦について

永福寺跡の発掘調査で出土した瓦類については、各年度にその概要を報告してきた。本報告ではこれらの記述をもとに、その後の知見を加えて昭和56～平成8年度までの発掘調査で出土した瓦類を総合的に検討してみたい。

記述に使用した型式番号は、鏡瓦(軒丸瓦)⇒YA、宇瓦(軒平瓦)⇒YN、鬼瓦⇒YO、文字瓦⇒YMの頭文字を付し、各々新形式と確認した順に番号を与え、次のアラビア数字は各系統(例:鏡瓦のI類=蓮花文系など)を区別し、それに続く小文字アルファベットは同一型式の異種(同文異范や同一文字の異印)を表示したものである。また宇瓦のアルファベットに続く数字は、同范の切り詰めを意味する。型式番号は、原則として概要報告に準ずるが、その後の検討で一部に訂正を生じている。本報告書をもって正式な型式番号とするものであり、鏡瓦・宇瓦を訂正した型式については、表4の新旧対照表に明記している。

ところで永福寺出土の瓦類は、その殆んどが鎌倉時代に位置付けられることは、ほぼ間違いないであろう。これらを以下のようにI期～III期に時期区分して、その組み合わせについても検討する。この区分は、検出した遺構の修理・再建等の痕跡、共伴した出土遺物の年代、永福寺関連の文献の記載記録、他遺跡の瓦当文様や製作技法との対比などを参考にして分けている。

永福寺I期瓦(1192～1231年頃):建久3年(1192)造営が開始された創建期(文治5年永福寺事始)から寛喜3年(1231)の惣門焼失までの時期の瓦。

永福寺II期瓦(1235～1280年頃):文暦2年(1235)の惣門再建と、寛元2年に始まり宝治2年(1248)頃までの永福寺修理から弘安3年焼失までの時期の瓦。

永福寺III期瓦(1287～1315年頃):鎌倉極楽寺の忍性が別当坊に來住した弘安10年の再建から延慶3年(1315)の二階堂焼失までの時期の瓦。

昨年度報告した「遺構編」の時期区分は、I期〔創建期〕、II期〔寛元・宝治年間〕、III期〔弘安年間〕、IV期〔14世紀以降〕に別けている。瓦類については、昨年度報告の時期区分と大筋では同じであるが、時間的な幅(瓦の部分的な差し替えなど)を考慮に入れて、上記のような時期区分を設定することにした。なお延慶2年火災後の記事として、元応2年(1320)に幕府、永福寺修造を督促とある。再建が行なわれたとすれば、この頃の瓦があるはずだが、明確に比定されていない現在、永福寺III期瓦としたものに含まれている可能性も考えられる。

第1節 鏡瓦・宇瓦(図56～83、図版43～59)

昭和56～平成8年度までの発掘調査では、鏡瓦(軒丸瓦)19型式34種で1,165点、宇瓦(軒平瓦)20型式34種で1,757点が出土した。型式ごとの解説は挿図中にその概略を記述しており、図55には鏡瓦・宇瓦についての各部名称を表わしている。さらに型式ごとの各部計測値や瓦質の特徴を法量表(表5)に、各時期(永福寺I期～III期瓦)の出土破片数とその出土比率に関しては、表2に示したとおりである。

(1) 鏡瓦(軒丸瓦)

永福寺I期瓦:当期の瓦は、瓦当裏面に人銘押印を含む八葉複弁蓮花文(YA I 01・02:2型式9種)・三巴文(YA II 02)鏡瓦に代表される比較的精良な胎土で瓦質の共通した一群である。両型式を

合わせた割合は、鏡瓦中約66%（不明含む）と高い出土比率からも、この時期の主要瓦であることが理解される。蓮花文鏡瓦の瓦当文様は、宝相華唐草文宇瓦（Y N I 01型式の一群）とセットになり、愛知県名古屋市の八事裏山1号窯や同県阿久比町の阿久比板山古窯の出土瓦と近似した意匠（Y A I 02以外は珠文縁の内外に圈線をもたない）を採用している。図58-3（Y A I 03）は出土量が少なく、小片で文様大半を欠失するが陶質瓦でその所産品とみて間違いないさそうである。なお三巴文のうち、小径で素文縁のY A I 01と珠文縁のY A II 02・11などは、鶴岡八幡宮の鎌倉時代前期に相当する出土層位の巴文鏡瓦例と、瓦当文様や製作技法の共通性が強く認められ、当期の年代観を与えることは妥当性がある。

永福寺Ⅱ期瓦：当期の瓦は、三巴文（Y A II 04・05）・「永福寺」寺銘（Y A III 01）で瓦当径18cm前後と大型の鏡瓦、胎土に石粒・砂粒を多く含む粗いもので、瓦当面の離れ砂は前者がやや粗い砂粒、後者が黒色微砂粒を用いた異なる特徴がみられる。この手の瓦質の出現時期をみると、女瓦D類凹面に「文暦二年永福寺」と押印されたものが初例である。「文暦二年」は同年9月に喜禎元年(1235)に改元、「吾妻鏡」によると寛喜3年(1231)焼失した総門を文暦2年7月に再建した記事があり、その時の葺き替え瓦にあたるものと思われる。鏡瓦中の割合は、両者合わせて約24%と永福寺Ⅰ期主要瓦に次ぐ出土比率を示しており、巴文中には瓦当面に「○」「△」などの押印を施すものが認められた。また図62-6（Y A II 13）は瓦当径約16cmとやや大径で同質のものである。後述する宇瓦のY N II 03や女瓦C類は、埼玉県美里町水殿瓦窯跡の製品が本寺に供給されたものであるが、図60-9・10は瓦質がこれに近似した胎土・焼成を有する珠文縁の三巴文鏡瓦（Y A II 12）である。瓦当文様は彫りが浅く、巴尾部が連続する点、後出的な要素をもつので当期瓦の可能性を考えたいところである。

永福寺Ⅲ期瓦：当期をすべて明確に区分できないので一括した。これらの鏡瓦は、Ⅱ期瓦に近似した粗い胎土であるが、瓦当径13~14cm程と小型になり、三巴文は全体に彫りが浅く、圈線外側に貧弱な珠文を巡らしており、瓦当面に黒色微砂粒の離れ砂を使用したものが主体をなしている。図62・63に示したように当期の鏡瓦は、7型式8種（Y A II 06~10・14・15）と出土比率の割合に比べて多くの范種が確認されており、宇瓦の瓦当文様のバラエティーの豊富さにも共通することである。図62-7は、剣頭文縁の三巴文鏡瓦（Y A II 06）で同范が極楽寺・金沢称名寺などからの出土例が知られている。

(2) 宇瓦（軒平瓦）

永福寺Ⅰ期瓦：当期の瓦は、人銘押印を含む宝相華唐草文宇瓦（Y N I 01）に代表される比較的精良な胎土で焼成に硬質・軟質の二者がみられ、6型式15種で破片数1,147点と宇瓦中の65%以上という高い出土比率を示した主要瓦である。この中でY N I 01 a・e・hの型式には、范の両端を切詰めたものがある（図66・71・73）。瓦当部の製作法は、女瓦凸面に別粘土を付加する顎貼り付け技法が主体をなしているが、図66-1（Y N I 01 a：切詰范例）ように凸面縄目叩きが瓦当裏面まで連続する折り曲げ技法の例も認められた。また少量出土した小型品の均正唐草文（Y N I 03・04）・除刻劍頭文（Y N II 01・13）宇瓦は、頸部の曲げジワや破断面の胎土の観察から同技法による資料と考えられる。図74-2・3（Y N I 06）は瓦当面に灰釉を有する陶質瓦で名古屋八事裏山1号窯（以後、知多半島も含めて尾張産と呼称することにしたい）の製品と類似しており、瓦当部の製作が顎貼り付け技法によっている。永福寺Ⅱ期瓦：当期の瓦は、水殿瓦窯産で隔刻劍頭文（Y N II 03：図71）と、「永福寺」寺銘文（Y N III 01：図81~83）宇瓦に代表されるもので、胎土は前者が比較的精良であるのに対し、後者は粗い土で瓦当面や凹凸面の離れ砂に黒色微砂粒を使用している。瓦当部の製作法は、両者とも基本的に顎貼り付け技法によっている。しかし寺銘文中には、Ⅲ期宇瓦で主流を占める特徴的な製作法（瓦当貼り付け技法）と

類似した瓦当部の粘土の流れや頸部の剥離面を残すものが認められるので、両技法が併存する可能性も指摘しておきたい。宇瓦中の割合は、剣頭文6.8% (119点)・寺銘文16.7% (293点) で合わせて23.5% (412点) とⅠ期主要瓦に次ぐ出土比率を示しており、組成は異なるがⅡ期鍍瓦に近い出土比率の割合を占めている。

永福寺Ⅲ期瓦：当期の特徴は、小型な陽刻の上向き剣頭文の出現と、瓦当部の製法が女瓦凸面広端縁を斜めに削って、瓦当用粘土を接合した瓦当貼り付け技法に限られる点が指摘できる。瓦当面には黒色微砂粒の離れ砂を使用するが、文様は全体に彫りが浅く范抜きの悪い例が多く認められた。女瓦部凸面には、女瓦E類と同じ叩き目を有しているが、不規則なナデ成形により不明瞭なものが多い。図79・80のように当期の宇瓦は、9型式10種 (YN II 05~12・15) にもおよび鍍瓦同様、出土比率の割合に比べ多くの范種が確認されている。

(3) 各期の主要な組み合わせ (鍍瓦=宇瓦)

	鍍 瓦	宇 瓦
永福寺Ⅰ期瓦：	YA I 01・II 02	= YN I 01
	YA II 01・II 11	= YN I 03・II 01

※瓦規格からYN I 01切詰例も下段とセットの可能性も捨てきれない。

永福寺Ⅱ期瓦：	YA II 04・05	= YN II 03
	YA III 01	= YN III 01

※YN II 03は水殿瓦窯産瓦であるが、鍍瓦については判明しておらず胎土や文様からYN II 03・12も当期瓦になる可能性が考えられる。

永福寺Ⅲ期瓦：	YA II 06・10	= YN II 05・06・07
	YA II 07~09	= YN II 09~11・15

※瓦規格から上段が大型品、下段が小型品のセット関係を想定してみた。

第2節 男瓦・女瓦 (図84~111、図版60~71)

昭和56~平成8年度までの出土瓦については、年度ごとにその概要を報告してきたが本報告書作成に際して年度別に再度、瓦類の型式分類と数量処理を実施した。その結果は表2に示したとおり、男瓦と女瓦の破片総数は合計123,825点にもおよび、その内訳は男瓦が33,032点、女瓦が90,793点である。前章で触れた鍍瓦・宇瓦の分析で明かなように軒先瓦は、永福寺造営時に新調した創建期のⅠ期瓦の製品が主流を占め、寛元・室治年間の修理時を中心としたⅡ期瓦の製品がこれに次いでいる。この二時期と、比較して低い出土比率を示しているのが、弘安期と推定されるⅢ期瓦 (弘安3年焼失・同10年再建~延慶3年焼失) である。この火災後の再建時に伴う瓦類を明確に比定し得ていないが、その殆んどは鎌倉時代に位置付けられるものであろう。軒先瓦の組成が基本的に男瓦・女瓦の組成と対応関係をなし、その結果を反映したものと仮定するならば、男瓦・女瓦の数量処理を含む組成を検討することで全貌をある程度、推察することができよう。さらに男瓦・女瓦には文字瓦として、人銘や寺銘・花押などを押印・へら書き・叩きにより施したもの、「○」「△」などの記号を押したもの、動物の戯面を描いたものなどが認められた。

以下、男瓦・女瓦に関しては型式分類ごとに諸特徴を要約して記述し、数量処理の調査結果を基にその組み合わせについても若干触れることにしたい。

(1) 男瓦(丸瓦)

男瓦はすべて玉縁付の有段式である。筒部は凸面が基本的に縦位の縄叩きを施した後、いずれも指頭やヘラのナデで磨り消しており、かすかに印目の痕跡を残しているものが多くみられる。凹面は糸切痕と布目痕を残し、布目痕は段部から玉縁端部に向けて絞りを有し、端面と側縁を面取り風に幅広くヘラ削りで成形している。

男瓦A類(図84~87)：破片数25,861点、男瓦中78.3%と極めて高い出土比率を占める。このことは、永福寺I期主要瓦と永福寺II期瓦の水殿瓦窯の製品とは同質で識別することが困難であった。出土量には少なくとも同窯製品の女瓦C類に近い出土比率を含んでいるためであろう。色調は灰~灰褐色で表面灰黒色もあり、胎土は砂粒を含むが良土、焼成は硬質・軟質の2種がある。完形品や計測可能な例では、全長38.6cm~48.6cm(平均44cm)、筒部長30.2~40.7cm(平均34.9cm)、玉縁長3.7~9.4cm(平均7.0cm)、筒部径14.5~20.4cm(平均17.0cm)、厚さ1.8~3.2cmである。

男瓦B類(図88~90)：破片数6,581点、男瓦中19.9%の出土比率を占める。色調は灰白~灰褐色、胎土は砂粒・石粒の多い粗土、焼成良好。完形品では、全長38.3cm~46.0cm(平均42.6cm)、筒部長31.6~39.3cm(平均36.2cm)、玉縁長6.0~8.3cm(平均6.7cm)、筒部径16.5~19.6cm(平均18cm)、厚さ2.5~3.2cmである。

男瓦C類(図91-4~7)：破片数45点、男瓦中0.1%と極めて低い出土比率を占める。色調は灰白~黄灰色、胎土は陶器質で長石粒が多く、焼成は硬質で一部に自然釉と思われる淡灰緑色釉が認められる。蓮華文鏡瓦(YA I 03)や唐草文字瓦(YN I 06)、後に述べる女瓦F類とも共通した瓦質であり、尾張産(名古屋市八事裏山1号窯など)と同一産地の製品みて間違いのない。玉縁長6.8cm、筒部径16cm前後、厚さ2.3~3.5cmである。

男瓦D類(図91-1~3)：破片数545点、男瓦中1.7%を占める。色調は表面が黒灰色を呈した、くすべ焼き風になり、胎土は灰白色で瓦質は男瓦B類に近く粗土、焼成は良好である。完形品は出土していないが、これと同じ時期の鏡瓦にあたる図62-1(YA II 09)の男瓦部では、全長31.2cm、筒部長25.8cm、玉縁長5.2~6.4cm、筒部径12.2~13.5cm、厚さ1.8~2.5cmである。

(2) 女瓦(平瓦)

女瓦A類(図92~94)：破片数48,243点、女瓦中53.1%と半数以上の出土比率を占める。色調は灰~灰褐色で表面灰黒色の例もあり、胎土は砂粒を含むが良土、焼成は硬質・軟質の2種がある。凸面は糸切痕と側面に平行した縄叩き痕を残し、粗い離れ砂は叩きで打ち込まれる。凹面は糸切痕と布目痕、離れ砂やナデ成形で布目痕の不明瞭のものがある。凹面端縁のヘラ削りするものは狭端だけに限られる。完形品及び計測可能な例で、全長36.2cm~43.7cm、広端幅31.4~33.2cm、狭端幅26.5~29.8cm、厚さ2.1~2.5cmである。

女瓦B類(図95~96)：破片数642点、女瓦中0.7%と低い出土比率を占める。色調・胎土・焼成や粗い離れ砂など女瓦A類と類似する。凸面は糸切痕と細かな斜格子目叩きを施しており、図66-2の唐草文字瓦(YN I 01a)は同じ印目、また図96-2は縄叩き痕も残す。凹面は糸切痕と粗い離れ砂、布目痕を残す例は少なく、端縁の成形は殆どみられない。計測可能な例で、全長41cm前後、広端縁31cm前後、狭端

縁26cm前後、厚さ2.1～2.4cmである。

女瓦C類(図97～100)：破片数8,200点、女瓦中9.0%の出土比率を占めている埼玉県美里郡水殿瓦窯産の製品である。色調は灰～灰褐色で表面が灰黒色の例もあり、胎土は比較的精良、焼成は硬質・軟質があり、女瓦A・B類と類似する。凸面は「X」状の斜格子叩きで文字・記号などを組み込んだもの(文字瓦参照)。図115のように7種類以上の叩き文様があり、図78の剣頭文字瓦(YN II 03)凸面には同じ叩き目認められた。凹面は糸切痕や布目痕を残すものが多く、ヘラ削り成形は狭端縁だけに認められる。計測可能な例で、全長36.2cm～37.7cm、広端幅31.5cm前後、狭端幅28cm前後、厚さ3cmを越す厚手の例が大勢を占めている。

女瓦D類(図101～107)：破片数31,701点、女瓦中34.9%でA類に次ぐ出土比率を占めており、寺銘押印を有するものも含む一群である。色調は灰白～灰褐色、胎土は砂粒・石粒を多く含む粗いもの、焼成は比較的良好であり、瓦質は寺銘系軒先瓦と類似する。凸面は「X」状の斜格子と、縦位や不規則なナデ成形で叩きを消す例が多い。その他、斜格子+花菱文+菊花文+横線などを組合わせた何種類かの叩き例(図104・116)や寺銘叩きの例(図107)などもある。凹面は糸切痕や布目痕を不規則なナデで磨り消すものが多い。完形品や計測可能な例で、全長34.2cm～41.6cm、広端幅29.8～32.1cm、狭端幅25.2～29.8cm、厚さ2.5～3.0cmである。

女瓦E類(図108・112-3～5)：破片数1,785点、女瓦中2%と低い出土比率である。色調は表面が灰黒色を呈し、胎土は男瓦D類と類似した瓦質の一群である。凸面に「X」状斜格子+花菱文+三鱗文+横線や市松文などを組合わせた何種類かの叩き目がみられる。本類の特徴としては、胎土中や表面の離れ砂に黒色砂粒が目立つ。同種の製品は、市内の鶴岡八幡宮・多宝寺・極楽寺・覚園寺などや金沢称名寺、千葉県萱野遺跡(拙稿1999)などから出土している。

女瓦F類(図109～111)：破片数222点、女瓦中0.3%で女瓦C類と同じく、最も低い出土比率を示した尾張地方窯産の陶質女瓦である。色調は表面赤灰～茶灰色、胎土は灰白色を呈し、長石粒が溶けて発泡しており、表面に自然降灰の灰軸を残すものがある。凸面は横位・斜位の縄目や正格子・斜格子の叩きを施す。凹面は糸切痕と、無刻の叩き締めにより縦位に重複した軽い段の痕跡を残しており、布目痕は殆ど認められない。凹凸面に多量の粗砂が付着する。

(3) 女瓦凸面の叩き模様について(図115・116)

女瓦C・D・E・F類については、それぞれの中に叩きの模様のことなるものが数種類含まれている。図115・116に叩きの模様の幅や文様構成などがほぼ明らかなものを模式図的に載せた。ここに掲げた以外にも数種の叩き板原体が存在すると考えられる。特にE類に関しては、叩き目の文様構成が分かる大きさの出土資料がいたって少なかった。実際には叩き原体の種類はかなり多いと見られる。F類に関しては、叩きの単位が明瞭でない破片が多かったので模式図には示さなかった。またF類には縄目叩きのものも多く含まれる。

女瓦C類：大きく太い斜格子で、格子の間に「大」「上」「十」や花押状の文様などをあしらったものもある。女瓦製作の課程で叩き板原体に傷が生じたもの(図99-1)も見られる。特殊な例として図99-2～5が挙げられる。図99-2は女瓦A類の硬質なものに極めて類似した胎土で、かなり焼き締まっている。叩きの文様は他と比較してやや細い凸線で表わされている。図99-3はごく細かい斜格子。図示したI点のみ出土している。図99-5も出土点数の少ないという点で同じで、縦長「X」状の叩き

を施す。図99-4は製作の課程で叩き板原体が縦に割れたものを使用していると考えられる。

女瓦D類：文様のバリエーションが多く、細かい斜格子、斜格子の中に菊花・七宝・花菱文などをあしらったもの、「永福寺」の3字を横位凸線の枠の中に配したもの、横位凸線の枠と花菱・三鱗文を組み合わせたもの等、多様の叩き文様が見られる。ここでも製作途中の破損が認められ、図104-1の叩き板原体が割れ、菊花文の部分を開けて使用したものが図104-2であるとみられる。「永福寺」の

3字を配したものは、凸部の中央一箇所に叩き目を残して、左右を縦方向にナデ消しているものが殆どである。また、図105-3・図106-1・2のように叩き目をすべてナデ消して成形している製品も多くある。宇瓦のYNⅢ01-03には斜格子ではなく横位の凸線・凸面状の枠に三鱗文や花菱文をあしらった叩き目が用いられている場合が多い。図116左下に示したものの以外に、よく似た別の叩きも認められる。図82は花菱文がみられない。

女瓦E類：前述したごとく、叩き板原体の種類は板って多いと思われる。図115左下に示したものの2例は、凸線・凸面状の枠に三鱗・花菱・市松・「X」文等を組み合わせたもの。同じ文様構成でも、凹凸が逆になるなど、叩き板原体の異なる叩き目が複数認められる。また、縦長の斜格子(図108-5)・花押状の文様(図108-7)・斜格子に「大」の字を組み入れたもの等もみられる。総じて文様は数種のモチーフを縦位に組み合わせたものが多い。

(4) 各期の男瓦・女瓦の組み合わせ

以上のように男瓦と女瓦の出土量と出土比率、型式ごとの諸特徴の概要について述べてきた。これらの調査結果を参考にした組み合わせが、下記のように指摘できる。

	男 瓦	女 瓦
永福寺Ⅰ期瓦：	A類・C類(尾張産)	A類・B類・F類(尾張産)
永福寺Ⅱ期瓦：	A類(水殿瓦窯産一部含む)・B類	C類(水殿瓦窯産)・D類
永福寺Ⅲ期瓦：	D類	E類

第3節 文字・記号瓦

永福寺跡から人名・寺銘押印の文字瓦が出土することは、古くから知られていた。大正4年に高橋健自氏により「古瓦に現われたる文字」で鎌倉出土の文字瓦がはじめて紹介された(高橋1915)。その後、大正7年には、住田正一氏の『鎌倉古瓦考』が発表され(住田1918)、その中で「宗俊」「国元」「守光」「文長」の人名や「永福寺」銘の押印文字瓦を紹介しており、以後鎌倉出土の文字瓦として、しばしば引用されてきた(赤星1926・1938、竹澤1983、拙稿1986)。昭和56-平成8年度にわたる発掘調査において文字瓦は、今までに13型式25種が確認されている。昭和61・63年度の発掘調査概要報告において、型式設定と分類の提示を行ない比較的詳しく紹介し、年代観や押印位置などを含めて分析を試みた。本報告書ではこれらの成果を踏まえてその後、新たに確認され増加した型式も合わせて、ここに調査成果を要約しつつ再構成してみたい。

型式ごとの文字瓦の概要は、以下のような順で解説したい。①記載文字②記載法・記載用具③記載対

象・方向④文字や押印原体の特徴などである。

(1) 人名の押印・へら書 (YMI類)

人名押印は、永福寺I期瓦(創建期瓦)に限られている。女瓦は凸面に縄目叩きを施すA類の凹面や宇瓦の女瓦部凹面、鏡瓦の瓦当背面や男瓦部凹面、鬼瓦の袖部などに施されており、人名へら書は鏡瓦の瓦当裏面や鬼瓦の袖部に描かれた資料が認められた。また宇瓦凹面に花押風のへら書を施したものがある。

YMI01a : ①「宗清」縦位2文字②長方形の押印・印長5.1cm、印幅2.4cm③女瓦A類凹面・縦位④底辺がやや長い台形状を呈する。印面上部の角がとれ、丸味をもつ。

b : ①「宗清」縦位2文字②長方形の押印・印長4.9cm、印幅2.2cm③女瓦A類凹面・縦位④文字の大きさがaと比較して小さめで細い字体の異范品。

c : ①「宗清」縦位2文字②長方形の押印・印長5.0cm、印幅2.4cm③女瓦A類凹面・縦位④文字の大きさがbと同じく小さめだが、やや太めの字体の異范品。

YMI02 : ①「守光」縦位2文字②長方形の押印・印長4.3cm、印幅2.5cm③女瓦A類凹面・巴文鏡瓦(YAII02a)瓦当裏面・鬼瓦袖部右下、図59-3は瓦当裏面と男瓦部凹面にも施された資料(YAII02a)・縦位④概報中にはa bの二種を提示したが、范抜けや焼成時の収縮等による相違であり、同范品と考えられる。

YMI03 : ①「宗俊」縦位2文字②長方形の押印・印長5.8cm、印幅3.2cm③女瓦A類凹面・蓮華文鏡瓦(図58-2・YAI01d)瓦当裏面・縦位④押印の上辺幅がやや長い。

YMI04 : ①本型式は「文長」としたが、「文」は「支」又は「友」のくずし字の可能性もある。概報中では五種を提示したが再度検討した結果、 $a = d \cdot b = c$ が同范の可能性が強い。

a : ①「文長」縦位2文字②長方形の押印・印長7.3cm、印幅3.3cm③女瓦A類凹面・唐草文字瓦(YNI01b)女瓦部凹面(図67)・縦位④「長」の第1・3・4画が第2画と離れる。縦長の押印で下部の余白が特徴的である。

b : ①「文長」縦位2文字②長方形の押印・印長6.2cm、印幅3.3cm③女瓦A類凹面・鬼瓦(YOI02c)袖部右下・縦位④「長」の第8画がaより下を向く。

e : ①「文長」縦位2文字②縦の短い長方形の押印・印長4.2cm、印幅2.7cm③女瓦A類凹面・蓮華文鏡瓦(YAI01d)瓦当裏面・鬼瓦(YOI02b・c・e)袖部右下・縦位④「長」の画数を省略した、偏平な字体が特徴的である。

YMI05 : ①「守光」縦位2文字②へら書③鬼瓦(YOI02a)袖部右下、この他に巴文鏡瓦(YAII02aか)瓦当裏面に「守□」(下部欠失)があり、同種の可能性がある。

YMI06 : ①「国元」縦位2文字②長方形の押印・印長6.0cm、印幅3.2cm③女瓦A類凹面・蓮華文鏡瓦(YAI01e)瓦当裏面・縦位④印面中央が窪み、范はカマボコ状を呈したものが。同范品に文字の下に范傷を有するものがある(図114「国元」右側)。

この他、I期主要瓦にあたる宝相華唐草宇瓦(YNI01d)の凹面には、焼成前の段階で工人によって、三角形に近い花押様のへら書を施した資料2点が認められた(図69-2・図70)。図69-2は凹面を丁寧なナデ成形を施した後、瓦当上端側の中央部に先端の尖った棒状の工具で花押様のものを描いている。図70は凹面を縦位のナデ成形を施した後、女瓦部狭端側の中央付近に同じ棒状工具を用いて花押様のものを描いているが、図69-2と逆向きの方向に表現されている。このへら書に近い形の例は、

常滑窯の愛知県知多郡青山池窯跡出土の人物文壺（鎌倉時代前期）で、肩部に描かれた人物文とするものに類似した文様の表現を行なっている。

(2) 寺銘押印 (YM II 類)

寺銘押印は、永福寺Ⅱ期瓦にあたる女瓦D類凹面に一箇所または複数箇所に施されている。その範種は多く、概報中では6型式9種を提示したが、その後本報告に向けての詳細な観察結果から少なくとも7型式14種を確認することができた。この中には同范印に再加工の修正や追刻を加えた資料も含まれている。

YM II 01 a : ①「文暦二年永福寺」縦位2行②長方形の押印・印長5.1cm、印幅3.0cm③女瓦D類凹面・縦位④文暦二年(1235)は同年9月「嘉禎」と改元、『吾妻鏡』7月5日条、寛喜三年(1231)焼失の惣門を上棟した記事あり。その時の書き替え瓦であろう。

b : ①「文暦二年永福寺」縦位2行②長方形の押印・印長4.7cm、印幅3.0cm、外枠長がaより短い③女瓦D類凹面・縦位④凸線枠の左長辺が貫通する。

YM II 02 : ①「永福寺」縦位②長方形の押印・印長7.0cm、印幅3.9cm、寺銘押印中で印面が最も大きい③女瓦D類凹面・縦位④「福」字の第10画と第12画目がくっつく。字体・凸線枠が太くなり、彫りの浅いものがみられるのであるいは細分が可能か。

YM II 03 a : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長5.7cm、印幅2.7cm ③女瓦D類凹面・縦位 a～cは「福」字の第12画が短く類似した字体。

b : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長6.2cm、印幅3.0cm ③女瓦D類凹面・縦位 ④a・cより印長・凸線枠がやや長い。

c : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長5.7cm、印幅2.7cm ③女瓦D類凹面・縦位 ④aと同范印と推定され、「寺」字の右脇に文字状の凸線があり、aの追刻かまたは范抜きの悪い資料の可能性も考えられる。

YM II 04 : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長6.3cm、印幅3.2cm ③女瓦D類凹面・縦位 ④字体や凸線枠がYM II 02と類似しており、この印范を再加工して印面を詰めた可能性も考えられる。

YM II 05 a : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長6.2cm、印幅2.7cm ③女瓦D類凹面・縦位 ④a・bは印面に凸線枠が無く、字体は太く直線的、印面を囲む浅い部分的圧痕あり。

b : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長6.2cm、印幅2.3cm ③女瓦D類凹面・縦位 ④「永」第2画目はねの部分が無く、印幅や字体も異なり、印面を囲む浅い部分的圧痕。

YM II 06 a : ①a～cは同范印、「永福寺」縦位②長方形の押印・印長6.1cm、印幅2.8cm③女瓦D類凹面・縦位④「永」第3画目のはらいが1画分多い字体である。

b : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長6.1cm、印幅2.8cm ③女瓦D類凹面・縦位 ④使用による摩耗や范傷で「永」第3画、「福」しめす偏、「寺」第2画が潰れている。

c : ①「永福寺」縦位②長方形の押印・印長6.1cm、印幅2.8cm③女瓦D類凹面・縦位 ④凸線枠の一部を修正や追刻を施しており、范傷は「福」のつくり部分などがさらに進んでいる。

YM II 07 a : ①「永福寺」縦位 ②長方形の押印・印長6.0cm、印幅2.1cm ③女瓦D類凹面・縦位

④細長の印面、印幅の狭い資料で文字が枠幅いっぱいになる。「水」第1画は枠外へ、「福」のつくりが異様に大きいなど、かなり乱れた字体である。

- b : ①「永福寺」縦位と推定②長方形の押印・印長不明、印幅約2.3cm③女瓦D類凹面・縦位④aとは字体から判断して異范印であろう。

(3) その他一甲具など (YMⅢ類)

YMⅢ 0 1 a : ①花押状のものとして「大」裏文字を組合わせた文字印き ②縦長の甲具・幅約8cm ③女瓦C類凸面・側面平行の縦位④印目は縦位に「×」状を連ねた斜格子目中に文字・花押状のものを一ヶ所づつに組込んでいる (図97-2 図115上段)。

- b : ①「大」裏文字による文字印き②縦長の甲具・幅約8cm③女瓦C類凸面・側面平行の縦位④印目は縦位に「×」状を連ねた斜格子目中に「大」の文字だけを組込んでいる (図97-1、図115上段)。

YMⅢ 0 2 : ①「十」文字・不明(文字または記号か)ものを組合わせた文字印き②縦長の甲具・幅8cm前後③女瓦C類凸面・側面平行④印目は縦位に「×」状を連ねた斜格子目中に「十」文字と文字または記号のようなものの順で一ヶ所づつに組み込んでいる (図78、図115下段)。

YMⅢ 0 3 : ①「寺」?・「上」?・花押状のものを組合わせた文字印き②縦長の甲具・幅8cm前後③女瓦C類凸面・側面平行④印目は縦位に「×」状を連ねた斜格子目中に「寺」・「上」・花押状のもの順で一ヶ所づつに組込んでいる (図98、図115下段)。

YMⅢ 0 5 : ①「永福寺」銘の文字印き ②縦長の甲具・幅4.2cm ③女瓦D類凸面・側面平行の縦位④印目は永福寺銘と横凸線を組合わせたもので、字体や規格の異なる少なくとも2種が確認されている (図107-1と2・3の分類、図116下段の寺銘印き)。

(4) 記号瓦

竹管印 : ①竹管文 ②円形の押印具、径約1cm ③巴文鏡瓦YAⅡ05の瓦当中央と周縁など、男瓦B種の段部(図90-3)、女瓦D類の狭端面(図107-1) ④竹管文は鎌倉極楽寺・多宝寺跡、金沢称名寺などで出土。

三角印 : ①三角文 ②正三角形の押印具、一辺約1cm ③巴文鏡瓦YAⅡ04bの瓦当中央、男瓦B種の段部(図91-2)、女瓦D類の狭端面(図107-2・3) ④三角文は鎌倉鶴岡八幡宮・極楽寺・多宝寺跡・覚園寺などで出土。

算木文印 : ①算木文風②横長の長方形で「目」を思わず押印具、長辺1.6cm・短辺1.2cm程 ③巴文鏡瓦YAⅡ05の瓦当周縁、男瓦B種の段部(図90-4)、女瓦D類の狭端面(図104-3) ④この記号は現在のところ、永福寺資料以外に出土を知らない。

花形印 : ①花形文 ②6弁花の押印具、径約1cm③剣頭文字瓦YNⅡ05の瓦当面、男瓦B種の段部(図91-1) ④花文状は鶴岡八幡宮・覚園寺で異なる印種が出土している。

三鱗印 : ①三鱗文 ②二等辺三角形の三鱗文、底辺3.4cm・斜辺2.5cmの押印具③女瓦E類の凹面(図112-3~5) ④三鱗文中心の逆三角形が凸状を呈す。凸面印目は図115下段の女瓦E類右側(図108-1・2)と想定される。

この他、女瓦C類の中に生瓦のうちに凹面や側面に「×」・斜位の「≡」の記号がへら書きされたも

のがみられた。古代の須恵器環には、「×」「一」「○」「+」などの簡単なヘラ記号を書いたものがあり、窯印や工人の個人記号と考えられてきたものである。本例はいずれにしても意味するものが何であるのか分からない。

(5) 朱書戯画瓦

上記までのものは、焼成前の生瓦段階で押印したり、ヘラや棒状の先端による銘記法であるのに対して、図112-6の戯画瓦は焼成後に朱書されたものである。略三角形を呈した女瓦A類の破片で、横長12.2cm、縦長6.8cm、厚さ1.8cmを計り、女瓦凸面に縄目叩きを無視して大胆な筆使いで左向きの猪らしき動物を朱で描いたものである。猪の頭部には、大きく開けた口に尖った牙や鼻、たてがみなどが描かれ、ことに目や眉の表情は擬人的ですらある。脚は前後一本づつの表現だが、関節部の描き方など手慣れた感じがうかがえる。本例は昭和56年度試掘調査の塔跡推定地に設定された第1Bトレンチ東端の版築層中から出土している。

第4節 道具瓦

永福寺跡で出土した道具瓦は、鬼瓦(図117~124)・熨斗瓦(堤瓦:図94-1~3)・隅切瓦(図72-1・3)・鳥衾瓦または雁振瓦(図112-1・2)などがある。

(1) 鬼瓦

発掘調査では、4型式13種で破片総数134点の鬼瓦が出土した。殆どが小片のため個体識別や同范か否かの認定が難しかったが、基本的に胎土が良土質な一群(YO I類)と、粗土質な一群(YO II類)との2種類に大別され、さらに文様部分の製作方法には、范の型作りのもの(01)と、部分的に范を用いた手作りのもの(02)とに分けられる。両者には、大棟や降棟などの部位に葺き分けていたようで形状に特大・大・中・小4種の大きさが認められた。以下、型式分類について少し触れておきたい。

YO I 01 范型作り

- a : 特大 (図117-1~3)
- b・e : 大 (図117・119-4~8、11)
- c : 中 (図118)
- d・f : 小 (図119-1~10、12・13)

YO I 02 一部范の手作り

- a : 特大 (図120-1~6)
- b : 大 (図120-7~9)
- c・e・f : 中 (図121・122・123-2・3)
- d : 小 (図123-1)

YO II 01 范型作り(図124-1~3)

YO II 02 一部范の手作り(図124-4)

YO I 01・02は鬼面文の製作方法が異なるが、いずれも良質な胎土でI期主要瓦・II期水殿瓦窯跡の出土例に類似しており、YO II 01・02は粗い胎土を用いたII期・III期主要瓦(水殿瓦窯以外)と同質である。全体の形状を推定復原できたのは、范で製作された中型品のYO I 01 c (図118-1)で、高さは残存高45.5cm、幅は下端(両袖)約51.0cm・上部42.9cm、厚さは目部分が一番高く9.2cm、側面の下端6.2cm・上端5cmである。范型作りは基本的に目・眉・鼻の部分などと范の深い部分ごとに、小さな粘土塊を順次詰め込んでいった形跡が窺える。またYO I 02・II 02の文様面は、基本的に粘

土を盛り上げて成形して周縁の珠文や目の部分だけを円形の范型で作っている。

(2) 契斗瓦

出土例には、焼成前から女瓦を縦に半截して成形したり、凹面に分割目安の刻線を入れて半截した契斗瓦は1点も認められなかった。ただし、永福寺I期瓦にあたる女瓦A類の図94-1~3に示した例は、普通の女瓦を使用時に分割線の刻みを入れ、打ち欠きにより半截したと推測されるものである。契斗瓦の多くは他の女瓦破片と識別できないので、少量の資料抽出にとどまったと判断される。また男瓦を焼成前にヘラで削り成形した面戸瓦も抽出されていないので、同様な「打ち欠き」による方法のものかも知れない。

(3) 隅切瓦

図72-1・3の字瓦(YN101f)は、焼成前に女瓦部をヘラで斜めに切断して隅切字瓦としたものである。ただし、焼成前に同様の成形を施した例は、他の瓦類を含めて本例以外に1点も抽出できなかった。隅切瓦の多くは使用時に加工を施したもので、他の瓦類破片と識別できないのであろう。図66-2・図73-1字瓦(永福寺I期瓦)のように残存形状や破面観察から、使用時に打ち欠き加工して隅切瓦としたものと思われる。

(4) 鳥衾瓦・雁振瓦

図61-4(YAII04b:永福寺II期瓦)は、瓦当裏面の下周縁に別粘土を足して凸形状にしており、鳥衾瓦と思われるものである。この他に図112-1・2は、男瓦を潰したような形状から鳥衾瓦または雁振瓦の一部と推測されるものであるが、小破片のためどちらの個体であるのか識別できない。抽出できた資料はこの2点だけである。これらは表面黒灰色、芯部灰白色を呈し、焼成は良好、胎土に砂粒を

第5節 瓦類からみた永福寺

前節までに永福寺跡から出土した鏡瓦・字瓦・男瓦・女瓦・文字瓦・道具瓦などについて不十分ながらも検討を行ない、その時期区分と概要を簡単に述べてきた。ここまでに述べてきた瓦類の年代観に基本的な間違いがないと仮定すれば、昭和56~平成8年度までの出土瓦について、以下のようなことが考えられよう。

永福寺I期瓦

『吾妻鏡』によると、頼朝入府後の街作りに急造都市鎌倉の姿を想像することができ、さらに寺院建立にも、その辺の事情を読みとることができる。まず源氏総領の象徴で祈禱寺の鶴岡八幡宮、次に父義朝を弔い滅罪もはかる菩提寺の勝長寿院、奥州合戦で亡くなった義経・藤原氏と多くの将士怨霊を静める鎮魂寺の永福寺などが頼朝の御願寺として創建された。しかし、当時鎌倉の在り地技術だけでは、中央に並ぶ寺院の設計・施行は難しく、まして壮大な伽藍建設などは不可能に近い状態であったと想像される。このことは寺院建立に伴う瓦の供給体制も含めて主に、京都や奈良などの先進地域からの技術力の導入及び人的協力が行なわれたことは確かであろう。

上記寺院の創建期に伴う所用瓦は、古代から続く在地の製品とは異なった瓦当文様や製作技法をもつ

たもので、平安時代末期の京都や南都を中心とした寺院で盛んに軒先を飾っていた瓦に共通した特徴をもっている。瓦当文様は、鏡瓦が巴文・蓮花文、宇瓦が剣頭文・半截花文などの新意匠を採用し、宇瓦に古代以来の顎貼り付け技法と共に、新しい製作法の折り曲げ技法が採用されている。鎌倉時代前期の寺院から出土する主要瓦は、鶴岡八幡宮が巴文鏡瓦と剣頭文宇瓦の大型品と小型品の組み合わせがあり(松尾・原他1985)、永福寺では蓮華文・巴文鏡瓦と唐草文宇瓦の大型品の組み合わせが主体をなし、巴文鏡瓦と剣頭文・唐草文宇瓦の小型品がわずかに認められたに過ぎず、主要瓦は異なる系譜の瓦当文様が採用されている。宇瓦の瓦当部製作技法をみると、鶴岡八幡宮では大型品が顎貼り付け技法、小型品が折り曲げ技法で両技法が存在するのに対し、永福寺瓦はごく少量の折り曲げ技法の小型品を除き、その殆どが顎貼り付け技法によって製作されている。ところで鶴岡八幡宮出土瓦には、静岡県菊川町皿山窯跡群で生産された宝相華唐草文(折り曲げ技法)・半截花文(顎貼り付け技法)宇瓦が供給されていたことが最近判明している(拙稿1999a)。また鎌倉極楽寺の調査では(斎木他1998、田代・宗豪他1999)、忍性入寺により律院化する以前に念仏寺か小堂に葺かれたと推測される鎌倉時代前期の瓦類があり、京都壬生寺所用瓦と同范で京都産瓦が鎌倉に供給されたものと理解されている(拙稿1999b、山崎2000)。このように各遺跡によって生産地や系譜の異なる瓦当文様や製作技法が採用されており、生産地(造瓦所)が複数存在していることは、当期の鎌倉における造寺活動と瓦の供給事情の一端をよく物語っている。

源頼朝が鎌倉市二階堂に建立した永福寺の創建期に同寺の軒先を飾っていた八葉複弁蓮花文鏡瓦(YA I類)と宝相華唐草文宇瓦(YN I類)の組み合わせが主たる型式である。この組み合わせは、愛知県名古屋市太白区に所在する八事裏山窯跡群で生産された瓦と同一の文様系譜にあたるものである。さらに同県知多半島に位置した阿久比町板山窯跡でも類似した八葉複弁蓮花文鏡瓦の製品が出土している(柴垣1988、半田市博1993)。永福寺の創建期瓦の中には、尾張産瓦の鏡・宇瓦や男・女瓦が少量ながら存在しており、市内の鶴岡二十五坊(大三輪1969)・千葉地東遺跡(服部他1986)が鏡瓦、また大倉幕府跡周辺の遺跡や茗宮大路の東側幕府域と西側屋敷地の発掘調査に伴ってわずかながら男瓦・女瓦小片の出土が知られている。県内では三浦党佐原氏の菩提寺で佐原義連の創建という横須賀市岩戸の満願寺(服部・小出1992)で宇瓦・男瓦が、伊勢原市コクゾウ塚遺跡(小林1989)で宇瓦がそれぞれ出土しているが、現在のところ永福寺を中心にして鎌倉からの出土量が最も多く、主な供給先であったことが分かる。八事裏山窯跡群における生産形態は、基本的に山茶碗・山皿を中心に焼成しているが、2期(12世紀第2四半期頃)と4期(12世紀第4四半期頃)に瓦生産も行なわれており、京都方面(鳥羽東殿等)から鎌倉方面へと供給先が変化している(尾野1992)。ところが永福寺主要軒瓦の組み合わせは、瓦当文様と宇瓦の瓦当部製作法(顎貼り付け技法)共通しているものの、尾張産瓦に特徴的な陶質の製品とは異なる瓦質が主体を占めており、創建期に同文の瓦生産を行ない当寺に供給していた別の造瓦所が存在していたことになる。

ところで永福寺の創建期軒瓦の瓦当文様については、埼玉県下を中心として東日本に広く分布しており、小林康幸氏によって「永福寺式軒瓦」と提唱されたものである(小林2001)。同氏による最近の研究成果によると、埼玉県では八葉複弁蓮花文鏡瓦(YA I O 1型式)が児玉郡神川町の伝元大師跡と南埼玉郡菟淵町の菟淵城跡の2ヶ所、宝相華唐草文宇瓦(YN I O 1型式)は本庄市岸崎の久久保山遺跡・熊谷市上中条の(推定)常光院・児玉郡児玉町の真鏡寺遺跡及び同郡上里町の堂裏遺跡・北埼玉郡騎西町の保寧寺中世墓跡からの出土が知られている(小林2001)。さらに当寺出土の均正唐草文(YN I O 3:折り曲げ技法)で鶴岡八幡宮や伊豆釜山順成就院出土瓦(森・荒木他1971、中世瓦研究会資料1999)

馬淵和雄、丸山陽一、桃崎祐輔、山崎信二、綿貫銳次郎

【引用・参考文献】

- 赤星直忠 1926 「鎌倉だより(一)」『考古学雑誌』第16巻7号日本考古学会
- 赤星直忠 1938 「永福寺跡の研究」『神奈川県史蹟名勝記念物調査報告6』
- 赤星直忠 1980 「永福寺跡の研究」『中世考古学の研究』所収有橋堂
- 赤星直忠・竹澤高範 1990 「神奈川の中世瓦集成図録」『横須賀考古学会研究調査報告5』横須賀考古学会
- 芦田淳一 1990 「中世南部に於ける造瓦」『ソビエト中世瓦の研究』帝塚山大学考古学研究室
- 足立佳代・斎藤和行 1993 「足利における中世瓦の一様相」『唐沢考古』第12号
- 荒川正夫 1986 「早稲田大学本庄校地内遺跡の発掘調査」『日本考古学協会第52回総会発表要旨』
- 荒川正夫 1996 「早稲田大学本庄校地内大久保山遺跡の中世遺跡の概要」『第4回中世瓦研究会発表資料』
- 荒川正夫 2000 「北武蔵における中世瓦形制の成立と集落」『第19回中世土器研究会報告資料』
- 飯田 孝 1999 「別冊第3章考古資料第1節 厚木市域及び周辺の古代・中世瓦出土遺跡」『厚木市史』中世通史編石井達・大三輪龍彦1983「三、極楽寺と鶴岡八幡宮—伽藍と社殿—」『中世鎌倉の発掘』有橋堂
- 石川安司 1994 「埼玉の中世瓦(1)」『埼玉県北西部地域(比企郡市)考古資料集成』③古代・中世編
- 石川安司 1995 「武蔵国内における中世瓦の一様相」『土曜考古学研究会7月例会発表資料集成』
- 石川安司 1996 「埼玉県の中世瓦の概要」『第4回中世瓦研究会発表資料』
- 石川安司 1998 「東松山市西浦遺跡出土の中世瓦」『比企丘陵』第3・4号
- 市本芳三 2002 「摂津泉地域の中世瓦の様相」『ソビエト中世瓦の研究』帝塚山大学考古学研究室
- 福村元元 1933 「第5章産業(窯業)」『埼玉県史第3巻鎌倉時代』
- 上原真人 1978 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』第13・14号元興寺文化財研究所
- 上原真人 2000 「平安京からみた花立遺跡出土瓦の年代」『瓦からみた平安文化—平安文化フォーラム2000—』平泉町・平泉町教育委員会
- 上原真人 2001 「秀の持物堂—平泉柳之御所遺跡出土瓦の一解釈—」『京都大学文学部研究紀要』第四十梅沢太夫久夫 1981「慈光寺出土瓦について」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第3号
- 大江正行 1991 「上州の中世瓦について」『上州文化』第48号
- 大江正行 1993 「考古学遺物から見た中世の高崎」『高崎市史編さんだより』第3号
- 大川 清 1987 「文字瓦研究の方法」『季刊考古学—考古学出土文字—』第18号 鎌山園
- 大川 清 1996 「古代のかわら」窯業史博物館
- 大澤伸吾 1997 「関東地方の浄土庭園をもつ寺院について」『浄土庭園と寺院記録集—永福寺創建800年記念シンポジウム—』
- 大三輪龍彦 1968 「庵多宝寺について」『鎌倉』第17号鎌倉文化財研究会
- 大三輪龍彦 1969 「伝鶴岡廿五坊址の発掘」(タイプ印刷の内部資料)
- 大三輪龍彦・斎木秀雄他 1983 「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書(研修道場用地・直会館発掘調査報告書)」同調査田及び鶴岡八幡宮
- 大三輪龍彦 1983 「鎌倉の考古学」考古学ライブラリー32 ニューサイエンス社
- 岡本広義 1991 「壬生寺境内発掘調査の概要」『元興寺文化財研究通信』No.37元興寺文化財研究所
- 小野正敏・斎藤慎一・塚本和弘他 1999 「横地城跡—総合調査報告書—」及び「横地城跡—総合調査報告書—資料編」2000静岡県
菊川町教育委員会
- 尾野善祐 1992 「八事裏山1号窯跡群の基礎的再検討」『古代人』第53号 名古屋考古学会
- 金沢文庫 1955 「5358兵衛大夫重常瓦員教用用途文(81)」『金沢文庫古文書』第七輯(所務文書編) 県立金沢文庫

(枚) 已下同じ

- 一、のきかわら 二百四十枚 代二頁四百文
一、あふみかわら 二百五枚 代二頁五百文

- 一、ひらかわら 千 枚 代十貫文
 一、まるかわら 百 六十枚 代一貫六百文
 一、をにかわら 二枚 た け 代六百文
 一尺六寸ん (未)

已上かわら合千六百五十枚「十貫持下行」

代せに合十七貫百文

うと合せに百六十三貫五十八文

嘉暦二年七月一日兵衛大夫重常(花押)

- 河野濱知郎 1982 『覚園寺境内遺跡発掘調査報告書』覚園寺境内遺跡発掘調査団
 河野濱知郎他 1990 『今小路西遺跡(御成小学校地内)』鎌倉市教育委員会
 河野濱知郎 1993 『中世鎌倉火鉢考』『考古学論叢神奈川』第2集神奈川県考古学会
 木津博明 1996 『第2部考古資料3 遺物(6)瓦類』『高崎市史』資料編3・中世
 木村美代治 1980 『第5章瓦』『極楽寺旧境内遺跡』極楽寺旧境内発掘調査団・鎌倉市教育委員会
 栗岡眞理子 1996 『神川町伝大師跡の出土遺物について』『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第18号埼玉県立歴史資料館
 小林康幸 1989 『関東地方における中世瓦の一様相』『神奈川考古』第22号
 小林康幸 1992 『鎌倉永福寺跡出土瓦の諸問題』『立正考古』第31号
 小林康幸 1998 『東日本における中世瓦研究の現状と課題』『立正考古』第83号
 小林康幸 2000 『12世紀末から13世紀初め鎌倉と東国の瓦』『瓦からみた平泉文化—平泉文化フォーラム2000—』平泉町・平泉町教育委員会
 小林康幸 2001 『埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について』『埼玉考古』第36号
 埼玉県教育委員会 1992 『埼玉の中世寺院跡』
 森本秀雄 1998 『極楽寺旧境内遺跡—江ノ島電鉄株式会社極楽寺地区改良計画に伴う発掘調査報告書—』極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団
 佐川正敏 1992 『法隆寺の至寶瓦編』昭和資財館15法隆寺昭和資財館編集委員会
 佐川正敏 1995 『鎌倉時代の軒平瓦の編年的研究—よみがえる中世の瓦—』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集
 佐川正敏 2000 『12世紀の瓦作り』『瓦からみた平泉文化—平泉文化フォーラム2000—』平泉町・平泉町教育委員会
 杉本宏 2000 『京都の瓦・平泉の瓦』『瓦からみた平泉文化—平泉文化フォーラム2000—』平泉町・平泉町教育委員会
 鈴木徳雄 1991 『第Ⅱ章塚谷氏館跡と曳玉堂の形成』『真鏡寺後遺跡Ⅲ』曳玉町教育委員会
 竹澤嘉範 1986 『鎌倉市内出土の人名瓦』『横須賀考古学会年報』No.26
 1996 『横須賀市大矢部近邊神社境内の掛け瓦』『横須賀考古学会年報』No.31
 高井柳三郎 1979 『常陸・下野の中世瓦管見』『茨城県史研究』第43号
 田熊清彦 1987 『益子地蔵院出土の古瓦』『益子町史』第1巻
 塚本和弘 1994 『瓢山古宗跡群の成立と終末について』『地域と考古学』坂岡二先生還暦記念論集妻沼町誌1976「資料観音堂瓦窯跡発掘調査報告書」妻沼町誌編集委員会
 時枝努・五十嵐信 1996 『北関東における中世瓦の一様相(上)』『高崎市史研究』第6号高崎市史編纂室
 伴瀬宗一 1999 『高崎城跡(旧)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 新野一浩 1983 『瑞巖寺境内遺跡試掘調査概報』瑞巖寺博物館
 永田宗孝他 1996 『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
 野沢均 1999 『埼玉県内中世瓦出土地名表』『極楽往生を願って』(第4回企画図録)朝霞市博物館
 樋口定志 1992 『中世「方形筋」の形成』『季刊考古学』第39号(特集:中世を考古学する)

- 橋場君男・桃崎祐輔 1990 「常陸南部における中世瓦の検討—新資料の紹介を中心に—」『奈良岐考古』第17号奈良岐考古同人会
- 橋場君男 1997 「国録中世の霞ヶ浦と津宗—よみがえる仏教文化の聖地—」土浦市博物館
- 橋場君男 1998 「茨城県内出土の中世瓦兩年試案」『第5回中世瓦研究会(茨城資料編)』
- 服部清道・小出義治 1992 「岩戸満願寺—満願寺境内遺構確認調査報告書—」(横須賀市文化財調査報告書第25集)横須賀市教育委員会
- 服部実喜・余酒琢磨 1990 「称名寺旧境内出土の中世瓦」『物質文化』53
- 深澤幸幸他 2000 「5. 大國魂神社周辺」『東京の中世瓦』(第7回中世瓦研究会)
- 本澤慎輔 2000 「平泉出土の瓦」『瓦からみた平泉文化—平泉文化フォーラム2000—』平泉町・平泉町教育委員会
- 前澤輝政 1971 「足利智光寺址の研究」綜芸社
- 馬淵和雄 1998 「鎌倉大仏の中世史」新人物往來社
- 三上次男他 1976 「多宝律寺遺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会
- 三上次男他 1977 「多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会
- 松田政基・山崎信二 1993 「三村山極楽寺跡遺跡群—確認調査報告書—」つくば市教育委員会
- 桃崎祐輔 1998 「常陸の中世瓦をめぐる諸問題」『第5回中世瓦研究会(茨城資料編)』
- 桃崎祐輔 1998 「考古学フィールドノート—つくば市日向院寺の瓦葺阿弥陀堂跡—」筑波大学総合科学博物館ニュース誌 第3号
- 森蔵・荒木伸介 1971 「伊豆釜淵成就院発掘調査概報—鎌倉時代初期寺院址—」釜淵町教育委員会
- 山崎信二 2000 「中世瓦の研究」(奈良国立文化財研究所学報第59冊)奈良国立文化財研究所
- 山中雄志 1991 「下万正寺遺跡試掘調査報告書」(桑折町埋蔵文化財調査報告書8)桑折町教育委員会
- 山中雄志 1991 「東北地方における中世鎌倉期瓦の一例」『東国史論』
- 山中雄志 1991 「下万正寺遺跡試掘調査報告書—第二次試掘—」(桑折町埋蔵文化財調査報告書9)桑折町教育委員会
- 山本暉久・服部実喜 1988 「金沢文庫遺跡—県立金沢文庫新築予定地内遺跡(旧指定史跡称名寺境内)の調査—」(神奈川県埋蔵文化財センター調査報告書)
- 山本梢・西井幸雄 1997 「山王裏/上川/西浦/野木氏館跡」(財)埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 総貫親次郎 1991 「白石大御堂遺跡—園池を伴う中世寺院跡の調査—」(財)埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 総貫親次郎 1997 「浜川北遺跡出土の中世瓦資料整理報告」『高崎市内遺跡出土資料整理報告書』
- 徳福 1981 「勝長寿院出土の古瓦について」『鎌倉考古』No.6 鎌倉考古学研究所
- 1982 「鶴岡二十五坊跡出土の建瓦」『鎌倉考古』No.11 鎌倉考古学研究所
- 1983 「第3章 瓦」『補修道場用地発掘調査報告書(鶴岡八幡宮境内の中世遺跡発掘調査報告書)』同調査団・鶴岡八幡宮
- 1984 「鎌倉の古瓦」『神奈川県立博物館だより』通巻85号神奈川県立博物館
- 1985 「第3章 瓦」『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 1986 「鎌倉における瓦の様式—鎌倉時代の瓦当文様を中心に—」『仏教芸術』第164号(特集:鎌倉の発掘)毎日新聞社
- 1986 「第4章 建瓦・字瓦の型式分類」『史跡永福寺跡—昭和60年度概要報告書—』鎌倉市教育委員会
- 1987 「第4章 文字瓦の型式分類」『史跡永福寺跡—昭和61年度概要報告書—』鎌倉市教育委員会
- 1997 「東国出土の中世瓦」『永福寺創建800年記念シンポジウム・浄土庭園と寺院記録集』鎌倉市教育委員会
- 1998 「附編出土瓦について」『極楽寺旧境内遺跡—江ノ島電鉄株式会社極楽寺地区改良計画に伴う発掘調査報告書—』極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団
- 1999 「瓦からみた菊川町の中世」『横地城跡総合調査報告書』静岡県菊川町教育委員会
- 1999 「鎌倉出土瓦と同范・同文瓦について」『鎌倉考古』No.42 鎌倉考古学研究所
- 1999 「第5章 出土遺物(瓦)について」『極楽寺旧境内中心伽藍跡群(極楽寺三丁目298番1外地点)発掘調査報告書』極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団・東国歴史考古学研究所

表5 鍍瓦・宇瓦法量表

蓮華文鍍瓦

F:複弁 R:蓮子 S:珠文 K:圈線

() 推定値 単位:cm

登録番号	型式分類	瓦当径	内区				外区						男瓦部		焼成	瓦当色調	胎土	段部から釘穴まで		
			文様	内区径	中房径	蓮子数	圈線	幅	内縁		外縁		径	厚さ						
									幅	文様	幅	高さ								
図56-1	YA I 01a	(15.6)	(F8)	(10.0)	4.9	1+8														
図56-2	YA I 01a	16.0	(F8)	9.6	5.0	(1+8)														
	YA I 01a	16.0	(F8)	9.8	4.8	(1+8)														
図56-4	YA I 01c	16.4	(F8)	9.4	4.5	1+8														
	YA I 01c	(16.8)	(F8)	9.8	4.8	(1+8)														
図58-1	YA I 01d (YM I 04e)	17.5	F8	9.0	4.4	1+8														
図58-2	YA I 01d (YM I 03)	(17.6)	(F8)	9.0	4.5	1+8														
	YA I 01d (YM I 04e)	17.8	F8	9.2	4.5	(1+8)														
	YA I 01d	(19.6)	(F8)	9.6	4.6															
	YA I 01e	17.0	F8	9.4	4.6	1+8														
	YA I 01e	17.0	(F8)	9.8	4.5	(1+8)														
図57-1	YA I 01e	16.6	F8	9.6	4.5	1+8														
図57-2	YA I 01e YM I 06	(17.6)	(F8)	9.4	4.6	(1+8)														
図57-3	YA I 01e (YM I 06)	(16.8)	(F8)	(9.6)	4.6	(1+8)														
図56-5	YA I 01f	(16.8)	F8	9.6	4.5	1+8														
	YA I 01f	(16.0)	(F8)	9.8	4.6	(1+8)														
	YA I 01g	(14.0)	(F8)	8.0	3.7															

图56-8	YA I 01g	14.3	(F8)	8.2	3.8	1+8		3.2	1.4	残数 S11	1.5	1.0			硬	黑灰	精良
	YA I 01g	(14.0)	(F8)	7.8	3.8	1+8		3.0	1.5	残数 S7	1.1	1.1			硬	灰白 赤み	精良
图56-6	YA I 02	(16.6)	(F8)	10.0	4.6	(1+8)	2	3.0	1.3	残数 S16	2.0	1.4			硬	灰	精良
图58-3	YA I 03						2	3.0	1.5	残数 S2	1.9	1.0			硬	明灰	精良

巴文鏡瓦

巴方向：右・左 圈線：内・外 S：珠文

() 推定値 单位cm

登錄 番号	型式 分類	瓦 当 徑	内区		外区				男瓦部		瓦 色調	燒成	胎土	
			文様 (巴・寺銘)	幅	圈線	内縁		外縁		徑				厚さ
						内区徑	幅	文様	幅					
图59-1	YA II 01	13.0	巴・右	2.1		1.0		1.3	1.0	12.5	1.4	黑灰	硬	精良
	8.7													
	YA II 01	(13.4)	巴・右	2.2		1.0		1.1	0.9			灰	硬	精良
	8.7													
图59-3	YA II 02a (YM I 02)	17.5	巴・左	4.3		2.0	S18	2.2	1.7	16.5	2.1	灰	硬	精良
	9.0													
	YA II 02a (YM I 02)	(17.6)	巴・左	4.2		2.2	残数 S8	2.0	1.4			灰	硬	精良
	(9.0)													
	YA II 02a (YM I 02)	(17.8)	巴・左	4.4		2.3	残数 S14	2.1	1.6			黑灰	硬	精良
	(9.0)													
	YA II 02a	17.5	巴・左	4.2		2.1	S18	2.0	1.4			黑灰	硬	精良
	9.0													
	YA II 02a (YM I 02)	17.8	巴・左	4.2		2.0	S18	2.1	1.5			灰	硬	精良
	9.4													
图60-3	YA II 02b	15.5	巴・左	3.4		2.0	S22	0.9	1.2			灰	硬	精良
8.6														
图60-3	YA II 02b	(14.0)	巴・左	2.1		1.3	残数 S19	0.7	0.6			黑灰	硬	精良
	9.5													
	YA II 02b	16.2	巴・左	3.8		2.2	S22	1.4	0.8			黑灰	硬	精良
	8.6													
	YA II 02b	15.8	巴・左	3.7		2.3	S22	1.4	1.0			灰	軟	精良
	8.5													
图60-1	YA II 03	(17.2)	巴・左	3.8	1	1.9	残数 S9	2.0	1.5			灰	軟	粗
(9.0)														

	YA II 03		巴·左 (9.4)		1	2.0	残数 S13					灰白	软	精良
	YA II 03	(19.6)	巴·左 9.6	4.2	1	2.0	残数 S5	1.9	1.6			灰	硬	精良
图60-8	YA II 11a	13.8	巴·左 9.5	2.0		1.0	残数 S18	0.8	0.6			黑灰	硬	精良
	YA II 11a	(13.6)	巴·左 (9.5)	2.0		1.1	残数 S13	0.8	0.4			黑灰	硬	精良
	YA II 11a	(12.6)	巴·左 (8.2)	2.2		1.2	残数 S10	1.2	0.6			灰白	软	精良
图60-4	YA II 11b	(14.0)	巴·左 7.5	3.2		1.8	S23	1.5	0.9			黑灰	硬	精良
图60-5	YA II 11b	13.4	巴·左 7.4	3.0		1.4	S23	1.5	1.4			灰	硬	精良
	YA II 11b	(14.0)	巴·左 8.0	3.1		1.5	残数 S8	1.6	1.0			黑灰	硬	精良
	YA II 11b	(13.2)	巴·左 7.5	2.8		1.5	残数 S18	1.3	1.1			灰	硬	精良
图60-6	YA II 11c	13.0	巴·左 8.0	2.4		1.2	S22	1.2	0.5			灰~ 黑灰	硬	精良
图60-7	YA II 11c	13.0	巴·左 8.2	2.4		1.3	S22	1.0	0.5			灰	硬	精良
图60-9	YA II 12a	(13.0)	巴·左 (7.0)	3.0	1	1.2	S	1.9	0.9			灰	硬	精良
图60-16	YA II 12b	(14.6)	巴·左 7.7	3.4	1	1.2	残数 S18	2.3	1.3			黑灰	硬	精良
图61-4	YA II 04b	17.3	巴·右 8.7	4.2	1	1.5	S20	3.0	1.3		2.8	灰白		精良
	YA II 04b	(18.4)	巴·右 (10.6)	3.9	1	1.5	S	2.5	1.1			黑灰	硬	粗
图61-1	YA II 05	17.4	巴·左 9.6	3.5	1	1.5	S21	2.2	1.2		2.4	黑灰		粗
	YA II 05	17.8	巴·左 9.6	4.2	1	1.6	S21	1.5	1.2			灰	硬	粗
	YA II 05	(18.0)	巴·左 9.6	4.0	1	1.6	残数 S16	2.3	1.1			黑灰	硬	粗
图62-7	YA II 06	(14.4)	巴·右 (7.6)	3.5		1.5	剑頭	1.4	0.6			黑灰	硬	精良

	YA II 06	(15.0)	巴・右 (8.6)	3.2		1.6	剣頭	1.6	0.5				黒灰	硬	粗
	YA II 06	(15.6)	巴・右 (8.6)	3.5		1.7	剣頭	1.7	0.6				黒灰	軟	粗
	YA II 06	(15.2)	巴・右 (8.6)	3.4		1.0	剣頭	1.5	0.8				黒灰	硬	粗
図62-3	YA II 07	(13.0)	巴・左 (8.0)	2.5	1	1.0	S	1.5	1.0				灰		粗
	YA II 07	(12.4)	巴・左 (6.8)	2.8	1	1.1	残数 S7	1.5	1.1				黒灰	軟	粗
図62-5	YA II 08	(12.8)	巴・左 (8.4)	2.0	1	0.9	残数 S11	1.2	1.1				灰	硬	粗
図62-1	YA II 09	13.8	巴・左 8.8	2.3	1	0.8	残数 S14	1.2	0.9	12.1	1.8		黒灰		粗
図62-2	YA II 09	(12.4)	巴・左 (8.0)	2.1	1	0.6	残数 S11	1.4	1.3				黒灰	硬	やや粗
図62-6	YA II 13	(15.4)	巴・右 9.4	3.1	1	0.9	残数 S23	2.0	1.0				黒灰	硬	粗
図63-1	YA II 14b	16.0	巴・左 (10.7)	2.6		1.0	残数 S11	1.6	1.0				灰白	軟	粗
図63-2	YA II 14b	(14.2)	巴・左 (9.2)	2.5		1.0	残数 S19	1.5	1.1				黒灰	軟	粗
図63-3	YA II 14b	(16.0)	巴・左 (11.0)	2.5		1.1	残数 S11	1.3	1.0				灰		粗
図63-6	YA II 15	(13.6)	巴・右 (8.8)	2.4	1	1.0	残数 S7	1.3	0.9				黒灰	軟	粗

寺銘瓦

寺銘瓦の内区径は珠文帯の内側を計測

推定値() 単位cm

登録番号	型式分類	瓦当径	内区						男瓦部		瓦当色调	焼成	胎土
			文様 (巴・寺銘)	幅	圓線	外区		径	厚さ				
						内縁 幅	外縁 高さ						
										内区径			
図64-1	YA III 01a	19.0	寺銘										
			14.3				2.1	1.2	6.1	2.6	黒灰		粗
図64-2	YA III 01a	(19.0)	寺銘										
			(16.2)				2.1	1.0			黒灰	軟	粗
	YA III 01a	18.0	寺銘										
			14.0				2.3	1.0			黒灰	硬	精良

图64-3	YAH01b	(19.0)	寺銘 (15.0)						1.8	1.5			灰白	軟	粗
	YAH01b	(19.0)	寺銘 (16.4)						1.9	1.2			黑灰	硬	粗
图64-4	YAH01c	(19.0)	寺銘 (15.0)						2.0	1.1			黑灰		粗
图64-5	YAH01c	(18.0)	寺銘 15.0						1.8	1.1			黑灰	軟	粗

唐草文字瓦

K:界線 S:珠文 顎部製作技法 a:顎貼 b:折曲 c:瓦当貼

()推定值 单位:cm

登錄 番号	型式 分類	瓦 当 部								女 瓦 部 厚	顎部		燒 成	色 調	胎 土					
		上 弦 幅	下 弦 幅	幅	内区 文樣 内区幅	上外区		下外区			臉区					顎 面 幅	製技 作法			
						幅	文 樣	幅	文 樣		幅	文 樣								
图65-1	YN I 01a1	32.0	31.6	6.7	唐草 4.3	1.0				1.3		2.6	2.2	a		黑灰	精良			
图65-2	YN I 01a1				唐草 4.2										2.5	2.9	a		黑灰	精良
图66-2	YN I 01a1	31.6	31.4	7.0	唐草 4.3	1.0										灰	精良			
					唐草 4.3						1.2	2.3	a							
小	YN I 01a1	31.5	31.3	6.7	唐草 4.3	0.9										黑灰	精良			
					唐草 4.3		0.9	1.0	0.8				2.5	a						
	YN I 01a1	31.5	31.2	6.8	唐草 4.2	1.2										黑灰	精良			
					唐草 4.2		1.2	1.2	1.3				2.7	a						
图66-1	YN I 01a2				唐草 4.1										2.0	b		精良		
图67	YN I 01b YM I 04d				唐草 4.0										2.7	3.1	a	硬	灰	精良
		图68	YN I 01b	34.8	34.3	6.6	唐草 4.3	1.2												
唐草 4.3	1.2						1.0		1.1	3.0	3.0	a	硬	灰	精良					
	YN I 01b	33.3	32.8	6.6	唐草 4.5	1.2														
					唐草 4.5		1.2	1.0	1.5				3.5	a				灰	精良	
	YN I 01b			6.8	唐草 4.3	1.2														
					唐草 4.3		1.2	1.3	0.8				3.5	a					精良	
图69-1	YN I 01d	32.6	32.5	7.2	唐草 4.3	1.5														
					唐草 4.3		1.5	1.1	1.5				3.8	a					精良	
图69-2	YN I 01d				唐草 4.4															
					6.8	4.4	1.2													精良

图70	YN I 01d			6.9	唐草	1.3		1.6	1.4	3.2	3.7	a			精良
	YN I 01d			6.9	唐草	1.2		1.3	1.9		3.8	a			精良
图71-1	YN I 01e1			6.3	唐草	1.3		1.1	1.1	2.3	3.8	a			精良
	YN I 01e1			7.0	唐草	1.1		0.9	1.5		3.2	a	硬	黑灰	精良
图71-3	YN I 01e2	25.4	26.5	7.6	唐草	2.0		1.1	1.4	2.4	3.3	b			精良
	YN I 01e2				唐草				1.4		3.0	a	软	黑灰	精良
	YN I 01e2				唐草				1.1		3.0	a	硬	黑灰	精良
图72-1	YN I 01f	30.5	29.5	6.5	唐草	1.2		1.3	1.2	2.9	3.2	a			精良
图72-3	YN I 01f	(30.0)		6.8	唐草	1.6		1.2	1.0	3.0	(2.2)	a			精良
	YN I 01f			(6.3)	唐草	1.1						a			精良
	YN I 01f	30.0	(30.4)	(7.0)	唐草	1.3		(1.2)	1.0		2.3	a			精良
图73-1	YN I 01h1	31.7	31.4	7.0	唐草	1.3		1.3	1.6	2.4	2.9	a			精良
	YN I 01h1	(31.0)		7.4	唐草	1.6		1.2	1.4		3.2	a			精良
图73-2	YN I 01h2			6.4	唐草	1.5		0.8	0.5			b			精良
图73-3	YN I 01h2			5.3	唐草	0.9		0.9	1.2		2.2	b			精良
	YN I 01h2				唐草	1.0			1.0			a			精良
图74-1	YN I 01k	30.0	30.2	6.5	唐草	1.3		1.1	1.0	2.5	3.3				精良
	YN I 01k	(30.0)		6.1	唐草	1.0		1.2	1.2		2.5	a			精良
	YN I 01k	30.5		6.5	唐草	1.3		1.2			3.5	a			精良

	YN I 03				唐草	0.7							b		黑灰	精良
					3.9											
图75-1	YN I 03	22.4	21.6	5.0	唐草	0.7	0.6	1.4	2.4	1.6	a				黑灰	精良
					3.7											
	YN I 03			4.8	唐草	0.6	0.7	1.2		2.0	b			黑灰	精良	
					3.8											
	YN I 03				唐草	1.0		1.2			b			黑灰	精良	
	YN I 03			4.8	唐草	0.7	0.8			1.7	a	硬	灰		精良	
					3.3											
	YN I 03			5.7	唐草	1.1	0.8			2.1		硬	黑灰		精良	
					3.7											
图76	YN I 04	25.5		6.9	K2S	1.0	0.6	1.0	3.5	3.0	a			黑灰	精良	
					3.7											
图75-4	YN I 05				K	1.2			1.9		c			灰	粗	
					1.4											
图74-2	YN I 06			6.5	唐草	4.0	1.1	1.2	1.5	2.4	a	硬	灰		精良	
					4.0											
图74-3	YN I 06			6.8	唐草	4.4	1.4	1.0	1.2	2.8	2.0	a	硬	灰	精良	

剑头文字瓦

K:界線 S:珠文 頸部製作技法 a:額貼 b:折曲 c:瓦当貼

()推定值 單位:cm

登錄 番号	型式 分類	瓦 当 部										女 瓦 部 厚	頸 部 面 積	額 部 製 技 成 法	燒 色 調	胎 土
		上 弦 幅	下 弦 幅	幅	內区 文樣	上外区		下外区		脇区						
						幅	文樣	幅	文樣	幅	文樣					
图77-1	YNII 01	23.1	24.5	5.4	劍頭·下	3.3	1.4	0.8	1.4		2.2	2.9	b		黑灰	精良
	3.3															
	YNII 01			4.9	劍頭·下	2.8	1.1	0.8	1.1		2.1	b		灰	精良	
	2.8															
图77-2	YNII 13			4.5	劍頭·下	3.1	1.0	0.7			2.2	b	硬	灰	精良	
					3.1											
图78	YNII 03	31.0	(30.0)	7.0	劍頭·下	4.0	1.6	1.4	1.5		2.8	2.8	a	黑灰	精良	
	4.0															
	YNII 03			7.0	劍頭·下	4.1	1.1	1.1	1.3		3.2	a		黑灰	精良	
	4.1															
	YNII 03	32.0	30.5	6.7	劍頭·下	4.3	1.6	1.1	1.1		3.2	a		黑灰	精良	
	4.3															

	YN II 03			6.7	劍頭·下 4.3	1.0	1.1				3.0	a		灰	精良
圖79-1	YN II 05a				劍頭·上				0.9			c	軟	灰	粗
圖79-2	YN II 06a				劍頭·上		0.8					c	軟	灰白	粗
圖79-3	YN II 05a				劍頭·上 2.5		1.0					c	軟	黑灰	粗
圖79-4	YN II 06a				劍頭·上 2.6		1.0				2.8	c	硬	黑灰	粗
圖79-7	YN II 06	(24.4)	(24.4)	4.8	劍頭·上 2.7	0.7	0.7	0.7	2.1	2.6		c		灰	粗
	YN II 06				劍頭·上	0.8		0.7				c		黑灰	粗
	YN II 06				劍頭·上 2.7			0.7				c			粗
圖79-9	YN II 07			4.0	劍頭·上 2.2	0.9	0.7				2.9	c		灰	粗
圖79-11	YN II 07				劍頭·上 2.2		0.9				2.1	c	軟	灰白	粗
	YN II 07				劍頭·上 2.5	0.7		1.3				c			粗
圖80-1	YN II 08				劍頭·上 1.3		0.7				1.7	c		灰白	粗
圖80-2	YN II 09			3.0	劍頭·上 1.4	0.6	0.5	0.6			2.3	a		灰白	粗
圖80-3	YN II 09			3.3	劍頭·上 1.7	0.7	0.7	0.6	1.7	2.4		c	軟	灰	粗
圖80-4	YN II 10			3.2	劍頭·上 1.7	0.5	0.6				2.3	c		黑灰	粗
圖80-5	YN II 10			3.2	劍頭·上 1.7	0.7	0.7	0.7	2.0	1.9		c		黑灰	粗
圖80-7	YN II 11				劍頭·上 2.1		0.7				1.8	c	軟	灰	粗
圖80-8	YN II 11				劍頭·上 1.8	0.6						c	軟	黑灰	粗
圖80-13	YN II 12			(3.9)	劍頭·上 2.2	1.0	0.7				2.0	a	軟	黑灰	粗

图80-14	YN II 12				剑頭·上										0.6			2.0	軟	黑灰	粗	
图80-9	YN II 15			3.4	剑頭·上		0.6	0.7	1.1	1.8			c								粗	
					1.7																	
图80-11	YN II 15			3.5	剑頭·上		0.7	0.7	1.1	1.7	2.2		a								粗	
					1.4																	
	YN II 15			3.7	剑頭·上		0.7	0.7	1.1				a								粗	
					1.5																	
	YN II 15				剑頭·上		0.5						a								粗	
					2.0																	
	YN II 15				剑頭·上		0.5						a								粗	
					2.1																	
	YN II 15				剑頭·上								a								粗	
					剑頭·上									a								粗

寺銘字瓦

K:界線 S:珠文 額部製作技法 a:額貼 b:折曲 c:瓦当貼 ()推定値 單位cm

登錄 番号	型式 分類	瓦 当 部										女 瓦 部 厚	額 面 幅	製 技 法	焼 成	色 調	胎 土	
		上 弦 幅	下 弦 幅	幅	内区		上外区		下外区		脇区							
					文 様	内区幅	幅	文 様	幅	文 様	幅							文 様
	YN III 01a			6.5	寺銘 4.1	0.8		1.2		1.3			4.1	a		灰白	粗	
	YN III 01a			6.8	寺銘 4.3	0.7		1.2		0.9			4.2	a		灰	粗	
图81	YN III 01a			(6.8)	寺銘 4.0	1.3		1.2		0.9		2.8	3.9	a			粗	
	YN III 01b				寺銘											軟	灰	粗
	YN III 01b				寺銘 3.5	1.0		1.3		1.6			3.2	a		灰	粗	
	YN III 01b			6.7	寺銘 4.0	1.0		1.2		1.4			4.0	a			粗	
	YN III 01b			7.0	寺銘 4.0	1.2		1.3		1.5			3.5	a			粗	
图82	YN III 01b	37.0	36.4	6.7	寺銘 3.8	0.8		1.2		1.5		2.8	3.0	a			粗	
	YN III 01c	35.0	37.2	6.5	寺銘 3.8	1.2		1.4		1.2		3.0	4.0	a			粗	

图83-5	YNIII01 c			7.0	寺銘 4.4	1.1	1.2					3.2	a			粗
图83-1	YNIII03a				寺銘		1.1					3.2		硬	灰	粗
图83-2	YNIII03a			7.1	寺銘 4.8	1.1						2.9	a	軟	灰	粗
图83-3	YNIII03b			5.7	寺銘 3.8	0.8	1.2	1.4				3.4	a		灰白	粗
图83-4	YNIII03b			5.6	寺銘 3.5	0.9	1.0	1.6			2.5	2.8	a		灰	粗

連珠文字瓦

K:界線 S:珠文 顎部製作技法 a:顎貼 b:折曲 c:瓦当貼 ()推定値 単位cm

登錄 番号	型 式 分 類	瓦 当 部										女 瓦 部 厚	顎部		施 成	色 調	胎 土	
		上 弦 幅	下 弦 幅	幅	内区		上外区		下外区		脇区		額 面 幅	製技 作法				
					文様	内区幅	幅	文様	幅	文様	幅							文様
图75-5	YNIV01			5.6	S·K 1.8	1.3		1.1				2.3	2.7	a		灰	精良	



3-8



3-9



3-10



3-11



3-12



3-13



3-14



3-15



3-7



3-16



3-17



3-18



3-19



3-20



3-21



3-22



3-23



3-24



4-1



4-6



4-5

图版 1



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-7



5-8



5-9



5-10



5-11



5-12



5-13



5-14



5-15



5-22



5-23



5-21



5-18



5-19



5-18



5-19



5-20

图版 2



6-1

6-2



7-2

7-1



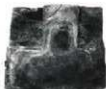
4-3



4-1



4-2



7-3

圖版 3



8-2



8-3



8-5



8-4



8-6



8-7



8-8



8-9



8-10



8-11



8-12



8-13



8-14



8-15



8-16



8-17



8-19



8-20



8-21



8-22



8-24



8-25



8-26



8-27



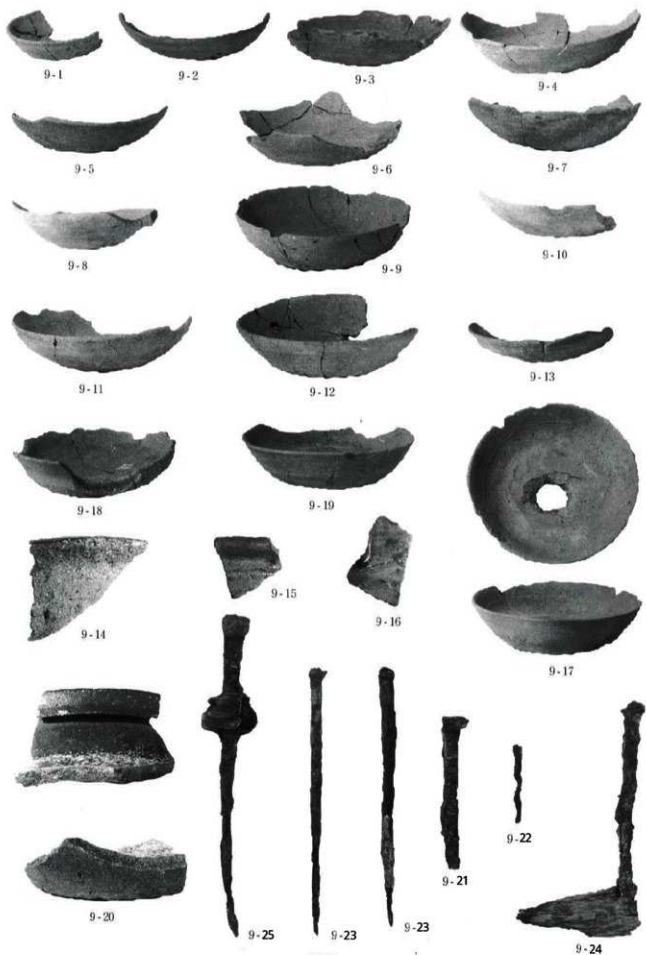
8-28



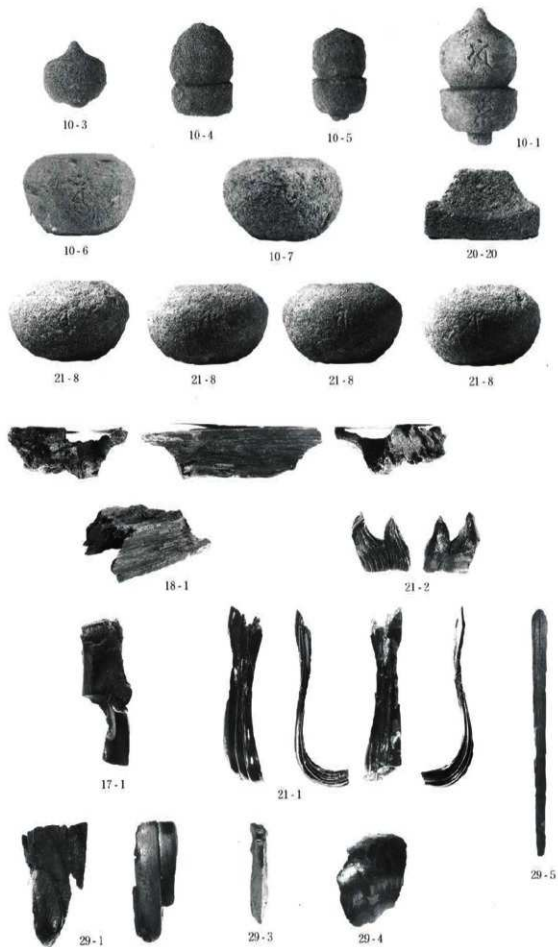
8-23



图版 4



圖版 5



图版 6



11-1



11-3



11-2



12

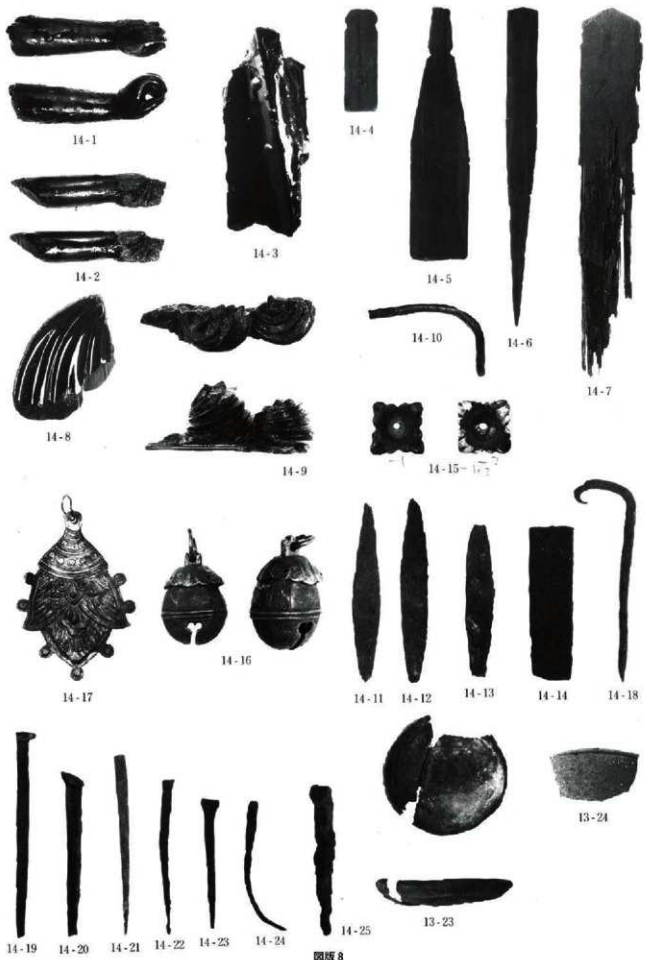


19

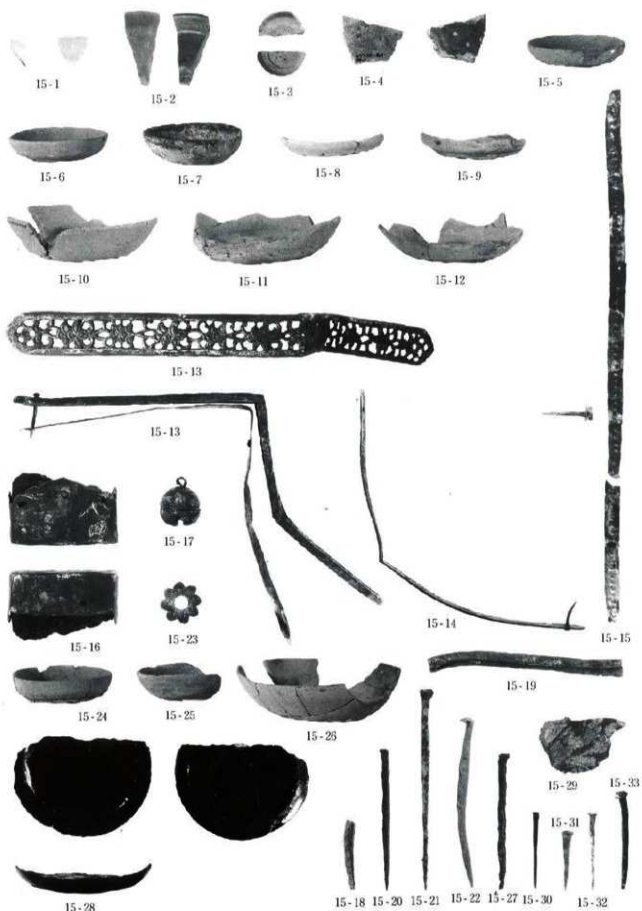


19 部分拡大

图版 7



圖版 8



GROUP 9



16-1



16-6



16-8



16-9



16-4



16-2



16-3



16-7

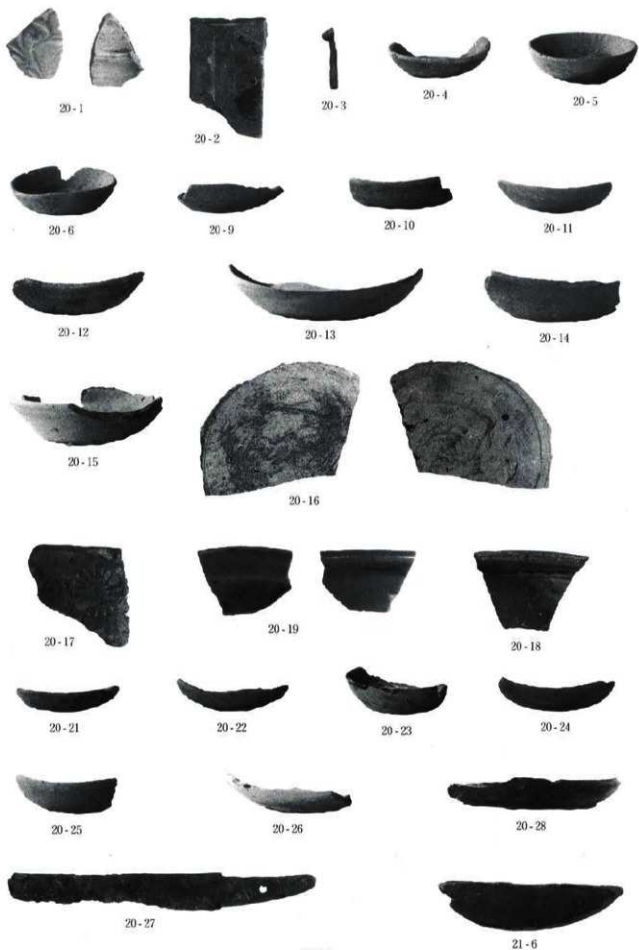


16-5

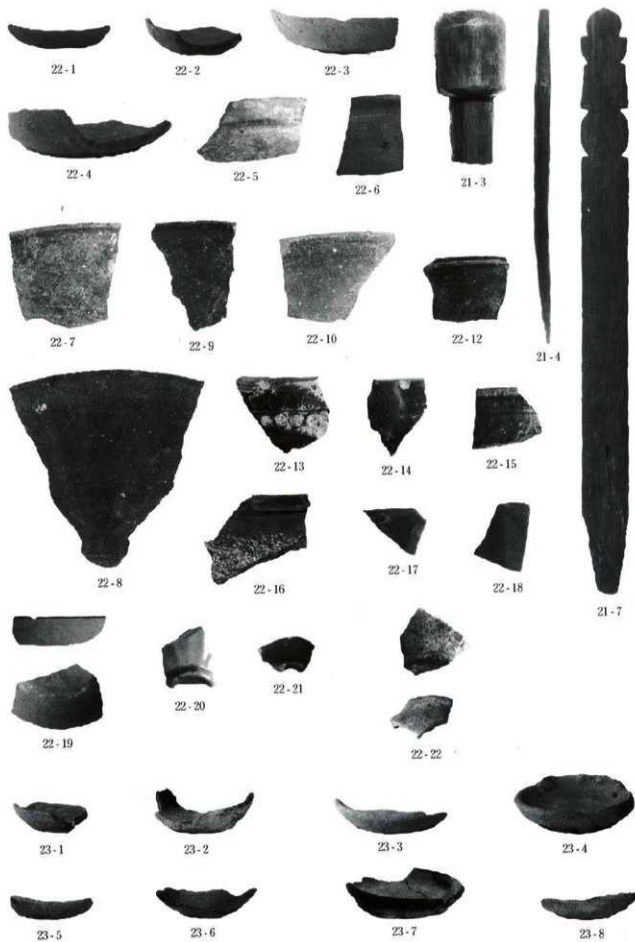


16-10

圖版 10



圖版 11



图版 12



23-9



23-10



23-12



23-13



23-14



23-15



23-16



23-17



23-18



23-19



23-20



23-21



23-22



23-23



23-24



23-25



23-26



23-27



23-28



23-29



23-30



23-31



23-32



23-33

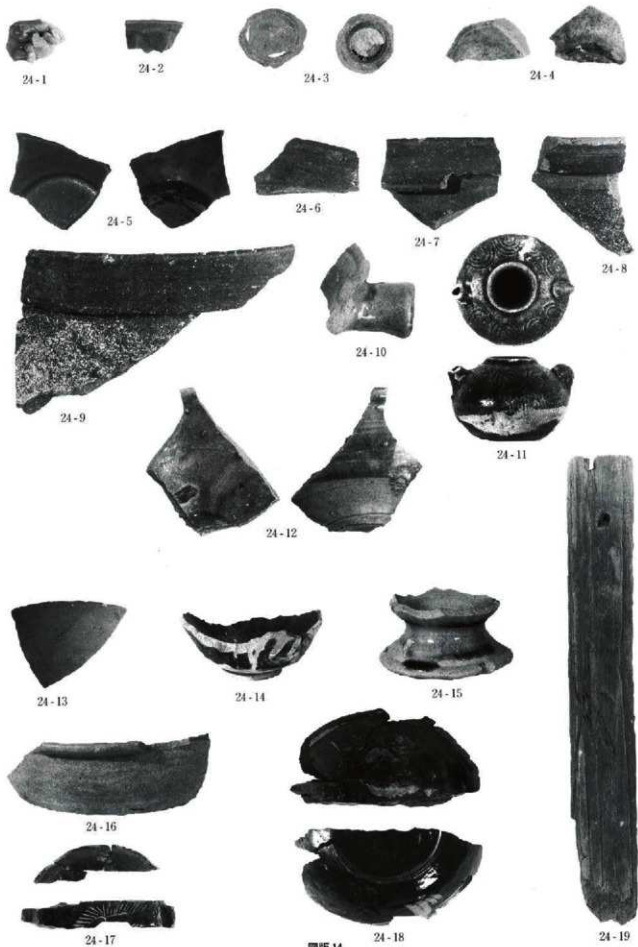


23-34

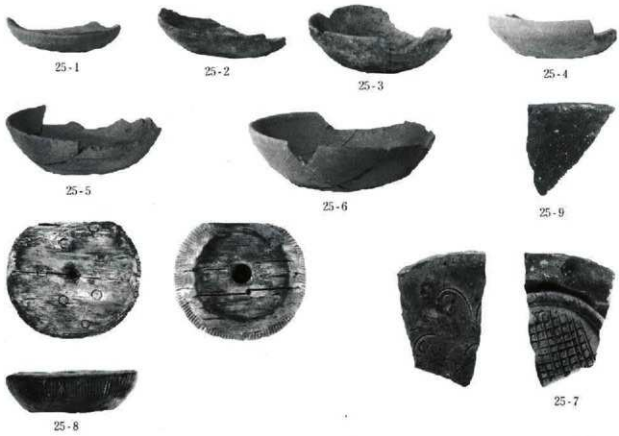


23-35

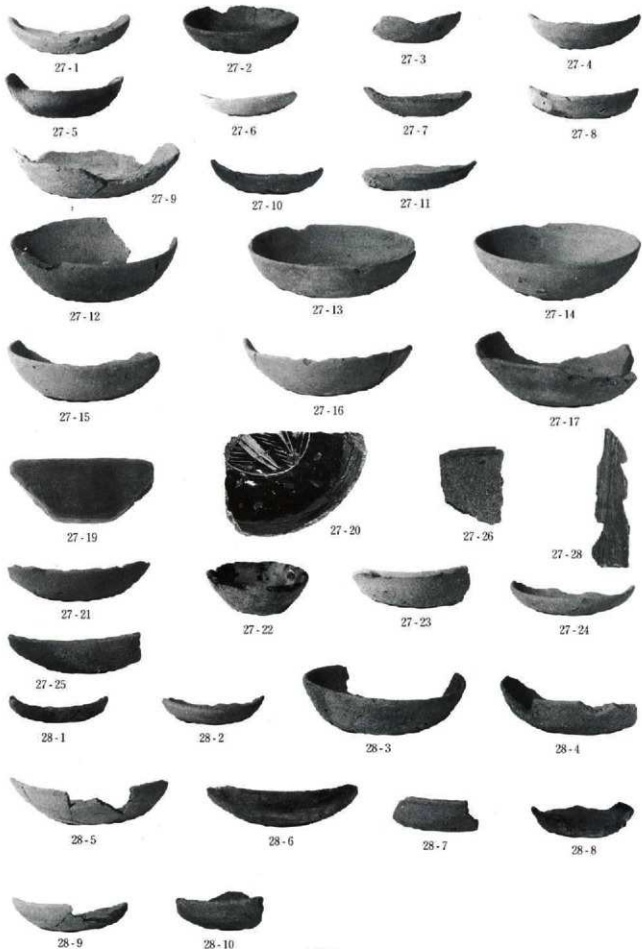
圖版 13



圖版 14



圖版 15



图版 16



28-11



28-12



28-13



28-16



28-14



28-15



28-18



28-17



28-19



28-19



圖版 17



30-1



30-2



30-3



30-4



30-5



30-6



30-7

图版 18



31-1



31-5



31-2



31-4



31-3



31-6



31-7



31-8



31-9



31-10



31-11



31-12



31-13



31-14



31-15



31-16



31-18



31-19

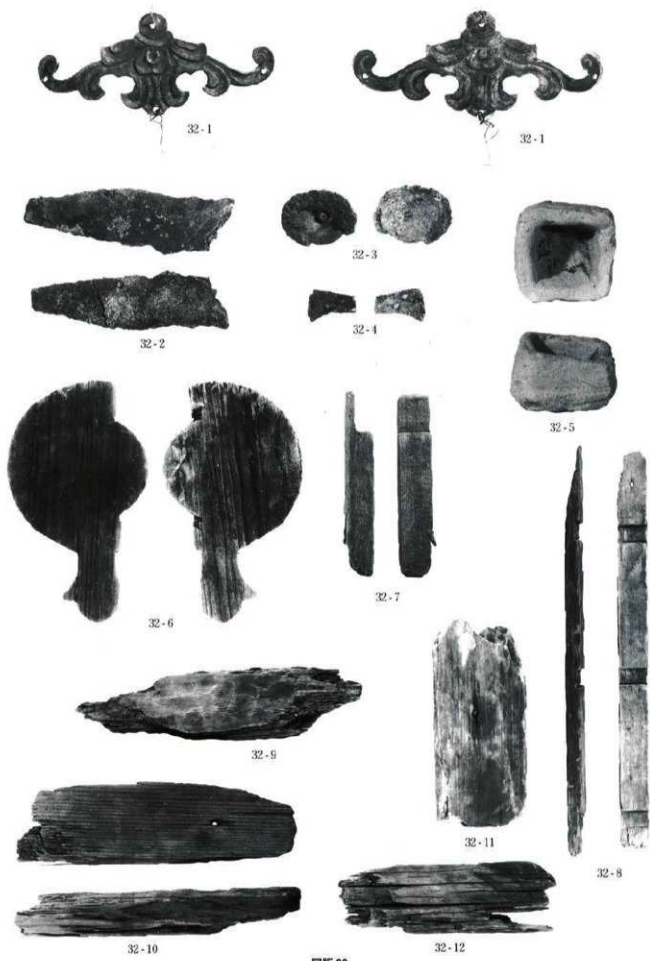


31-17



31-20

圖版 19



图版 20



图版 21



34-1



34-7



34-3



34-4



34-5



34-6



34-2



34-8

图版 22



35-1



35-2



35-3



35-4



35-5



35-6



35-7



35-8



35-9



35-10



35-11



35-12



35-13



35-14



35-15



35-16



35-18



35-19

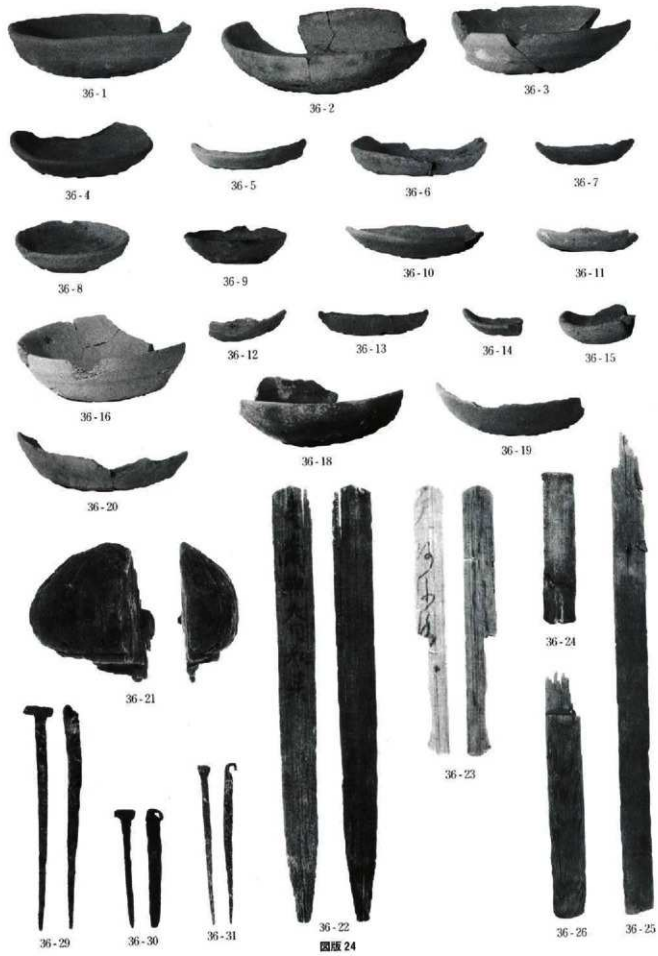


35-21



35-22

圖版 23



图版 24



37-1



37-3



37-4



37-2



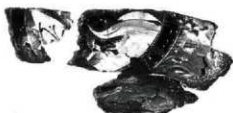
37-5



37-7



37-6



38-3



37-8



38-4



38-1



38-2



38-5



38-6

图版 25



图版 26



40-1



40-2



40-3



40-4



40-5



40-6



40-7



42-5



42-13



42-7



42-8



42-9



42-6



42-14



42-15



42-17



42-16



42-4



42-2



42-11

圖版 27



42-24



42-25



42-12



42-26



42-27



42-28



42-21



42-10



42-20



42-19



42-23



42-22



圖版 28



41-1



41-2



41-3



41-4



41-5



41-6



41-7



41-8



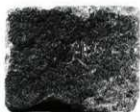
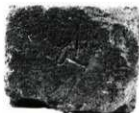
41-9



41-10



41-11



41-12



41-13



42-1

图版 29



43-1

43-2

43-3

43-4



43-5



43-6



43-7



43-12



43-13



43-14



43-15



43-16



43-17



44-1



44-2



44-3



44-4



44-5



44-6



44-7



44-8



44-9



44-10



44-11



44-12



44-13



44-14



44-15



44-16



44-17



44-18

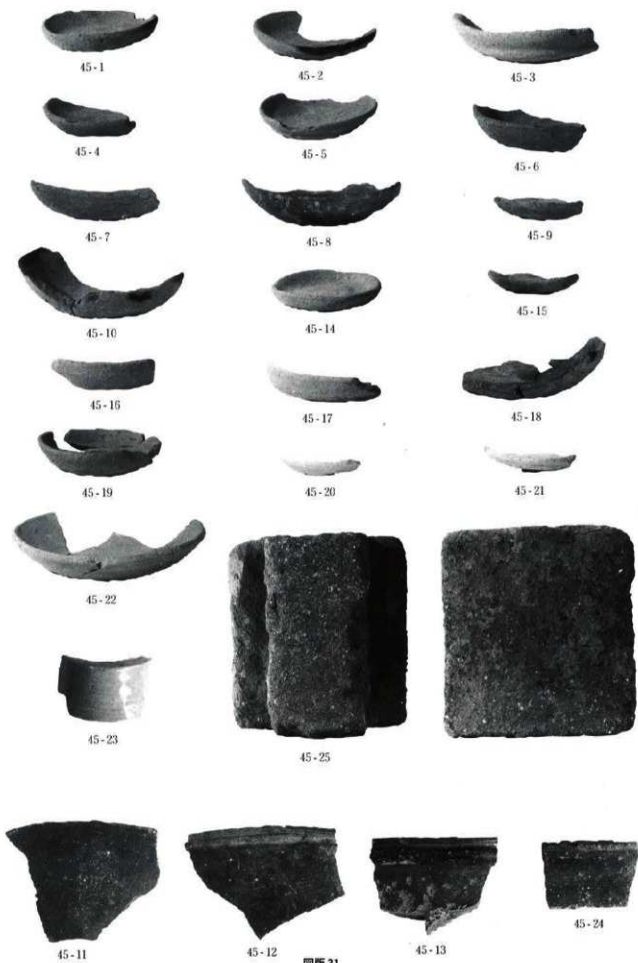


44-19

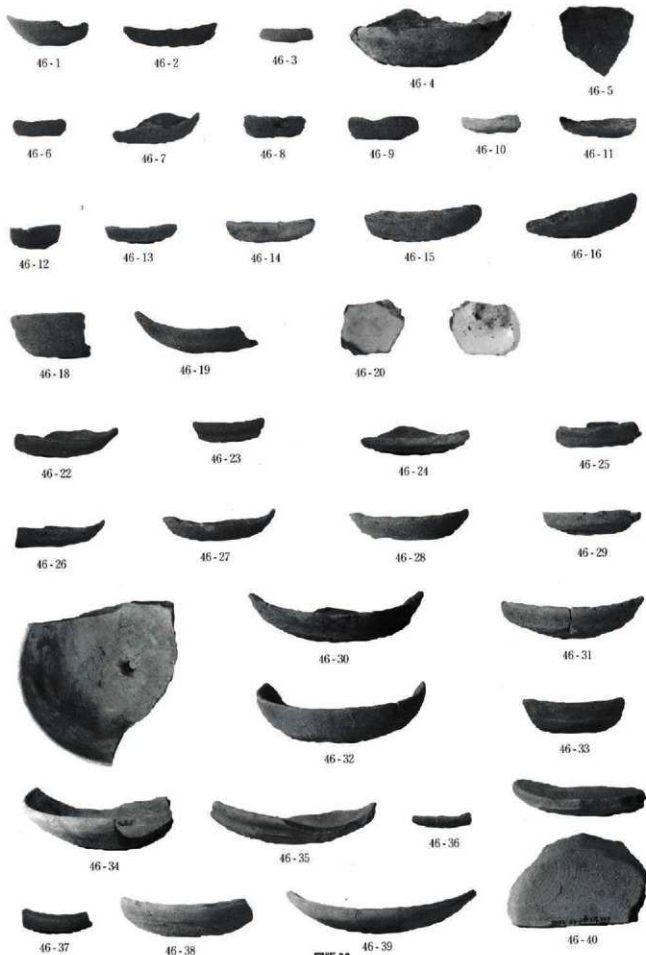


44-20

图版 30



图版 31



图版 32



47-1



47-2



47-3



47-4



47-5



47-6



47-7



47-8



47-9



47-10



47-11



47-12



47-13



47-14



47-15



47-16



47-17



47-18



47-20



47-21



47-22



47-23

图版 33



图版 34



49-1



49-2



49-3



49-6



49-7



49-8



49-9



49-10



49-11



49-14



49-15



49-16



49-17



49-18



49-19



49-20



49-21



49-22



50-1



50-2



50-3



50-4



50-5



50-6



50-7



50-8



50-9



50-10



50-11



50-13



50-12

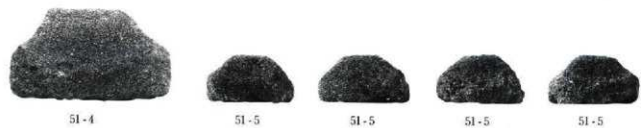


50-14

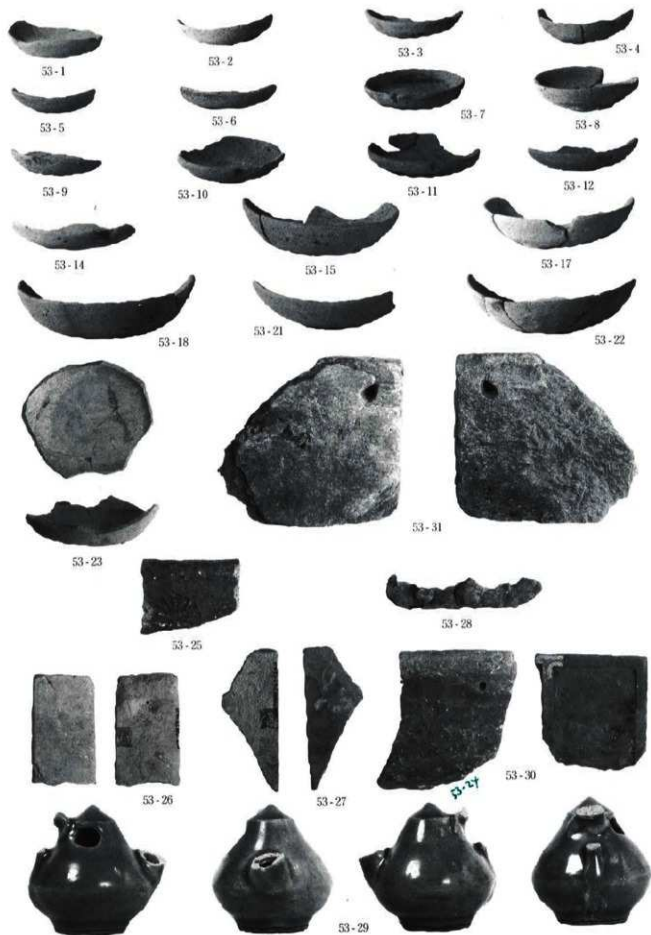


50-13, 14

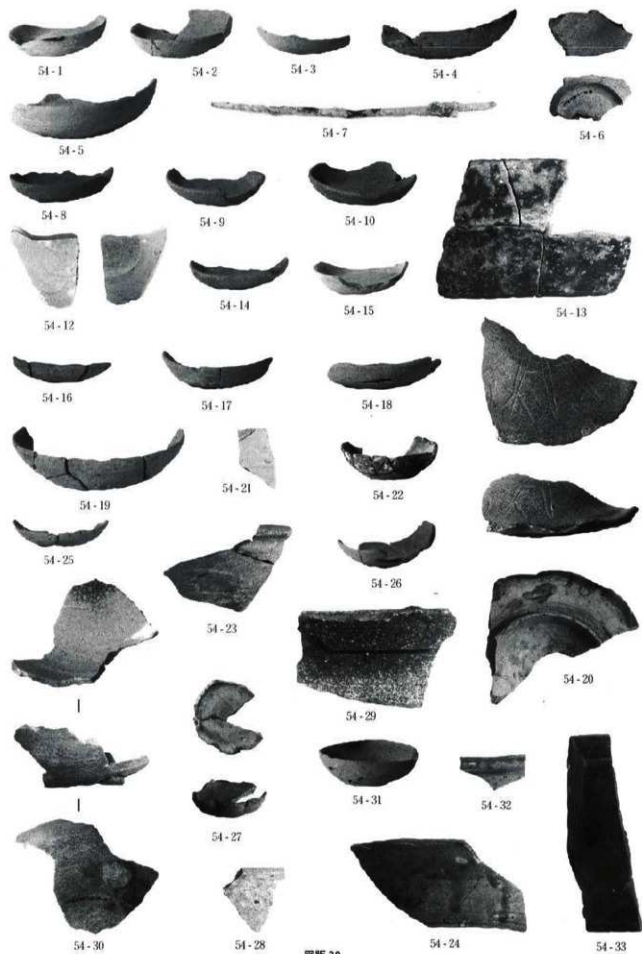
图版 36



圖版 37



图版 38



图版 39



遺構編 図 53-4



遺構編 図 53-1・2



遺構編 図 52-3



経塚外容器内出土
木製数珠玉



水晶製数珠玉



遺構編 図 53-1



遺構編 図 53-2

図版 40



遺構編 図52-2



遺構編 図52-1



遺構編 図53-3



遺構編 図51-1



経塚出土玉石



遺構編 図51-2

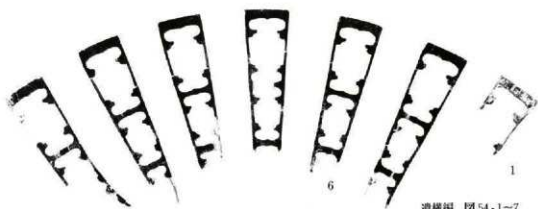


肩部拡大

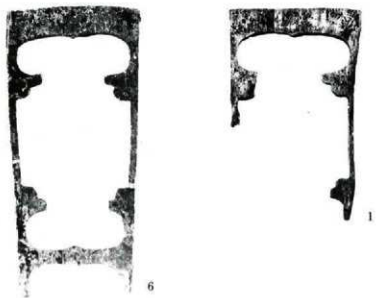
図版 41



道横圖 图 53-3-12



道横圖 图 54-1-7



图版 42



YAI01e
图 37-1



YAI01d
图 58-2



YAI01d
图 58-1



图版 43



YAI01a
图 56-2



YAI01a
图 56-1



YAI01b
图 56-3



YAI01c
图 56-4



YAI01f
图



YAI01g
图 56-8



YAI02
图 56-6



YAI01i
图 56-7



YAI03
图 58-3



YAI01e 图 57-2



YAI01e 图 57-3



YAH03 图 60-1



YAH01 图 59-2



YAH01 图 59-1



YAH03 图 60-2



YAH02a
图 59-3



YAH02b
图 60-3



YAH11a
图 60-8



YAH11b
图 60-4



YAH11c
图 60-5



YAH12a
图 60-9



YAH12b
图 60-10



YAH11c
图 60-6



YAH11c
图 60-7



YAH05 图61-1



YAH14a
图63-5



YAH14a
图63-4



YAH05 图61-2



YAH13
图62-6



YAH04b 图61-4



YAH04b
图61-5



YAH06 图62-7



YAH14b 图63-2
图版 46



YAH14b 图63-1



YAH14b 图63-3



YAH09
图62-1



YAH09 图62-2



YAH07 图62-3



YAH08 图62-5



YAH08 图62-4



YAH10
图62-8
63



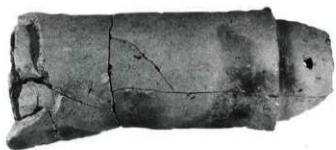
YAH10 图62-7
63



YAH15
图63-6



YAM01a
图 64-1



YAM01a
图 64-2



YAM01b
图 64-3



YAM01b



YAM01c
图 64-4



YAM01c
图 64-5

图版 48



YNI01a1
图65-2



YNI01a1
图66-2



YNI01a1
图65-1



YNI01a2
图66-1



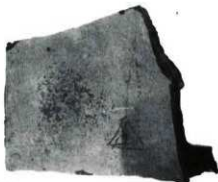
YN101b 图68



YN101b 图67



YNI01d 图70



YNI01d 图69-2



YNI01d 图69-1



YNI01e1 图71-2



YNI01e1 图71-1



YNI01e2 图71-3



YNI01f 图72-3



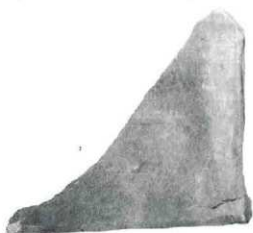
YNI01f 图72-1



YNI01f 图72-2



YNI01k 图74-1



YN101h1 图73-1



YN101h2 图73-2



YN101h3 图73-3



YN104 图76



YN103 图75-1



YNN01 图75-5



YN106 图74-2



YN106 图74-3



YN105 图75-4



YN03a
图83-1



YN03a
图83-2



YN01c 图83-5



YN03b 图83-3
图版 55



YN03b 图83-4



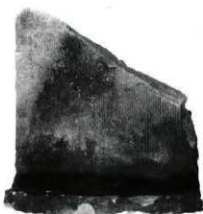
YN01a 图81



YN01b 图82



YNII03 图78



YNII01
图77-1



YNII13
图77-2

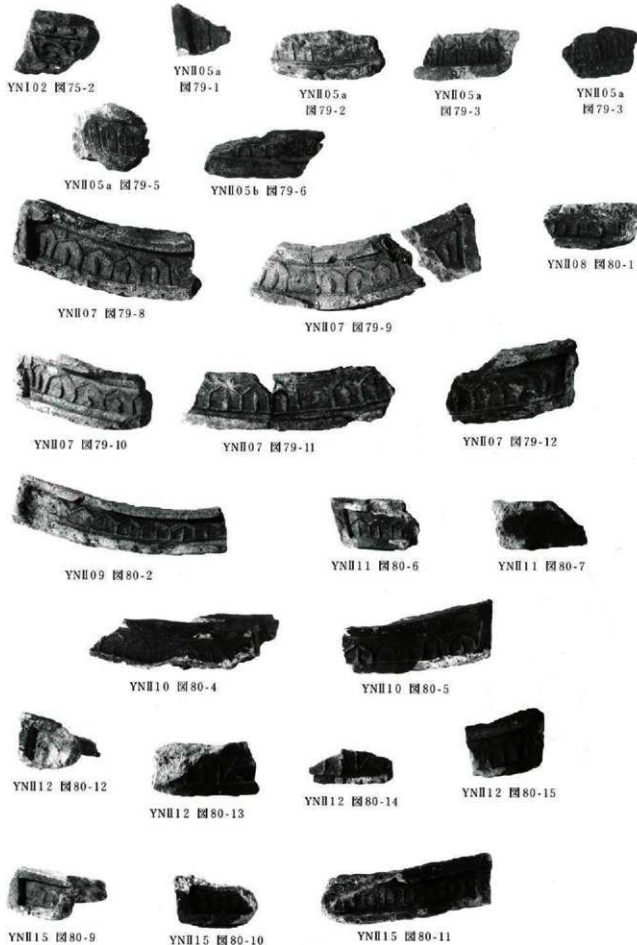
图版 57



YN06 图79-7



YN09 图80-3



图版 59

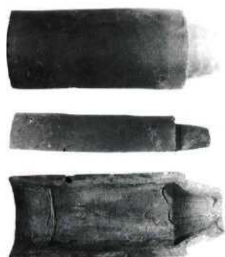


图 86-3

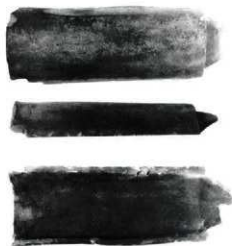


图 85-4



图 86-2



图 85-3



图 85-1



图 85-1



图 84-2



图 86-1



图 86-4



图 87-1



图 87-2



图 87-3



图 87-4



图 87-5



图 87-4





图 88-1



图 88-2



图 88-3



图 88-4



图 89-1



图 89-2



图 89-3



图 89-4



图 90-1



图 90-2



图 90-3



图 90-4

图版 63



图91-2



图91-3



图112-7



图91-1



图87-6



图 94-1



图 94-2



图 94-3



图 94-4

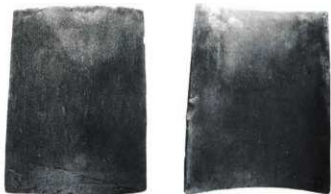


图 92-1



图 92-2



图 93-2

图版 65



图 95-2



图 95-3



图 96-1



图 96-2



图 96-3



图 96-4



图 99-3



图 99-4



图 99-5



图 100-3



图 100-4



图 100-1



图 100-2

图版 66



图97-1



图97-2



图98-1



图98-2



图99-1



图99-2



图101-1



图101-2

图版 67



图 102-1



图 102-2



图 103-1



图 103-2



图 104-1



图 104-2



图 105-1



图 105-2





图105-2



图106-1



图106-2



图107-1



图107-2



图107-3



图104-3



图91-4



图91-6

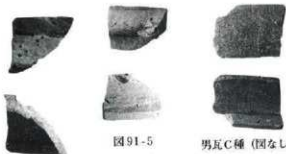


图91-7

图91-5

男瓦C種 (国なし)



图109-1



图109-2



图110-1



图111-3



图111-7



图110-5



图111-5

图版 70



图111-6



图108-1



图108-6



图108-4

图108-5



图108-7

图108-8

图108-2

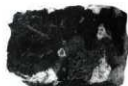


图112-1

图112-2



图112-3

图112-5



图112-4

图版 71



YMI01a



YMI01b



YMI01c



YMI02



YMI05



YMI04e



YMI04b



YMI04a



YMI06



YMI06



YMI03



YMI01a



YMI01b



YMI042a



YMI042c



YMI03a



YMI03b



YMI03c



YMI07a



YMI07b



YMI06a



YMI06b



YMI06c



YMI05a



YMI05b

圖版 72



YO101a
图 117-1



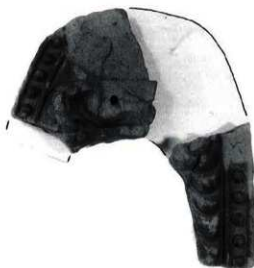
YO101a
图 117-2



YO101a
图 117-3



YO101d
(珠文なし)
图 119-3



YO101d
图 119-1-9



YO101d
图 119-8



YO101e
图 119-11



图版 73



YO101f
图 119-12



YO101c
图 118-2·4·5



YO101b
图 117-4



YO101b
图 117-8



YO101c
图 118-1



YO101b
图 117-7



YO101b
图 117-6



YO101 图 124-1



图版 74



YO101
图 124-2



YO102 图 124-4



YO102a



YO102a
图 120-3



YO102b



YO102a
图 120-4



YO101b
图 120-7



YO102a
图 120-5



YO102b
图 120-9



YO102f 图 123-2



图版 75



YO102d
图 123-1



YO102e
图 123-3



Y0102e
图 122-1



Y0102e
图 122-2



Y0102e
图 122-3



Y0102e
图 122-7



Y0102e 图 121-3

图版 76

考 察 編

考察編目次

永福寺跡正面の山から発見された経塚に関連して	青山学院大学名誉教授 吉田章一郎	251
永福寺跡の上木遺構及び仏教関係遺物について	鶴見大学教授 大三輪龍彦	260
永福寺跡建築遺構の考察	鶴見大学講師 鈴木 巨	262
永福寺跡の庭園遺構について	日本庭園協会副会長 龍居竹之介	268
永福寺跡出土の金工	文化女子大学大学院教授 中野 政樹	271
永福寺跡出土の漆製品	鶴見大学教授 中里 壽克	276
永福寺跡一帯の古植生について	千葉大学名誉教授 田畑 貞寿 恵泉女学園短期大学助手 宮内 泰之	281
史跡永福寺跡の古環境変遷	株式会社パレオ・ラボ 鈴木 茂	284

永福寺跡正面の山から発見された経塚に関連して

吉田章一郎

1 経塚小考

平成8年度の調査で、伽藍正面の山から経塚が発見されたが、鎌倉では、これ迄確実に経塚と認められる遺構は発見されていなかった。故赤星直忠先生が、逗子市小坪の山上で、和鏡と硯を発見された事があるが、その時先生が、これを経塚であろうと言われているが、これなどが、鎌倉市及びその周辺地域を含めての唯一の発見例であったのではないかとと思われる。先生は、その時、鎌倉には「やぐら」に寫経石を埋納している例がよく見られるが、それなどは特殊な形をした経塚であったのではないとも言われている。⁽¹⁾

鎌倉に於ける経塚についての文献資料としては、「吾妻鏡」の寛元三年十月大の項に、

十二日 癸酉 天晴る。久遠壽量院において、如法華經十種供養あり。導師は本覺院僧正。すなわち今日永福寺奥山に奉納せらる。これ大納言家の御願として、日來勤行書寫せらるるところなり。とある。⁽²⁾ 尚、寛元三年は西暦1245年である。

この吾妻鏡の史料は、將軍頼朝(1218-1236)の時に、寫経が納められた事を示しているときれているが、赤星先生は、これについて、その遺構を探したが発見出来なかったと、前記の報文に記されている。

この外、経塚関係の文献資料としては、「鎌倉市史、史料編、第四」に、「續燈庵文書」(山ノ内圓覺寺塔頭)として、

経筒銘

(崇演 北條貞時)

當 寂勝園寺禪門十三年、如法書寫

妙典一部

元亨三年十月十九日

敬
左衛門尉藤原光時
白

という史料があげられている。元亨三年は、西暦1323年である。そして、その注に、

コノ経筒及ビ次ノ骨壺ハ大正十二年ノ関東大震災ノ際破損セリ、イマ東京都世田谷區荻野三七彦氏所蔵ノ拓本ニヨリテ、コノニ取ム

とある。

今回の環境整備事業に関連して、伽藍の周辺地域の発掘調査が何回も行われたが、平成8年度の調査報告書では、伽藍背後(西側)の山に設けた「トレンチ23」で、表土の下の茶灰色土層から瀬戸折縁鉢、魚住捏鉢、砥石、かわらけ、永福寺1期瓦片等が出土している。13世紀代の遺物は確認されなかったが、長い期間、この場所は何かの儀式等に使用されていたのではないかと窺われると述べている。

また「トレンチ23」で表土を剥ぐと、直径55cmの土塚が検出され、直立した状態で埋納されていた「常滑壺」と、蓋の代わりに壺の口縁部に載せられた鏡、更に伏せた状態で、山茶碗系の捏鉢が出土したと誌されている。常滑壺の中には土は殆ど入っておらず、中国産の銅銭3枚と、直径1cmほどの水晶製の数珠玉1個が出土したといい、埋納時期については、14世紀中頃と考えられるとしている。

その外、前述の土塚の西側に、もう一つの土塚が検出され、中から常滑焼の捏鉢が出土したが、視乱

が著しく、委細は不明であるが、前述の土壌よりは若干古いのではないかと報告書では述べている。

伽藍正面の山で経塚が発見された時、或いは、これが「吾妻鏡」にいう寛元三年の時のものではないかと考えた事もあったが、その位置が奥山とは違っているので、この考えは成り立たないと思った。その時、西側の山の「トレンチ23」のものについては、伽藍正面に立ってみれば、丁度奥山の位置にあたり、筆者は、或いはこれが寛元三年の時のものかも知れないと考えた事もあったが、前記の報告書では、これが経塚というものの条件を具備しているとは考えにくく、また遺物も14世紀中頃のものとと思われるので、これを「塚」として扱ったのではないと思われる。

結局、寛元三年に作られたと思われる経塚については、現在の所、その位置は掴められていないが、奥山という事に関連して考えてみると、西ヶ谷、杉ヶ谷方面にも永福寺に関連した附属建物と思われる遺構も見られるといい、寺域も、この方面に広がっていた様で、寺の奥山と言ってもよい位置にあたり、或いは、このあたりの山に経塚があったかも知れないという考え方も捨てきれない。

注1 赤星直忠「鎌倉の経塚」(考古学雑誌42-4、昭和32年)

注2 「永福寺跡—平成8年度」(第2分冊)(鎌倉市教育委員会、平成9年)にあげられた史料から引用。

付記

神奈川県における経塚から出土した渥美焼としては、山北町の山北中学校の校庭より出土したものがあつた。(「山北町史、史料編」平成12年3月)。この遺物は山北町教育委員会に保管されている。

II 渥美焼(鎌倉出土)小考

今回発見された経筒外容器が、渥美焼であった事に関連して、鎌倉市内に於ける渥美焼の出土状況を知らたいと思ひ、市関係の発掘調査報告書を中心に調べて見たのであるが、以前から言われていた事ではあるが、常滑焼と伴出する遺跡が多い事を実感した。

所謂、都市遺跡の場合、出土した遺物の相互関係、とくに年代関係などを掴む事はなかなか難しい場合が多い。鎌倉に於ける渥美焼と常滑焼の関係についても同様であるといえる。

そして、最近の都市遺跡の発掘調査報告書には、出土遺物の数量的記載のあるものが多く見られる様になってきている。その点、鎌倉に於いても同様である。そこで今回は、この方面から渥美焼と常滑焼の関係をみたら、どうなるであろうかと考えたのである。

資料としては、現在、筆者の手許にある鎌倉市関係の発掘調査報告書などの中で、遺物について数量的記載のあるものを中心とし、数量的記載はないが、遺物観察表などから計算出来るものについては、筆者が計算したものも含まれている。勿論、これで全資料を網羅したものではないが、大体の傾向はつかめるのではないと思われる。

1. 鎌倉に於ける常滑焼と渥美焼の出土傾向

(1) 鶴岡八幡宮境内^(註1)

	常滑焼	渥美焼	比率
直会殿用地	195	5	96:4
研修道場用地	1000片以上	110	91:9

(2) 東勝寺^(註2)

常滑焼	渥美焼	比率
532	6	99:1

(3) 円覚寺旧境内遺跡 (注3)

常滑焼	渥美焼	比率
555	9	98 : 2

(4) 大倉幕府周辺遺跡群

① 雪ノ下3-607外 (注4)

常滑焼	渥美焼	比率
346	19	95 : 5

② 雪ノ下4-580-10外 (注5)

常滑焼	渥美焼	比率
40	3	93 : 7

③ 二階堂字住柄38-1 (注6)

常滑焼	渥美焼	比率
39	7	85 : 15

④ 大倉耕地562-16 (注7)

常滑焼	渥美焼	比率
24	3	89 : 11

(5) 政所跡 (注8)

雪ノ下3-970-2外

常滑焼	渥美焼	比率
693	6	99 : 1

(6) 北条時房・顕時邸跡

① 雪ノ下1-271-4 (注9)

常滑焼	渥美焼	比率
165	20	89 : 11

② 雪ノ下1-273イ (注10)

常滑焼	渥美焼	比率
171	4	98 : 2

③ 雪ノ下1-272 (注11)

常滑焼	渥美焼	比率
436	78	85 : 15

(7) 北条高時邸跡

小町3-426-3 (H12)

常滑焼	渥美焼	比 率
255	92	73 : 27

(8) 北条小町邸跡 (泰時・時頼邸) (H13)

雪ノ下1-377-7

常滑焼	渥美焼	比 率
526	74	88 : 12

(9) 上杉氏憲邸跡

浄明寺1-699外 (H14)

常滑焼	渥美焼	比 率
153	2	99 : 1

(10) 横小路周辺遺跡

二階堂字荏柄10-64 (H15)

常滑焼	渥美焼	比 率
279	4	99 : 1

(11) 若宮大路周辺遺跡群

① 雪ノ下1-198-6 (H16)

常滑焼	渥美焼	比 率
1,273	39	97 : 3

② 御成町819-1 (H17)

常滑焼	渥美焼	比 率
304	32	90 : 10

③ 御成町123-5 (H18)

常滑焼	渥美焼	比 率
2,595	82	97 : 3

(12) 蔵屋敷遺跡 (H19)

小町1-103-7

常滑焼	渥美焼	比 率
3,674	200	95 : 5

(13) 千葉地東遺跡 (H20)

御成町12-18

常滑焼	渥美焼	比 率
228	42	84 : 16

(14) 米町遺跡

① 大町2-2308-1 (H21)

常滑焼	渥美焼	比 率
215	2	99 : 1

② 大町2-2315 (H22)

常滑焼	渥美焼	比 率
1,917	116	94 : 6

(15) 名越ヶ谷遺跡 (H25)

大町4-1888

常滑焼	渥美焼	比 率
1,557	46	97 : 3

(16) 材木座町屋遺跡

① 材木座1-890-7 (H24)

常滑焼	渥美焼	比 率
520	11	98 : 2

② 材木座1-364-1外 (H25)

常滑焼	渥美焼	比 率
1,344	2	99.9 : 0.1

③ 材木座2-217-6外 (H26)

常滑焼	渥美焼	比 率
796	26	97 : 3

(渥美焼には湖西を含む)

(17) 由比ガ浜地区

① 由比ガ浜4-1136 (H27)

常滑焼	渥美焼	比 率
10,584	6	99.9 : 0.1

② 由比ガ浜3-1175-2外⁽¹²⁸⁾

常滑焼	渥美焼	比 率
1,050	29	98 : 2

(8) 三浦半島方面

① 蓼原東遺跡⁽¹²⁹⁾

横須賀市久里浜

常滑焼	渥美焼	比 率
200	25	89 : 11

② 八幡神社⁽¹²⁹⁾

横須賀市久里浜

常滑焼	渥美焼	比 率
70	14	83 : 17

③ 熊野社下⁽¹²⁹⁾

横須賀市久里浜

常滑焼	渥美焼	比 率
5	0	

④ 池子遺跡群⁽¹²⁹⁾

逗子市池子

常滑焼	渥美焼	比 率
476	21	96 : 4

この様に見てくると、今回とりあげた遺跡では、その殆どで、常滑焼が90%を越え、低くても70%はあり、圧倒的に常滑焼の方が多く出土している。

これに対して、常滑焼と渥美焼が多数出土している岩手県平泉の場合をみると、その「柳之御所」の何回かの発掘調査の結果⁽¹³⁰⁾によると、両者は略同数出土の場合もあるが、渥美焼が常滑焼よりも多い場合もあり、鎌倉の場合とは違った状況を呈している様に思われる。

何故、この様な状態になったのであろうか、その事を考える前に、一応、渥美焼と常滑焼について見ておきたい。

注1 直会殿用地発掘調査報告書(鎌倉市八幡宮直会殿用地発掘調査団)(昭和58年)

研修道場用地発掘調査報告書(鎌倉市八幡宮研修道場用地発掘調査団)(昭和58年)

注2 東勝寺跡一第3・4次遺構確認調査報告書一(鎌倉市教委)(平成10年3月)

注3 円覚寺旧境内遺跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14)(平成10年)

注4 大倉幕府周辺遺跡群(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10)(平成6年)

注5 大倉幕府周辺遺跡群(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17)(平成13年)

- 注6 大倉幕府周辺遺跡群(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9)(平成5年)
- 注7 大倉幕府周辺遺跡群(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17)(平成13年)
- 注8 政所跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15)(平成11年)
- 注9 北条時房・顕時邸跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16)(平成12年)
- 注10 北条時房・顕時邸跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15)(平成11年)
- 注11 宗室秀明「鎌倉市・若宮大路周辺の事例」(貿易陶磁研究会集、鎌倉大会資料集)(平成11年)
- 注12 北条高時邸跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12)(平成8年)
- 注13 北条小町邸跡(奈時・時朝邸)(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12)(平成8年)
- 注14 上杉氏忠邸跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11)(平成7年)
- 注15 福田誠「鎌倉市・大倉地域周辺の様相」(貿易陶磁研究会集、鎌倉大会資料集)(平成11年)
- 注16 若宮大路周辺遺跡群(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16)(平成12年)
- 注17 若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書(御成町819番地1地点)(若宮大路周辺遺跡群発掘調査団)(1999年)
- 注18 若宮大路周辺遺跡群(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15)(平成11年)
- 注19 蔵屋敷遺跡(鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会)(昭和59年)
- 注20 千葉地東遺跡(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書 10)(昭和61年)
- 注21 米町遺跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17)(平成13年)
- 注22 米町遺跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11)(平成7年)
- 注23 名越ヶ谷遺跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16)(平成12年)
- 注24 材木座町屋遺跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16)(平成12年)
- 注25 材木座町屋遺跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13)(平成9年)
- 注26 材木座町屋遺跡(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11)(平成6年)
- 注27 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘報告書(由比ヶ浜4-1136地点)(由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団)(平成9年)
- 注28 長谷小路周辺遺跡(由比ヶ浜3-1175-2外地点)(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10)(平成5年)
- 注29 中三川昇「三浦半島に於ける中世前期の貿易陶磁について」(貿易陶磁研究会集、鎌倉大会資料集)(平成11年)
- 注30 柳之御所発掘調査報告書、第24次、第25次(平泉町文化財調査報告書 19)(平成2年)
- ・柳之御所発掘調査報告書、第27次、第29次(平泉町文化財調査報告書 24)(平成3年)

2. 渥美焼と常滑焼

渥美焼、常滑焼は所謂「灰釉陶器」の流れを汲んで作られ始められたといわれている。

渥美焼は、平安時代の後期には作られ始められたと思われる。その窯は渥美半島の略々全域に分布しており、その数は100群、500基以上にのぼるといわれている。⁽⁸¹⁾

渥美焼には、その年代を考える資料が多く見られる。古く熊野本宮から出土した渥美焼の経筒外容器に、「保安二年」(1121)の銘がある事⁽⁸²⁾や、田原町の大アラク古窯址から藤原顕長という名前を刻した大甕が発見されている。⁽⁸³⁾彼は、保延2年(1136)に三河守となり、途中、遠江守になっているが、またもどって久壽2年(1155)まで、その任にあったといわれている。(公卿補任)。

また渥美町には、東大寺復興時(建久6年、1195)に、その瓦を焼いた窯があるが、そこから、甕なども出土しており、窯址出土の遺物の年代決定の時の一つの規律とされている。

その外、伊勢国の各地で発見された瓦経、経筒などに、「瓦工、三河国平四郎」とか、承安4年(1174)と刻されたものがあり、これらが渥美焼の年代を考える時の基準となっている。

渥美焼の編年については、小野田勝一氏は、これらの資料を基準として、12世紀初めには生産が始め

られているが、鎌倉時代末を待たずに廃絶されたのではないかといわれている。^(註4)

常滑窯については、平安時代から中世にかけての古窯址群は「知多半島古窯址群」と呼び、中世後期から近世にかけてのものを「常滑窯」と呼ぶという意見もあるが、ここでは、半島に分布する古窯を「常滑窯」と呼ぶことにしたい。

常滑焼については、現在500基にのぼる窯址があるといわれており、その編年に関しては、中野晴久氏によると^(註5) 12型式に分けられ、1 a 型式を12世紀第1四半期を中心とし、以後1 b 型式、第2型式～第5型式と分け、第5型式を13世紀の第4四半期に当て、この時期まで渥美焼の生産が行われた可能性は乏しいとされている。そして、それ以後を6型式～12型式に分け、12型式を16世紀後半とされている。

鎌倉における渥美焼、常滑焼の編年については、河野眞知郎氏^(註6) は、全体を8期に分け、「第Ⅱ期」(13世紀前半)には、渥美焼、常滑焼は相拮抗しているが、第Ⅲ期(13世紀中葉から後葉)になると渥美焼は減少傾向になり、常滑焼、瀬戸焼が量を増し、第Ⅳ期(13世紀末～14世紀前葉)に於いては、常滑焼、瀬戸焼が極めて多く見られるとされている。

服部実喜氏^(註7) は、鎌倉時代を6期に分け、(第Ⅰ期～第Ⅵ期)、その第Ⅱ期(13世紀第1四半期)に猿投窯、渥美窯、常滑窯の製品が搬入されているが、量的には猿投窯の製品が多く、第Ⅲ期(13世紀第2四半期)には渥美窯の製品が主体を占め、出土量も多く、また常滑窯の製品もあるとされ、第Ⅳ期(13世紀第3四半期)も渥美窯の製品が主体を占めているが、第Ⅴ期(13世紀第4四半期～14世紀第2四半期)になると、渥美窯の製品は殆ど姿を消し、常滑窯や瀬戸窯の製品が増加し、第Ⅵ期には瀬戸窯、常滑窯の製品が主体を占める様になったといわれている。

注1 「田原町史・考古編」昭和46年

注2 小野田勝一「常滑・渥美」(日本陶磁全集8)昭和52年

注3 注1と同じ

注4 注2と同じ

注5 中野晴久「常滑・渥美」(概説、中世の土器・陶磁器)(中世土器研究会編、平成7年)

注6 河野眞知郎「鎌倉における中世土器様相」(「古代末期～中世に於ける在地系土器の諸問題」神奈川考古、21)昭和61年

注7 服部実喜「中世鎌倉における陶磁器構成の時代的変遷」(貿易陶磁研究、)5、昭和60年)

3. 渥美焼の衰亡

以上の様な諸氏の意見によれば、时期的には若干の違いはある様であるが、渥美焼は鎌倉時代の半ば頃には、鎌倉には入って来なくなった様である。

筆者は、嘗つて渥美半島の田原町で窯址の発掘をした事があったが、^(註8) その時、前述(257頁)の大アラコ窯の事が話題になり、藤原顕長銘のある甕の出土があった事や、附近の阿志神社が式内社である事などから、この附近は国司の直接の管轄下にあったのではないかという意見が出た事を思い出した。また、奥州藤原氏の首都ともいえる平泉の柳之御所から渥美焼が多数出土している事も、この様な事が背後にあったのではないかと思われるのである。

渥美半島には、伊勢神宮の神戸、御厨、御厨が多くあった。律令制の崩壊によって、経済的に危なくなった伊勢神宮は、御厨や御厨を開拓する事によって、それを乗り切ったとよく言われている。御厨や御厨は、その特産物を神宮に差し出し、調や庸を免除されたといわれている。渥美半島の御厨、御厨の多くは、渥美焼を神宮に差し出していたのではないかと思われる。

峰岸純夫氏は、渥美焼は、東国各地の莊園年貢や、御厨年貢、伊勢大神宮役夫工米などの輸送の迎え船に積まれて、東国各地にもたらされたのではないかといっておられる。^(註9)

ところが、武士階級が興隆してくると、地方行政を行う為に守護、地頭が置かれる様になり、これらと御厨、御箇の間で紛争が生ずる事が間々あった様で、三河国でもこの様な事があった事が吾妻鏡に記載されている。これらの事が渥美焼の生産をやめる方向へと向かわせたのではないと思われる。

それに加えて、小野田勝一氏が言う様に、^(註1) 焼成技術の衰退という様な事も加わって、渥美焼は衰亡していったのではないと思われる。そして、その時期は、鎌倉時代中期の事ではないかと思われる。

注1 渥美半島の窯業遺跡 (田原町教育委員会) 昭和46年

注2 峰岸純夫、「常滑焼・渥美焼の東国伝来の背景」(常滑焼と中世社会) 平成7年

注3 吾妻鏡、正治元年(1199年)三月二十三日の條

正治元年(1199年)六月十六日の條

注4 小野田勝一「渥美窯の成立と終末」(「常滑・渥美」日本陶磁全集8) 昭和52年

史跡永福寺跡における宗教的遺構と遺物

大三輪龍彦

永福寺は文治五年（1189）奥州征伐から帰った源頼朝の発願によって十二月九日に事始めが行われた。「吾妻鏡」によれば、「奥州において、泰衡管領の精舎を覽せしめ、當寺花構の愚府を企てらる。且つは數萬の怨霊を宥め、且つは三有の苦果を救はんがためなり。」と平泉の寺を見て、數萬の怨霊を宥め、三有の苦果を救うために永福寺の建立を発願したという。この記事のとおりとすれば永福寺は鎮魂・慰霊の寺ということになる。

ところが、この寺の工事は順調には進まなかった。飢饉や鎌倉の火事、さらに頼朝の上洛によるといふ。ようやく御堂供養を迎えたのは建久三年（1192）十一月二十五日のことであった。供養導師は法務大僧正公顯が勤めている。公顯は三井寺の天台宗寺門派の僧侶であった。したがって、創建当時の永福寺は天台色の強い寺であったと言える。

永福寺の本堂は、二階堂と称され、平泉の二階大堂と呼ばれた中尊寺の大長寿院を模したものであったという。永福寺西側の山裾にこの本堂を中心に北側に薬師堂、南に阿彌陀堂の三堂を複層でつなぎ、前面に堂前池を配していた。さらに、薬師堂と阿彌陀堂からは池に向かって翼廊が伸び、その先端には釣燈がつけられていたことが発掘調査によっても確認されている。このような伽藍配置には二つの要素が含まれているような気がする。つまり、三堂部分は宗教的空間、翼廊部分は寝殿造り的な鎌倉幕府の離宮的空間であったのではないだろうか。そのことはひとまずおくとして、ここでは宗教的空間である三堂部分について考えてみることにしたい。

発掘調査の結果から、三堂の規模は二階堂で桁行五間六四尺、梁行五間五八尺、阿彌陀堂では桁行五間五四・七五尺、梁行四間四一・七尺、薬師堂は桁行五間五五尺、梁行四間四二尺であった。これをみると三堂のうちで二階堂の規模が大きく、阿彌陀堂、薬師堂は二階堂よりも規模が小さく同規模であったことがわかる。建久五年（1194）十二月二日、鎌倉の御願の寺社の奉行人について沙汰があった。「吾妻鏡」によれば、「鶴岳八幡宮」大庭平太景義藤九郎盛長右京進季時因書允清定「勝長壽院」因幡前司廣元梶原平三景時前右京進仲業豊前介実景「永福寺」三浦介義澄品山次郎重忠義勝房成尋「同阿彌陀堂」前掃部頭親能民部丞行政武蔵大藏丞頼平「同薬師堂」豊後守季光「華人佑康清平民部丞盛時」とあって、永福寺と永福寺阿彌陀堂と同薬師堂を分別して記載しており、永福寺はあくまでも二階堂を指している、三堂が対等一体のものではなかったことを示している。これは「吾妻鏡」建仁三年（1203）十一月十五日条の寺社奉行を改める際にも同じ表記を使っており、寛元二年（1244）七月五日条では、「永福寺ならびに両方の脇堂修理の儀あり。今日事始めなり。」とあって、二階堂に対して阿彌陀堂や薬師堂は脇堂であった。さて、この本堂であった二階堂であるが、その本尊については明らかではない。「吾妻鏡」にもそれに関する記述は見当たらない。「玉林苑」一永福寺勝景一に（「前略」）さても靈場を拝し奉れば。安養の聖容は無辺の光を垂。淨瑠璃医王善逝。一代牟尼の尊像。（後略）と三種の仏の尊名が出てくる。「安養の聖容」は安養極楽浄土の阿彌陀如来、「淨瑠璃医王善逝」は東方瑠璃光浄土の当主で医王如来ともよばれる薬師如来、「一代牟尼の尊像」は釈迦牟尼如来のことであり、このうち、阿彌陀如来と薬師如来は三堂のうちに堂があり、消去法によれば、三堂の中に尊名の無いのは釈迦如来だけとなる。従って、尊名の付けられていない堂は二階堂だけとなるので、二階堂の本尊は釈迦如来であった可能性が高い。さらに、大分県の臼杵市にある「臼杵石仏群」の中には多くの半肉彫の三尊磨崖仏があるが、これらは、天台教義に則って造られたといわれている。その配置をみると、中央に釈迦如来、向かって右に薬師如

来、向かって左に阿彌陀如来である。

天台宗の根本教義は法華一乗であり、それからいっても、創建期において、天台宗専門派の強い影響下にあった永福寺の本堂である二階堂の主尊は釈迦如来であった可能性は極めて強い。堂前池の存在によって、これを浄土庭園と見做し、従来、二階堂の本尊が阿彌陀如来とする見解が強いが、現世仏である釈迦を中心とした法華曼荼羅の世界を具現化したのが三堂と堂前池からなる永福寺伽藍であったのである。建久三年（1192）十一月二十五日の御堂供養の時には曼荼羅供が修されている。

創建当初は、天台色の強かった永福寺も時が経つにつれ、東密の影響を受けることとなる。特に、鎌倉時代後期には極楽寺忍性が別当となり、弘安三年（1280）の鎌倉大火によって焼失した二階堂の復興を実現させている。

ところで、永福寺の宗教的性格であるが、史料のみで限り、永福寺で行われた仏教行事は、曼荼羅供、御禮佛、一切経供養、舍利会であり、中でも一切経供養はかなり積極的に行われていたようである。永福寺の境域では2ヶ所から経塚と思われる遺構と遺物が検出されているが、その詳細は吉田章一郎氏の考察に譲りたいと思うが、永福寺の宗教的遺構の中心は経塚にあったのかもしれない。『吾妻鏡』寛元三年（1245）十月十二日条には「十二日癸酉天晴る。久遠壽量院において、如法華經十種供養あり。導師は本院僧正。すなはち今日永福寺奥山に奉納せらる。これ大納言家の御願として、日來勤行書寫せらるるところなり。」と、他寺院で書寫供養された写経も永福寺に納められたことがわかる。おそらく永福寺が鎌倉での納経所としての機能を担っていたものと思われる。

出土遺物の中で注目されるのは堂前池の北東部で検出採集された木製卒塔婆である。「南無阿彌陀仏」の六字名号を墨書したものは市内の各所から検出されているが、ここでは「大日如来」の墨書のあるものが検出されている。これまで述べてきたように永福寺内では大日堂の存在を示す史料はない。史料にないからといって、寺内に大日如来が祀られていなかったとはいえないが、この卒塔婆の存在は特異である。卒塔婆そのものは、検出地点の奥の亀ヶ淵には中世墳墓群や茶毘所跡が見つかったので、その供養のためのものとも考えられる。しかし、ここで注意しなければならないのは栃木県足利市の禅崎寺跡の存在である。

禅崎寺跡には現在禅崎八幡宮があり、この八幡宮は足利義兼の墓所に建てられた赤御堂の跡といわれている。八幡宮の建つ谷の西側の八幡山麓には他に同レベルで3ヶ所の建物跡があり、その位置には足利氏代々の墓所がかつて存在していたという。建物はいずれも東面しており、東前面には圍池が拡がっている。圍池は中島と北から張り出す岬を持つ。規模の違いはあるが、永福寺と極めて類似した構造を持っている。この圍池の北東にあたる地点の平地には間口三間、奥行三間の東に向拝を持ち、構のある建物跡が存在していて、そこにはかつて大日如来が安置されていたという。永福寺の大日如来の墨書卒塔婆の検出された位置とほぼ同じである。或いは、寺地の北東部に大日如来を配することになにか意味があるのかも知れないが分からない。類似性のみを指摘しておく。

いずれにしても、永福寺の場合壮大な伽藍が存在するが宗教的徴証が希薄なことが特徴ともいえる。

1 時期区分

永福寺中心伽藍の建築は、造営時期をもとに四期に分けられる。

第Ⅰ期は、源頼朝による創建期で、建久3年(1192)から同5年の三カ年にわたる造営で二階堂、阿弥陀堂、薬師堂よりなる永福寺の中心伽藍が整った。

第Ⅱ期は、寛元・宝治の修理である。中門、翼廊が再建され、三堂は解体を伴う再建に近い修理がなされた。建長元年(1249)11月23日、再建供養が行われた。

第Ⅲ期は、弘安3年(1280)10月28日火災後の再建である。三堂と門廊の規模は第Ⅰ期・Ⅱ期と同じであるが、屋根はすべて檜皮葺もしくは柿葺に改められたと推定される。同10年8月24日、二階堂修理供養が行われた。

第Ⅳ期は、延慶3年(1310)11月6日焼失後の再建である。三堂は再建されたが、規模など不詳である。翼廊は再建されず、北翼廊東端に二間に一間の建物が建てられた。

このように、第Ⅰ期からⅢ期まで、三堂と門廊はほぼ同規模であったと推定される。以下、主として創建期の建築について考察する。

2 中心伽藍の構成と計画寸法

中心伽藍は東面して並立する二階堂と左右の薬師・阿弥陀両堂よりなる。中央の二階堂は方五間裳階付仏堂と考えられ、両脇堂は三間四面堂である。二階堂と両脇堂の間を桁行五間の複廊で繋ぎ、両脇堂と複廊は二階堂と背面を揃えて後退して建てられた。また阿弥陀堂南面と薬師堂北面の各西二間目の位置に南・北両翼廊を構成する南北廊が取り付き、それぞれ五間目で東に折れて東面の池に臨む東西廊となり、その中間に中門が開かれた。このように永福寺伽藍の特徴は東池に臨んで三堂を並立する構成にあり、特に二階堂を前面に突出し、両脇堂と複廊を後退させている点が注目される。

二階堂の主屋は桁行五間(64尺)、梁間五間(58尺)の規模である。側柱心より外側8尺離れた位置に径2尺程の礎石が1間毎に据わり、また、側柱から雨落溝までは14尺程である。主屋外側をめぐる礎石は裳階柱または縁東の礎石と考え得るが、これを縁東とすると、主屋は重層で下層三手先、上層四手先斗拱の重厚な建築になる。それよりも京都風の裳階付二階堂の例よりみて、主屋は方五間三手先の建物で、その周囲に裳階が付くとみるのが妥当であろう。すなわち、二階堂は方七間、総桁行80尺、梁間74尺の規模になる。

二階堂左右の複廊は、二階堂と同じ建久3年に建立されたと考えられる。その理由は、複廊の梁間各11尺は二階堂の梁行柱間に合わせたもので、両脇堂のそれに合わないことである。両複廊の桁行柱間は南複廊が8.3尺等間、北複廊が8尺等間で各々異なるが、二階堂の中心から両複廊の南・北両端柱までの距離は等しく87尺であり、複廊の計画寸法は、北複廊の桁行柱間8尺等間、主屋裳階柱との間隔7尺と考えられる。

両脇堂は桁行五間(55尺)、梁間四間(42尺)の規模である。二階堂と両脇堂の中心間距離は、阿弥陀堂125.5尺、薬師堂126.5尺で、1尺の差がある。これは両脇堂と複廊の間隔を阿弥陀堂11尺、薬師堂12尺としたためである。また、二階堂の中心から南・北翼廊の東西廊内側柱までの距離は南翼廊195.5尺、北翼廊197尺で、1.5尺の差がある。このうち何れが計画寸法であろうか。197=87+55×2であり、北複廊北端柱から北翼廊東西廊の内側柱までの距離110尺は薬師堂の桁行55尺の2倍である。これは薬師堂北

側柱から東西廊外側柱までの距離が薬師堂の桁行寸法と同じことであり、北翼廊の197尺が計画寸法であったと推定される。

北翼廊の東西廊は中間に桁行15尺の中門を開き、中門両脇間を含めて西廊が桁行六間各柱間8尺等間、東廊が桁行五間各8尺等間で、その先に梁間9尺の妻庇が付き、総桁行は112尺である。すなわち、8尺間で14間が計画寸法であり、そのうち東妻庇の梁間を9尺とし、その分中門の柱間を1尺縮めたものと推察される。一方、南翼廊の東西廊は中門西廊が六間で、東廊は三間分を抽出したが、その先が破壊されていた。抽出した総桁行は88尺、計画寸法は桁行8尺等間で11間分、中門の柱間はその内の2間分16尺である。これは東西廊の先端が北翼廊のように妻庇の形にならないことを示唆する。『吾妻鏡』に、永福寺の釣殿がみえるので、南翼廊の先端には方三間程の釣殿の存在が推定される。南釣殿は、西南の中島越しに深く入り込む谷戸が見通せる位置にある。『玉林苑』永福寺勝景に「先目にかゝる釣殿」とあり、釣殿は、二階堂および橋とともに目立つ建物であった。

二階堂の正面には池の東岸と西岸を結ぶ梁間二間各8尺等間の橋が架けられた。創建当初の橋が最も長く桁行114尺程で、時期が下る程池の東岸を埋め立て橋が短くなる。橋の西岸の橋脚位置は三時期にわたり変化がなかった。二階堂東面裳階柱から西岸橋脚までの距離は約80尺、二階堂総桁行に等しく、二階堂の正面に80尺四方の前庭が想定されたことがわかる。

3 三堂および門廊の考察

1) 二階堂

二階堂は方五間裳階付仏堂である。平安末期から鎌倉時代の記録には、二階建の仏堂とともに裳階付仏堂を二階あるいは二階堂と記す。主屋の規模は桁行64尺、梁間58尺、柱間割は桁行中央間15尺、脇間13.5尺、端間11尺、梁行東第二間と三間が12.5尺、他の柱間11尺等間である。柱は径2尺程の丸柱と推定されている。軒出は12尺8寸程(茅葺外下角まで、以下同じ)、組物は尾垂木付三手先斗拱と考えられる。裳階は梁間8尺、径2尺の礎石よりみて1尺角程の大面取角柱を用い、軒出5尺程、平三斗であろう。裳階の軒先が主屋軒先と同じか、それより内に入る形は平等院鳳凰堂と同じ形式であり、この点は裳階軒先が主屋軒先より外に出る京都・法勝寺金堂や平泉・毛越寺金堂の形式と異なる。

二階堂の荘厳について、『吾妻鏡』建久3年10月29日条に「永福寺扉ならびに仏後壁の画図功を終る。修理少進季長これを画く。これは円隆寺に模せらる。画図に至りては一事以上彼の如く云々」とあり、堂の扉と来迎壁には円隆寺を模して絵画が描かれた。扉は主屋側柱通りに建てられ、裳階は吹放しであったと推察される。また『海道記』(貞応2年)に「次に東山のすそに望みて二階堂を礼す。これは余堂よりはるかにすぐれて感嘆および難し。第一第二、重なる檐には玉の瓦、鶯の翅を飛ばし、両目両足(仏像)の並び給へる台には金の盤、雁灯をかかけたり」とあり、屋根に鶯鷲もしくは鳳凰の飾りをつけていた。二階堂の本尊は釈迦如来である。堂内の荘厳については、鳥羽上皇御願の金剛心院釈迦堂が参照される。『本朝文集』に収める供養願文によると、釈迦堂は瓦葺三間四面裳階付の仏堂で「二階」といわれた。仏後障子の表裏に虚空会并靈鷲山の絵を図し、四面各々の扉の内に八相成道の儀式を図絵していた。仏壇には本尊皆金色一丈六尺釈迦如来像を安置し、同じく金色の八尺普賢・文殊二菩薩像各一体、五尺五寸四天王像各一体を安置していた。永福寺二階堂の母屋方三間は前二間通りと後方一間通りに分かれる。前二間は12.5尺等間で、梁間25尺、後一間は11尺であり、前二間が身舎に相当する。毛越寺金堂(円隆寺)を模したという二階堂は、本尊を身舎に安置したと考えられる。本尊は丈六の釈迦如来と推定され、仏壇は身舎背面中央間の来迎壁前に置く平安朝以来の形式であろう。身舎の上部架構は、平等院鳳凰堂と同じ二手先斗拱にて折上組入天井を上げる形式、後方一間部分は組入天井と考えられる。主屋

側柱の高さは、裳階柱との関係から、裳階床より22尺程と推定される。身舎の梁間は25尺であり、身舎柱と側柱が同じ高さのいわゆる殿堂形式とするのが格式ある二階堂にふさわしく、これによると身舎の天井高さは29尺程になる。主屋入側柱は上部を頭貫のみで繋ぎ、後方一間部分の西南および西北隅を壁とし、米迎壁とともにそこに壁画が描かれたと推定される。主屋の庇は繫虹梁の上に組入天井を張る形式であろう。屏絵の画かれた板屏の位置は正面中三間、両側面前一間と複廊が取りつく西第二間目、それに後戸が推定される。他は壁もしくは連子窓で、連子窓の場合も盲連子として内に壁画を描いたかもしれない。裳階は床を長押一本下げて柱間を開放し、正面中央三間の屋根を切上げる形式で、正面中三間の板屏は内法を高くしていたであろう。天井は化粧屋根裏、柱以下斗拱、桁、繫虹梁、化粧垂木など大面取りである。

屋根は三堂ともに本瓦葺である。永福寺の構成は中心の二階堂を前面に出して立体的に見せること、それに対して両脇堂と左右の複廊を後退させ、高さを抑制して控えめに見せる意匠であったと想像される。とすると、二階堂の屋根は立体的な母屋造が最も相応しいであろう。両脇堂はそれに合わせて入母屋造とする案が考えられる。二階堂の正面中間と左右前端間に設けた階段は擬宝珠柱を立てた登り高欄が付く。裳階柱から擬宝珠柱までの心々距離は正面7尺程、側面5尺程で、2尺の差がある。階段前面が擬宝珠柱心に一致するとして参考までに裳階床高を算出すると、正面階段を8級として踏面約8.3寸、蹴上を6寸程とすると裳階床高は5尺4寸程になる。また、側面階段を6級として踏面約7.8寸、蹴上を7.2寸程とすると裳階床高は5尺程になる。裳階柱の内側、主屋床下に木製基壇が造られた。基壇出は5尺、高さは2尺程と推定される。木製基壇は、第Ⅱ期に同じ高さの凝灰岩壇正積基壇に改修された。

2) 阿弥陀堂と薬師堂

阿弥陀堂と薬師堂は本瓦葺三間四面堂である。規模はともに桁行55尺、梁間42尺、柱間割は桁行中央間15尺、両脇と端間各10尺、梁行中央二間各11尺、端間10尺である。二階堂と同じ木製基壇上に建つ板敷の仏堂で、基壇の出4尺、高さ1.6尺、軒出約9尺、縁の出6.7尺である。柱間割に見られる両脇堂の特徴は、中央間を広く二階堂と同じ15尺とすることである。これは柱を太く木太い建物とし、また中央間に対する内法高さを低くして左右の廊への連続感をもたせることを意図したものであろう。

『吾妻鏡』建久5年11月7日条に、薬師堂の扉を建てたことがみえる。平成4年度の阿弥陀堂前方池の調査で、第Ⅰ期の池底から表面に螺鈿仕上げを施した断面八角形の木製部材の断片や金銅製飾金具が出土し、室内荘厳の様子が窺えた。二階堂と同様、両脇堂にも屏絵および壁画が図されたと推察されるが、それを伝える資料を欠く。同規模の例に、仁和寺の高野御室が大聖院内に建立し、保延5年11月に供養された檜皮葺三間四面の阿弥陀堂（無量寿院）がある。阿弥陀堂は四柱に極楽浄土、後壁に阿弥陀と観音・勢至各一体を図し、金色一丈六尺の阿弥陀如来を安置していた。また、薬師堂については毛越寺の金堂と嘉勝寺が参照される。両堂とも三間四面の主屋周囲に開放しの裳階を付けた建物で、金堂は本尊丈六薬師と十二神将を安置し、嘉勝寺は四壁並びに三面の扉に法華経廿八品の大意を彩画し、本尊丈六薬師を安置していた。永福寺両脇堂も本尊は丈六仏と推定され、母屋背面中間の米迎壁前に仏壇を造り、壁画、屏絵、柱絵が描かれたと想像される。両脇堂は母屋柱を側柱より高くした形式と考えられ、母屋は高さ17尺程の組入天井、庇は化粧屋根裏天井と推定される。側柱の径は1.5尺程、縁床より上の柱高さは二階堂の裳階柱より高い12～12.5尺程で、組物は出組もしくは二手先斗拱であろう。阿弥陀堂と薬師堂の正面に設けた擬宝珠登り高欄付の階段は縁束心よりの出が各々4.3尺と5.3尺で、1尺の差がある。参考までに両脇堂の縁床高を出してみると、阿弥陀堂の階段を5級とすると踏面約7.4寸、蹴上を6寸程として阿弥陀堂の縁高は3尺6寸程、また、薬師堂の階段を6級とすると踏面約7.8寸、蹴上を6寸程として

薬師堂の縁高は4尺2寸程と算定される。これは阿弥陀堂の地表面が薬師堂より約6寸高かったことを示す。

3) 南複廊と北複廊

複廊の計画値は桁行五間各8尺等間、梁間二間各11尺等間である。正面と背面に幅6尺の縁が付き、柱は径1尺程の丸柱、柱高さは縁もしくは床上より8尺程と推定される。⁹⁾屋根は切妻造木瓦葺、軒出は7尺程であり、三斗組もしくは出三斗組、二軒であろう。当時一般的な三棟廊と推定され、上部は虹梁板葎股に化粧屋根裏天井と考えられる。

建久3年11月、二階堂供養の時、両複廊は聴聞所に当てられたと思われる。『吾妻鏡』同4年11月27日条に、薬師堂（阿弥陀堂カ）供養の間、安田義資が艶書を投げ入れたという女房聴聞所は南複廊ではないだろうか。複廊は東側一間通りを廊とし、西側を部屋として囲い、東面に扉戸、南北両端に妻戸、西面に連子窓をたてていたと推定される。

4) 南中門と北中門

南中門は桁行一間（16尺）、梁間二間（12尺）各6尺等間の規模で、建て替えが認められた。主柱、袖柱とも丸柱とし、創建期の主柱は径1.7尺の掘立柱、袖柱は径1尺程の礎石立である。北中門は三期の遺構が確認された。規模は各期とも同じ桁行一間（15尺）、梁間二間（12尺）各6尺等間である。主柱、袖柱とも丸柱で、創建期には主柱径1.5尺、袖柱径1尺、ともに掘立柱であった。軒出は5尺程である。これにより、両中門は切妻造の四脚門と推定される。創建期の屋根材料は瓦葺もしくは檜皮葺と推定される。

中門の形式は同時代の四脚門を参照して、主柱を冠木長押で繋ぐ和様の四脚門と推定した。組物は大斗肘木もしくは平三斗、妻飾は虹梁板葎股、軒は二軒繁垂木である。内法高は唐敷居から冠木まで柱間の8割程、扉は鎌倉時代の絵巻に描く中門廊を参考にして外開き板扉とし、框付内側縦板張り、外側横棧打の形式と推定した。

5) 南翼廊と北翼廊

南翼廊は、東西廊南側が後世の溝により破壊されて遺構の残存状態が悪く、中門主柱位置に残る柱根と礎石掘方を基に平面規模を復元した。南北廊の梁間は11尺、桁行は隅間を除いて、四間各8尺等間、東西廊の梁間は12尺、桁行は柱間各8尺等間で、中門脇間を含めて西廊は六間であり、東廊は三間分を検出したが、その先が破壊されていた。内庭側に幅4.3尺程の縁が付く。南面と西面の縁は攪乱のため不明である。

北翼廊は三時期に及ぶ同規模の遺構を検出し、さらに第Ⅳ期に翼廊東端位置に桁行二間、梁間一間の建物が建てられたことを確認した。南北廊の梁間は11尺、桁行四間の柱間は北一間が9尺、他8尺等間である。東西廊の梁間は12尺、桁行は中門西廊が六間、東廊が五間で各8尺等間、その先に池に臨んで9尺の妻庇が付く。南北廊は三時期とも礎石立、それに対して東西廊は礎石と掘立柱を併用していた。すなわち、第Ⅰ期は西廊が礎石、中門と東廊が掘立柱、第Ⅱ期は中門を含めて東西廊すべて掘立柱、第Ⅲ期はすべて礎石立であった。柱は径9寸ないし1尺の丸柱である。妻庇東端の柱は7寸6分角程の四面取角柱で、面の大きさは1寸3分2厘、5.75分の1面である。¹⁰⁾これは第Ⅱ期の柱であるが、第Ⅰ期も同じ角柱であったと推定されている。

北翼廊南北廊の床組は、隅間を含めて梁行方向に大引を半間毎に渡して根太を受ける構造であり、特に柱位置では丸柱の側面から大引を抱かしている。この工法は平泉の嘉勝寺にみられるので、東石は第Ⅲ期に使用されたものであるが、創建期に遡る可能性がある。南北廊の東西両面に側柱からの出を異に

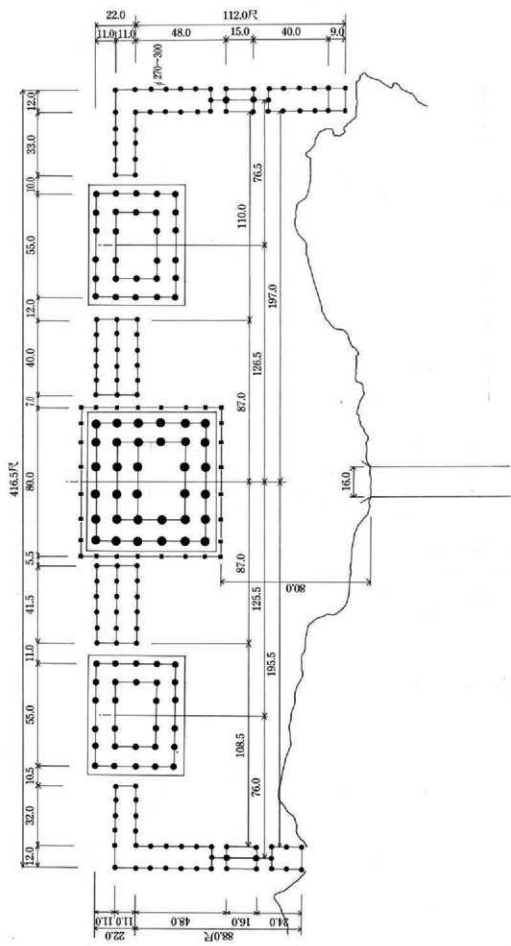
する縁東石と雨落溝石列が検出された。西面は縁幅4.3尺、雨落溝出6尺、東面は縁幅5尺、雨落溝出6.6尺である。東西で寸法が違うのは時期が異なることを意味する。東面の溝は石列の乱れや石材などから弘安頃の遺構と考えられているので、西面の遺構は第Ⅰ期もしくは第Ⅱ期に遡ると推定される。

中門西廊は床組の工法を示す資料を欠くが、南面の縁東石と雨落溝石列は南北廊東面のそれと同じ位置にあるので第Ⅲ期の遺構と考えられる。北面の雨落溝は側柱からの出が6尺であり、第Ⅰ期もしくは第Ⅱ期の遺構であろう。北面には縁がなく、西第一間と二間の位置に踏板を受ける東石が残存し、南北廊北端に妻戸を建てたらしい。また北面西第一間から三間の礎石間に残る地覆石（玉石列）は北面床下に壁が付くことを示す。これらは第Ⅲ期の遺構である。中門東廊では東妻庇を含む東四間までの柱間において、掘立柱の足元を地中で繋ぐ梁行方向の横架材を検出した。これは第Ⅱ期の遺構と推定されている。Ⅱ期の柱はⅠ期の掘立柱を地中で切断してその上に立てたものがあるので掘方が浅く、そのための補強と考えられるが、同じ条件にある東五間目の柱にそれがないので、Ⅱ期の東廊は東四間部分が板敷、東第五間から中門までが土間であった可能性がある。一方、東廊の南面に検出した縁東石と雨落溝石列は第Ⅲ期の遺構である。縁東石の残存状態から、第Ⅲ期の東廊は中門東柱の位置まで板敷であったことが知られる。以上のように、北翼廊の床は第Ⅱ期とⅢ期でやや異なることが推測できる。創建期の床は不詳であるが、第Ⅱ期と同じと考え、縁幅を4.3尺、軒出を5尺程と推定した。両翼廊の屋根は切妻造で、隅部が振開になる。屋根材料は基本設計では檜皮葺を提案したが、昭和60年度の発掘調査で南翼廊東端位置から第Ⅰ期の鎧瓦が出土し、その大きさは同形式の第Ⅰ期鎧瓦に比べて小型であることが指摘されている。したがって、屋根葺材料は今後の課題としておきたい。

翼廊の復元にあたり、板敷回廊の古式を伝える巖島神社回廊と春日大社御おおよび土間床であるが南北朝期の春日大社本社回廊を参照した。翼廊の高さは三堂および中門と密接な関係をもつので単独では決められないが、上記の回廊を参照し、一応の目安として縁もしくは床上よりの柱高さが桁行柱間8尺を越えないようにした。^{*)}上部架構は平三斗に虹梁豕扱首もしくは板葺股、軒出は5尺程、二軒半繁垂木と推定した。北翼廊東端の妻庇は大面取角柱を用いており、舟肘木、桁、繋虹梁、二重垂木など大面取を施す。翼廊屋根が瓦葺であっても、妻庇の屋根は檜皮葺であろう。柱間装置は内庭に面する柱間をすべて吹放し、外側を連子窓として北翼廊の南北廊北端に妻戸を立てる。妻庇は釣殿形式であるので、柱間を開放して三面に高欄付切目縁をめぐらした。

(注)

- 1) 『東國紀行』(仁治3年)に「二階堂はここにすぐれたる寺なり。風の聲、日にかがやき、(後略)」とある。
- 2) 『仁和寺諸院家記』所収の「古徳記」。
- 3) 南北朝期の春日大社本社回廊を参照した。
- 4) 平等院鳳凰堂の裳階柱は8寸5分角の大面取角柱で、面の大きさは1寸5分、5.67分の1である。
- 5) これについては、『营造法式』巻五・柱の項に廊の柱長さについて「もし廳堂などの屋内の柱は皆脊勢に随ってその短長を定め、下檐柱を以て剛とする。[もし副階、廊舎の下檐柱であるならば、長くても、柱間の広さ以上にはしない。]」と注記するのが参考になる。



永福寺跡の庭園遺構について

龍居竹之介

長年にわたる発掘調査は、まずそれ自体が大事業である。それだけにそこから得られた数々の成果は、貴重な知的財産でもあることを言をまたない。

国指定史跡永福寺跡の調査は、特に鎌倉時代の文化相を再発見する上で、意義深い作業である。昭和6年に赤星直忠氏や森福氏などによって着手された発掘調査が、紆余を経つつ断続する形で現在の環境整備事業にかかわるといふ目的のもと、大きな展開を見せたことは、社会的に遺跡の価値が認知されたためにほかならない。これも関係者の努力の賜物である。

そのような中で、実はもっとも発掘調査の困難なものが、庭園であろうかと考えられ、常に担当者諸氏の苦勞腐心のほどに、頭が下がるばかりである。そのような点に感謝し敬意を表しつつ、以下に永福寺跡の庭園遺構をめぐる二、三の所見を綴ってみたい。

建造物とのかわり

十分認識されているはずだが、つい忘れられがちなのは、建造物と庭園を一体として見ようという姿勢である。別個にとらえて考察を進めた結果、両者が整合せず判断に苦しむ例があるのはこのためだ。

永福寺の場合、二階堂を中心に北に薬師堂、南に阿彌陀堂が並び、そろって東面する形をとっている。これに付随する庭園は三堂全体を荘厳するものであると同時に、三堂それぞれの内外から眺めて別世界を感得させるようなものでなければならない。

平坦地の西側一杯に三堂を寄せて、東側に可能な限りの庭園部分をとったことは、これを計算に入れたの方策に違いない。[東関紀行]に「樓臺の荘嚴よりはじめて、林地のありとにいたるまで、殊に心とまりて見ゆ」といい、[海道記]に「見レハ又、山ニ曲水(木)アリ庭ニ怪石アリ。地形ノ勝タル、仙室ト云ツヘシ」とあるのは、三堂と庭園がよく融け合っ一仙境を生んでいたのを示しているものといえる。

周囲を山で囲まれた地形は、どこもなく平泉の金色堂東南下の大池跡あたりと似通った感じもするが、隔絶された世界を構築するときは、このような場が好適であろうこと想像に難くない。

三堂から池泉までの間に広がる平坦地は、行事のために必要であったろうが、池の東岸から眺めたとき、建造物の威容を助長させる意味でも大切な空間であった。池泉に建造物の姿を倒影させるための計算もふくんでいたかも知れない。

二階堂正面に架せられた橋の存在、これもまた見逃すわけにはいかない。架け替えられるごとに、その規模は変わっていくと考察されているが、それだけ早く三堂に近寄りたいとの意識が生じたためとも思えるし、池護岸の修景に力がこもってきたためだとも見ることができる。

北翼廊、南翼廊と池泉の関係も、解明が進められているが、時代によって遺水のもたらす景観の価値判断に差のある理由、意匠が変わる理由などについては、未知数である。実はこれも翼廊とのかわりを、さらに検証するべきだろう。

庭園の構成をめぐる

平安文化への傾斜から生まれた平泉文化、それは庭園を考える上でも、大切なキーワードである。寝殿造系統の建築にともなった、いわゆる寝殿造庭園の雰囲気をも十分に感じさせるものが、奥州にまで伝

挿したことは、驚嘆すべきことであろう。

その平泉文化をさらに関東へ引いたのが、源頼朝であり、その具現化が永福寺であったことは、誰しもよく知るところである。

平泉の毛越寺庭園は、寝殿造庭園についてのテキストブック『作庭記』をよく参照して生み出されている。隣接する観自在王院の庭も、少し離れた場所の無量光院の庭も、それぞれ同じである。

三堂の前に広庭をしつらえ、その先に池泉を構え、それをめざして翼廊をのびし、さらには池泉に橋を渡すといった構成は、平泉からの移入である。しかしそれは平安京で生まれ、黄金花咲く奥州に写されたという経緯を持った庭園であるから、完全なコピーとはいえない。

特に『吾妻鏡』にいう「数万の怨霊を宥め」といった創建意図から思うに、その行事の中心的存在となる二階堂建設への情熱が先行して、庭園の構成には特別な感懐などないままに、進化したとも考えられる。池泉の面積が三堂に比して大である割には、平面構成、立面構成ともさして複雑でないこと、あるいは景観上、重視すべきいわゆるビューポイントが少ないことなどから、それは感じられてならない。

数度におよぶ改修の結果、単純なものとなったという見方もあろうが、現在の知見だけからいえば、むしろ逆に手を加えてきていると考えられ、その意味では当初の姿は二階堂に比べて、おとなしいものであったともいえよう。

寝殿造庭園の橋は一般的に中島を結ぶ形で人を対岸に導く。従って二橋以上を架けることになる。一つの中島に兩岸から橋を渡す形が普通で、毛越寺はその一例である。これに対して永福寺の橋は一つであり、現在のところは中島も認めにくい。つまりこの橋は景観の上から重視されているようであって、機能的にはさほど力があつたものとは思えない。そのような点も、のちに阿弥堂前の橋の出現につながってくるのではないだろうか。

これもふくめて人の動線が判然としえないのは不思議である。北翼廊の遺水のありようの半端なことも同様で、これらが全体構成の中でどのように位置づけられていたかを考えてみると、まずは壮観を極めた平泉の形の移入に心をつくすことにスタートした「永福寺の事始」(『吾妻鏡』)であつたと、思い当たる気持ちもわいてくるのである。

いずれにしても、永福寺庭園はその構成についてさらに掘り下げる必要があるだろう。

庭園の細部意匠など

永福寺の池泉の汀線は洲浜が主となっている。ゆるい勾配の傾斜面に砂利を敷きつめるといったものだが、その間に景石を配してアクセントをつけている。

三堂前の西岸では洲浜が創建当時からつくられていたと考えられており、時期が下るごとに汀線の大方は洲浜と化していったようだが、現実には汀線の意匠で変化しやすいのは、洲浜である。護岸の位置変更を意図して行う場合は当然だが、砂利敷が崩落、陥没することによって、または水位の変化によってなどさまざまな事象により、洲浜の形状は変わりやすい。

逆にそれだからこそ、汀線全体を簡単に洲浜に変えるのだともいえよう。永福寺もたび重なる改修によって、ほぼ全面的に洲浜となってきたのは、当然のルートをたどってきたことであつた。

池中立石や岩島など、残された石の景観もいろいろある。いずれも創建期に成立したと考えられるものは、基礎をしっかりと固めて、手がたく立てたり組んだりしている。これに対して時代の経過につれて、基礎づくりを省くといった傾向が見え、景石に対するつくり手の安易な態度がのぞかれるようになる。

阿闍梨静空の弟子の静玄が頼朝に召し出されて、池に石を立てあるいは数十個の石を積んで岡のよう

にしたなどという『吾妻鏡』の記事とは大分ようすが違ってくるのである。

これからは、創建期が頼朝の直接の指示による工事であり、一丸となつての作庭ぶりであつたことが裏付けられよう。同時に仕事に当たる者すべてが怨霊を鎮めるとの意識をもっていたことも、骨のあつた仕事をさせることにつながつたのであろう。

北冥廊脇の遺水の変遷がたどれるようになった現在、いかに庭が人為によって相貌を変えられてしまふかといった点も、よく理解できるはずだ。

それは給排水の状況の変化に左右されるのかも知れないが、結局はどのような形に納めれば形がよろしいかという意識のもとに変容するといえよう。同様に見所をふやしたいとの思いが強ければ、石組が多くなつてくるのである。いわば追加景観である。

庭園の意匠に影響をおよぼす原因は多彩だが、以上のほかに大きな要因となるのは、植栽と周辺の植生の变化といった事態である。植栽は当初こそ計画的に進められるが、管理次第で姿が整わなくなり、景観は変わる。自然の植生の変貌は大きくいって、環境の変化にもつながってくる。

このような状況下にあると、永福寺の創建期の植物環境をとり戻すのは至難の技であつて、むしろ現在のありように、どれだけかつての姿が加えられるかといった折衷案におちつかざるを得ないのである。

庭園の要素である石、木、水はいずれも変容するのであつて、これが庭園の顔を変えていく原因でもある。細部意匠のありようの検討には、より一層の注意が必要なことは、いうまでもないところだ。

むすび

永福寺庭園の発掘調査が進み、その全貌が判然としてくるにつれ、改めて鎌倉時代の庭園がこれを契機として解明される日が近付いているような思いにさせられる。

反面、庭園は変わっていくという現実には直面させられるのも、発掘調査によつてなのである。その意味で庭園遺構ははっきり見定めて、現代の目で現在の環境の中に、いかに生かすかを、管理する目も備えて決定したい。

永福寺発掘調査によって発見された出土遺物はかなりの量に達しているが、瓦・土器・漆器に比べ、金属製品は以外と少なかった。完存して発見されるものはなく、いずれも断片であり、なかには罹災の跡を示すものが多く見られた。この点から、出土遺品は寺院焼失後、焼跡の整理が行われ、その際に見落されたと思われるものが、今回の発掘調査によって発見されたと考えられる。再利用できる金属品の少なかったことは焼跡整理が良く行われていた結果ともいえよう。

銅製品のうち、飾紙・銅釘・飾金具などの中には八双金具や角縁金具とおもわれるものがあり、これらは厨子・経机といった仏教関係の工芸品を飾った飾金具の一部とおもわれる。なかでも飾金具(平1図37-11)は宝相華文透彫したものであるが、観心寺藏金銅花瓶の透彫と文様・彫趣ともに近いものがある。

出土金工品のうち、明らかに仏具といえるものに幡頭飾金具3個(平4図15-3.4.5)がある。幡頭の吊金具であり、いずれも精緻な作技を示す格调の高いものである。その一つには山形をした宝相華唐草薄肉彫板の間に木製薄板を二枚重ね、左右からハの字状に挟み込められている。また他の幡頭金具には木片に布を縫い付けた跡を残している。このことから、これらが袈裟幡の幡頭を飾る金銅吊環金具であることが知れる。当初の袈裟全体を推測することはできないが、宝相華唐草文薄肉彫板を用いた精巧華麗なものである。出土品のなかに見られる金銅飾もこのような幡や華蔓に付属していたものであったとおもわれる。この幡頭飾金具は宝相華唐草文を薄肉彫した金銅板がもちいられており、その彫法や文様は瀬洲八幡宮所藏の神輿の幡裝飾金具に通ずるものがあり、制作期のほぼ近いものとみることができよう。

花草唐文金具(平5図13-28)、は表裏とも同文様の薄肉透彫板である。上部に吊座、下部に小穴が穿けられ、連結用の銅線が付けられており、天蓋や幡・華受の垂飾の一部とみられる。同じような金銅透彫飾金具は神奈川県称名寺藏の華蔓に下げられた垂飾にもみられる。

また珍しいものとしては蓮華蕾形(平6図23-14)が挙げられる。これは木製黒塗の蓮蕾形に金銅の受座をつけたもので、なににもちいられたのか問題もあるが、その形状は伊勢神宮正殿の高欄居玉と類似しており、高欄の裝飾の一つではないかと考えられる。飾金具のうち、蓮華飛雲文透彫断片は表面に蓮華と飛雲の文様を薄肉彫したもので、罹災し変形しているが、当初の華麗さをおもわすものであり、仏像の宝冠の一部などが考えられる。

これら出土した金銅飾金具はわずかであるが、当時の寺院莊嚴の豪華さを偲ぶことができるといえよう。

このほかに貨幣が出土している。八枚を数えるが、いずれも当時わが国において通用されていた中国舶載の宋明銭である。

鉄製品の多くは建築用の鉄釘である。大形のものがあり、なかには翼廊先端の角柱とそれに伴う横木を留めていた状態で出土したものもある。また、鋸・目鋸や雁釘などといった建築用の特殊な鉄器がみられる。大形の鉄鋸は堂舎などの大きな建築物の構造材を打ちつけて結合していたものであり、雁釘は部材と部材の間をとめたものであろう。

鉄製利器としては刀子・剃刀がかなり出土しているのが注目される。剃刀のなかには刃部が研ぎ疲れ磨り減ったものがある。日常長く使用されていたものが、土中したといえよう。

飾金具関係

- 1 飾紙(図15-23)、1個 銅製鍍金 八花形 径1.6、中心穴径0.4 3区の瓦積み面下出土

- 2 飾鉾(図15-15)、1個 銅製 菊座平円頭 釘付 径0.8、釘長1.9池中より出土
- 3 釘(図15-32)、1本 銅製 長2.8、1区J面出土
- 4 釘(図15-33)、1本 銅製 長3.6、断面方形 6溝出土
- 5 釘(図15-18)、1本 銅製 長2.6、棒状 2区池汀線出土
- 6 飾金具(図15-16)、1個 銅製 縦3.0、横4.3、厚2.5、断面蒲鉾形 小口金具内部に木質遺存 3区池中出土
- 7 飾金具(図15-14)、1個 銅製 板状 長14.5、幅0.7、両端と中央に小穴あり、そのうちの一つに銅釘が残る。両端は花先形をしており、器物の縁飾である八双金具とおもわれる。1区J期池中出土
- 8 飾金具(図15-15)、1個 銅製 板状 長さ(34.8)、細長い板状で、上下二条の細線の間に小珠文連線を打ち装飾している。小穴があり、器物の縁飾金具とおもわれる。1区池中出土
- 9 縁飾金具(図15-19)、1個 鍍金 長7.0、3区池中出土
- 10 飾金具(図15-13)、1個 銅製鍍金 宝相華唐草文透彫 長16.0、両端花先形で目釘穴を持つ。透彫板に裏板を当てており、形状から器物の角を飾る八双金具とおもわれる。翼廊先端池中出土
- 11 飾金具断片(図37-4)、1個 銅製 蓮華飛雲文透彫 長8.5、厚0.3、銅板の表面に蓮華と飛雲を薄肉彫した断片である。火災に遭ってかなり変形しているが、当初はやや反りをもっていたものとみられる。文様は一部欠損しているが左右相象的であり、下の蓮華の花弁端に3箇所、飛雲の端部に1箇所、それぞれ銅製の釘が貫通し裏面から叩きつぶされており、なにかに打ちつけられていたものと考えられる。仏像の宝冠などが考えられる。A面覆土出土
- 12 飾金具(図37-6)、1個 銅製鍍金 宝相華文透彫 長16.0、幅5.0、高0.2、中央は無地で中心に1辺0.8センチの角形小穴が裏より穿たれている。当初はここにさらに飾金具で飾られていたものとおもわれる。左右の花心に取付用とおもわれる小穴があり、銅釘が貫通している。形状からみて須彌壇の高欄などにとりつけられた飾金具と考えられる。A面覆土出土
- 13 飾金具(図37-5)、1個 銅板 鍍金 厚約0.3、薄肉彫 冠冠の部分かともおもわれる。A面覆土出土
- 14 縁金具(図39-12)、1個 銅製鍍金 現存長14.7、途中で折れ曲がる。表面に銀色に輝く部分があり、銀鍍金し上に金鍍金をほどこした可能性も考えられる。2区トレンチ7、8内C面覆土出土
- 15 幡頭金具(図37-1)、1個 金銅板製 縦9.0、横3.6、魚々子地に宝相華文を線刻した厚0.1センチ金銅板を表裏二枚合わせとし、先端に吊金具を取付けたもので、左右上下四個所を釘で穿ち内部の木心をとめている。被災による熱をうけて変色しているが、鍍金していたものである。A面覆土出土
- 16 幡頭金具(図37-2)、1個 金銅板製 縦8.7、横5.0、魚々子地に宝相華文を線刻した厚さ0.3センチの金銅板を表裏二枚合わせとし、先端に吊金具を取付けたもので左右上下四個所をとめるが内部の木心は遺存していない。被災による熱をうけて変色しているが、鍍金していたものである。A面覆土出土
- 17 幡頭金具(図37-3)、1個 金銅板製 縦8.4、横4.6、魚々子地に宝相華文を線刻した厚0.2センチ金銅板を表裏二枚合わせとし、先端に吊金具を取付けたもので、左右上下四個所を釘で穿ち内部の木心をとめており、布裂を縫い付けた糸の痕跡と小穴がのこる。A面覆土出土

幡頭金具の15.16.17はいずれも同様の形式・技法によるのであるが、寸法・文様・彫技法出など若干の違いが認められる。15は地金も厚手で最も繊細な彫技法を示している。金銅板にはさまれた木片は薄板を二枚重ねたもので、左右からハの字状に組まれ挿し込められている。16は木片を欠けており、17には布を縫い付けた跡を残している。薄肉彫と透彫の表現はことなるが、この金具にみられる文様と類似する

ものに頼瀨八幡宮所蔵の国宝神輿に附属する金銅透彫轡がある。金具の形状や宝相華文線刻の様相からみて何れも鎌倉時代のものといえる。

- 18 飾金具(図32-1)、1枚 銅製 長5.6、左右対象の花唐草文薄肉透彫金具で表裏とも同様である。上部に吊座をつくり下部には小穴があげられ銅針金に通っている。天蓋や轡・華曼の垂飾の一部とみられる。Ⅲ期遺構面覆土出土
- 19 蓮華蕾形(図28-19)、1個 花卉部は径5.0、現存長10.2、被災し傷損しているが、花蕾部は木製黒塗塗で、縦に刺ぎ合せ、鉄錠で2個所を接合している。焼損し詳らかでないが、蕾の外面は黒塗金箔貼の可能性もある。花蕾受は金銅製 径9.8、厚0.3、表面に花卉状の文様が薄肉彫されている。焼損しているが裏面と蕾と接するところに鍍金が残る当初は全面に鍍金されていたといえる。蕾と金銅受の取付には長1.6-1.8、の銅釘が4本用いられている。3区A面まで出土
- 20 金銅鈴(図15-17)、1個 銅鍛製鍍金 径1.7、なかに珠を入れる。頭部に吊金具がつく。2区汀線出土
- 21 金銅鈴(図33-12)、1個 銅鍛製鍍金 径1.8、ややつぶれているが依存状態はよい。鍍金の跡が残っている。Ⅲ期遺構面出土
- 22 数珠(図42-11)、1個 水晶製 算盤形 径0.9、穴0.15 5溝注ぎ口付近出土
- 23 金銅製品(図32-3)、1個 3.2×4.2、凸面にわずかに鍍金残る。被災し原形をとどめていないが飾鉾かとおもわれる。Ⅲ期遺構面覆土出土
- 24 金銅製品(図32-2)、1個 鑄造 厚さ約0.6、鍍金の跡あり、仏像の一部かとも考えられる。Ⅲ期遺構面覆土出土
- 25 金銅製品(図33-11)、1個 円形 径7.0、厚0.4、側面に波状文様の象嵌があり、径0.5センチの穴が対角線上に開けられている。用途不明。Ⅲ期遺構面覆土出土
- 26 金銅製品(図32-4)、1個 用途不明 残存長2.7、厚0.3、Ⅲ期遺構面覆土出土
- 27-1 大観通宝(平4図17-5)、1枚 銅製 中国北宋銭 1107年初鑄 池中出土
- 27-2 洪武通宝(平4図17-5)、1枚 銅製 中国明銭 1368年初鑄 池中出土
- 28.29.30 嘉祐通宝(平5図13-24.25.26)、3枚 中国北宋銭 1056年初鑄 Ⅲ期遺構面出土池中
- 31 天聖元宝(平5図13-27)、1枚 中国北宋銭 1023年初鑄 Ⅲ期遺構面出土池中
- 32 熙寧元宝(平7図42-23)、1枚 Ⅳ期2面直上出土
- 33 政和通宝(平7図42-24)、1枚 Ⅳ期2面直上出土
- 34 寧寧元宝(平7図44-35)、1枚 中国宋銭 初鑄1068年 池中出土

鉄製品

- 1 鉄製品(昭63図38-1)、1個 筥状形 全長2.3、幅1.3-0.5、厚0.4、3区池中出土
- 2 鉄製品(昭63図38-2)、1個 薄板状 残存長5.3、幅2.1、厚1.5、片側に径0.3センチの小穴あり。1区Ⅲ期遺構面出土
- 3 刀子(昭63図38-3)、1本 現存長13.2、闊幅1.2、茎は長く目釘穴1個 切先を欠損する研ぎ減りが著しい。2区池中出土
- 4 刀子(平5図13-17)、1本 長18.3、途中で折曲損 片刃 Ⅱ期遺構面覆土出土
- 5 刀子(平6図23-10)、1本 残存長12.1、幅2.0、片切刃 目貫穴を穿つ。3区A面まで出土
- 6 刀子(平7図42-22)、1本 現存長16.2、幅2.7、Ⅳ期2面直上出土

- 7 刃物(昭63図38-4)、1本 全長20.3、片刃の刃部と東部からなり、剃刀とおもわれる。3区池中出土
- 8 剃刀(平5図13-18)、1本 残存長14.7、中央は身幅が狭くなっている。Ⅱ期遺構面覆土出土
- 9 鉄鎌(図35-18)、1本 全長10.0、鎌先長5.8、Ⅱ期遺構面覆土出土
- 10 鉄釘(図9-25)、1本 約長18.0、礎石No.37出土
- 11 鉄釘(図9-21)、1本 欠損 礎石No.38出土
- 12 鉄釘(図9-22)、1本 欠損 礎石No.34出土
- 13 鉄釘(図9-24)、1本 約長18.0、礎石No.40出土
- 14 鉄釘(図9-23)、1本 約長さ15.0、礎石No.36出土
- 鉄釘 はいずれも建築用の釘でありとくに13鉄釘は翼廊先端の角柱とそれに伴う横木を留めていた状態のまま発見されている。
- 15 鉄釘(図39-13)、1本 長さ8.4、断面四角形 池中より出土
- 16 鉄錐(図35-16)、1本 長さ9.6、Ⅱ期遺構面出土
- 17 鉄釘(図35-17)、1本 長さ6.6、Ⅱ期遺構面覆土出土
- 18 鉄釘(図36-30)、1本 長さ6.7、Ⅱ期遺構面覆土出土
- 19 鉄釘(図36-31)、1本 長さ9.0、Ⅱ期遺構面覆土出土
- 20 鉄釘(図36-29)、1本 長さ12.5、Ⅱ期遺構面出土
- 21 鉄釘(図40-5)、1本 長さ15.0、柱穴3(Ⅱ-2期・Ⅲ期の横の取付き)出土
- 22 鉄釘(図40-3)、1本 長さ15.1、布掘り4掘方内出土
- 23 鉄釘(図40-4)、1本 長さ15.2、布掘り4掘方内出土
- 24 鉄釘(図33-14)、1本 残存長10.2、幅1.9、厚0.45、Ⅲ期遺構面出土
- 25 鉄釘(図28-18)、1本 長さ13.7、幅0.7、途中で折れ曲がる 3区A面まで出土
- 26 鉄釘(図35-15)、1本 履 釘長12.0、幅1.6、厚0.5、Ⅱ期遺構面出土
- 27 鉄釘(図39-14)、1本 履 釘長10.7、幅1.2、厚さ0.5、Ⅱ期遺構面出土
- ..26.27は部材と部材の間をとめるために用いられる履釘である。
- 28 鉄錠(図39-8)、鍛鉄製 1本 長さ27.0、大形製品であるので堂舎などの大きな建築物の構造物を打ちつけて結合していたものと考えられる。2区C面直上堆積層出土
- 29 鉄目錠(図33-13)、1本 長さ16.5、幅1.7、厚0.4、角釘長7.8、池中Ⅲ期遺構面出土
- 30 鉄錠(図35-13)、1本 長さ18.0、幅1.6、厚0.4、Ⅱ期遺構面出土
- 31 鉄製品(図39-15)、1個 板状 長さ10.0、端に小穴あり、錠前の部品かもしれない。池中出土
- 32 骨製品(平5図13-29)、1個 筒形 径2.5、高2.2、用途不明。Ⅲ期遺構面出土
- 33 筭(平4図17-6)、1本 骨製 長さ16.5、幅1.4、1区2溝出土

1 はじめに

三方を低い山に囲まれた、さほど広くもない平地は建久5年(1191)に甍を連ねて、中央に二階堂、左に阿彌陀堂、右に薬師堂が建ち、前方には池を配して永福寺として繁栄した所である。その栄華は永く続かず弘安3年(1280)に二階堂が焼失、弘安10年(1287)に新装だったが、応永12年(1405)には永福寺瓦上の記録があって、この頃を境に廃絶の道をたどったらしい。

もともと永福寺は頼朝の奥州遠征と関連が深いことは良く知られており、この遠征によって見つけた中尊寺の二階大塔等に強い刺激を受け、又その戦いによって死んだ義経、泰衡をはじめとする多くの霊を鎮魂するためであったと吾妻鏡は記している。

ここで取上げる6点の螺鈿器の残欠は平泉と鎌倉を史実と同じ様に関連づける遺品と考えられ、又日本螺鈿史の上からも極めて興味深いものである。(図16-1,2,3,6,7、図37-8、図版10、図版25)史実とどの様に係わり、螺鈿史の上でどの様に評価されるべきかを考察してみたい。

2 螺鈿遺品

永福寺跡出土螺鈿遺品は7点ある。その内1点は阿彌陀堂前の池跡より、他の6点は薬師堂前の池跡より出土したものである。いずれもその様式は黒漆地螺鈿であるが、不幸にも螺鈿はまったく遺存せず、又総て焼痕を持つ断片である。したがってどの様な什器として使用されたものか見定めることが出来ないのがほとんどである。

7点の内、6点について現状を記す次の様になる。

(1) 黒漆地螺鈿装棒状断片(図37-8、図版25)

長さ約17.5cm 幅約3.3cm 横幅2.7cm 面取り幅約1.0cm

両端に焼痕を持つ棒状断片。面取りを設る。螺鈿跡は上下面、横面、面取り面の各面すべてに認められ、文様は宝相華文、各面独立した構成にする。

いずれの面の螺鈿文も文様の一部を遺存する状態にあり、完全な宝相華文を復元するには難しいが、ある程度は確かめられる。

少し幅の広い上面では幅一杯の開花文痕跡が断片の一方の端に認められる。両側面では長三角形の半開花文に蕨手形のつるを配した文様と葉文と小つる文を組合わせた単文が5cmほどの間隔をおいて点飾される。面取り部は半開花文を中心に左右に葉文とつる文を細長く構成した文様がみられるが、あるいは上面の開花文と一組の文様として意匠されているかもしれない(開花文は上面の幅から少し両端をはみ出して面取り面にかかっているためである)。

嵌装技法は上面ではおそらく素地貼付法^(註1)を用いたと思われ、両側面は大体彫り法^(註2)によっていると思われる。現状では大体彫り法に施した漆地粉はどの様な素材のものか認めにくい。発掘報告書(注3)では黒色漆地粉を認めている。素地上には漆下地を薄くつけ、上に塗漆している。

(2) 黒漆地螺鈿装列形断片(図16-7、図版10)

長さ約14.0cm 幅約6.5cm 厚さ約1.5cm

断片の長手の一方にゆるい割り形を作り、短側面の一方はこの断片の小口部分が遺される。断片全体は照りむくりになっている。この断片の状態ではどの様な器形か不明だが、案の膜板の様なのであろう。螺鈿跡は表面に遺される。表面では開花文を中央に四方に展開する密度の濃い宝相華文が断片上方に置

かれる。その右辺にも宝相華文の一部が見える。この中間帯に小蝶文が1個点飾される。

裏面には螺鈿跡はあまり残されていないが、唯一残される半開花文は表面のと同形を示し、おそらく同じ規模の螺鈿文が嵌装されていた可能性がある。螺鈿も1個認められる。

嵌装技法はすべて大体系形によると思われる。

(3) 黒漆地螺鈿断片 (図16-1、図版10)

最長13.0cm×4.5cm厚さ1.5cm

かなり強いカーブの列形を持つ湾曲した断片で、それに直行する一方の側面は直線的で割目の様に見えるが漆溜りがあり、小口と考えられる。

螺鈿跡は表裏にあり、表面では中央に大きめの開花文を置き、左右につるを多用した宝相華文が延びる。裏面では小蝶文が2個ある。開花文の螺鈿は29mm×20mm。

螺鈿嵌装法は、表面の螺鈿跡に列形に添って切り込みがみられ、大体系形法によると思われる。

(4) 黒漆地螺鈿装膜板断片 (図16-2、図版10)

幅約6.5cm高さ7.0cm厚さ1.3cm

案などの膜板の一部と思われるもので、一方の横側面にはゆるい列形を削り出し、その対側面には幅広の柵を造り出している。縦側面の片方には麦漆状のものが付着しているのでこの面もおそらく脚に差し込まれていたと考えられる。

螺鈿跡は表裏にあり、表面では縦側面に接近して開花文が横向に置かれ、そこから上方に向かってつる文が延び半開花文に達する宝相華文を構成する。裏面では布目が見え、布着せが施してあり、小蝶文の螺鈿跡がある。

螺鈿嵌装法は上端広柵に添って切込みが見え、大体系形法によるものと思われる。

(5) 黒漆地螺鈿装燈台断片 (図16-6、図版10)

径約15cm厚さ5.7cm

燈台の最上部に取付ける燈明皿を受ける台、燈械とみて間違いなからう。ほぼ半分を焼失するもつるのびる宝相華文が一単位となって周囲におそらく4個所配され、その中間に半開花文をつるを組合せた小螺鈿文が占める意匠である。

螺鈿嵌装法ははっきりしない。おそらく大体系形法であろう。ただ螺鈿嵌装部分である側面は曲面を示すから、螺鈿は平面ではなく、器体の曲面に合わせた凸形の螺鈿が用いられたであろう。最大螺鈿文は開花文で、24mm×20mmあり、1mm以上の湾曲が必要である。

(6) 黒漆地螺鈿装柱断片 (図16-3、図版10)

長さ約17.5cm厚さ2.1cm

板状の端部とも思えるが細い柱状の片が焼損したものであろう。現在、柱側面とも見える面(A)と、それに直角に続く面(B)に細長の宝相華文跡が認められる。(A)面の一部に布着せがある。又(B)面の反対面には螺鈿跡はない。

螺鈿文は(A)面でみると開花文(18mm×17mm)が柱の上方に向け、上下に2個並べてつるで結び、上端には横開花文を据えて細長宝相華文とする。ほぼ同じ宝相華文を(B)面の同位置に飾っている。この一単位の螺鈿文は全文遺存し135mmある。

嵌装法ははっきりしないが、布着せ面と螺鈿跡底面に少し差があり、大体系形法と考えてよいだろう。

3 考察

調査した永福寺跡出土の6点の螺鈿遺品は、以上の様にいずれも焼痕を持っているが、前記した堂が

焼失した時代に池に投棄されたものであることは明らかである。ここで問題となるのは焼け出された年代ではなく、これらの遺品がいつ造られたか、あるいはどこで造られたかにあると思われ、その解答は遺された遺品に刻まれた螺鈿文様、螺鈿技法からしか得られない。前記の観察の結果をまとめてみたい。これら6点の遺品から次の様なことがわかる。

- (1) 6点の螺鈿文様の様式は共通すること
- (2) 黒漆地としていること
- (3) 螺鈿文様は12世紀の様式を持つこと
- (4) 嵌装技法に素地貼付法、大体彫法をみること
- (5) 螺鈿文充填に黒色漆地粉が用いられること
- (6) 螺鈿厚さは1mm以上あること

等が特徴として共通してあげられる。

(1) については先述の様に遺品の1点は阿弥陀堂前池より、他の5点は薬師堂前池より出土している。両堂は創建年代が前後するが、室内具も創建と同時に用意されたと考えてもその差は数年であり、様式の変化があるとは考えにくい。共通の様式を示すのは当然であろう。

(2) については、12世紀の現存する螺鈿遺品の多くは沃懸地螺鈿にしており、黒漆地螺鈿は少数派である。少なくとも黒漆地螺鈿は12世紀螺鈿の特徴を示すとはいえない。12世紀に入って黒漆地螺鈿は螺鈿鞍の装飾として多く採用され、又法隆寺及び東大寺には黒漆地螺鈿卓が遺され、これらを勘案するとむしろ13世紀の特徴として認めてよいかもしれない(図16-7、図版10)。永福寺跡出土品をこれらと比較するとこれらが自ずと明確になってくる。しかし答えはそれほど単純ではない。

(3) について(2)と考え合わせるとそこに矛盾が浮上ってくる。螺鈿文様はいずれも13世紀様式とは思えず、12世紀の特徴を持つことがその矛盾点である。中尊寺蔵螺鈿室内具と比較すると、永福寺出土品の螺鈿がかなり類似することは偶然とは思われない。全体的な螺鈿文構成については、まったく同じとは云えず異なる雰囲気を持っているが、その違いはいわば「個性」の範囲であり、印象としては中尊寺螺鈿遺品との類似を否定出来ないし、頼朝の奥州遠征という史実の裏付けを意識せざるを得ない。

12世紀末、永福寺創建の頃の螺鈿遺品は遺されておらず、12世紀から13世紀にかけて螺鈿がどの様な過程を踏んで発展したかはまだ良くわかっていない。逆説的に云えば永福寺螺鈿遺品がその空隙を埋めることになり、したがって螺鈿史上では重要な遺品といえるだろう。時代的に永福寺遺品に最も近い遺品の一つは巖島神社の二振の螺鈿飾太刀ということになろう。この飾太刀には寿永2年(1183)銘の朱塗の外箱が付属し、飾太刀の製作年代の下限を知ることが出来る遺品である。

この二振の飾太刀はもちろん黒漆地ではなく沃懸地となっており、螺鈿は一振は双鳳文、他は宝相華文としている。これらはその伝来からすれば京都で製作されたと確実にいえる遺品であることは重要である。つる文をやや長目にして花文と花文を結ぶ様式は、永福寺出土遺品に極めて類似することは明らかであり、永福寺出土遺品の製作年代を示唆するのに十分な遺品といえよう。

中尊寺螺鈿室内具類との比較ではどうか。実の所、これら室内具11点の内螺鈿が残存している具は4点しかなく、他は痕跡のみになっている。4点の内2点は数個を遺すのみで、残る2点は大長寺院蔵の螺鈿平座案と螺鈿平座燈台である。ここで直接比較出来るのは(5)の燈檠断片である。中尊寺の燈台は平安時代唯一のもので、これに付属する燈檠は径12cmあるが、永福寺出土品は15cmもあり一廻り大きい。中尊寺蔵燈檠の螺鈿は簡単な文様で、螺鈿による装飾の中心は基台と竿にある。基台の螺鈿は変絵風に4箇所飾るが、文様は開花文を中央におき、それから四方につるを延ばした意匠となってお

り文様は単調である。

螺鈿平座案は高さ76cm、幅68cmほどある大形の前机で、4本の長い脚と甲板側面、框の側面に螺鈿を飾るが、脚の螺鈿は1本にのみ遺されるにすぎない。この螺鈿文は正面向きの開花文を中央に置いた整った文様で、構成や文様のリズムは永福寺出土品の文様にかなり似通っている。

中尊寺堂内具類の製作年代は金色堂より遅れて12世紀後半の様式を持っており、丁度永福寺出土品に前後することに興味をおぼえる。

(4) 12世紀の螺鈿嵌装法は3種類あり、文様彫込法、素地貼付法、大体彫法である。現存する12世紀螺鈿遺品はこのどれかによって嵌装されるが仕上がりは同じになる。永福寺出土品もこの内の大体彫法と素地貼付法によって嵌装されている。13世紀の螺鈿の特徴は螺鈿の厚さが0.3mmぐらいに薄くなり、したがって嵌装法は素地貼付法が主流となる傾向にあり、3つの嵌装法が並行するのは11、12世紀頃であるといえ、永福寺出土品もこの範囲に入るだろう。金色堂の螺鈿もこの内の2つの方法が用いられる。

(5) の黒色漆地粉は12世紀の螺鈿遺品のほとんどに用いられる。つまり大体彫法で螺鈿を嵌装する際、螺鈿間の空隙をこの漆地粉で充填するのに用いられる。ここになぜ黒色漆地粉を用いるのか、黒色漆地粉の素材は何かについてはわかっていない。13世紀の螺鈿遺品に用いられる場合もあるが、例外に近い。黒色漆地粉の技法は12世紀の後半まで行われていたと思われ、12世紀の螺鈿技法を特徴づけるものといえよう。永福寺出土品に存在を認めることが出来るのは、12世紀技法の伝統を受継いでいることを示すものであろう。

4 まとめ

永福寺跡出土品螺鈿遺品を12世紀の螺鈿の内で比較して考察して来たが、これによって結論を急ぐことは難しく、様々な可能性について述べたにすぎない。それらをまとめると次の様になるだろう。

- (1) 頼朝の平泉遠征に際し、戦勝品として平泉から持帰って永福寺に納めた
- (2) 鎌倉在住の工人によって製作された
- (3) 京都で製作され、鎌倉に持込まれた
- (4) 平泉の工人が鎌倉で製作した

最も興味を持つのは(1)だが、この仮説には不利な条件が幾つかある。まず永福寺跡出土品と直接比較出来る中尊寺堂内具のいづれもが沃懸地としており永福寺跡出土品の様な黒漆地のものは中尊寺に伝世されていないこと。現存品が総てではないから平泉にも黒漆地具が存在した可能性はもちろんあるが、黒漆地の様式が遺品から13世紀の様式を代表しており、戦利品とするとしたら見栄えのする沃懸地螺鈿具を選んだと考える方が自然である。螺鈿の個々の形状や構成なども両具はかなり似通っているが、これだけでは平泉と鎌倉の間に緊密な関係にあるとはいえない。

(4)も仮説としては興味深く頼朝遠征に関連してくるが、この様な事実があったかどうか知らない。平泉遠征後、平泉はほとんど焼落ち、在住した工人はおそらく四散したと思われる。一部が鎌倉にたどりつくことはあったかもしれない。永福寺建立の現場は彼らにとって恰好の職場であったろう。しかし彼らがいかに有能であっても主導権を持ったとは思えない。この仮説は(3)に関連してくる。

螺鈿は改めて述べるまでもないが当時においては輸入品であり、12世紀の記録を見るまでもなく極めて高価な材料であった⁽⁴⁾。当時の鎌倉においてこの貴重品を加工する伝統が以前からあったとは思えない。永福寺跡出土品について鎌倉の工人を予想することはあたらぬ。とすれば残るは(2)の仮説となる。

永福寺建立から始まる鎌倉周辺の寺院の建設に京都から多くの多種の工人を動員したことは想像出来

る。この内には当然工芸関係の工人も含まれていたはずである。当時の京都は唯一螺鈿加工工人が活躍していた所と考えられるから、彼らの一部が鎌倉で寺院の建設に参加したことは間違いない。穿って考えれば永福寺跡出土品がまず彼らによって製作されたと想像することは、かなり可能性が高い様に思われる。つまり当時の螺鈿様式は京都で一般的な様式であったし唯一無比のものということが出来、又一方平泉はたえず京都と交流があり、京都様式は直接導入されていたから、螺鈿様式もいや応なく最新の様式が採用され、鎌倉と平泉は螺鈿様式を京都様式で共有していたことになる。巖島神社古神宝類の二口の螺鈿太刀も前記の様に京都で製作された可能性が高いから、三地方の螺鈿は必然的に同時代的様式を示すことになったのであろう。

永福寺跡出土品が黒漆地として仕上げられたのは異色ともいえるが、それはまさに鎌倉の風土から選択されたものであろう。この様式は以後13世紀の螺鈿様式として特徴づけられることになる。

永福寺跡出土品に関して“戦勝品”とする考え方は最も魅力的な仮説と思われた。その様な結果を導くために12世紀の螺鈿の歴史にあてはめてみたが、結局画期的な結論が得られなかったことは惜しくもある。しかしこれら計7点の遺品は今まで空白となっていた藤末鎌初の螺鈿の歴史を補ってあまりあるものと思われ、今後その存在はゆるぎないものとなるだろう。

注1 素地貼付法は素地の上に直接螺鈿文を貼付け、螺鈿の表面まで漆下地で埋めて仕上げる方法

注2 大体彫法は螺鈿文の形を大雑把な形に彫り下げて、そこに螺鈿を貼付け仕上げる方法

注3 「永福寺跡」昭和63年

「永福寺跡」平成4年

注4 「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」16平成11年でヤコウガイの原貝の出土を報告している。これが加工用のものかどうかは不明だが、13世紀の遺例としては異例である。

永福寺跡一帯の古植生について

田畑 貞寿・宮内 奏之

1 関東地方の太平洋沿岸地域の古植生

後水期初期、関東地方の太平洋沿岸地域には、シイ、カシ類を主とする照葉樹林が成立しており、ナラ類やシデ類などの落葉広葉樹も随伴していた。後水期後期の花粉分析結果には次のような傾向が認められる。①人為による森林の破壊を示すマツ属の急増は2000年前と1000年前の間に生じたこと、②コナラ亜属は、ほぼ全域において恒常的に主要な樹種として存在していたこと、③ニレ属、ケヤキ属も規模は小さいもののコナラ亜属と同様な出現を示すこと、④シイ属（花粉の識別が困難なために最大限の可能性としてクリ属を含めた）の拡大はアカガシ亜属と同様に約4000年前には生じていたが、(中略)マツ属の急増期に同調して減少したこと、⑤アカガシ亜属の拡大は内陸部まで及び、マツ属の急増に同調的な減少を示さないこと、⑥規模は比較的小さいものの、スギ属やその他の針葉樹は約4000年前以降増加し、マツ属の急増期までその出現率が維持されたこと(安田ほか,1998)。以上のことから、後水期初期に成立していた照葉樹林は、人間の侵入に伴い切り開かれ耕作地や裸地、そしてコナラやマツ類の二次林となった様子がうかがえる。コナラは、萌芽性が強く伐採に適應するため、結果として残存したものであろう。このコナラ林およびマツ林が今日の里山の起源であり、薪炭林として近年にいたるまで人間の活動と深く結びついていた。マツ類については、森林の破壊によって生じた疎開地に、陽樹として適應した結果であるほか、崖地など人間の利用に適さない地にも残存することとなったものと考えられる。ケヤキ林の残存も同様の理由であろう。スギについては、シイ類と同様、人間の侵入にともない減少する。その理由は有用材として伐採された結果である。

2 幕府開府以前の鎌倉の古植生

鈴木茂(1994)によると、北条政村屋敷跡(常盤字殿入下643番4他)の花粉分析の結果、縄文時代後・晩期から古代にかけて、大勢としてはスギ属を主体とした針葉樹林と、アカガシ亜属やシイノキ属—マテバシイ属を主体とした照葉樹林が遊跡の周辺に広く成立しており、一部にコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が成立していたと報告されている。

鈴木茂(1996c)によると、宇津宮辻子幕府跡(小町2丁目389番1)の花粉分析結果からも、古墳時代中期頃の植生として、上記の北条政村屋敷跡とほぼ同様の状況が報告されている。

以上の結果は、鎌倉幕府開府以前、人間の影響が小さい時期の照葉樹林を示しているものと考えられる。スギ属については、関東地方全般の傾向と比較して、花粉の産出が多いようである。この時期、植林されていたとは考えにくいので、気候的要因によるものと考えられるが、少なくとも、盛んに伐採されることはなかったということであろう。コナラやマツ類の二次林は、まだ発達していないようである。

3 幕府開府以降の永福寺一帯の古植生

鈴木茂(1996a)によると、平成6年度の永福寺跡の花粉分析結果から次のように報告されている。

- 1) I期(12世紀末～13世紀前半)の永福寺周辺ではスギ林や照葉樹林が優勢であったが、I期の終わり頃にはニョウマツ類の増加がみられる。また、永福寺裏手においては早い時期にニョウマツ類の侵入も一部には予想される。
- 2) II期(13世紀中頃)においては、ニョウマツ類やコナラ亜属などの二次林要素が目立つようになった。(中略)
- 3) III期以降(13世紀後半～14世紀前半)の永福寺周辺は、ニョウマツ類がさらに多くみられるようになって

た。(中略)

I期は鎌倉幕府開府時期に相当し、永福寺の創建もこの時期に含まれる。このI期の花粉分析結果は、スギ属と照葉樹類が優勢であるという点で、北条政村屋敷跡の結果とほぼ同様であることがわかる。したがって、縄文時代後期以降、幕府開府までの時期には植生的には大きな変化はなく、照葉樹林が広がっていたものと考えられる。スギ林については北条政村屋敷跡の状況と同様、関東地方全般の傾向よりも優勢であったようである。

II、III期は鎌倉に人々が集まり、町として栄える時期に相当する。I期の終わり頃から増加し始めたニヨウマツ類がII期以降さらに増加しており、照葉樹林を伐採した過程をよく示している。コナラ亜属はII期では増加したが、III期では再び減少している。これは、コナラ林ではなくマツ林が薪炭林として発達していたことを示しているのだからである。いずれにせよ、鎌倉一帯の山が里山として利用されるようになるのがII期以降であり、当時の景観としては、山中にマツ林が展開していた様子がうかがえる。

鈴木茂(1996b)によると、平成7年度の永福寺跡の花粉分析結果から、苑池を中心とした古植生について、次のように報告されている。

永福寺創建前後の周辺植生は、スギ属林や照葉樹林が優勢であった。(中略)13世紀中頃から後半には、周辺の植生はスギ属林や照葉樹林からニヨウマツ林へと代わったと推測される。また、エノキ属-ムクノキ属も増加したとみられ、14世紀後半以降その傾向が高まったようである。

この結果は、スギ林や照葉樹林がマツ林へと代わったことについては、他の結果と同様である。エノキ属-ムクノキ属の増加については、周辺の山地にエノキ属、ムクノキ属が急増したと考えるよりも、苑池周辺にエノキ属、ムクノキ属が生育していたために一時的に増加したと考えるほうが妥当であろう。仮にエノキ、あるいはムクノキであった場合、いずれも園内に積極的に植栽される樹木ではなく、実生で侵入したものと考えられる。エノキやムクノキのような大木になる樹木の実生が放任されるということは、園内の管理が行き届かなくなった状況を暗示しているのではなからうか。鎌倉市教育委員会(2001)によると、永福寺は一説には15世紀半ば以後に廃絶したと考えられている。エノキ属-ムクノキ属の花粉が増加した時期と半世紀ほどのズレはあるが、今後検討すべき課題である。

4 まとめ

主に花粉分析の結果から、永福寺一帯を含む鎌倉の古植生の変遷は、関東地方の太平洋沿岸地域全般における古植生の変遷とほぼ同様であったものと考えられる。ただし、以下の2点については、関東地方の太平洋沿岸地域全般とは若干異なる結果であった。①人間の影響が加わる以前は、照葉樹林とともにスギなどの針葉樹林が優勢であったこと、②鎌倉が中世の都市として繁栄していた時期の永福寺周辺の里山は、関東地方南部に広く分布していたコナラ二次林ではなく、マツ林であったこと。

明治15年に作成された迅速図によると、永福寺跡周辺の山には「松」、「雑」、「杉(すぎ?)」という文字が書かれている。「雑」が何を示しているのか検討を要するが、少なくとも現在よりもマツ林が多かったようである。

永福寺周辺だけでなく、鎌倉一帯の里山の植生管理指針を考えていく上で、いつの時期の植生を目標にするのか、目標の植生は1つのタイプだけなのか、あるいは様々なタイプがありえるのか、十分検討する必要がある。

引用・参考文献

鎌倉市教育委員会,2001. 鎌倉市二階堂国指定史跡永福寺跡. 鎌倉市教育委員会.

鈴木 茂,1991. 北条政村屋敷跡の花粉化石. 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書,10,第1分冊,38-45. 鎌倉市教育委員会.

- 鈴木 茂,1996a. 史跡永福寺後の花粉化石(平成6年度). 鎌倉市二階堂史跡永福寺跡40-54. 鎌倉市教育委員会.
- 鈴木 茂,1996b. 史跡永福寺後の花粉化石(平成7年度). 鎌倉市二階堂史跡永福寺跡80-96. 鎌倉市教育委員会.
- 鈴木 茂,1996c. 宇津宮辻子幕府跡の花粉化石. 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書,12,第1分冊:256-260. 鎌倉市教育委員会.
- 安田喜憲, 三好教夫,1998. 日本列島植物生史. 朝倉書店, 東京.

1. はじめに

史跡永福寺跡において平成元年より発掘調査に伴い土壌試料が採取され、花粉分析を主体に珪藻分析、大型植物化石分析などが行われた。また検出された木材遺体について樹種同定作業も一部でなされている。こうした自然科学分析の結果から永福寺跡においては13世紀前半から中頃にかけて周辺森林に大きな変化があったことが明らかとなった。この要因としては鎌倉市内における同様の分析結果から大規模な土地改変や多大な木材利用によるものと考えられている(鈴木 1999)。永福寺においても発掘調査から土地改変の様相が明らかとなっており、造営に際して丘陵部を削って平地の拡大がなされ、庭園の苑池南半部では土丹を敷き詰め池底としている(鎌倉市教育委員会 2001)。このように永福寺周辺においても土地改変が行われたことがうかがわれ、丘陵部や低地部に成立していた植生は大きく破壊されたことが容易に推測されるのである。

以下には発掘成果から設定された4つの時期区分(鎌倉市教育委員会 2001)を基に、花粉分析結果を中心に、樹種同定、大型植物化石分析、珪藻分析などこれまで行った自然科学分析結果をまとめる形で史跡永福寺跡周辺の古環境変遷について示す。

2. 永福寺周辺の古環境変遷

I期 創建期(12世紀末)

この時期の永福寺周辺丘陵部は、スギを主体にヒノキ類(イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科)やモミ属などを交えた温帯性針葉樹林とコナラ属アカガシ亜属・シイ類(シノキ属-マテバシイ属)を中心とした照葉樹林が優勢であった。加えてコナラ属コナラ亜属やアカシデ、イヌシデ、ケヤキ、エノキなどの落葉広葉樹類も一部に生育していた。これら高木類の他に中・低木類としてアカメガシワ属、カエデ属、アオキ属、エゴノキ属、イボタノキ属、ムラサキシキブ属、ガマズミ属などが丘陵斜面部を中心に生育していたと推測され、これら樹木に絡まるようにブドウ属もみられた。また木本か草本かは不明であるがユキノシタ科近似種(ウツギ、ユキノシタなど)も生育していた(鈴木 1994など)。

この時期の苑池は北側の取水口より水が流入したとみられ、取水口に比較的近い地点における珪藻分析からも同様のことが予想されている(鈴木 1996b)。また同分析から水深は1~2m前後と推測されている。この苑池には水生植物のヒルムシロ属(浮葉植物)が生育していたと推測され、平成5年度試料から比較的多くの同花粉化石が産出している(鈴木 1994)。さらに藻類のクンショウモ属が生育していた。この苑池を中心とした庭園造りには京都の作庭家が関わっていることや年中行事として花見や蹴鞠が行われていたと推測されており、苑池周辺には庭木として松や桜、楓などが植えられていたと予想される。実際平成2年度調査で汀線付近よりクロマツの根株が検出されており(鈴木 1991)、クロマツの葉片は苑池や溝試料より多数得られている(鈴木 1991a, 1996bなど)。さらに平成4年度調査で苑池よりサクラ属の材が、平成6年度調査でも2溝よりサクラ属(ヤマザクラを除く)の材が検出されているが、残念ながら鉱泉などの影響で種名までの同定には至っていない(鈴木 1993, 1996a)。大型植物化石ではサクラ属サクラ節(ヤマザクラを含む)の枝が1点のみ得られ、イロハモミジの果実も同年度調査で検出されている(鈴木 1996b)。このように蹴鞠と関わりの深い樹木について柳を除いてその存在は予想されるが、庭園内に植えられていたかどうか、植えられていたとするとどこかについては不明である。

また草本植生について、苑池周辺や丘陵部の林縁部などにはギシギシ、アカザ科かヒユ科、ナデシコ

科、カラマツソウ属、マメ科、ツリフネソウ、セリ、オオバコ属、ヨモギ属、シダ植物などの雑草類がみられた(鈴木 1994)。

なお永福寺創建以前の植生について、平成4年度の発掘調査において池の掘削時における排水に関係した施設の可能性が考えられている土丹面の落ち込みが認められ、創建以前の堆積物と考えられる最下部の土丹混じりシルト質砂とその上位の粘土について花粉分析およびプラント・オパール分析が予察的に行われている(鈴木 1993)。その結果スギが最優占しており、次いでアカガシ亜属やシイ類が多く、時代については不明であるが永福寺創建以前における周辺丘陵部の植生は上記した創建時の植生と同様で、スギを主体とした温帯性針葉樹林とアカガシ亜属やシイ類を中心とした照葉樹林が優勢であった。また低地部ではイネ科花粉の高率出現と水田雑草を含む分類群(オモダカ属、ミズアオイ属など)の検出、イネのプラント・オパールの多産などから水田稲作が営まれていたと推測される。

Ⅱ期 寛元・宝治年間(13世紀中頃)

この時期になるとニヨウマツ類とコナラ亜属の二次林要素が目立つ存在となり、それまで優勢であった温帯性針葉樹林や照葉樹林は急激に減少した(鈴木 1996aなど)。この減少傾向は13世紀前半の中頃と推測される頃より明瞭となり、この時期鎌倉は北条氏に実権が移り、大規模な土木工事が各地で行われるなど発展期をむかえた。この時期に当たるかは不明であるが永福寺においても主要伽藍裏手の丘陵部を削って平坦面を広げて道路や溝、目隠し塀を構築しており、頂部には人為的な削平が認められる(鎌倉市教育委員会 2001)など土地改変が行われていた様相が認められている。また鎌倉で出土した板材や箸などの木製品のほとんどがスギやヒノキである(松葉 2000、藤根 1993a,1993bなど)。ここ永福寺においても鎌倉市教育委員会(2001)の遺構編に記されている薬師堂木製基壇束柱(束東1・束東3)や北翼廊Ⅱ期掘立柱柱根(北翼17)はヒノキであり(未公表:松葉(パレオ・ラボ)が同定)、平成5年度の発掘調査の際検出された橋の基礎材や構造材はヒノキ属、カヤ、スギであった(藤根 1994)。このように鎌倉ではスギやヒノキなどの温帯性針葉樹類は有用材として非常に多く利用されたことが容易に推測される。こうした土地改変や木材利用などで永福寺周辺丘陵部に成立していた温帯性針葉樹林や照葉樹林は大きく破壊され、その跡地にニヨウマツ類とコナラ亜属が進入してこれらの二次林が形成され分布を拡大するようになった。また二階堂川など河川周辺の肥沃な所にはエノキが生育しており、裏手の崖にはカエデ属がみられ、雑草類のイネ科やアカザ科カヒユ科、アブラナ科、ツリフネソウ、セリ科、オオバコ属、ヨモギ属、シダ植物などが生育していた。一方苑池では水生植物であるアサザなどのアサザ属アサザ型(浮葉植物)が生育していた(鈴木 1994など)。

Ⅲ期 弘安年間(13世紀後半)

この時期になると永福寺周辺はニヨウマツ類がさらに目立つ存在となった。このニヨウマツ類については上記したようにクロマツの根株が苑池の汀線付近より検出され、多数の葉片も得られていたことからクロマツと考えられていた。しかしながら北翼廊付近のⅢ期と考えられている遺水(5溝)内よりアカマツの根株が検出され(鈴木 1996a)、Ⅳ期と考えられている北側の岬付近からもアカマツの材が得られている(鈴木 1997)。このように永福寺周辺ではアカマツとクロマツの2種類のニヨウマツ類が生育していた。このニヨウマツ類の他、主要伽藍裏手の丘陵崖部や2溝付近にはイヌシデ、エノキ、キイチゴ属、アカメガシワ、ミズキ、ニシキギ科、ガマズミ、クワ科、シダ植物などがみられ、同裏手の道路付近などにはイネ科、スゲ属、タデ属、シロザ近似種、ナデシコ科、キンボウゲ科、カタバミ属、アブラナ科、オオバコ属、ヨモギ属などの雑草類が生育していた(鈴木 1993b,1994など)。この頃の苑池では水生シダ植物のクンショウモ属やⅡ期に引き続き浮葉植物のアサザ型も生育していた(鈴木

1996a)。

IV期 (14世紀以降)

この頃の永福寺周辺は依然としてニョウマツ類が優勢であり、アカマツやクロマツの二次林が形成されていた。しかしながらニョウマツ類が減少する傾向も認められ、反対にスギやヒノキ類、アカガシ亜属、コナラ亜属などは増加する傾向を示している(鈴木 1991b, 1997など)。このことは鎌倉幕府崩壊後の室町期には人間による森林への影響が少なくなり、スギなどの温帯性針葉樹林や照葉樹林などが多少とも回復傾向を示すようになったのであろう。またエノキ属—ムクノキ属の多産が認められ(鈴木 1996b)、この試料を採取した北側付近にエノキカムクノキが14世紀後半の一時期に生育していたと推測される。

14世紀前半と推測される頃の苑池においては浮葉植物のヒシやアサザ型が生育しており、後半頃より抽水植物のガマ属が急増し、比較的浅いところに群落を形成したとみられる。その他この水辺にはミゾソバ、タガラシ、ツリフネソウ、セリ、タカサブロウなどが生育していた(鈴木 1996b)。

14世紀後半に行われた改修にともない苑池は一時的に水深を増したが、その後縮小し水深も浅くなり、湿地的景観もみられるようになったと推測される(鈴木 1996b)。植生はガマ属に代わりイネ科やカヤツリグサ科が多く見られるようになり、一部オモダカ(抽水植物)の群落も形成された。その他ヘラオモダカ、アギナシ、ハリイ属、イボクサ、イグサ属、イヌビエ近似種、コゴメガヤツリ近似種、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、キツネノボタン近似種、タガラシなども生育していた(鈴木 1996b)。

永福寺の廃絶後、すなわち15世紀以降の植生は、一時よりも減少したものの依然としてニョウマツ類の二次林が広く形成されていた。同じ二次林要素のコナラ亜属もやや生育地を広げ、アカシデ、イヌシデ、ケヤキなどととも落葉広葉樹林を一部に形成し、スギ林もやや回復した(鈴木1991b)。その後、1707年に降下した宝永テフラの存在から江戸時代に入るとスギ林の拡大がみられ、永福寺周辺ではスギの植林がなされたのではないかと推測される(吉川 1990)。また苑池が存在した低地部では廃絶後水田稲作が行われるようになり、水田雑草といわれる分類群のオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などからなる植生が形成された(吉川 1990)。

引用文献

- 藤根 久, 1993a, 佐助ヶ谷遺跡出土木製品の樹種同定, 「佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書—第2分冊—」, 389-396, 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団。
- 。 1993b, 木製品の樹種同定, 「鎌倉市早見芸術学園改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(本文編)」, 343-346, 早見芸術学園発掘調査団・株式会社四門文化財研究室。
- 。 1994, 永福寺跡から出土した橋構造材の樹種, 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—平成5年度—」, 鎌倉市教育委員会, 40-42。
- 鎌倉市教育委員会, 2001, 鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書—遺構編—, 88p。
- 鈴木 茂, 1991a, 平成元年度史跡永福寺跡の溝内埋積物の花粉化石, 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—平成2年度—」, 鎌倉市教育委員会, 17-25。
- 。 1991b, 平成2年度史跡永福寺跡の苑池堆積物の花粉化石, 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—平成2年度—」, 鎌倉市教育委員会, 26-32。
- 。 1993, 史跡永福寺跡の花粉化石, 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—平成4年度—」, 鎌倉市教育委員会, 29-37。
- 。 1994, 史跡永福寺跡苑池堆積物の花粉化石, 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発

掘調査概要報告書「平成5年度」, 鎌倉市教育委員会, 29-39.

・ 1996a, 史跡永福寺跡の花粉化石(平成6年度), 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書「平成6・7年度」, 鎌倉市教育委員会, 40-53.

・ 1996b, 史跡永福寺跡の花粉化石(平成7年度), 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書「平成6・7年度」, 鎌倉市教育委員会, 80-96.

・ 1997, 史跡永福寺跡の花粉化石と木材化石, 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書「平成8年度」, 鎌倉市教育委員会, 73-80.

・ 1999, 神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊, 国立歴史民俗博物館研究報告 第81集, 131-139.

吉川昌伸, 1990, 史跡永福寺跡における花粉化石, 「鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書「平成元年度」, 鎌倉市教育委員会, 20-34.

基本花粉・シダ類和胞子

樹木花粉

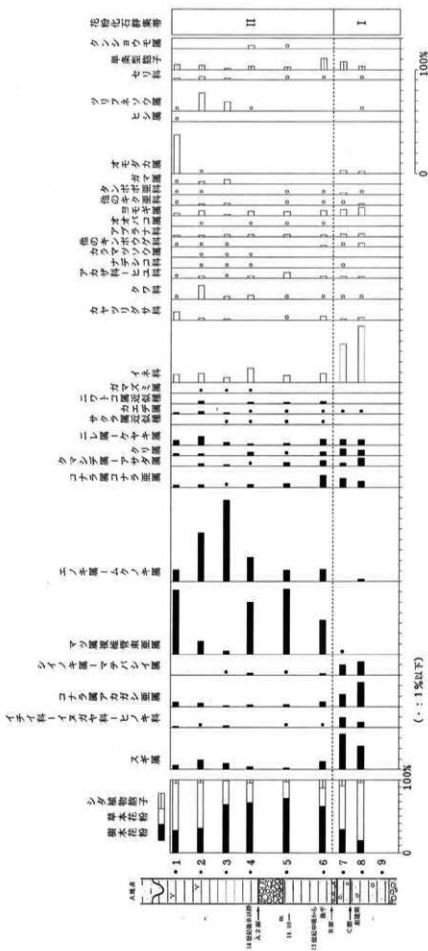


図1 築池地層の主要花粉化石分布図 (平成7年度A地点)
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した) (鈴木(1996)を改定)

追 補

永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書
平成8年度(第2分冊)に掲載されなかつた史料である。

永福寺関連主要文献資料収録文献一覽

十三 保暦間記

(群書類従 雑部十三 第壹拾七輯)

建久三(一九二)年十一月廿五日

「永福寺ヲ造立シテ。供養ヲ遂グ、導師ハ公顯僧正也。此寺ハ專ラ池ノ禪尼ノ孝養トソ聞エシ。誠ニ平治ノ亂ノ時。此尼公ノ口入ニ依テ助リ給シカバ。報答モ其故有トソ覺ケリ。」

報告書妙録

ふりがな	くにしていせきようふくじあと							
書名	国指定史跡永福寺跡							
副書名	国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書							
巻次	遺物・考察編							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	福田 誠 原 廣志 菊川 泉							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	平成14年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇〇°	東経 〇〇°	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よりふくじあと 永福寺跡	かながわけん 神奈川県 かまくらしにのぶどう 鎌倉市二階堂	14204	61	35度 19分 30秒	139度 34分 14秒	19811205 1 19970131	15,828.2 m ²	史跡整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
永福寺跡	寺院跡	鎌倉時代 1 室町時代	二階堂、阿彌陀堂、 薬師寺、翼廟、庭園 (遺水、橋、取水口)		蓮華文軒丸瓦、巴文 軒丸瓦、唐草文軒平 瓦、渥美甕、涅槃鉢、 銅製経筒、堂内具 (螺鈿製品、金銅製品)		源頼朝が創建し た、三堂を中心 とした浄土寺院	

鎌倉市二階堂
国指定史跡
永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る
発掘調査報告書

—遺物編・考察編—

発行日 平成14年3月
編 集 鎌倉市教育委員会
発 行
印 刷 グランド印刷株式会社